

平成2年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第3分冊 —

1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は平成2年度農業基盤整備事業地域内における埋蔵文化財のうち上野市南部地域の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他を県農林水産部の負担によるもの（本調査）と、全額県農林水産部の負担によるもの（立会い調査）がある。
3. 調査体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査協力 三重県農林水産部農村整備課、耕地課、上野農林事務所
上野南部第二、第三土地改良区
上野市教育委員会 財団法人三重県農業開発公社

4. 調査面積、期間、担当者は下表のとおりである。

遺 跡 名	面積 (㎡)	期 間	担 当 者
浮田遺跡A地区 (旧称:浮田C) (立会い調査)	1,200	平成2年9月5日 ～9月10日	主事 田中久生 併任主事 東山則幸
浮田遺跡B地区 (旧称:浮田B) (本調査)	1,600	平成2年5月7日 ～6月25日	主事 森川常厚
浮田遺跡C、D、E、F地区 (旧称:浮田B) (立会い調査)	670	平成2年8月8日 ～8月24日	技師 竹内英昭 併任主事 東山則幸、宮崎宣光
高賀遺跡A、B地区 (旧称:浮田C) (本調査)	2,000	平成2年5月14日 ～6月20日	主事 穂積裕昌
高賀遺跡C地区 (旧称:浮田C) (立会い調査)	240	平成2年7月20日 ～8月2日	技師 竹内英昭 併任主事 宮崎宣光
才良遺跡A、B地区 (本調査)	2,010	平成2年7月2日 ～8月7日	主事 穂積裕昌
才良遺跡C地区 (立会い調査)	950	平成2年9月3日 ～9月6日	主事 穂積裕昌
貝野氏館 (立会い調査)	170	平成2年9月11日 ～10月9日	主事 穂積裕昌
高田氏館 (立会い調査)	1,100	平成2年9月12日 ～10月9日	主事 穂積裕昌
澤田遺跡A、B、D、E地区 (本調査)	2,355	平成2年7月2日 ～8月24日	主事 森川常厚
澤田遺跡C地区 (立会い調査)	172	平成2年8月27日	併任主事 小川専哉、宮崎宣光

5. 本書の執筆は調査担当が行い文末にその名を記し、全体の校閲、監修は調査第一課長伊藤克幸、同第一係長長田阪仁が行った。
6. 本書の作成には、下記の方々から指導、助言を賜った。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）
森 浩一（同志社大学教授） 小笠原好彦（滋賀大学教授） 金原正明（天理大学付属天理参考館）
寺沢 薫（橿原考古学研究所） 橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査センター） 中井 均（米原町教育委員会） 清水真一（桜井市教育委員会） 植田文雄（能登川町教育委員会） 次山 淳（京都大学大学院）
福井健二（三重県文化財調査員） 久保勝正（斎宮歴史博物館） 浜口 元（鼓ヶ浦中学校教諭）
7. 図面における方位は、浮田遺跡B地区、高賀遺跡は国土調査法による第6座標系を基準とする座標北、他は磁北を用いた。なお当地域の磁針方位は西偏約6°20′（昭和63年）である。
8. 本書に使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。
9. 本書で用いた遺構表示略記号は下記による。
SA：柱列・柵・塀 SB：掘立柱建物 SD：溝・堀 SE：井戸 SH：竪穴住居 SK：土坑 SX：墓・SZ：不明遺構 その他

10. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目次

I 浮田・高賀遺跡	1
II 才良遺跡	85
III 貝野氏館・高田氏館	95
IV 澤田遺跡	103

挿 図 目 次

I 浮田・高賀遺跡		第 I -31 図 SK 7 実測図	12
第 I -1 図 遺跡位置図	1	第 I -32 図 SK 7 出土遺物実測図	12
第 I -2 図 遺跡地形図	2	第 I -33 図 SE 1 実測図	13
第 I -3 図 調査区位置図 (A 地区)	3	第 I -34 図 SX 1 ~ 4, SH 2 出土遺物実測図	15
第 I -4 図 A 地区遺構平面図	3	第 I -35 図 SH 3, SK 13~17, 小ピット出土遺物実測図	16
第 I -5 図 A 地区遺物実測図	4	第 I -36 図 SK 1, 9, 10, 11, SE 1, 2 出土遺物実測図	18
第 I -6 図 調査区 (B 地区) 位置図	4	第 I -37 図 包含層出土遺物実測図	20
第 I -7 図 B 地区土層断面図	5	第 I -38 図 調査区位置図 (C, D 地区)	27
第 I -8 図 B 地区遺構平面図	5	第 I -39 図 調査区位置図 (E, F 地区)	27
第 I -9 図 SX 1 遺物出土状況実測図	6	第 I -40 図 F 地区遺構平面図	28
第 I -10 図 SX 2 遺物出土状況実測図	6	第 I -41 図 遺物実測図	28
第 I -11 図 SX 3 遺物出土状況実測図	6	第 I -42 図 調査区位置図	29
第 I -12 図 SX 3 遺物出土状況実測図	6	第 I -43 図 大溝南側実測図	30
第 I -13 図 SH 2 実測図	7	第 I -44 図 A 区遺構平面図 (折込)	31, 32
第 I -14 図 SB 2, 3, 4 SK 12 実測図	7	第 I -45 図 しがらみ 2 実測図 (折込)	31, 32
第 I -15 図 SB 5 実測図	8	第 I -46 図 杭列実測図 (折込)	31, 32
第 I -16 図 SB 1, SA 1, 2, 3 実測図	9	第 I -47 図 大溝横断面図 (折込)	31, 32
第 I -17 図 SH 1, SB 6, 7, 8 実測図	10	第 I -48 図 大溝縦断面図 (折込)	31, 32
第 I -18 図 SK 16 実測図	11	第 I -49 図 大溝遺物出土状況図	33
第 I -19 図 SB 9 実測図	11	第 I -50 図 A 地区北端部遺構実測図	34
第 I -20 図 SK 1 実測図	11	第 I -51 図 SB 6, 7, 8, 11 実測図	34
第 I -21 図 SK 10, 11 実測図	11	第 I -52 図 SB 9, 10 実測図	35
第 I -22 図 SK 2 実測図	12	第 I -53 図 SB 12, 13 実測図	36
第 I -23 図 SK 2 出土遺物実測図	12	第 I -54 図 井戸実測図	37
第 I -24 図 SK 3 実測図	12	第 I -55 図 SK 1 実測図	37
第 I -25 図 SK 3 出土遺物実測図	12	第 I -56 図 B 区遺構平面図 (折込)	39, 40
第 I -26 図 SK 4 実測図	12	第 I -57 図 SB 14, 16 実測図 (折込)	39, 40
第 I -27 図 SK 4 出土遺物実測図	12	第 I -58 図 SB 15, 17 実測図 (折込)	39, 40
第 I -28 図 SK 5 実測図	12	第 I -59 図 SB 18~21 実測図	41
第 I -29 図 SK 6 実測図	12	第 I -60 図 A 区大溝出土遺物 (1)	43
第 I -30 図 SK 6 出土遺物実測図	12	第 I -61 図 A 区大溝出土遺物 (2)	44

第 I - 62 図	A 区大溝出土遺物 (3)	45	第 III - 6 図	出土遺物	100
第 I - 63 図	A 区大溝出土遺物 (4)	46	第 III - 7 図	S E 1 実測図	100
第 I - 64 図	A 区大溝出土遺物 (5)	47	第 III - 8 図	調査区位置図	101
第 I - 65 図	A 区大溝出土遺物 (6)	48	第 III - 9 図	高田氏館遺構平面図	102
第 I - 66 図	A 区大溝出土遺物 (7)	50	第 III - 10 図	出土遺物	103
第 I - 67 図	A 区大溝出土遺物 (8)	51	IV 澤田遺跡		
第 I - 68 図	A 区大溝出土遺物 (9)	52	第 IV - 1 図	遺跡地形図	105
第 I - 69 図	A 区大溝出土遺物 (10)	53	第 IV - 2 図	遺跡位置図	106
第 I - 70 図	A 区大溝出土遺物 (11)	54	第 IV - 3 図	調査区位置図	106
第 I - 71 図	A 区大溝出土遺物 (12)	55	第 IV - 4 図	A 地区遺構平面図	107
第 I - 72 図	A 区遺構出土遺物	57	第 IV - 5 図	A 地区土層断面図	107
第 I - 73 図	A, B 区出土遺物	58	第 IV - 6 図	A 地区 S B 3, 4, 5, 6 実測図	108
第 I - 74 図	C 区遺構平面図	67	第 IV - 7 図	A 地区出土土器実測図	109
第 I - 75 図	S H 5 実測図	68	第 IV - 8 図	A 地区出土石鏃実測図	109
第 I - 76 図	C 区出土遺物	68	第 IV - 9 図	B 地区遺構平面図	110
第 I - 77 図	A, C 区建物群	70	第 IV - 10 図	B 地区 S B 1 実測図	111
第 I - 78 図	B 区建物群 (1)	70	第 IV - 11 図	B 地区土層断面図	111
第 I - 79 図	B 区建物群 (2)	70	第 IV - 12 図	B 地区 S B 2 ~ 8 実測図	112
II 才良遺跡			第 IV - 13 図	B 地区 S B 9 実測図	113
第 II - 1 図	遺跡位置図	87	第 IV - 14 図	B 地区 S K 16 実測図	113
第 II - 2 図	A 区遺構平面図	88	第 IV - 15 図	B 地区 S K 16 出土遺物実測図	113
第 II - 3 図	S B 1, 2 実測図	88	第 IV - 16 図	B 地区 S E 18 実測図	113
第 II - 4 図	B 区遺構平面図	88	第 IV - 17 図	B 地区出土遺物実測図	114
第 II - 5 図	A 区北端部実測図	89	第 IV - 18 図	C 地区出土石造物実測図	115
第 II - 6 図	B 区東壁土層図	89	第 IV - 19 図	D 地区遺構平面図	116
第 II - 7 図	C 区遺構平面図	89	第 IV - 20 図	D 地区 S D 4 土層断面図	116
第 II - 8 図	A 区遺構出土遺物	90	第 IV - 21 図	D 地区 S B 1, 2, 3, 6, 10 実測図	117
第 II - 9 図	A 区包含層出土遺物	91	第 IV - 22 図	D 地区土層断面図	117
第 II - 10 図	B 区出土遺物	91	第 IV - 23 図	D 地区 S B 5, 7, 9 実測図	118
第 II - 11 図	C 区出土遺物	92	第 IV - 24 図	D 地区 S D 4 出土遺物実測図	119
III 貝野氏館・高田氏館			第 IV - 25 図	D 地区出土遺物実測図	121
第 III - 1 図	才良・沖地区トレンチ配置図	97	第 IV - 26 図	E 地区遺構平面図	122
第 III - 2 図	遺跡位置図	98	第 IV - 27 図	E 地区土層断面図	122
第 III - 3 図	トレンチ北面土層断面図	99	第 IV - 28 図	E 地区 S K 4 実測図	122
第 III - 4 図	調査区位置図	99	第 IV - 29 図	E 地区 S K 4 出土遺物実測図	122
第 III - 5 図	遺構平面図	99			

表 目 次

I 浮田・高賀遺跡			表 I - 2	浮田遺跡出土遺物観察表	23~26
表 I - 1	浮田遺跡 B 地区掘立柱建物・柱列一覧表	22	表 I - 3	高賀遺跡 A, B 地区出土遺物観察表	60~66

II 才良遺跡	
表II-1 才良遺跡出土遺物観察表	93~94
IV 澤田遺跡	
表IV-1 A地区出土遺物観察表	109

表IV-2 B地区出土遺物観察表	114
表IV-3 D地区出土遺物観察表	120
表IV-4 E地区出土遺物観察表	123

写真目次

I 浮田・高賀遺跡	
浮田遺跡B地区全景と神戸神社	71
浮田遺跡B地区SX3	71
浮田遺跡B地区土坑群とSH1	72
浮田遺跡B地区SK2	72
浮田遺跡B地区SK3	72
浮田遺跡B地区SK5	72
浮田遺跡B地区SK6	72
浮田遺跡B地区SK16	73
浮田遺跡B地区SX2, SB1, SA1, 2, 3	73
浮田遺跡B地区SE1	74
浮田遺跡F地区柱穴群	74
浮田遺跡B地区出土遺物	75, 76
高賀遺跡調査前風景	77
高賀遺跡A地区全景	77
高賀遺跡大溝北側遺物出土状況(1)	78
高賀遺跡大溝北側遺物出土状況(2)	78
高賀遺跡大溝南側槽出土状況	79
高賀遺跡A区北端部建物群	79
高賀遺跡SH1, SH2	80
高賀遺跡SK1	80
高賀遺跡調査前風景	81
高賀遺跡B区全景	81
高賀遺跡C区全景	82
高賀遺跡SH5	82
高賀遺跡大溝出土土器(1)	83

高賀遺跡大溝出土土器(2)	84
高賀遺跡大溝出土土器(3)	85
高賀遺跡大溝出土木製品	86
II 才良遺跡	
A区全景	95
SB2とSD3	95
B区全景	96
C区全景	96
III 貝野氏館・高田氏館	
貝野氏館SE4	104
貝野氏館SE4断面	104
IV 澤田遺跡	
A地区全景	125
A地区SB3	125
A地区SB4	126
A地区SB6	126
B地区全景	127
B地区出土遺物	127
C地区出土遺物	128
D地区全景とSB3	128
D地区全景	129
D地区SB5	129
D地区出土遺物	130, 131
E地区全景	132
E地区SK4遺物出土状況	132
E地区出土遺物	132

I. 上野市上神戸 うきた たかが 浮田・高賀遺跡

1. 位置と環境

上野市の神戸地区は上野盆地の南端部に位置し、三方を山に囲まれ、その中央部を木津川が南から北へ流れている。浮田遺跡(1)は、木津川左岸の河岸段丘上にあり、標高約160mで東方の氾濫原とは約1mの比高差をもつ。高賀遺跡(2)は浮田遺跡の南西に接する丘陵東端部にあり、その標高は約170mである。

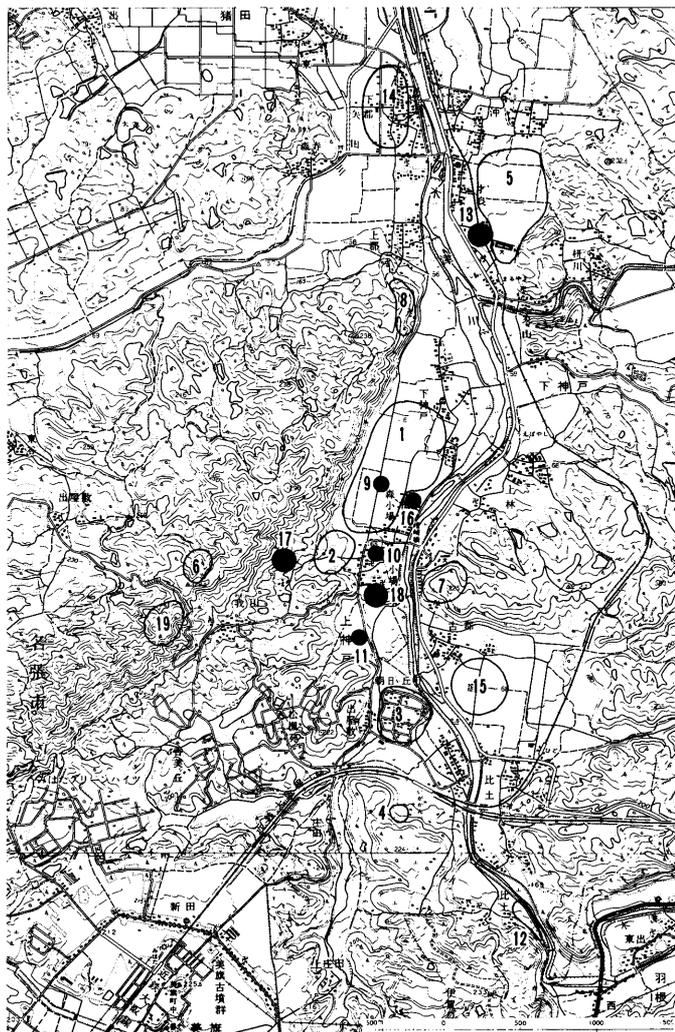
神戸地区では、縄文時代以前の遺跡はあまり知られておらず、わずかに奥城寺遺跡(3)からポイントが採集されているのみである。

弥生時代では、奥城寺遺跡、銅鐸が出土した比土遺跡(4)等があるが、北接する伊那古地区の才良遺跡(5)は、昭和57年度に上野市教育委員会、平成元年度に三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査され、多数の弥生後期の土器が出土し大集落が存在した可能性を示している。

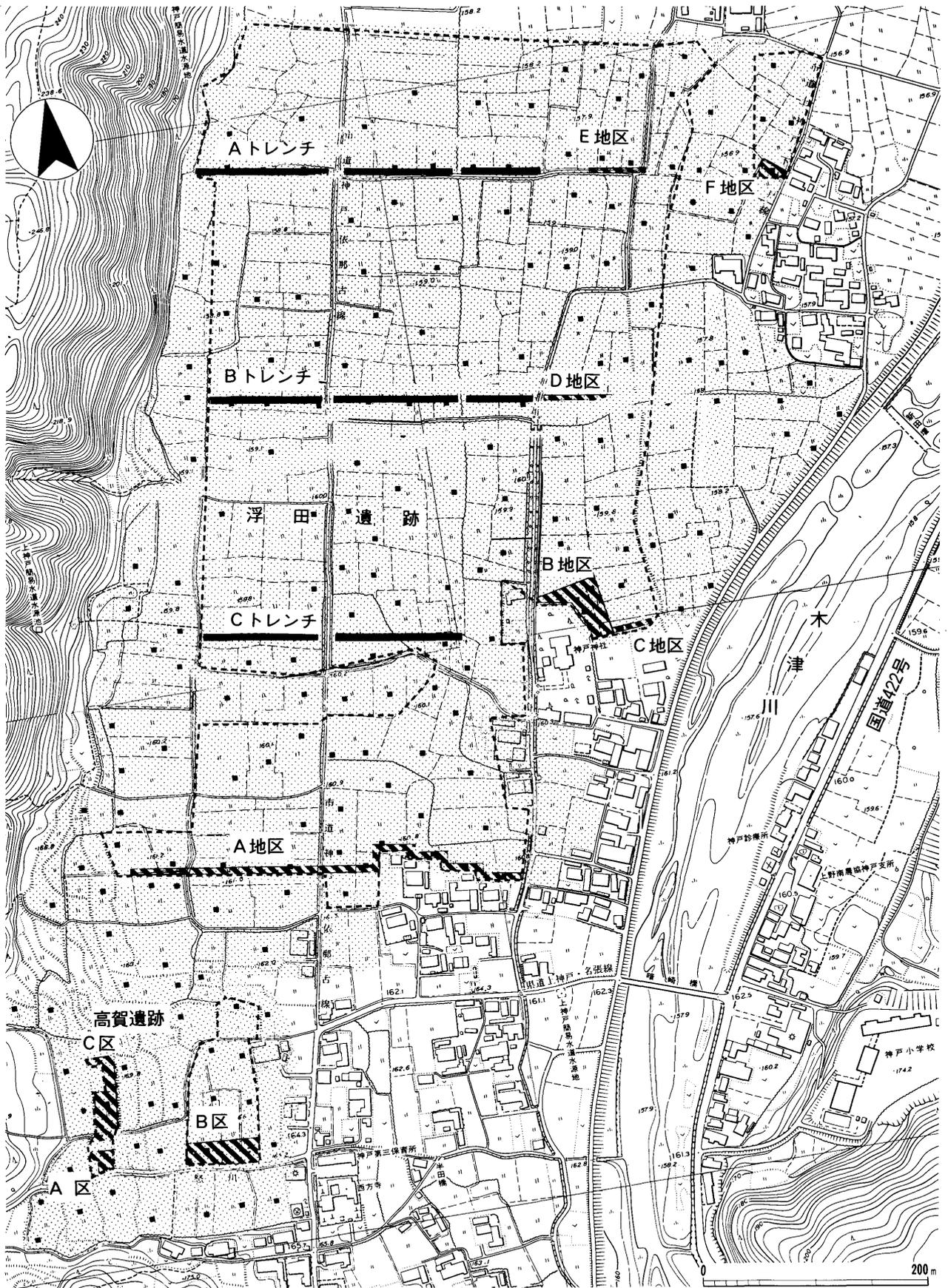
古墳時代にはいと、浮田・高賀遺跡周囲の丘陵上に、六つ子塚古墳群(6)、大師山古墳群(7)、天童古墳群(8)等多くの群集墳が築造される。また、浮田遺跡内には天皇塚古墳(9)が、集落内には中出八王子社古墳(10)の存在が伝えられているが、いずれも削平され現況では確認できない。天皇塚古墳については、昭和63年度の三重県教育委員会の試掘調査、及び平成元年度の浮田遺跡発掘調査でもその痕跡を確認するに至らなかった。昭和61年度に発掘調査された近代古墳(11)は、伊賀で初めての帆立貝式古墳の調査となり、同62年度には高瀬遺跡(12)が調査され、古墳時代の環濠集落を検出するなど調査例も増加している。

律令時代には、飛鳥・奈良の都と東国を結ぶ幹線道が当地区を縦貫していたと推定され、壬申の乱では大海人皇子がこの道を北上したと考えられている。さらに浮田遺跡周囲の水田は条里がよく残っており、対岸の白鳳寺院に推定される財良廃寺(13)、郡衙

跡の候補地である下郡遺跡(14)、古郡の稻田遺跡(15)など畿内と関係の深い地区であったことがしのばれる。また、当地区は伊賀国伊賀郡神戸郷に属し、その名は、伊勢神宮の神戸に由来すると考えられている。「倭姫命世記」には、『倭姫命が神霊を奉じ、伊賀穴穂宮に一時とどまったとき、伊賀国造らが貢進した』とあり、「延喜式」には『伊賀神戸』の記載があるなど、少なくとも平安時代前期以前には成立していたものと考えられる。また神戸神社(16)は、明治40年に合祀されるまでは穴穂宮と呼



第I-1図 遺跡位置図 1：50,000 (国土地理院・伊勢路・阿保・1：25,000)



遺跡範囲
 遺構残存範囲
 試掘坑
 平成元年度調査区
 平成2年度調査区

第I-2図 遺跡地形図 1:5,000

ばれ、近くに穴太御厨の存在が推定でき、古代末期から中世にかけて伊勢神宮との関係は、さらに強化されていったものと考えられる。

中世には、伊賀国に多くの城館が築かれるが、神

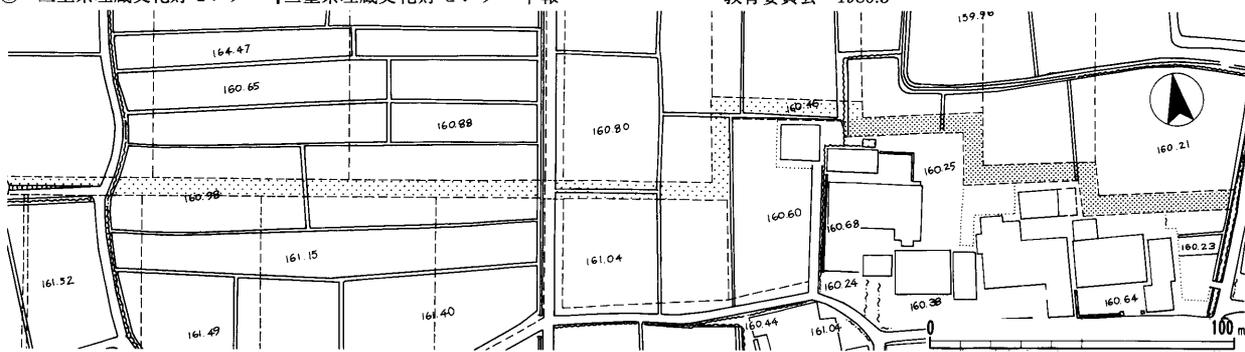
【註】

- ① 山本雅靖 『上野市遺跡地図-1987年版-』 上野市教育委員会 上野市遺跡調査会 1979.3
- ② 前掲①に同じ
- ③ 西森平之 『才良遺跡発掘調査報告』 上野市教育委員会 1983.3
- ④ 三重県埋蔵文化財センター 『三重県埋蔵文化財センター年報 1』 1990.3
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター 『三重県埋蔵文化財センター年報

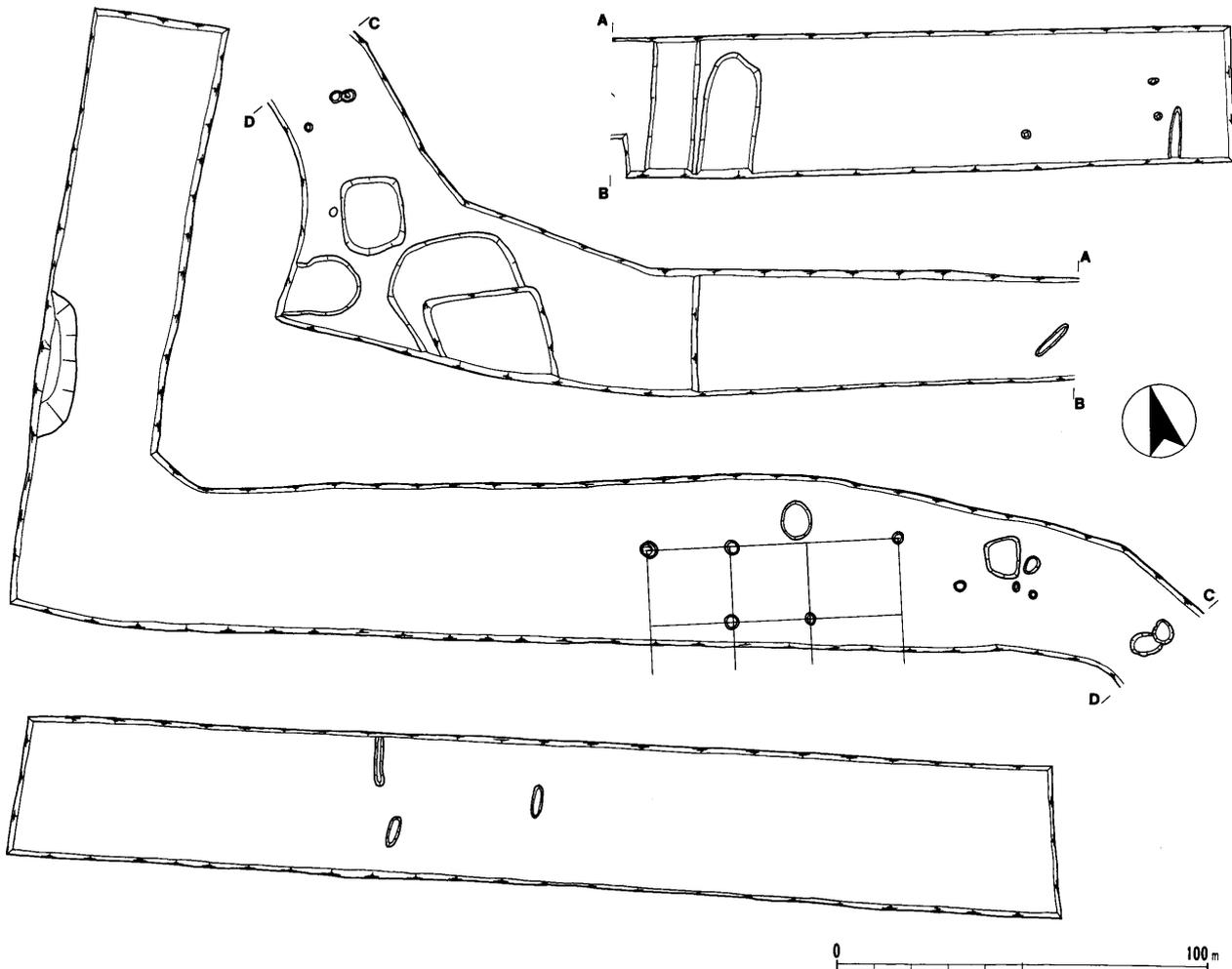
戸地区にも永浜氏館址(17)、夷山城址(18)、我山城址(19)等が存在する。集落跡については、平成元年度の浮田遺跡発掘調査で検出しているもの、調査例も少なく不明な点も多い。(森川常厚)

1』 1990.3

- ⑥ 三重県教育委員会 『三重県文化財年報17』 1987.3
- ⑦ 三重県教育委員会 『三重県文化財年報18』 1988.3
- ⑧ 鎌田元一 『壬申の乱』 『週刊朝日百科日本の歴史46』 朝日新聞社
- ⑨ 下郡、稲田両遺跡ともその一部を発掘調査されているが、直接郡衙跡に結付くような結果を得られていない。
倉田 守 『下郡遺跡発掘調査報告-第7次調査-』 三重県教育委員会 1986.3



I-3 調査区位置図 (A地区) 1:2000



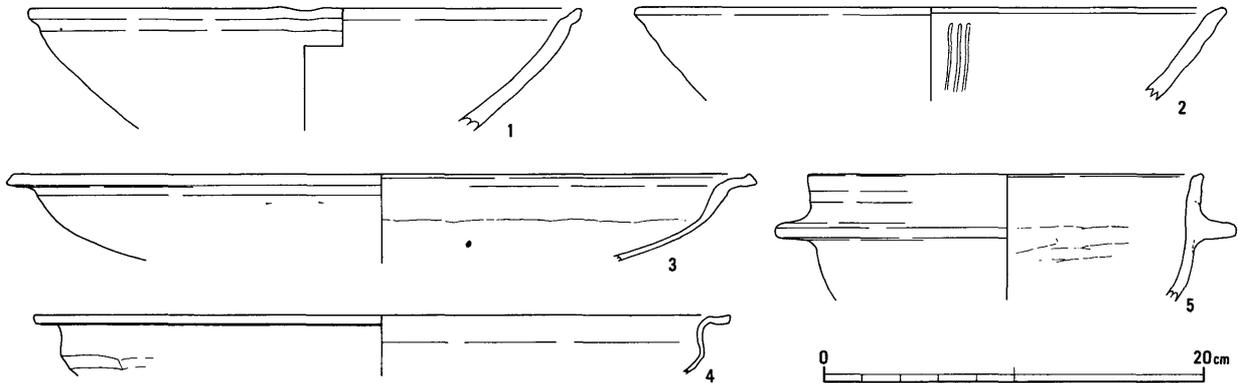
I-4 図 A地区遺構平面図 1:200

2. 浮田遺跡

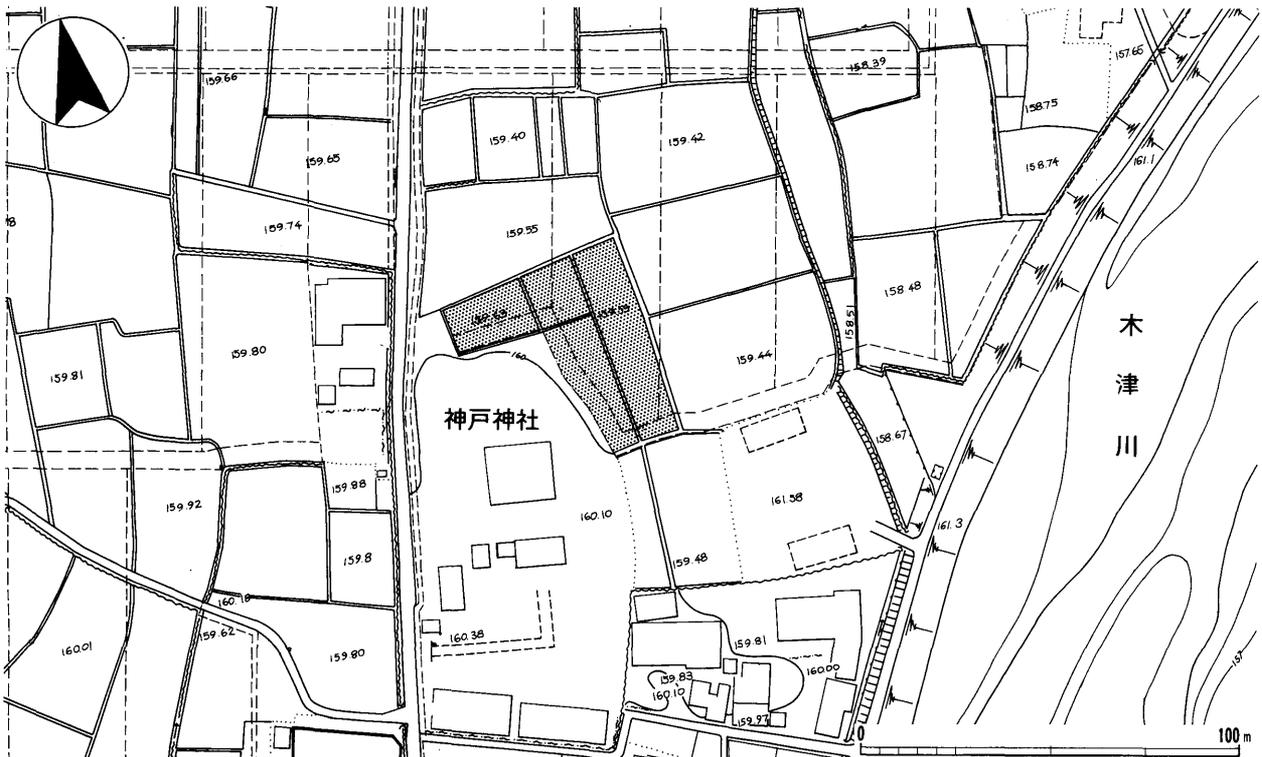
(1) A 地区

社の南西約200mの水田を丘陵近くから現集落まで東西に横断する排水路計画線に合せてトレンチを設定した。その結果、東側の現集落に接した地区で中世の掘立柱建物1棟、若干の土坑、溝を検出したにとどまる。掘立柱建物は、3間×2間以上の総柱建物になるものと考えられる。

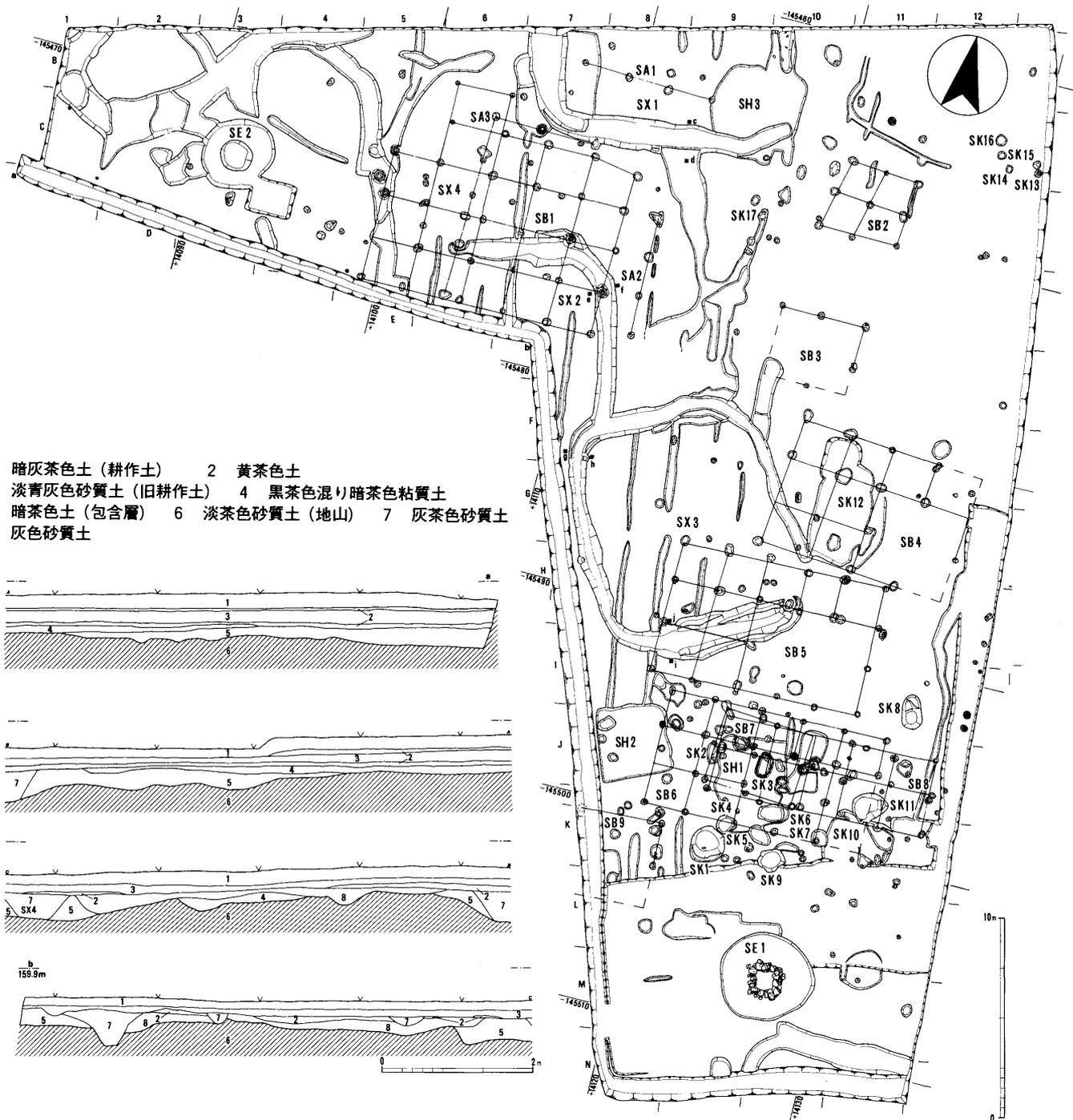
遺物は古墳時代の須恵器、平安時代の黒色土器から近世の磁器までであるが、図示できるものとしては以下の5点であった。(1)は信楽産の播鉢、(2)は瓦質の鎌鉢ないしは播鉢である。瓦質の播鉢は県内では伊賀地方を中心に若干の出土例が確認されており、大和地方よりの搬入であると思われるが確証はない。(5)は中世前期の羽釜、(3),(4)は近世の焙烙で、伊勢地方の影響が強いものと思われる。(田中久生)



第I-5図 A地区遺物実測図 1:4



第I-6図 調査区(B地区)位置図 1:2000



- 1 暗灰茶色土 (耕作土) 2 黄茶色土
- 3 淡青灰色砂質土 (旧耕作土) 4 黒茶色混り暗茶色粘質土
- 5 暗茶色土 (包含層) 6 淡茶色砂質土 (地山) 7 灰茶色砂質土
- 8 灰色砂質土

第I-7図 B地区 土層断面図 1:80

第I-8図 B地区遺構平面図 1:300

(2) B 地区

A. 遺 構

1. 弥生時代後期の遺構

検出した遺構はすべて方形周溝墓である。盛土や主体部はすでに削平されており、いずれも周溝のみの検出である。なお、調査区西端で弯曲する数条の浅い溝を検出したが、これらも方形周溝墓の痕跡かもしれない。

SX1 (第I-9図) 発掘区北端で検出した。北側半分は調査区外なので、その正確な形態は不明であるが、周溝の内側で一辺約10mの正方形を呈するものと推定する。南東隅は、東溝が南溝の手前2.5mで止まり陸橋部となっている。周溝は、幅1.5~2mで検出面よりの深さ約0.3mを測る。底部は平坦だが、西溝はやや深くなっている。埋土は黒色土で分層は不可能だった。遺物の出土は極めて少ないが、南溝中央部で、高杯(19)が横倒しの状態で、溝底より約6cm浮いて出土した。高杯の周りからは

20cm程の石が4個検出された。この高杯と関連するものだろうか。

S X 2 (第 I-10図) 発掘区西端で検出した。西側半分は調査区外なので、その正確な形態は不明であるが、周溝の内側で一辺約 8 m の正方形を呈するものと推定できる。周溝は、北溝から東溝へ連続して掘られているが、東溝が幅 1 m、検出面よりの深さ約 0.3m に対し北溝は幅 1.1~1.5m、深さ 0.4~0.5 m とやや規模が大きくなっている。いずれも底部は平坦である。南溝は、調査区断面でその存在を確認し、東溝と同規模のものが調査区外へ延びているものと推定できる。南東隅は陸橋になっているが、S X 3 に切られるため正確な幅は不明である。西溝は北端部を検出したが、他のものより極端に浅く西溝かどうかあやしい。仮に西溝とした場合、北西隅は幅約 3 m の陸橋部となる。埋土は黒色土で分層は不可能だった。遺物の出土は少なかったが北東隅近くの東溝から台付甕 (20) が、検出面と同じレベルで横倒しの状態で検出された。

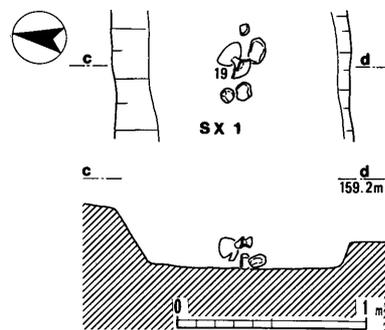
S X 3 (第 I-11,12図) 調査区中央で検出した。周溝内側で一辺約 9 m の正方形を呈する。南東隅は幅 1.7m の陸橋部となる。北西隅で S X 2 を切る。周溝の幅は 0.7~1 m であるが、東溝は幅 0.5m と細く南溝は幅 2 m と広い。検出面よりの深さは 0.35~0.5 m であるが、東溝は浅く 0.25m しかない。底部は平坦で、埋土は黒色土で分層は不可能だった。北西隅近くの西溝から小型の壺 (21) が出土した。底から 14cm 浮いて倒立状態で出土し、口縁部を故意に打ち欠いたように欠損している。また、南西隅近くの南溝からは大型壺 (22) が底に接し正立状態で出土したが、胴部は土圧のため潰れていた。

S X 4 調査区北部で西溝と東溝の痕跡を検出したにすぎない。西溝の北端は東へ曲り北溝へ、東溝の南端は西へ曲り南溝へそれぞれ繋がっているようで、これらの角には陸橋部は存在しない。また、東溝は S X 1 を切る。東西の溝の距離は、内側で測って約 14m あり、4 基の方形周溝墓中最大規模である。

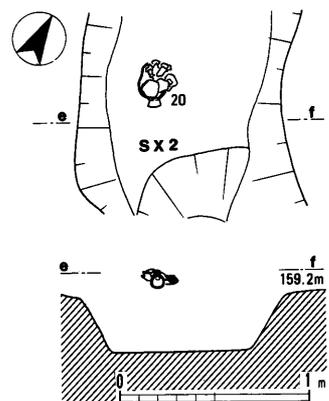
2. 古墳時代後期の遺構

竪穴住居 2 棟を検出した。

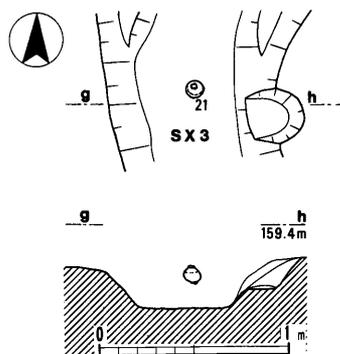
S H 1 (第 I-17図) 後世の掘立柱建物や土坑に多数切られ、深さは検出面より 5 cm 前後と残りも



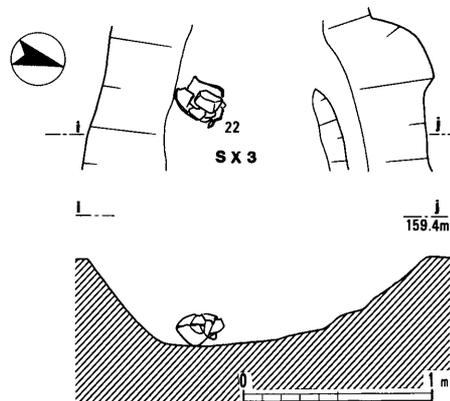
第 I-9 図 S X 1 遺物出土状況実測図 1 : 40



第 I-10 図 S X 2 遺物出土状況実測図 1 : 40



第 I-11 図 S X 3 遺物出土状況実測図 1 : 40



第 I-12 図 S X 3 遺物出土状況実測図 1 : 40

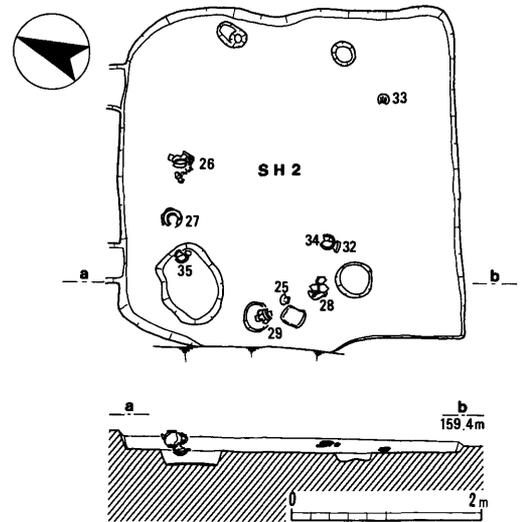
非常に悪い。したがって平面形に疑問も残るが、東西3.5m、南北4.5mの長方形を呈する。北壁近くで焼土を検出した。おそらくこの辺りに竈があったのだろう。また、支柱穴は検出できなかった。

SH2（第I-13図）平面形は一辺3.5mの正方形を呈する。深さは検出面より5~20cmである。支柱穴と竈は確認できなかった。北西隅に長軸85cm、短軸65cm、深さ15cmの楕円形の土坑があり、この堅穴住居に伴う貯蔵穴であろう。

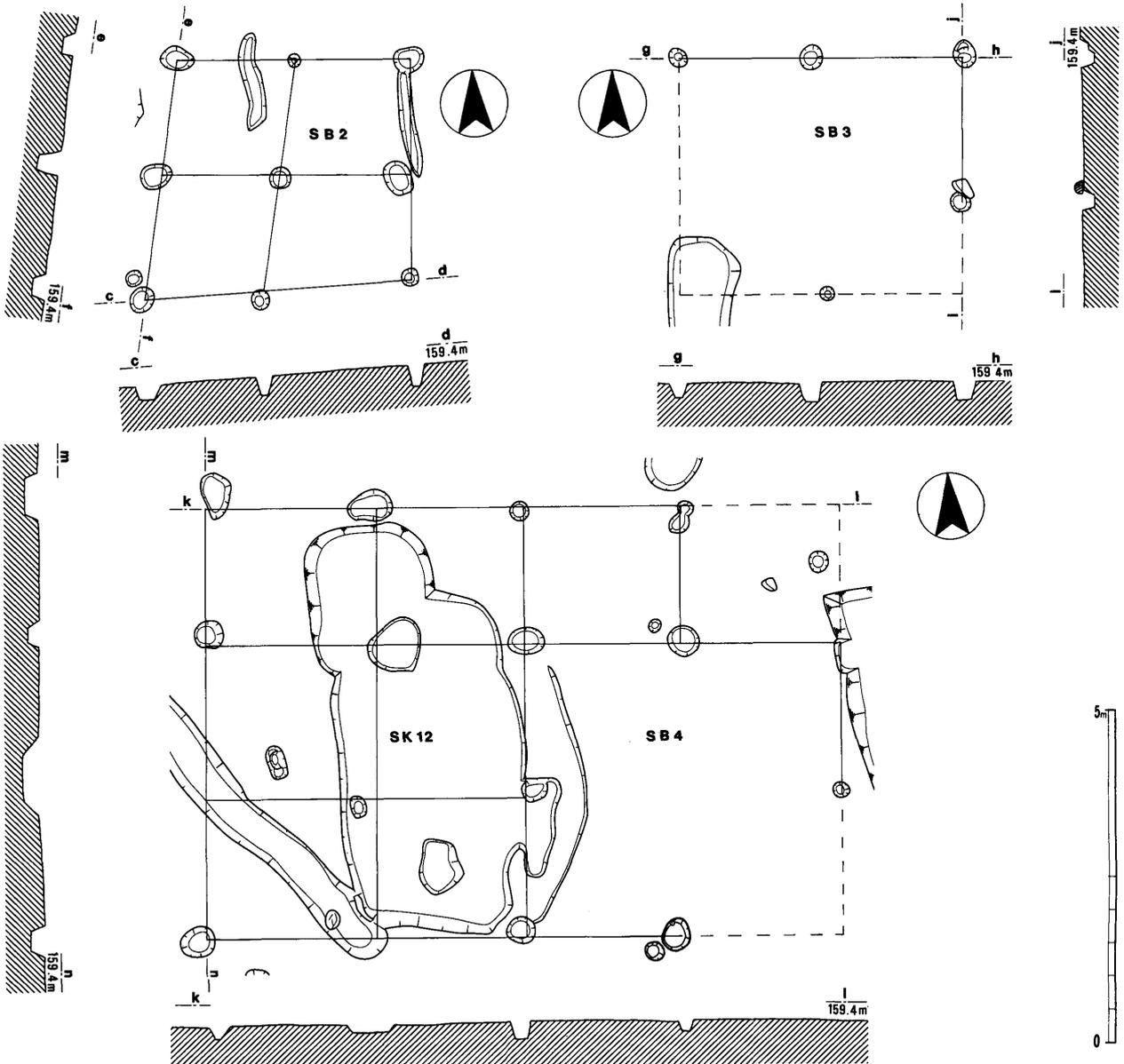
3. 奈良時代末期の遺構

堅穴住居1棟のみを検出した。

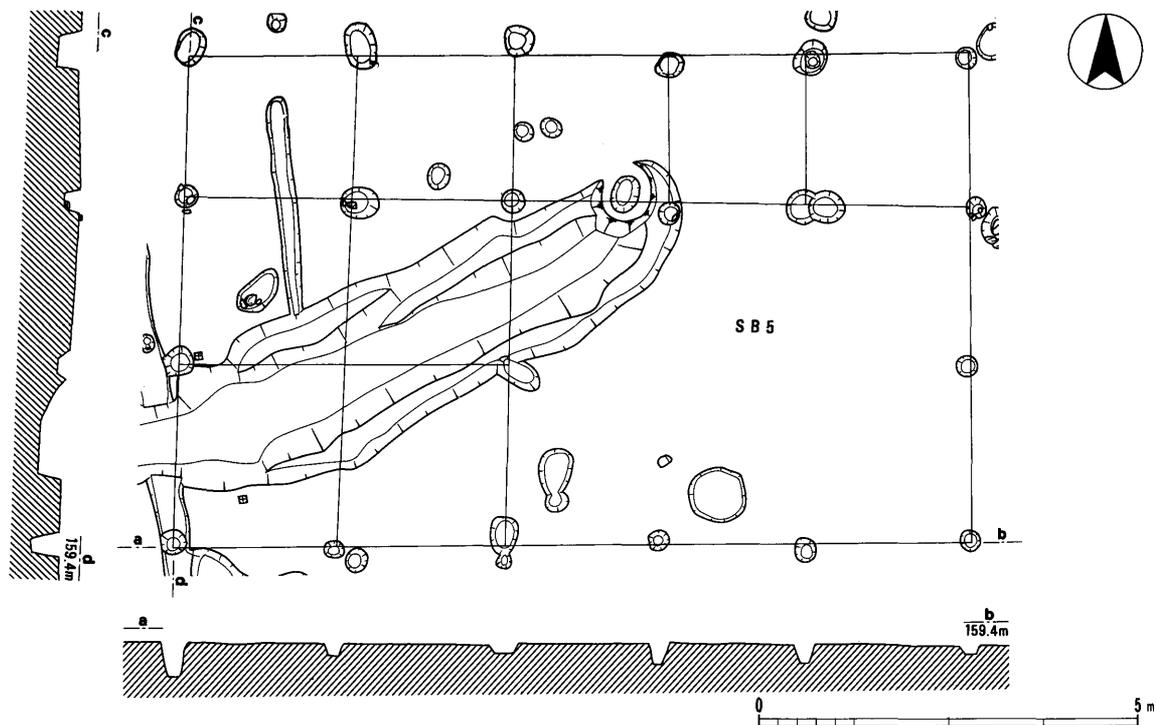
SH3 調査区北部で検出した。東西4m、南北4.5mのいびつな正方形を呈する。深さは検出面より



第I-13図 SH2 実測図 1:80



第I-14図 SB2、3、4、SK12 実測図 1:100



第I-15 SB5 実測図 1:100

り10cm前後で底部は平らである。主柱穴や焼土は検出できず堅穴住居とするには疑問も多い。

4. 平安時代中期の遺構

検出した遺構は、掘立柱建物4棟をはじめ柱列、土坑等がある。

(1) 掘立柱建物

SB2 (第I-14図) 桁行2間×梁行2間の非常に歪んだ方形の東西棟と考えた。

SB3 (第I-14図) 検出できなかった柱穴も多いが2間×2間の東西棟と考えた。東側妻柱の柱穴の脇に35cmほどの石が1個置かれていた。柱を固定するために置かれたものであろう。

SB4 (第I-14図) 4間×3間の総柱の東西棟である。柱穴はほぼ円形を呈しているが、その大きさは不揃いで、柱間もやや不等間である。SX3と重複する柱穴は、埋土が酷似していて検出できなかった。また、北東隅と南東隅の柱穴は検出することができず、3間×3間で東側に張出部をもつ建物と考えられなくもないが、4間×3間の建物とするほうが自然であろう。その場合、SB5と同様、南東部は土間になっていたかもしれない。SK12は、この建物とはほぼ同時期のもので関連施設であることも考えられる。

SB5 (第I-15図) 5間×3間の総柱の東西

棟であるが、建物の南東部の束柱は精査にもかかわらず検出できなかった。この部分はSB4と同様に土間であったのかもしれない。

(2) 柱列

SA2 (第I-16図) SB1の東側で3間分の柱列を検出した。SB1関連の施設と考えられなくもないが、SB1柱穴埋土には瓦器片が含まれるのに対しSA2では黒色土器片が含まれ瓦器は一片も確認されなかった。さらに柱列の方向がSB3,5と一致するためSB1よりも一時期古いSB3,5に関連する施設であると考えられる。

(3) 土坑

SK12 (第I-14図) 長辺5m、短辺3.5mのおおむね長方形を呈する。検出面よりの深さ15cmと浅く、底部は平坦である。北端部は、試掘坑によって壊されている。SB4の中に収まり、この建物に伴う遺構であるかもしれない。

SK13 直径40cm、検出面よりの深さ8cmの小土坑であるが、黒色土器碗片と土師器片がぎっしり詰まっていた。接合の結果完形に復元できるものはなく、(43)の他は別固体の小片である。

SK14 直径35cm、検出面よりの深さ20cmの小土坑であるが、遺物の出土状況はSK13と同様である。

SK15 直径40cm、検出面よりの深さ15cmの小土坑であるが、遺物の出土状況はSK13、14と同様である。

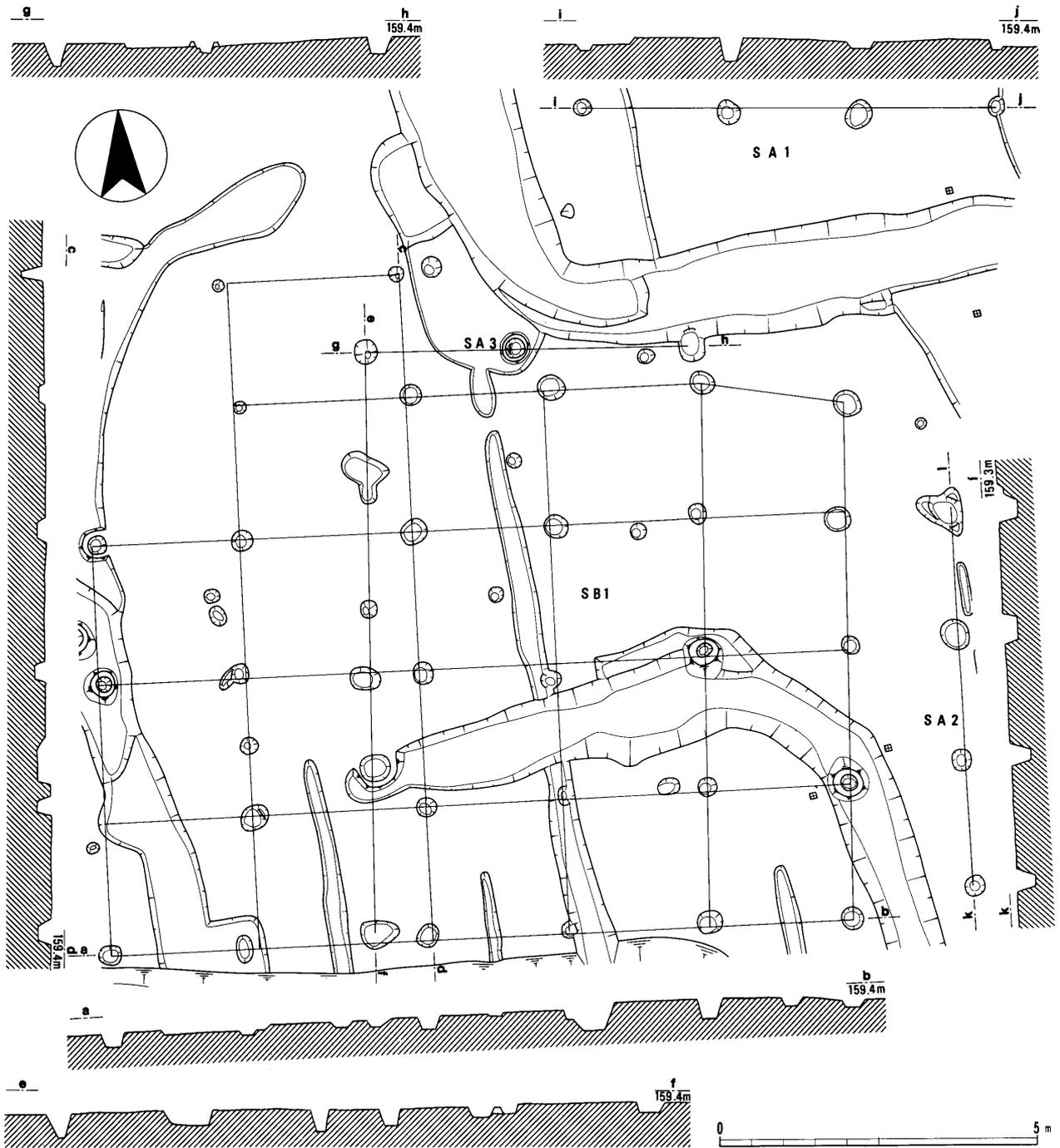
SK17 直径40cm、検出面よりの深さ20cmの小土坑であるが、ほぼ完形の黒色土器碗(44)が、1個正立状態で出土した。

5. 平安時代末期の遺構

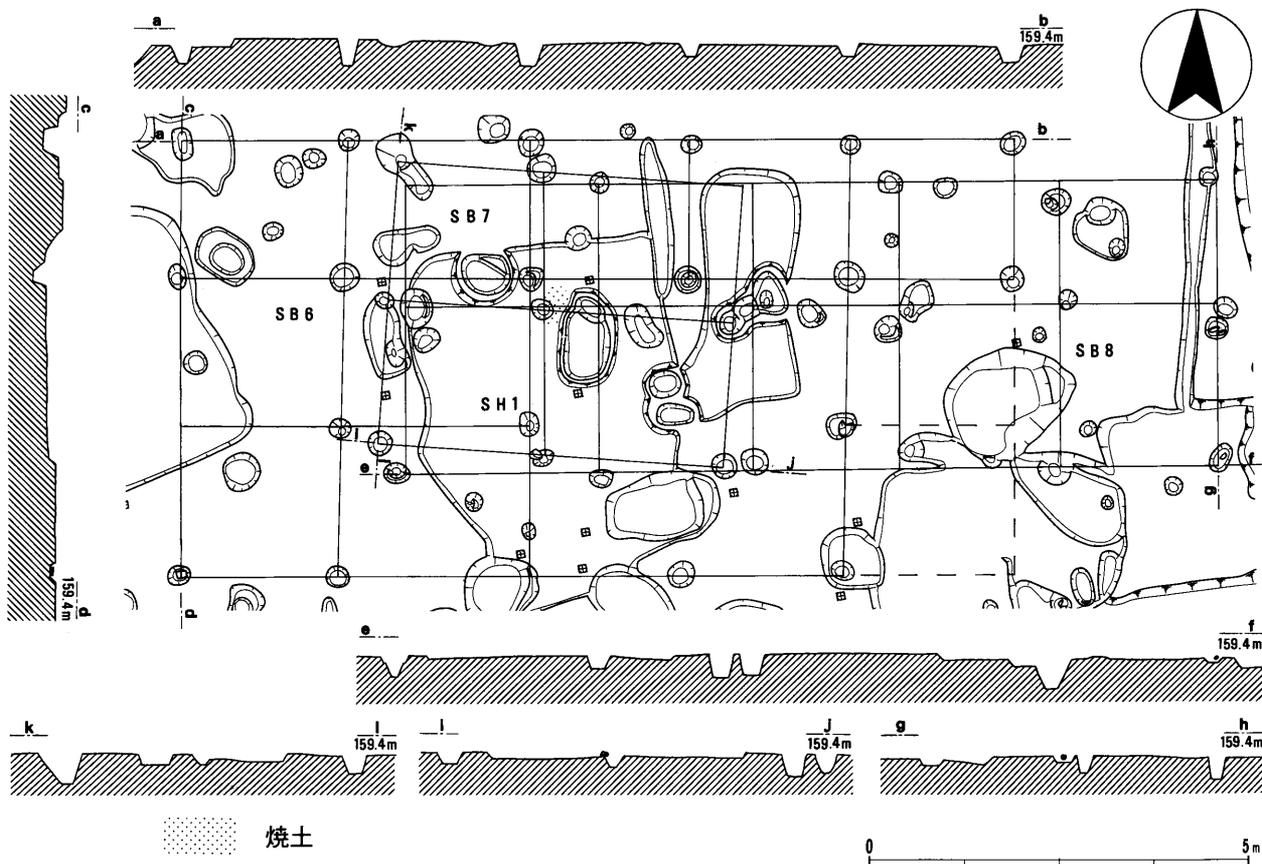
掘立柱建物3棟、小土坑、井戸等を検出した。

(1) 掘立柱建物

SB1 (第I-16図) 5間×3間の総柱の東西棟で北側に逆L状の張出部をもつ変則的な建物と考えた。最大5間×5間の総柱建物となる可能性も残されているが、SX4と柱穴の埋土は色、質ともに大きく違うので、柱穴を見落としたとは思えない。しかし、SX3とは酷似していたのでその可能性を否定できないが、その場合でも、最北部の柱穴は他のものより小さく庇であることは間違いのないであろう。また、北東隅の柱穴は大きく南へはずれているので



第I-16図 SB1, SA1, 2, 3, 実測図 1:100



第I-17図 SH1, SB6, 7, 8実測図

身舎とは考えにくく、この建物の北部は逆L状の張出部と考えた。南から2列、西から2列目の柱穴から完形の土師器皿が出土している。

SB6 (第I-17図) 5間×3間の総柱の東西棟である。他の遺構との重複により検出できなかった柱穴も多い。SB8とは建て替え関係にあるものと思われる。

SB8 (第I-17図) 柱通りが悪く、検出できなかった柱穴もあり建物とするには疑問も残るが、5間×2間の総柱の東西棟とした。SB6とは建て替えの関係にあるものと思われる。中央西から3本目の東柱から完形の土師器皿が出土している。

(2) 柱列

SA1 (第I-16図) SB1の北側で3間分を検出した。両端の柱穴は直径25cm, 中央の2基は直径40cmの円形を呈し、中央の2基が大きくなっている。SB1と方向はやや違うものの、これに関連する施設と考えられるが、柱穴からの遺物の出土もなく確証はない。

SA3 (第I-16図) 南北5間、東西2間の直角に曲がる柱列である。掘立柱建物の一部かもしれ

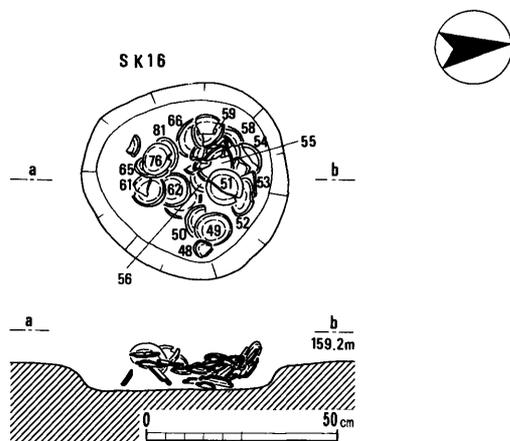
ないが、ここでは柱列としておく。南から2番目の柱穴から「て」字口縁の台付皿(46)がほぼ完形で出土した。

(3) 土坑

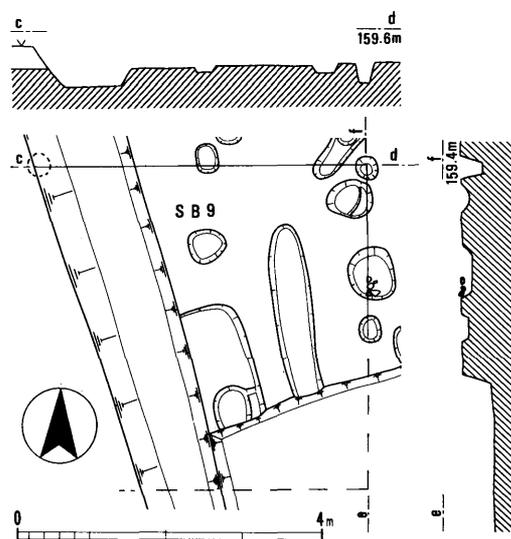
SK16 (第I-18図) 直径50cm、検出面よりの深さ6cmの浅い小土坑である。土坑内には土師器の「て」字口縁皿33枚(48)～(80)と瓦器皿1枚(81)が、ほぼ完形で埋められていた。埋め方には特に規制は認められない。何かの祭祀に使用されたあとと投棄されたものだろうか。

(4) 井戸

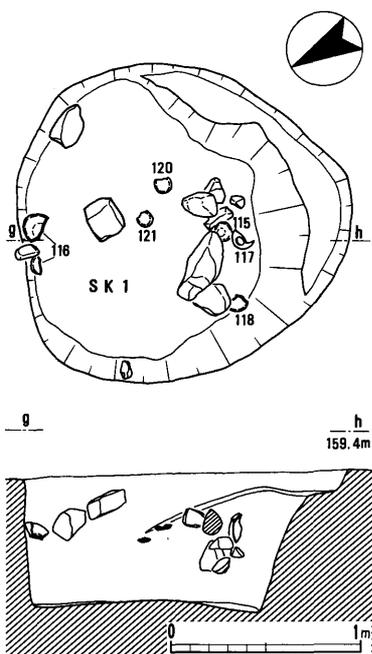
SE2 調査区西部で検出した。直径1.5mの円形状で、壁面に30cm弱の石が数個張付いていた。これにより、元は石組井戸であったことが推測でき、その石は埋土からほとんど出土せず、抜取られたものと考えられる。井戸の平面形は、円形か方形かははっきりしない。深さは検出面より2.1mで、底部には特に埋納された土器等は確認できなかった。掘形は、直径3.6mの円形である。井戸埋土は、検出面から1.5mまでは暗茶色砂で、それ以下は淡青色砂である。



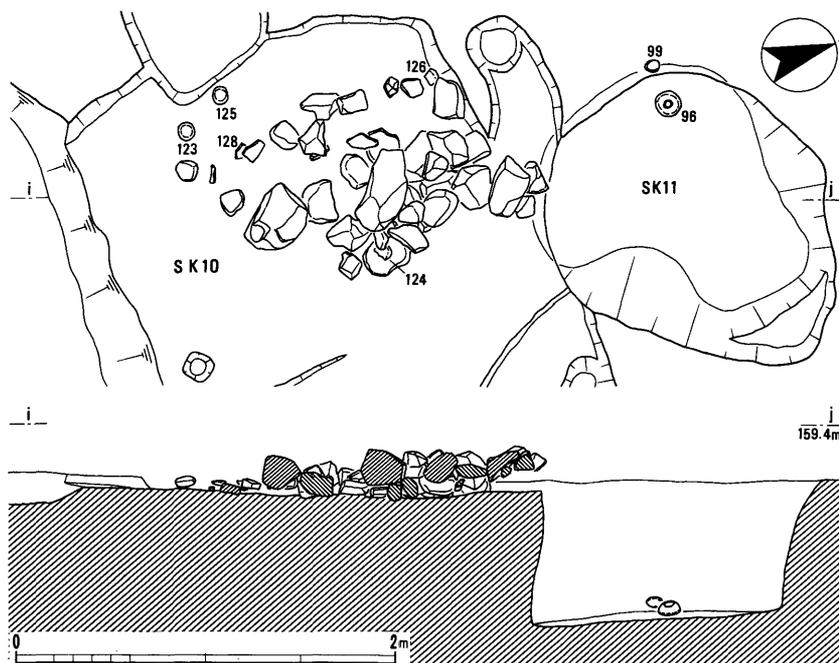
第I-18図 SK16実測図 1:20



第I-19図 SB9 実測図 1:100



第I-20図 SK1実測図 1:40



第I-21図 SK10, 11 実測図 1:40

6. 鎌倉時代の遺構

掘立柱建物、土坑、井戸などを検出した。

(1) 掘立柱建物

SB7 (第I-17図) 2間×2間の総柱の東西棟と考える。北西隅の柱穴が検出できず建物として疑問も残る。

SB9 (第I-19図) 調査区端での検出のため、その規模は不明である。桁行の柱穴を調査区壁面で確認できたため、桁行は2間以上で柱間2.15m等間であることがわかった。

南東隅柱を検出できなかったのは、砂地による浸透のため層位の把握が不十分のために検出面を深くとりすぎたため、本来は検出できたものと思われる。

(2) 土坑

SK1 (第I-20図) 直径約1.7mの歪んだ円形を呈し、検出面よりの深さは70cmと深い土坑である。壁面は垂直に近い角度で落ち、底部は平坦である。埋土は、黒色のやや粘質土で、20~40cmの大きな石が数個と多量の土器片を含んでいた。土器片の多くは、瓦器の椀と小皿で、完形や接合後完形になったものが5個体ある。しかし、その出土状況は、規則的な埋納を表してはいない。全体の形態や遺物の出土状況はSK9、11と似ている。

SK2 (第I-22図) 長径1m、短径50cmの長円形を呈する。検出面よりの深さ10cm弱、底部は平

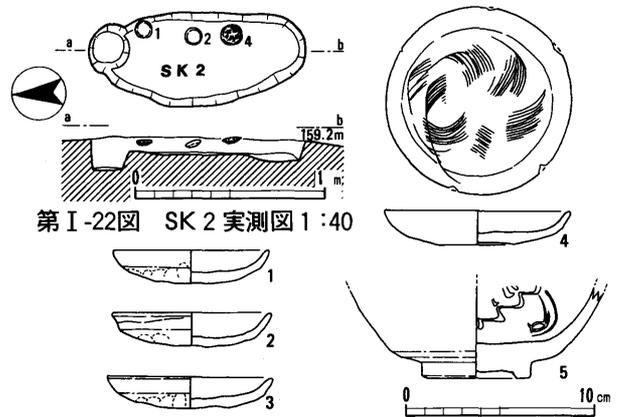
坦で埋土には炭が多く含まれていた。土坑内東側に土師器の小皿2枚(1), (2)と青磁の皿1枚(4)が、並んで出土した。いずれも土坑底部より4~5cm浮いて正立状態で検出された。調査中、不慮にして完形の土師器の小皿1枚(3)が取上げられてしまった。元は(1)と(2)の間に置かれていたものである。これらの土器は、その出土状況から埋納されたものとする。なお土坑北端でSB7の柱穴を切る。

SK3(第I-24図) 長径1m、短径60cmの長円形を呈する。検出面よりの深さ7cm弱で、底部は平坦である。埋土は、茶色砂質土で炭を多く含んでいた。土坑中央やや北側で土師器の小皿1枚(6)が完形で出土した。土坑底部より4cm浮いて正立状態で検出され、その出土状況は枚数は少ないもののSK2と似ている。なお土坑北端でSB8の柱穴を切る。

SK4(第I-26図) 長径1m、短径90cmの楕円形を呈する。検出面よりの深さ16~22cmで、底部は南側がやや深いものの平坦である。底から15cmほど浮いて土師器の皿(9), (10)と小皿(7), (8)が出土した。いずれも完形ではないが、(8)と(10)は正立状態で重なっていた。これらは、元は完形で埋納されたものかもしれない。さらに、蓋をするようなかたちで、20~40cmの石が5個並べられていた。埋土は、茶色砂質土で炭を多く含んでいた。

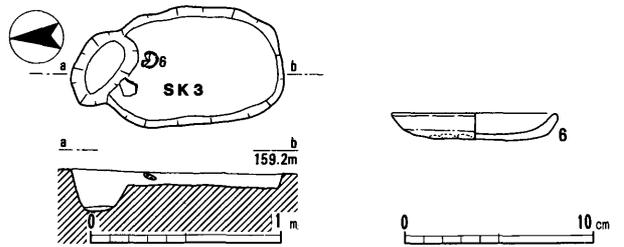
SK5(第I-28図) 長径1.25m、短径80cmの長円形を呈する。検出面よりの深さ10~14cmで、底部は北側がやや深いものの平坦である。遺物の出土はなかったが、25~35cmで厚さ8cmほどの偏平な石が4個、あたかも土坑に蓋をするかのような状態で出土し、埋土には炭を多く含んでいた。

SK6(第I-29図) 長径1.5m、短径80cmの長円形を呈する。検出面よりの深さ20cmで、底部は平



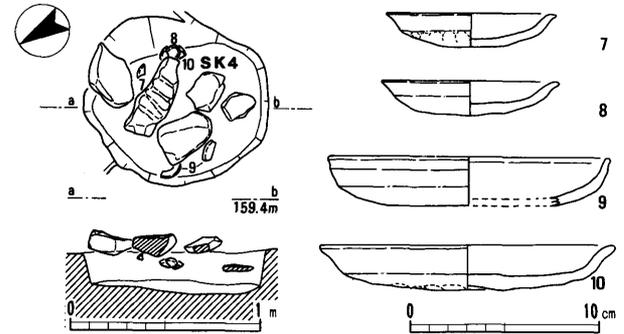
第I-22図 SK2 実測図1:40

第I-23図 SK2 出土遺物実測図1:4



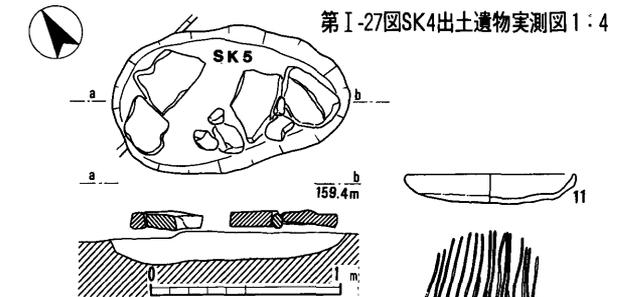
第I-24図 SK3 実測図1:40

第I-25図SK3 出土遺物実測図1:4

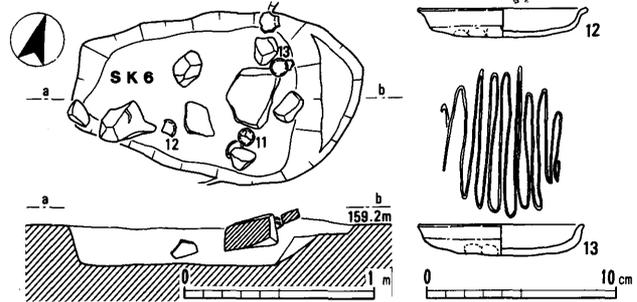


第I-26図 SK4 実測図1:40

第I-27図SK4出土遺物実測図1:4

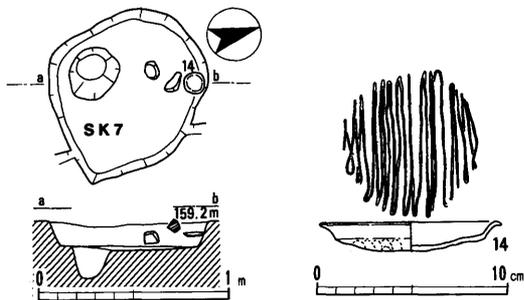


第I-28図 SK5 実測図1:40



第I-29図 SK6 実測図1:40

第30図SK6出土遺物実測図1:4



第I-31図SK7 実測図1:40

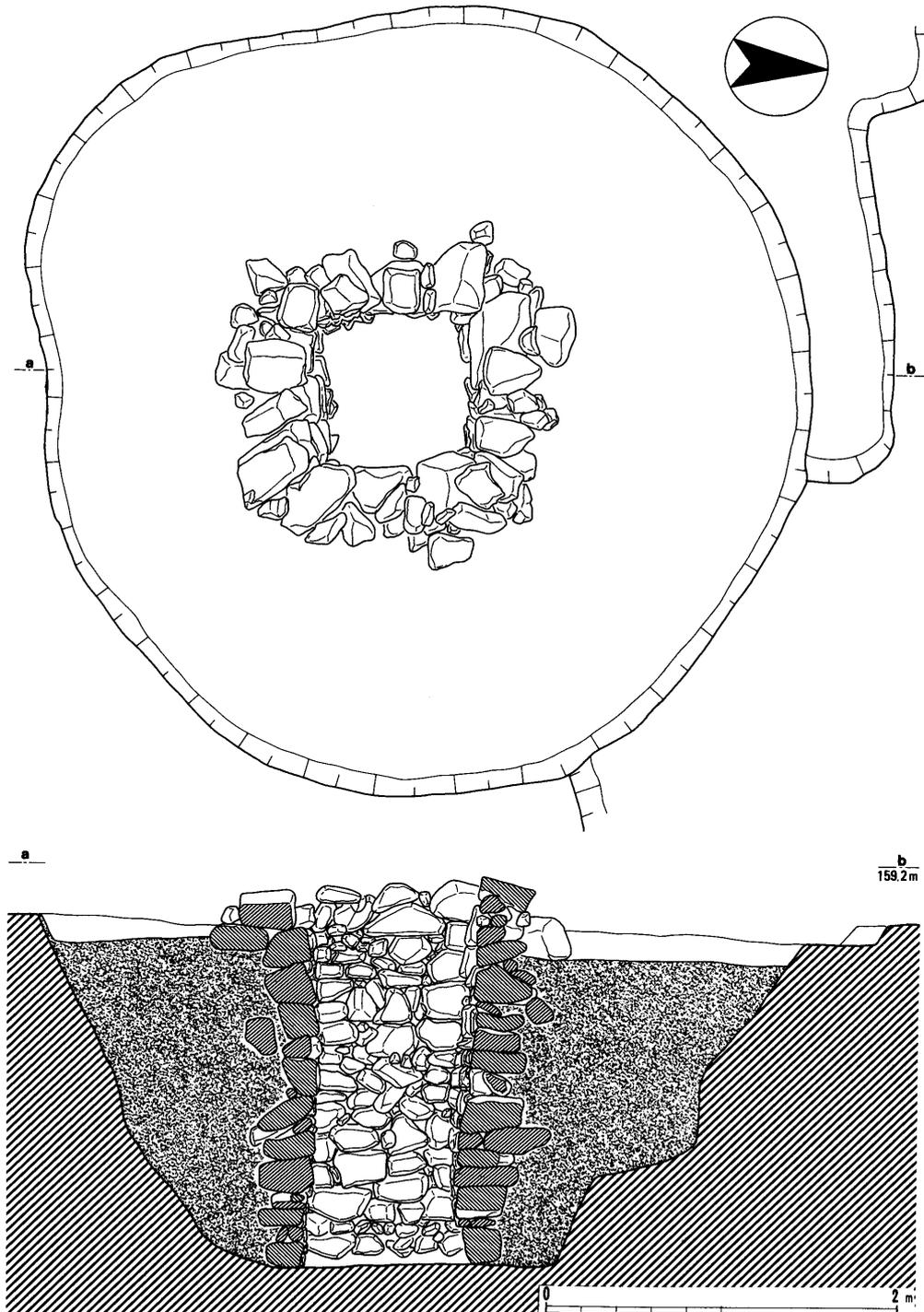
第I-32図SK7出土遺物実測図1:4

坦である。東側23cmは深さ5cmほどのテラス状になっている。ほぼ完形の土師器の小皿が1枚(11)、瓦器の小皿2枚(12)、(13)が正立状態で、また10~30cmの石が9個出土した。しかし、石はSK4、5のように蓋をしたような状態ではなく、瓦器皿(13)は石の上に乗る形で検出された。

SK7(第I-31図) 一片80cmの北東隅のつぶれた隅丸正方形を呈する。検出面よりの深さ14cmで、

底部は平坦であり、SB6の柱穴を切る。北壁に接して完形の瓦器の小皿(14)が、土坑底部より6cm浮いて正立状態で出土した。8cmほどの小石が2個小皿の近くで出土したが、この遺構に伴うという確証はない。

SK8 長径1.75m、短径1mの卵形を呈する。検出面よりの深さ30cmであるが、北側半分は深さ15~20cmのテラスになっている。埋土には炭が多く含



第I-33図 SE1実測図 1:40

まれていたが、SK2～7のような石や土器の出土はなく瓦器の破片が出土したのみである。

SK9 直径1.2mのほぼ円形を呈する。検出面よりの深さ80cmで、底部は平坦である。壁面はオーバーハングして袋状を呈する。瓦器の椀、皿等比較的多くの土器が出土した。全体の形態や遺物の出土状況はSK1、11と似ている。

SK10 (第I-21図) 長辺3.3m短辺2mの長方形を呈する。検出面よりの深さは、深いところでも6cmほどしかなく、土坑として認められないぐらいだ。西側でSK7を切る。土師器小皿が2枚(123)、(125)、正立状態で土坑の西側で並んで出土した。土坑中央からSK11に向い15～45cmほどの石が、かたまって検出された。石の間には、瓦器の椀、小皿、土師器の小皿が挟まっているが、どれも完形ではない。この集石は、図示できなかつたがSK11の上まで延びているのでSK11より新しいことがわかる。場合によっては、SK10より新しい別の遺構であるかもしれない。

SK11 (第I-21図) 長径1.75m、短径1.4mの不整形円形を呈する。検出面よりの深さ75cmであるが、北東側に深さ15cmのテラスをもつ。底部は平坦だが、南西側の壁面は大きくオーバーハングしている。底部西端で、瓦器の椀(96)と土師器の小皿(85)が完形で出土した。このほかにも(86)、(95)、(99)が完形で出土しているが、いずれも埋納されたものとはいえない。全体の形態や遺物の出土状況はSK1、9と似ている。

(3) 井戸

SE1 (第I-33図) 調査区南部で検出した方形石組井戸である。30～50cmの川原石を一辺約1mの正方形に積み上げて形成する。断面で見ると、中ほどでやや狭まり、再び底へ向かって広がっている。検出面から2m下がった所で底になった。底には特に胴木のようなものは認められない。底の淡青色微砂層が、よくしまっているために、そのまま石を積み上げたのだろう。掘形は直径4.4～4.6mのいびつな円形を呈し、1.2mほど掘った所でテラスを設け、直径2.2mほどにして底に至る。埋土は、検出面から70cmで大きく2層に分れ、上層(黒灰色粘質砂)からは多量の瓦器片が出土した。井戸廃絶後は、廃

棄土坑として利用されたのであろう。下層(暗灰色粘質砂)は、上層に比べて遺物の出土が極端に少なく、底部にも埋納された様な土器は出土しなかつた。

B. 遺物

B地区からは、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代末期、平安時代後期～鎌倉時代の土器が出土し、その量は整理箱約30箱分ほどである。弥生時代後期の土器の出土量は極めて少なく、大部分は方形周溝墓からの出土である。古墳時代後期、奈良時代末期の土器は、出土量は少ないものの竪穴住居内から比較的まとまって出土した。平安時代後期～鎌倉時代の土器は、瓦器を中心に出土遺物の大部分を占める。その出土状況は、土坑内からの一括出土や埋納遺物など完形またはそれにちかいものが多い。

1. 弥生時代後期の土器

(1) SX1 出土の土器 (第I-34図)

(17)は小型の壺の底部、(15)、(16)、(19)は高杯である。(15)は底部より強く屈曲して立ち上がる口縁部を持つのに対し、(19)は半球状の杯部を持つ。脚部には(16)は4方、(19)は3方の円形の透し孔が施される。(18)は脚付壺の脚部の様だが、底部の中心に直径1cmの円孔が焼成前より施されている。小型の器台であるかもしれない。

(2) SX2 出土の土器 (第I-34図)

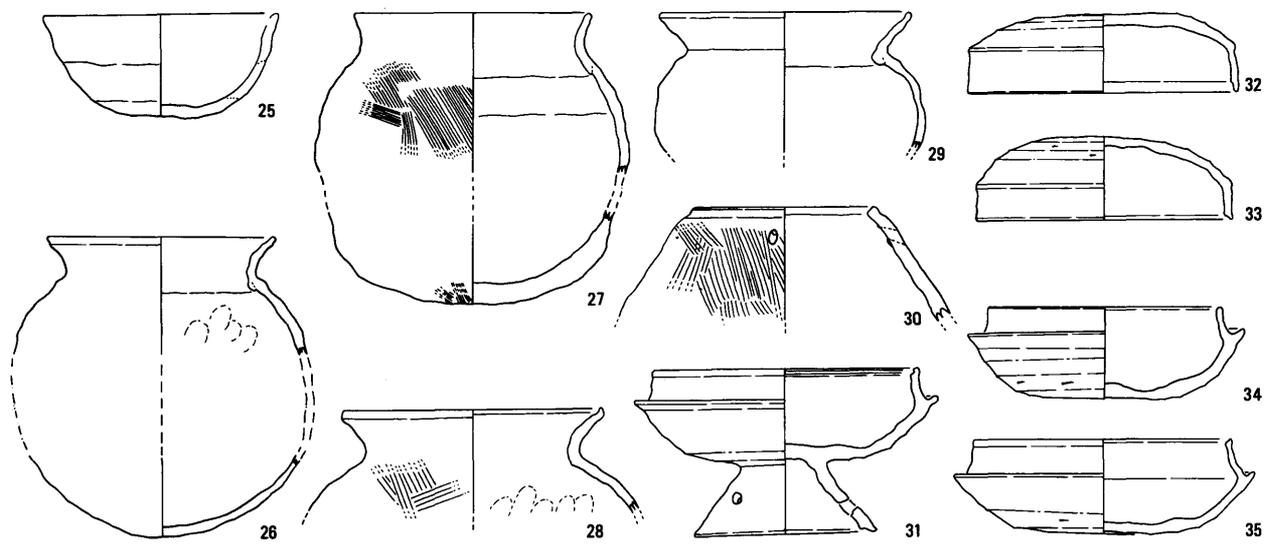
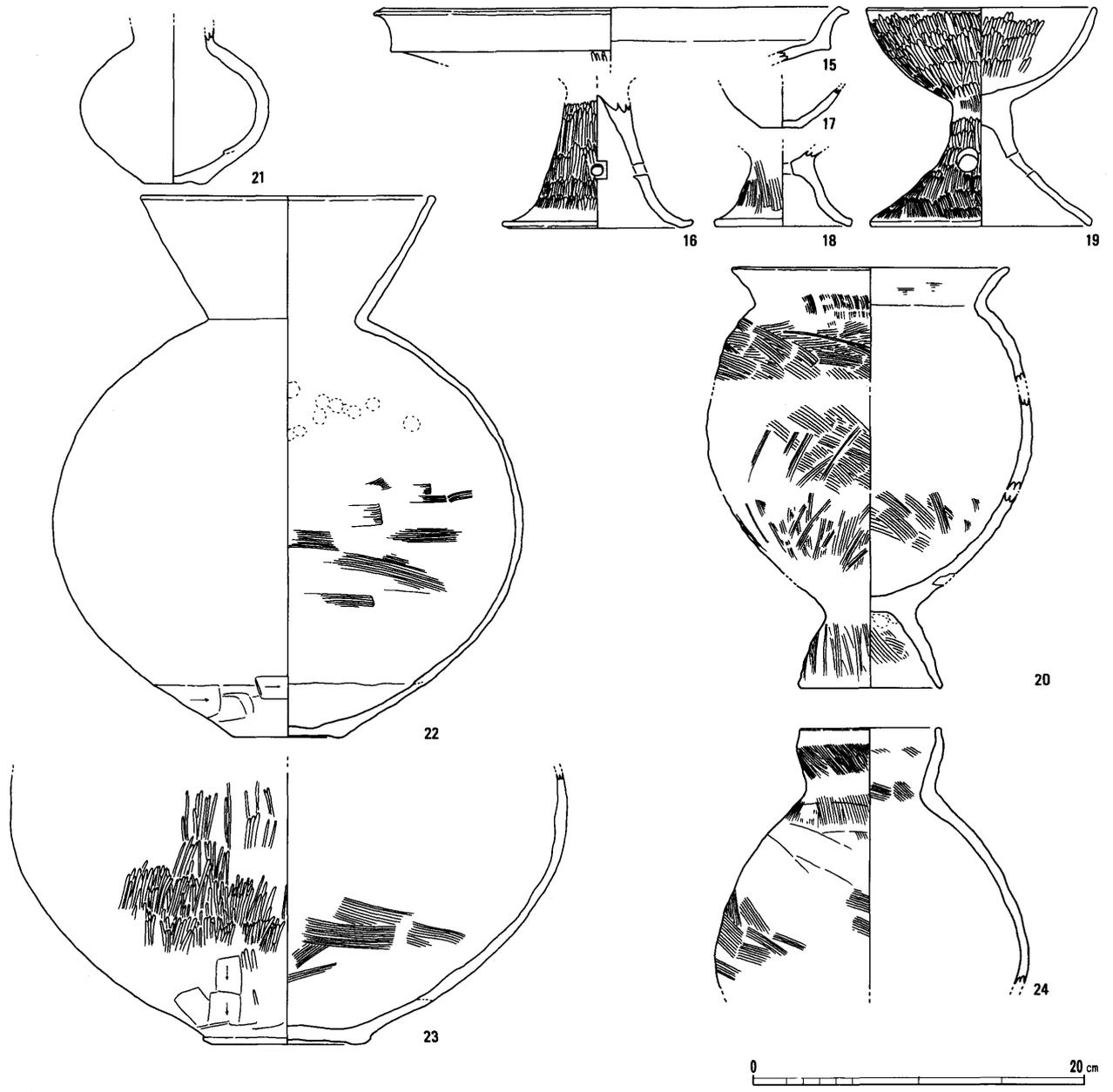
(20)は台付甕であるが完全に接合できなかったため、口径、高さに疑問も残る。ハケ目は、原体幅1.3cm前後と4mm前後の2種類を使用している。色調、胎土とも他のものと異なる。

(3) SX3 出土の土器 (第I-34図)

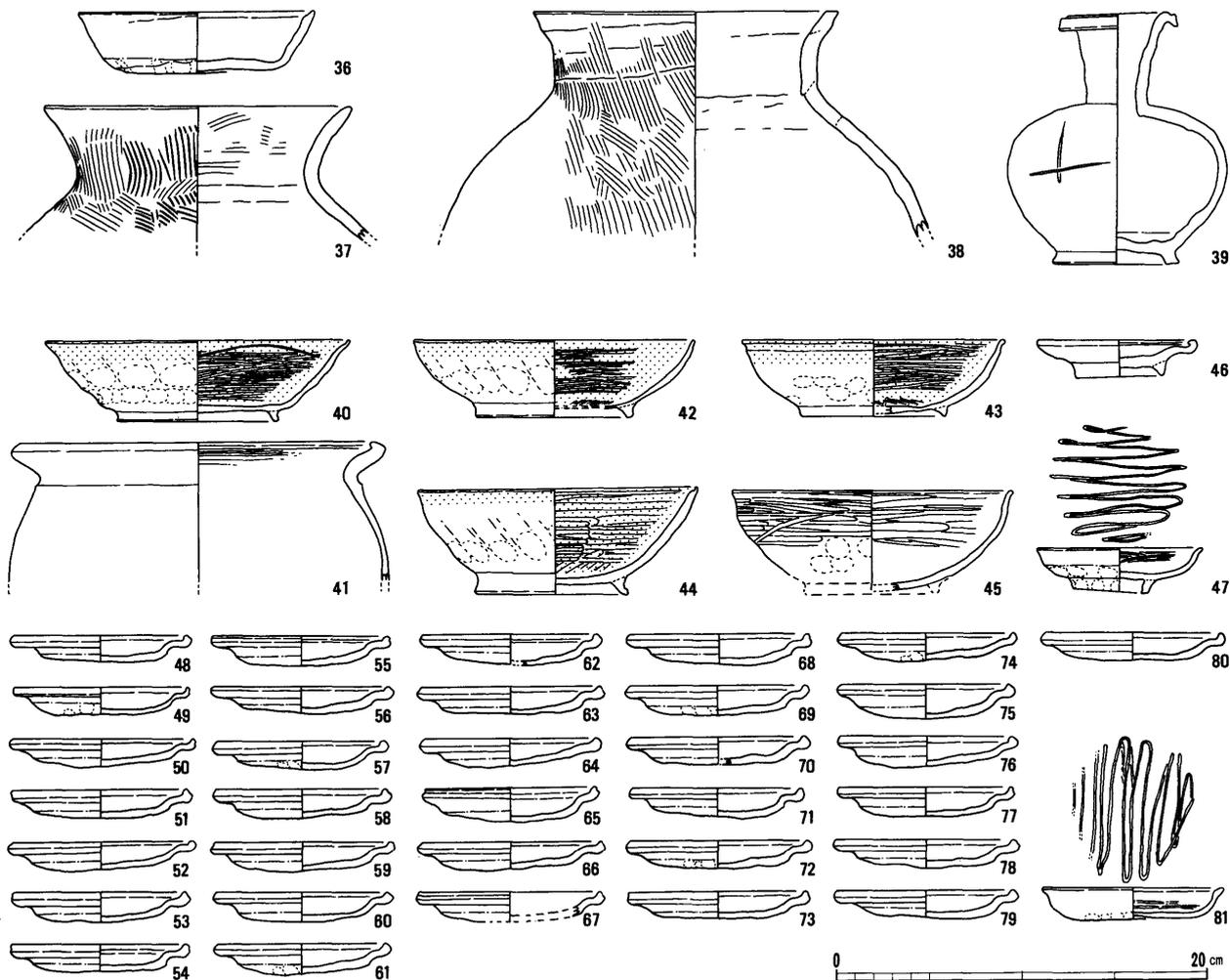
(21)は、小型の壺であるが頸部を欠損しているため全体の形態は不明である。(22)、(23)は大型の壺であるが(23)は体部下半のみの残存である。(22)の体部外面上半は板状工具により左上にナデ上げられているが、(23)は縦方向のヘラミガキで調整する。両者共底部に粘土紐を張付け輪台状に仕上げている。

(4) SX4 出土の土器 (I-34図)

(24)は、体部最大径が体部下半にある非常に下脹れの壺である。外面は原体幅約2cmのハケにより調整するが、その後一部を同一原体によりナデてい



第I-34図 SX 1~4, SH 2 出土遺物実測図 1:4 15~19はSX 1, 20はSX 2, 21~23はSX 3, 24はSX 4, 25~35はSH 2



第I-35図 SH3, SK13~17, 小ピット 出土遺物実測図 1:4

36~39はSH3、40はSK14、42はSK15、43はSK13、44はSK17、46はSA3、45、47はその他小ピット、48~81はSK16の出土短脚の有蓋高杯である。口縁端部には段を残し、脚部には円形の透かし孔が三方に空けられる。

るようである。あまり類例をみない土器であるが、伊勢市野垣内遺跡SB23から同系のもが出土している^①。

2. 古墳時代後期の土器

(1) SH2出土の土器 (第I-34図)

土師器 (25) は粗製の杯、(26) ~ (29) は甕である。(28) の口縁端部はつまみ上げられ外に面を持つが、他はそのまま丸くおさめる。(30) は無頸の甕であるが、体部下半を欠損しているため全体の形態は不明である。口縁部近くに直径8mmの円孔が、外から内に向かって空けられている。確認できるのは1個だけであるが、口縁部が弱く残存しかないため2個対にあげられていた可能性もおおきい。

須恵器 (32), (33) は蓋である。(32) の天井部は歪みが激しく、別個体の須恵器片が粘着している。(34), (35) は杯である。(35) は口縁端部に段をのこすが(34)では無くなっている。(31) は

3. 奈良時代末期の土器

(1) SH3出土の土器 (第I-35図)

土師器 (36) は杯である。粘土紐接合痕や指頭圧痕を残す。(37), (38) は甕である。両者とも1cmに3~4本の非常に幅の広いハケ目で調整される。土師器としては非常な高温で焼かれたようで、よく焼き締まっている。

須恵器 (39) は球形に近い体部に細長い頸部のつく壺である。体部に「+」の記号が付けられている。焼成前にヘラにより刻まれたものであろう。

4. 平安時代中期の土器

(1) SK14出土の土器 (第I-35図)

土師器 (41) は、やや内側に折返した口縁部をもつ甕である。外面全面に煤の付着があり、内面にも炭化物の付着がある。

黒色土器 (40) は、A類の杯であるが炭素の吸着は口縁部外面まで及ぶ。内面のヘラミガキは、見込み、器壁の順に施す。

(2) SK15出土の土器 (第I-35図)

黒色土器 (42) は、A類の杯である。(40) とくらべ、やや丸みを帯びた形態で、見込みと内面のミガキは接しない。

(3) SK13出土の土器 (第I-35図)

黒色土器 (43) は、A類の杯であるが炭素の吸着は口縁部外面にまで及ぶ。(42) と同様に見込みと内面のミガキは接しない。

(4) SK17出土の土器 (第I-35図)

黒色土器 (44) は、A類の碗であるが炭素の吸着は口縁部外面まで及ぶ。内面は、見込み、内面の順に丁寧なヘラミガキし、外面は簡単なナデのため指頭圧痕が残る。

5. 平安時代末期～鎌倉時代の土器

(1) SA3柱穴出土の土器 (第I-35図)

土師器 (46) は、いわゆる「て」字口縁皿に高台を張付けたもので、胎土は精良である。

(2) SK16出土の土器 (第I-35図)

SK16からは、土師器皿33枚と瓦器皿1枚がすべてほぼ完形で出土した。

土師器 (48) ～ (80) は、いわゆる「て」字口縁皿である。口縁部外面に浅い沈線が認められるが、(79)、(80) には全く認められない。しかしその差は、型式差というほどではない。楕円形を呈するものが多く、全体の形態も全てに歪みがあるが、法量の差はほとんどない。底部外面は、簡単なナデのため指頭圧痕を残すものがあり、すべてに「く」字、あるいは逆「く」字状の粘土紐接合痕が残る。また、見込みのナデは右回りに一回りするもの(51)、(69)、(80) と、逆に左回りのもの(50)、(60)、(78)、(79) がある。胎土はほとんどが精良であるが、(50) は砂粒を多く含むやや粗い胎土で色調も他のものより赤味が強く異質である。(49) は、他のものより器壁が薄く、燃成不良のためか黄色味を帯びている。

瓦器 (81) はやや深い形態の皿である。内面のヘラミガキは見込みを簡単に行い、側面に移って再び見込みに戻っている。

(3) SK11出土の土器 (第I-36図)

土師器 (82) ～ (87) は、皿である。口径14～16cmの大型のもの(82)、(83) と9cm前後の小型のもの(84) ～ (87) がある。大型のものは、口縁端部が外反するもの(82) と、そのまま丸くおさめるもの(83) があり、小型のものは、法量により(84)、(85) と(86)、(87) に分類できる。(86) は、底部中央がやや盛上がり、口縁部の一部には油煙が付着しており、底部の一部は橙褐色や赤褐色に変色している。(91)、(92) は、羽釜である。体部外面には煤が口縁部まで付着している。

瓦器 (89)、(90)、(93) ～ (96) は、碗である。体部外面を粗くヘラミガキし、連結輪状文が4～6個の輪をもって一周するもの(89)、(90) と、体部外面未調整で、連結輪状文は「ℓ」状になるもの(93) ～ (96) に分類できる。(94)、(96) は底部が高台より下に突出した不安定な形態である。(93) のヘラミガキは、見込みを横方向に行ってから体部内面に移り、再び見込みを「ℓ」字状にみかく。最初の見込みのミガキの幅は2.5～3mmで、他のもの(1～1.5mm) より広い。(95) の底部外面には「×」印の記号が刻まれている。焼成後、鋭利な工具で刻まれたものだろう。さらに、体部外面には三ヶ月状にいぶしの掛からない部分がある。(97)、(98) は、小碗である。調整は碗の(93) ～ (96) とほぼ同じである。(99) ～ (102) は、皿である。底部と口縁部の境が明瞭なもの(100) ～ (102) と滑らかなもの(99) がある。(100) の口縁部外面や底部内面には油煙の痕跡が認められる。

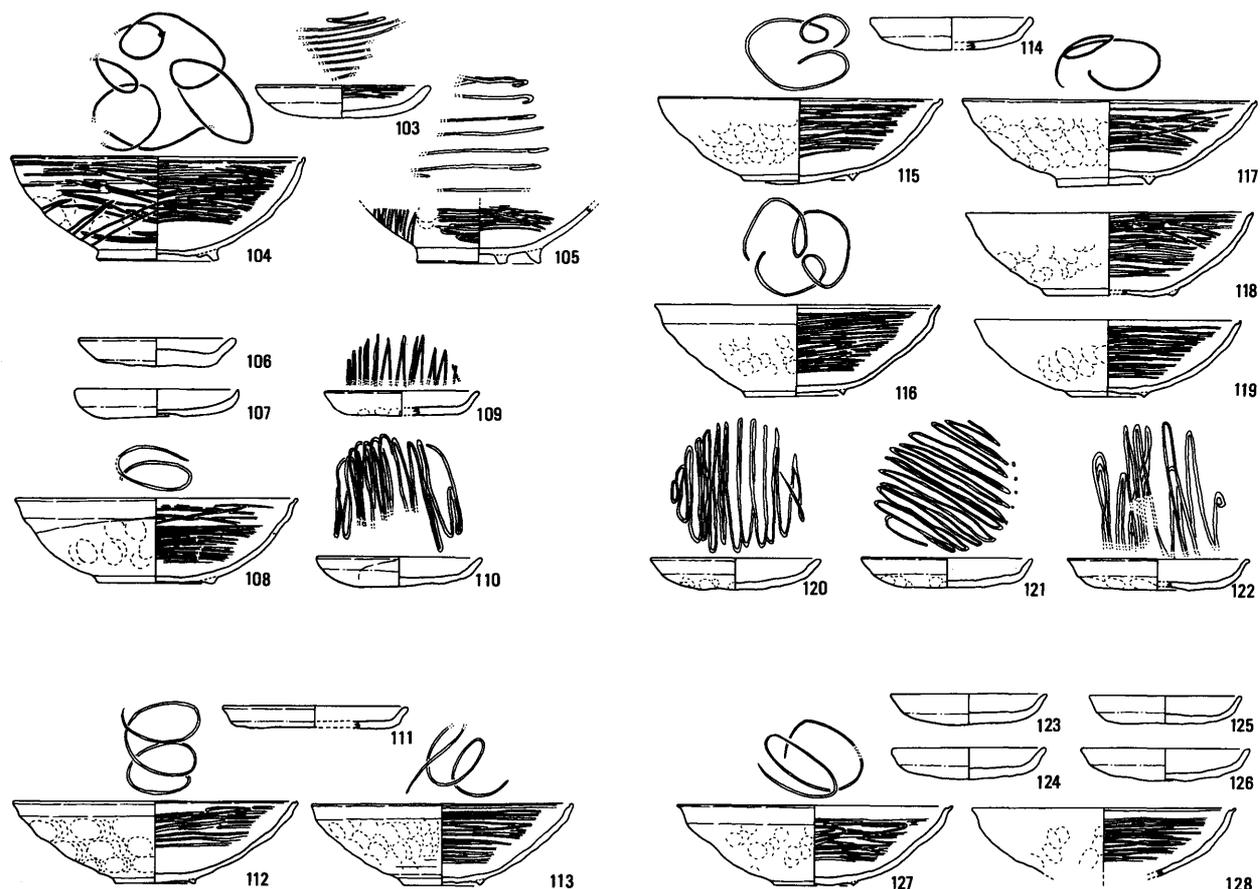
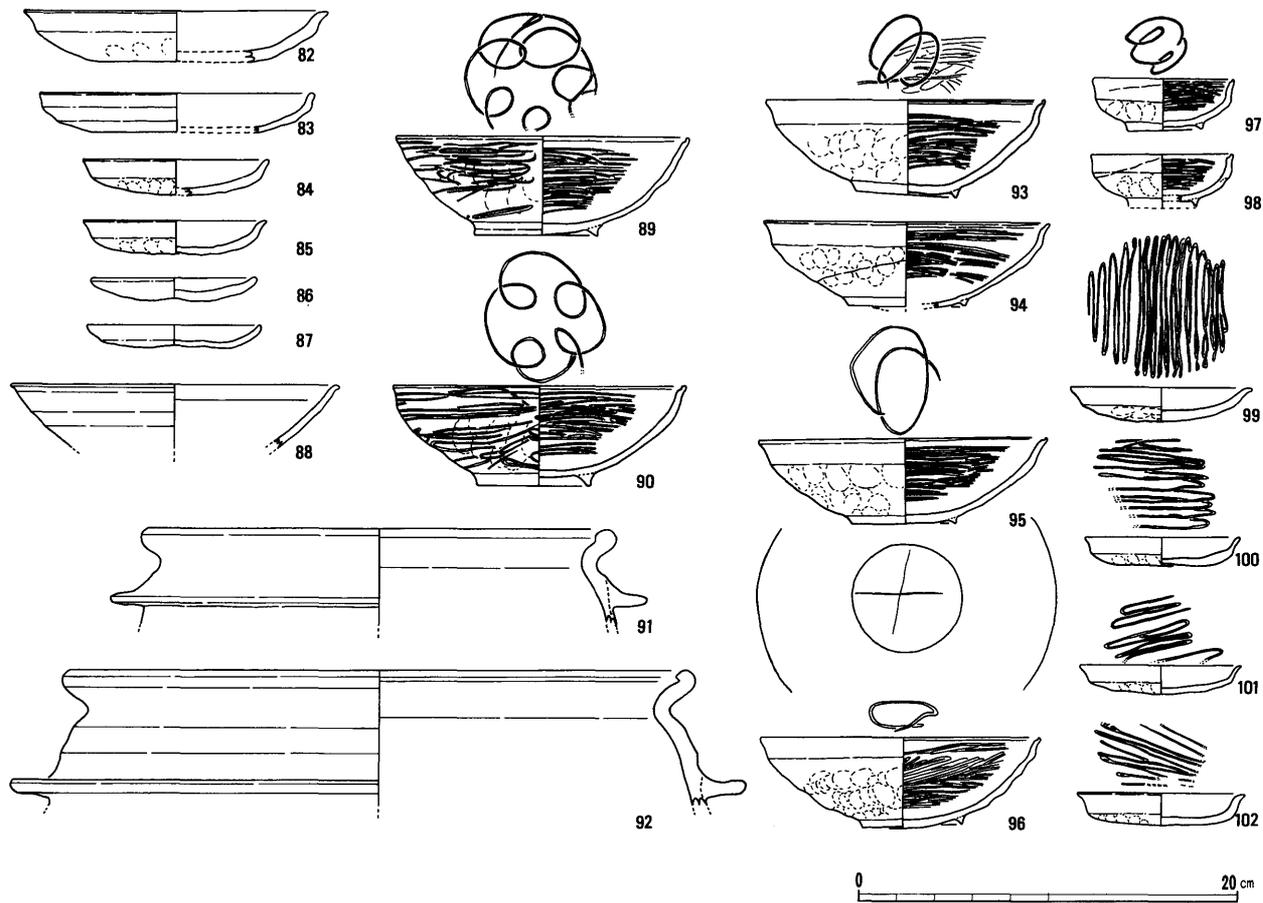
白磁 (88) は、碗である。内外面に施釉されるが発色が悪く、黄灰色を呈する。口縁部から1cmほど下がった内面に幅1mm以下の浅い沈線がはいる。

(4) SE2出土の土器 (第I-36図)

図示したものは、全て井戸内埋土からの出土である。

瓦器 (104)、(105) は碗であるが、(105) は二重高台である。(104) は内部側面から見込みの順にミガキを行うのに対し、(105) では見込みを平行状に行なった後、内部側面に移る。(103) は、皿である。口縁部内面のミガキは密である。

(5) SK9出土の土器 (第I-36図)



第I-36図 SK 1, 9, 10, 11, SE 1, 2 出土遺物実測図 1 : 4

82~102はSK 11, 103~105はSE 2, 106~110はSK 9, 111~113はSE 1, 114~112はSK 1, 123~128はSK 10出土

土師器 (106), (107) は、皿である。底部から屈曲して立上がる口縁部をもつもの(106)と丸味をもつもの(107)がある。(107)が底部外面にかるいナデを施すのに対し、(106)は未調整のまま、口縁部に比べて非常に厚い底部となっている。(106)の口縁部内面の一部は橙褐色に変色している。

瓦器 (108) は椀である。見込みと内部側面のミガキは、重複しない。(109), (110) は皿である。口縁部と底部の境が明瞭なもの(109)と丸味をもつもの(110)がある。(110)が底部外面にかるいナデを施すのに対し、(109)は未調整のままである。

(6) SE1出土の土器(第I-36図)

図示したものは、全て井戸内埋土からの出土である。

土師器 (111) は口縁部と底部の境が明瞭な皿である。

瓦器 (112), (113) は、椀である。(112)の高台は歪みが激しく、体部内面のミガキは疎らであり、(113)の外面はいぶしが不十分である。

(7) SK1出土の土器(第I-36図)

土師器 (114) は口縁部と底部の境が明瞭な皿である。

瓦器 (115) ~ (119) は、椀であるが全て歪みが激しい。(115)は底部が高台より下に飛出している不安定な形態で、体部外面には、三ヶ月状にいぶしの掛からない部分がある。(120) ~ (122) は皿である。いずれも口縁部と底部の境が明瞭な形態である。(112)の口縁部内面には、 $\frac{1}{2}$ ほどいぶしの掛からない部分がある。

(8) SK10出土の土器(第I-36図)

土師器 (123) ~ (126) は口縁部と底部の境が明瞭な皿である。(125)の内外面の $\frac{1}{2}$ は暗灰色~灰色に変色している。油煙によるものかもしれない。

瓦器 (127), (128) は、椀である。両者とも体部内面のミガキは、やや疎らである。

(9) SK2出土の土器(第I-23図)

(1) ~ (4) はSK2に埋納された土器である。

土師器 (1) ~ (3) は、口縁部と底部の境が丸味をもつ皿である。

青磁 (4) は、同安窯系の皿である。底部中央

はロクロケズリにより窪められ、高台をやや意識した器形をしており、この部分には釉が掛けられていない。釉の発色は、淡灰緑色で、見込みには、櫛描文が陰刻されている。(5)は、龍泉窯系の椀である。高台は削り出されており、見込みから体部内面にかけて陰刻文が施されている。釉は、内面全面と高台外面まで掛けられている。

(10) SK3出土の土器(第I-25図)

土師器 (6) は口縁部と底部の境が明瞭な皿で、SK3に埋納されたものである。

(11) SK4出土の土器(第I-27図)

土師器 図示したものはすべて皿で、小型のもの(7), (8)と大型のもの(9), (10)がある。

大型のものは、口縁端部が外反するもの(10)と、そのまま丸くおさめるもの(9)に分類できる。(7)の内面にはヘラ状工具の跡が残り、工具によりナデ調整を行ったものと思われる。

(12) SK6出土の土器(第I-30図)

土師器 (11) は器壁の薄い皿である。

瓦器 (12), (13) は、ともに口縁部と底部の境が明瞭な皿である。

(13) SK7出土の土器(第I-32図)

瓦器 (14) は皿で、SK7に埋納されたものである。口縁端部は大きく外反する。

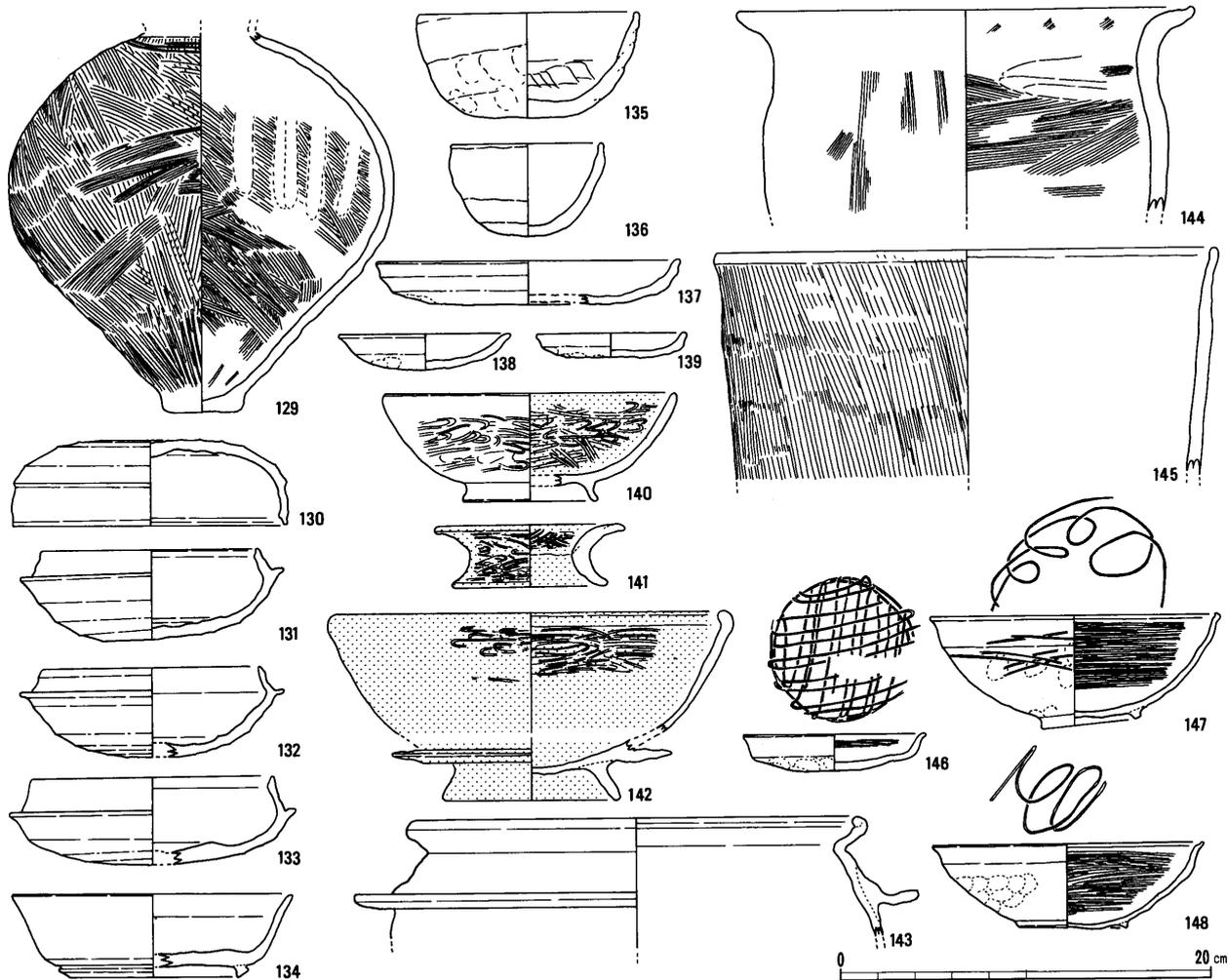
(14) その他小ピット出土の土器(第I-35図)

瓦器 (45) は椀である。ヘラミガキは内外面とも体部下半には及んでいない。見込みのヘラミガキは摩滅により確認できない。(47)は、高台付きの皿である。高台は雑に張付けられているため歪みが激しく、指頭圧痕も多く残る。

6. 包含層出土の土器(第I-37図)

弥生土器 (129) は、壺と思われ、受け口状の口縁部が付く近江地方系の形態をとるものであろう。甕と共通の調整を行い、体部内面上半はナデによるが、一部は体部中央部からナデ上げる。外面の肩部には、ヘラによる沈線が2周半ほど回る。

土師器 (135), (136) は、粗製の杯である。両者とも底部内面に板状工具痕を残し、外面は、(135)は軽くナデるのに対し(136)は未調整である。(137) ~ (139) は、皿である。大型のもの(137)と小型のもの(138), (139)がある。口縁



第I-37図 包含層出土遺物実測図 1 : 4

部と底部の境が(139)は明瞭なのに対し、(138)は滑らかである。(144)は、甕である。(145)は、下半を欠損しているが甌であろう。一对の把手が付くものと思われる。(143)は、羽釜である。外面に煤の付着は認められない。

須恵器 (130)は蓋、(131)～(134)は、杯である。受部をもつもの(131)～(133)と高台の付くもの(134)がある。(131)、(133)の口縁端部内面には弱い段あるいは面をもつが、(132)は丸くおさめている。

黒色土器 (140)は、A類の椀である。ミガキは高台まで及んでいない。(141)は、B類の特殊な器形をした土器であり、托と思われる^②。特に内面上半を密に磨く。(142)はB類で、托上椀である。高台は張付けられ、托部を先に作って後、その上に粘土紐を巻上げて作上げているようである。調整は摩滅のため不明瞭であるが、椀部内面は7分割ほどでヘラミガキされ、外面のヘラミガキは高台と底部

には及んでいないかもしれない。福岡県吉井町竹重で類例が出土しており、密教法具の六器を模倣したものと思われ、おそらく仏具として利用されたものであろう^③。(141)、(142)とも全体として丁寧に作られ、黒光りするほど磨きこまれている。

瓦器 (147)、(148)は椀である。(147)は体部外面に若干ヘラミガキが残り、(148)のヘラミガキは体部内面から見込みの順に磨いている。(146)は皿である。見込みは格子状に磨く。

C. 結 語

1. 掘立柱建物について

掘立柱建物は全部で9棟検出し、3基の柱列とともに、すべて中世前半に属する。柱穴埋土から出土した土器により3時期に分けることができる。I期＝瓦器を含まず黒色土器片を多く含むものを平安時代中期、II期＝外面にヘラミガキの残る山田編年II段階^④の瓦器を含むものを平安時代末期、III期＝外面が

未調整の同じくⅢ段階の瓦器を含むものを鎌倉時代とした。

I 期に属するものはSB2～5の4棟とSA2がある。SB4と5は桁行が一間違うものの、いずれも南東部が土間であった可能性のあるよく似た建物で、建て替えの関係にあるのかもしれない。SB2と3はともに建物とするには疑問の強いものであるが、SB3はSB5と方向が一致しておりSB5に伴う雑舎と考えられ、SA2が屋敷地を区画していたものではないだろうか。同様にSB2はSB4の雑舎と考えられ、SB2,4、SB3,5の対で建て替えられたものと推測したい。

Ⅱ期に属するものはSB1,6,8の3棟とSA1,2があるが、SA1については前述のように、この時期の確証はない。SB6と8は建て替えの関係にあり、3棟とも方向がほぼ一致していることから、比較的大型の建物が2棟並存していたものと推測できる。

Ⅲ期にはいると、小規模の建物SB7,9の2棟だけになる。後述の様に、この頃中世墓がつけられはじめ一部はSB7の柱穴を切るため、SB7の存続は短期間であったものと考えられる。

調査区内には2基の井戸があり、SE2は平安時代末期、SE1は鎌倉時代と報告した。したがってSE2はⅡ期の掘立柱建物、SE1はⅢ期のものに属することになる。SE1の場合、埋土下層からの土器の出土は極端に少なく、廃絶後短期間にある程度埋没し、その後廃棄土坑として利用され、完全に埋没するまでにはかなりの時間が費やされたと考えられる。また、狭い調査区ではあるがⅢ期には掘立柱建物が小規模な雑舎的なものしかなく、井戸を伴う可能性は他の時期より少ないものと思われる。以上により、SE1はⅡ期の掘立柱建物に伴う可能性もあるものと考えている。

次に、これらの遺構は現在の神戸神社の神域と非常に接近し、あるものは重複しており、当時の穴穂宮との関係が問題となる。発掘調査では、直接穴穂宮に結付く資料や神域を区画するような遺構も検出できず、神社そのものの遺構とも考えられない。したがって当時の穴穂宮は小さな祠程度のものであったか、他の場所にあったものと考えられる。これらの遺構は、当地域の歴史的環境から穴太御厨に関連する一般集落と考えるのが適当であろう。

2. 土坑について

SK16からは土師器皿33枚と瓦器皿1枚がほぼ完形で出土した。斎宮のSK2650からは15000点以上が出土し祭祀に伴う土器が一括投棄されたものと考えられており、SK16の場合も同様であるものと思われる。しかし、浅い土坑で、土器の一部は検出面より浮いた状態で検出され、この数が埋納時の枚数を必ずしも正確に表していないことも考えられる。土師器皿は、いわゆる「て」字口縁皿と呼ばれるもので法量、色調、胎土など2枚を除いてほとんど同一のものである。しかし仕上げナデには、右回りのもの(51)、(69)、(80)と、左回りのもの(50)、(60)、(78)、(79)が観察され、複数工人により製作されたものである。もしこれらの皿が祭祀に利用されたものであるならば、瓦器皿1枚の混入を単なる間に合わせとは考えがたく祭祀のなかで土師器皿と瓦器皿が使い分けされていたものと考えられないだろうか。今後の類例の増加に期待したい。さらにSK13,14,15では多数の土器片をあたかも詰込んだ様な状態で出土した。完形に復元できるものはないものの、その出土状況は自然混入とは考えがたく、やはり祭祀等に利用されたものを壊して埋めたものではないだろうか。調査区端のため同様な小土坑が調査区外に分布する可能性も大きい。

SK2～8は検出状況から中世墓と考えているが、その状況は多様である。平面形は長円形のもの(SK2,3)、円形に近いもの(SK4,7)、卵型のもの(SK5,6,8)があり、SK4,5には蓋をするかのように石が置かれているが他のものにはその形跡はない。また、SK5,8には埋納された土器がなく、他のものの土器の埋納の様子も様々である。しかし、いずれも皿であることだけは共通している。SK2,3,4,5,8の埋土には炭が多く含まれていた。しかし、土坑には焼けた痕跡はなく他の場所で火葬にされ、その灰を埋葬したようである。

SK1,9,11は平面形が直径1.2～1.7mの円形、深さ80cm前後で壁面は垂直かややオーバーハングしているなどよく似た形態を呈する。埋土には多くの土器と、人頭大の石が出土したことも共通している。土器には完形品もいくつかあり、単なる廃棄土坑ではないのかもしれない。人一人埋めるのにはちょうど

よい大きさであるが、土塚墓とするだけの確証はない。

4. 瓦器について

二重高台椀（105）、台付皿（47）、小椀（97）、（98）という出土例の少ない特殊器形のもものがそろって出土したことが注目される。

二重高台椀は、伊賀では北堀池遺跡、岸之上遺跡^⑥に出土例があるのみである。調整の大部分は共通しているが、（105）は見込みのミガキが平行であるのに対し、岸之上遺跡^⑦のものは格子状である。共伴する椀は、山田編年Ⅱ-2前後に属するものと考えられるのに対し、岸之上遺跡^⑧のものは同Ⅱ-2～3に属するものである。井戸埋土の共伴資料であるため、ある程度の時期差は考えなければならないかもしれないが二重高台椀の下限がⅡ-2型式まで下がることも十分考えられよう。

台付皿は、上寺遺跡^⑨に出土例がある。山田編年Ⅱ-2～3に属する椀と共伴し、外面にヘラミガキを施す。

[註]

- ① 下村登良男 「野垣内遺跡」【昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告】三重県教育委員会 1974.3
- ② 橋本久和氏（高槻市立埋蔵文化財調査センター）の御教示による。
- ③ 西弘海 「西日本の土師器」【世界陶磁全集2 日本古代】小学館
- ④ 山田猛 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」【中近世土器の基礎研究Ⅱ】日本中世土器研究会 1986.12
- ⑤ 三重県斎宮跡発掘調査事務所【斎宮跡発掘調査事務所年報】

（47）は、共伴する遺物は無いものの、外面にヘラミガキは認められず高台の張付けも雑であり、上寺遺跡のものより新しい様相を呈する。

小椀はSK11から出土した。共伴する椀には残念ながら型式差があり純粋な一括資料と言えない。（89）、（90）は山田編年Ⅱ-2、（93）～（96）はⅡ-4～Ⅲ-1に属するものと考えられ、小椀（97）、（98）がどちらに属するものかは断言できない。同じく上寺遺跡^⑩と的場遺跡^⑪に出土例がある。上寺遺跡^⑫のものは山田編年Ⅱ-2～3に属する椀と共伴し、外面にヘラミガキを施す。（97）、（98）とも外面のヘラミガキは認められず上寺遺跡^⑬のものより新しい様相を呈する。椀と小椀の調整が共通するものであるならばⅡ-4～Ⅲ-1型式に並行することも考えられる。

これら特殊器形の瓦器は、これまで伊賀で報告されているものよりも、いずれも新しい要素を持つもので、これらの器形が存在する最下限にちかいものであり、貴重な資料である。（森川常厚）

- ⑥ 杉谷政樹 「岸之上遺跡」【昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告】三重県教育委員会 1984.3
- ⑦ 前掲④に同じ
- ⑧ 山田猛 「上寺遺跡」【昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告】三重県教育委員会 1980.3
- ⑨ 前掲④に同じ
- ⑩ 前掲④に同じ
- ⑪ 前掲⑧に同じ
- ⑫ 駒田利治 【的場遺跡発掘調査報告】伊賀町教育委員会 1987
- ⑬ 前掲④に同じ

表Ⅰ-1 浮田遺跡B地区掘立柱建物・柱列一覧表

S B	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
1	5×3	E0.5°S	11.7	6.54	2.3+2.7+2.15+2.2+2.35	2.18	平安末	北面に逆L字状の廂 廂柱間2.15m+1.9m
2	2×2	E5.5°S	3.45 3.95	3.3 3.6	1.75+1.7 1.75+2.2	1.7+1.6 1.75+1.85	平安中	東西棟と仮定
3	2×2	E1°S	4.2	3.5	2+2.2	2.15+1.35	平安中	
4	4×3	E5°S	9.4	6.4	2.5+2.2+2.3+2.4	2+2.3+2.1	平安中	南東部が土間か？
5	5×3	E1.5°N	10.4	6.5	2.3+2.1+2+1.8+2.2	1.9+2.2+2.4	平安中	南東部が土間
6	5×3	E1°N	10.9	5.8	2.15+2.4+2.1+2.1+2.15	1.9+1.9+2	平安末	
7	2×2	E3°S	4.5	3.8	1.9+2.6 2.2+2.3	1.8+2	鎌倉	
8	5×2	E1°N	10.3 10.6	3.8	2.4+2+1.8+2.2+1.9 2.5+2+2.1+1.9+2.1	1.65+2.15	平安末	
9	—×(2)	E2°N	—	(4.3)	—+2.1+2.1	2.15+(2.15)	鎌倉	調査区壁で北側側柱確認
S A								
1	3	E3°S	6.5		2.3+2+2.2		不明	
2	3	N1°W	6		2		平安中	
3	5×2	N3.5°E	9.3	5.1	1.9+2.2+1.1+1.4+2.7	2.4+2.7	平安中	逆L字状の柱列

表 I - 2 浮田遺跡B地区出土遺物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
1	SK 2	J-10 SK 2	土師器	皿	8.2	1.8	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部	ナデ中心、底部外面に指頭圧痕が残る	外内 鈍橙色 褐灰色	0.1~0.5mm の砂粒含	良好	完形		003-02
2	"	"	"	"	8.4	1.8	底部からやや屈曲ぎみに立ち上がる口縁部	"	外内 橙色 鈍橙色	精良	"	"	粘土ひも接合痕が残る	003-03
3	"	"	"	"	8.8	1.7	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部	"	淡黄橙色	"	"	ほぼ完形		004-05
4	"	"	青磁	"	9.8	1.8	底部をロクロケズリでくぼめ、高台をやや意識した形態	底部ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白色	"	"	完形	見込みに櫛描文 釉色 淡灰緑色	004-02
5	"	"	"	碗	5.8 (高台径)	—	削り出し高台	"	"	"	"	底部 $\frac{1}{4}$	見込みに陰刻文 釉色 灰緑色	033-02
6	SK 3	J-10 SK 3	土師器	皿	8.6	1.4	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部	ナデ中心、底部外面に指頭圧痕が残る	鈍橙色	"	"	ほぼ完形		003-05
7	SK 4	K-10 SK 2	"	"	9.0	1.8	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部だが端部は外反する	"	赤灰色	"	"	$\frac{1}{4}$		004-03
8	"	"	"	"	9.4	1.8	"	ナデ中心、内面に板状工具の痕跡が残る	褐灰色	0.1~0.5mm の砂粒含	"	ほぼ完形		003-04
9	"	"	"	"	15	2.6	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部	ナデ中心	淡黄橙色	0.5mmの砂 粒含	"	$\frac{3}{4}$		004-04
10	"	"	"	"	1.5	2.4	底部から屈曲ぎみに立ち上がる口縁部で端部は外反する	ナデ中心、底部外面に指頭圧痕が残る	外内 灰褐色 鈍橙色	精良	"	$\frac{1}{2}$		004-01
11	SK 6	K-10 SK 4	"	"	8.8	1.5	底部から内弯ぎみに立ち上がる口縁部	口縁部のみヨコナデ 他は未調整	淡橙褐色	砂質土	"	完形	やや歪む	034-03
12	"	"	瓦器	"	8.8	1.5	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部は外反する	口縁部ヨコナデ、底部外面未調整、見込みは平行ミガキ	黒灰色	精良	"	$\frac{1}{2}$		034-04
13	"	"	"	"	8.6	1.6	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部はやや外反する	"	外内 黒灰色 灰色	"	"	完形		034-02
14	SK 7	K-11 SK 3	"	"	9.2	1.5	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は大きく外反する	"	黒灰色	"	"	"	やや歪む	010-04
15	SX 1	B-9 溝4	弥生土器	高杯	27.6	—	浅い杯部で口縁部は強く外反する	口縁部ヨコナデ、他はヘラミガキ	鈍橙色	1mm以下の 砂粒含	"	杯部 $\frac{1}{4}$		021-03
16	"	"	"	"	10.6 (底径)	—	端部が大きくハの字に開く脚部で四方に透し孔	端部ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ナデ	"	3mmの砂粒 多含	"	脚部 $\frac{1}{4}$	脚端部は $\frac{1}{4}$ の残存	021-02
17	"	"	"	壺	—	—	球状の胴部をもつ小型の壺と思われる	ナデ中心に調整する	"	1mmの砂粒 多含	"	底部のみ 完存		024-01
18	"	"	"	脚付壺?	8.0 (底径)	—	ハの字に開く短い脚	外面ハケ目、内面ナデ、端部ヨコナデ	"	微砂を若干 含	"	脚部 $\frac{1}{4}$	脚端部は $\frac{1}{4}$ の残存	021-04
19	"	"	"	高杯	13.6	13.3	ハの字に開く脚に半球状の杯部がつく	脚部内面はナデ、他はヘラミガキ 端部はヨコナデ	橙色	3mmの砂粒 多含	"	$\frac{3}{4}$		021-01
20	SX 2	D-8 溝6	"	台付甕	16.4	25.9	球形に近い体部に真直外方へ開く口縁部がつく	体部内面上半を板ナデ、他を2種類のハケ	明赤色	5mmの砂粒 多含	"	脚部完存 他は小片	図上での推定復元	024-03
21	SX 3	H-8 溝2	"	壺	—	—	球形の体部をもつ小型の壺	ナデ中心?	鈍橙色	4mmの砂粒 多含	"	頸部以下 完存	摩滅により調整 不明確	033-01
22	"	H-8 溝2	"	広口壺	17	32.2	球形の胴部に真直外へ開く口縁部をもつ	外面はナデ、底部近くをヘラケズリ、内面はナデとハケ	黄橙色	3mmの砂粒 含	"	$\frac{3}{4}$	底部は低い高台 状を呈する	028-01
23	"	I-9 溝2	"	壺	9.0 (底径)	—	球形の胴部をもつ大型の壺	外面はヘラケズリの後ヘラミガキ 内面は浅いハケ	鈍橙色	微砂若干含	"	体部下 半は完存	"	029-01
24	SX 4	B-5 SD 2	弥生土器	壺	8.4	—	下脹れの体部に短い頸部がつく。口縁部は内傾する	外面はハケの後ナデ 内面はナデ	橙色	2mmの砂粒 若干含	"	上半は ほぼ完存	外面のハケとナ デは同一工具か	024-02
25	SH 2	J-9 タテ穴2	土師器	杯	12.4	5.4	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で端部はやや外反する	ナデ中心	鈍褐色	0.5~1mmの 砂粒含	"	$\frac{3}{4}$		014-01
26	"	"	"	甕	12.0	16.1	球形の体部に真直外へ開く口縁部がつく	外面ハケ? 内面ナデ?	鈍黄橙色	3mmの砂粒 含	良好	口縁部完 存	摩滅のため調整 不明確	014-03
27	"	"	"	"	12.2	15.5	いびつな球形の体部に真直短く外方へ開く口縁部	外面ハケ 内面ナデ	外内 赤灰色 鈍橙色	2mmの砂粒 含	良	$\frac{1}{2}$	"	016-01
28	"	"	"	"	13.6	—	真直外へ開く口縁部で端部を軽くつまみ上げる	外面ハケ 内面未調整	外 浅黄橙 色 内 暗褐色	"	良好	$\frac{1}{4}$	"	014-02
29	"	"	"	"	13.0	—	球形の体部に真直外へ開く口縁部がつく	—	暗褐色	1mmの砂粒 多含	"	$\frac{3}{4}$	摩滅がはげしく 調整不明	014-04
30	"	"	"	"	9.4	—	無頸で肩部に円孔をあける	外面ハケ 内面板ナデ	灰茶色	1mmの砂粒 若干含	"	$\frac{3}{4}$		016-02
31	"	"	須臾器	有蓋高杯	14.0	8.7	短脚で3方に透し孔をもつ	ロクロナデ	灰色	2mmの砂粒 若干含	"	ほぼ完形		005-01
32	"	"	"	蓋	14.3	4.2	平な天井部から真直下がる口縁部をもつ	天井部の $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ 他はロクロナデ	"	精良	"	$\frac{3}{4}$	ロクロ右回転 天井部に別個体 が粘着	013-02
33	"	"	"	"	13.4	4.4	丸味をもつ天井部から真直下がる口縁部をもつ	"	"	"	"	ほぼ完形	ロクロ左回転	005-01
34	"	"	"	杯	12.2	4.8	口縁部内面に段をもたづらくおさめる	体部の $\frac{3}{4}$ をロクロケズリ、他はロクロナデ	"	砂粒多含	"	$\frac{3}{4}$	"	005-03
35	"	"	"	"	13.5	5.0	口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部内面に段をもつ	体部の $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ、他はロクロナデ	"	精良	"	ほぼ完形	"	005-02
36	SH 3	B-10 堅穴3	土師器	"	12.6	3.2	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部内面に面をもつ	口縁部ヨコナデ 底部未調整	浅黄褐色	3mmの砂粒 若干含	"	"		013-01
37	"	"	"	甕	16.4	—	くの字に開く口縁部で端部は丸くおさめる	非常に幅の広いハケで調整する	"	微砂多含	"	口縁部 $\frac{3}{4}$	非常な高温で焼 かれる	018-01

表 I - 2 浮田遺跡B地区出土遺物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
38	SH3	B-10 堅穴3	土師器	甕	16.3	—	くの字に開く口縁部で上 端部に面をもつ	非常に幅の広いハケで調 整する	淡赤黄色	精良	良好	口縁部完 存	非常に高温で焼 かれる	018-02
39	"	"	須恵器	壺	5.2	13.5	球形の体部に細長い頸部 が付く	ロクロナデ	灰色	2mmの砂粒 若干含	"	1/2	体部外面にヘラ 記号「メ」	013-03
40	SK14	B-13 P3	黒色A	杯	16.2	4.4	底部から直線的に外へ開 く口縁部で端部はやや内 彎	外 未調整 内 ヘラミガキ	橙色	0.5mmの砂 粒含	"	1/2	内面のミガキは 底部、側面の順	009-05
41	"	"	土師器	甕	18.8	—	くの字に開く口縁部で端 部は内側に折り返す	ナデ	赤灰色	2mmの砂粒 多含	"	1/2	外面に煤、内面 に炭化物付着	009-06
42	SK15	B-13 P4	黒色A	杯	15.0	4.2	底部より丸みをもって立 ち上がる口縁部をもつ	外 未調整 内 ヘラミガキ	明赤褐色	3mmの小石 含	"	1/2		009-04
43	SK13	B-13 P2	"	"	14.0	4.2	底部より丸みをもって立 ち上がる口縁部で端部は 外反する	"	"	2mmの砂粒 含	"	"		009-03
44	SK17	C-10 P3	"	碗	15.0	5.7	底部より丸みをもって立 ち上がる口縁部で端部内 側に沈線	"	橙色	3mmの砂粒 多含	"	1/2	ミガキは底部、側 面の順	009-02
45	—	H-10 P1	瓦器	"	15.0	—	底部より丸みをもって立 ち上がる口縁部で端部は 外反する	内外面上半をヘラミガキ	黒色	1mmの砂粒 含	"	1/4	摩滅により見込 みのミガキ不明	007-04
46	SA3	D-6 P1	土師器	台付皿	8.4	2.2	「て」字口縁皿に高台 をはり付ける	ナデ	淡黄褐色	精良	"	1/2		007-02
47	—	J-11 P12	瓦器	"	8.8	2.4	口縁端部が外反する皿に 高台を雑にはり付ける	外 未調整 内 ヘラミガキ、特に側 面を密に磨く	灰色	"	"	"	歪みが大きい	008-05
48	SK16	B-13 P5	土師器	皿	9.2	1.4	「て」字状口縁で端部外 面に浅い沈線	ナデ中心に調整するが底 部外面には指頭圧痕が残 る	橙褐色	"	"	完形	やや歪む	017-08
49	"	"	"	"	"	1.5	器壁が薄くやや粗悪なつ くり、口縁部外面に浅い 沈線	"	乳褐色	砂質土	"	"		017-05
50	"	"	"	"	9.5	"	「て」字状口縁で端部外 面に浅い沈線をもつ	底部外面未調整 他はナ デ	赤茶色	砂粒多含	"	ほぼ完形	見込みの仕上げ ナデは左回り	017-06
51	"	"	"	"	9.4	"	"	ナデ中心に調整するが底 部外面には指頭圧痕が残 る	淡橙褐色	精良	"	完形	見込みの仕上げ ナデは右回り	017-07
52	"	"	"	"	9.5	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形		017-04
53	"	"	"	"	9.2	1.6	"	"	"	"	"	完形		015-04
54	"	"	"	"	9.4	1.5	"	"	"	"	"	"		015-05
55	"	"	"	"	9.4~ 10	1.6	"	"	"	"	"	"	歪が大きい	015-02
56	"	"	"	"	9.4	1.4	"	"	"	"	"	"	やや歪がある	017-02
57	"	"	"	"	9.4~ 9	1.6	"	"	"	"	"	"	"	015-01
58	"	"	"	"	9.2~ 9.6	"	"	"	"	"	"	"	"	020-01
59	"	"	"	"	9.4~ 9.6	"	"	"	"	"	"	"	歪が大きい	015-03
60	"	"	"	"	9.2	"	"	"	"	"	"	"	見込みの仕上げ ナデは左回り	017-09
61	"	"	"	"	9	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形		020-03
62	"	"	"	"	9.4~ 9.6	"	"	"	白褐色	"	"	1/2	やや歪む	020-02
63	"	"	"	"	9.4	1.5	"	"	淡橙褐色	"	"	ほぼ完形	"	017-01
64	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	022-05
65	"	"	"	"	9.0~ 9.2	1.8	"	"	"	"	"	完形	歪が大きい	017-03
66	"	"	"	"	9.2~ 9.6	1.6	"	"	"	"	"	"	やや歪む	015-06
67	"	"	"	"	9.6	"	"	"	"	"	"	1/2	やや歪む	020-05
68	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形	"	022-06
69	"	"	"	"	9.4	1.6	"	"	"	"	"	完形	見込みの仕上げ ナデは右回り	020-09
70	"	"	"	"	"	1.5	"	"	"	"	"	1/2	やや歪む	022-08
71	"	"	"	"	9.2	"	"	"	"	"	"	完形	"	020-07
72	"	"	"	"	9.4~ 10	"	"	"	"	"	やや 不良	"	一部生焼けの部 分あり	022-03
73	"	"	"	"	9.6	1.5	"	"	外 淡橙褐 色 内 灰褐色	"	良好	1/2	やや歪む	022-07
74	"	"	"	"	9.2~ 9.6	"	"	"	淡橙褐色	"	"	完形	歪がはげしい	022-02

表 I - 2 浮田遺跡B地区出土物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
75	SK16	B-13 P5	土師器	皿	9.0~ 9.6	1.9	「て」字状口縁で端部外 面に浅い沈線をもつ	ナデ中心に調整するが底 部外面には指頭圧痕が残 る	淡橙褐色	精良	良好	完形	歪がはげしい	022-01
76	"	"	"	"	9.2	1.6	"	"	"	"	やや 不良	ほぼ完形	口縁部の一部が 生焼け	015-07
77	"	"	"	"	9.2~ 9.6	"	"	"	乳褐色	"	良好	完形	やや歪む	022-04
78	"	"	"	"	9.5	"	"	"	白橙色	"	"	ほぼ完形	見込みの仕上げ ナデは左回り	020-08
79	"	"	"	"	9.4	1.5	「て」字状口縁で端部外 面には沈線はなく丸くお さめる	"	"	"	"	完形	"	020-06
80	"	"	"	"	9.4~ 9.6	1.5	"	"	淡橙褐色	"	"	"	見込みの仕上げ ナデは右回り	020-04
81	"	"	瓦器	"	9.6	1.8	底部より丸味をもって立ち上 がる口縁部で端部はやや外反し、 内面をもつ	口縁部ヨコナデ、外面未 調整、内面ヘラミガキ	淡灰色	2mmの砂粒 若干含	"	"	見込みのミガキ は2回行う	022-09
82	SK11	J-12 SK5	土師器	皿	16	2.7	底部より丸味をもって立ち 上がる口縁部で端部は 外反する	口縁部ヨコナデ、他をナ デ	淡橙褐色	砂質土	"	1/4	"	006-02
83	"	"	"	"	14.4	2.1	底部より丸味をもって立ち 上がる口縁部で端部は 丸くおさめる	"	"	1mmの砂粒 含	"	1/4	"	006-03
84	"	"	"	"	9.6	1.9	底部より丸味をもって立ち 上がる口縁部で端部は 若干外反きみになる	口縁部ヨコナデ、内面ナ デ、外面未調整	淡褐色	3mmの砂粒 多含	"	1/2	"	010-03
85	"	"	"	"	"	1.8	底部より丸味をもって立ち 上がる口縁部で端部は 外反する	"	暗褐色	3mmの砂粒 若干含	"	ほぼ完形	"	001-03
86	"	"	"	"	8.6	1.2	やや厚手で、底部より若 干立ち上がる口縁部をも つ浅い形態	口縁部ヨコナデ、他をナ デ	乳褐色	3mmの砂粒 多含	"	完形	口縁内面に油煙 と赤褐色の変色 部あり	006-04
87	"	"	"	"	9	1.2	底部より若干立ち上がる 口縁部をもち、底部は中 央でやや盛り上がる	"	外 淡橙褐 内 淡褐色	砂質土	"	1/4	"	006-01
88	"	"	白磁	碗	17	—	口縁部は若干外反する。 内面に浅い沈線が1条巡 る	ロクロナデ 外面はロク ロケズリか?	灰白色	精良	良	1/4	釉色淡黄白色で 発色悪い	012-04
89	"	"	瓦器	"	15.5	5.2	口縁端部内面に浅い沈線 を巡らす	内外面ヘラミガキ、見込 みに連結輪状文6個	黒灰色	1.5mmの砂 粒含	良好	1/2	器壁、見込みの 順にみがかく	011-03
90	"	"	"	"	15.45	3.3	"	内面ヘラミガキ 外面は 荒いヘラミガキ、見込み は連結輪状文4個	暗灰色	2mmの砂粒 含	"	1/2	"	011-04
91	"	"	土師器	羽釜	24	—	口縁端部は内側に巻き込 み、やや肥厚する	ナデにより調整する	暗褐色	2mmの砂粒 多含	"	1/4	外面前面に煤付 着	001-02
92	"	"	"	"	32.2	—	"	"	外 暗褐色 内 明褐色	"	"	1/4	"	001-01
93	"	"	瓦器	碗	15.0	5.2	口縁部はヨコナデにより 稜をもって外反し、端部 内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面見込み を平行ミガキ後器壁のミ ガキ後再び見込み	灰白~ 暗灰色	1.5mmの砂 粒含	"	1/2	"	012-01
94	"	"	"	"	"	4.5	"	外面未調整、内面やや荒 いミガキ	暗灰色	精良	"	1/4	内面の一部にい ぶしのかからな い部分あり	010-02
95	"	"	"	"	15.25	"	"	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	"	1.5mmの砂 粒含	"	ほぼ完形	底部に「+」の ヘラ記号	011-02
96	"	"	"	"	14.8	4.8	"	"	黒灰色	1mmの砂粒 多含	"	完形	"	011-01
97	"	"	"	小碗	7.2	2.7	口縁部は稜をもって直立 し、端部は沈線状の段に なる	外面未調整、内面ヘラミ ガキ、見込みは「E」字 2連のヘラミガキ	"	精良	"	1/4	"	006-05
98	"	"	"	"	"	2.9	"	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	"	"	"	1/4	"	006-06
99	"	"	"	皿	9.75	1.65	底部よりゆるやかに立ち 上がる口縁部で端部は外 反する	"	暗灰色	1.5mmの砂 粒含	"	完形	底部外面に「#」 の記号?	012-02
100	"	"	"	"	8	1.5	底部より屈曲して立ち上 がる口縁部をもつ	"	黒灰色	1mmの砂粒 若干含	"	1/2	油煙痕?あり	012-03
101	"	"	"	"	8.6	"	"	外面未調整、内面やや荒 いヘラミガキ	褐白色	精良	良	"	いぶし不良	010-01
102	"	"	"	"	8.9	1.7	底部より屈曲して立ち上 がる口縁部をもち端部は 外反する	"	黒灰色	1.5mmの砂 粒含	良好	1/4	"	034-05
103	SE2	C-3 井戸2	"	"	9.0	"	底部より丸味をもって外 反する口縁部をもつ	外面ナデ、内面ヘラミガ キ口縁内面を密にみがかく	暗灰色	精良	"	1/4	"	008-03
104	"	"	"	碗	15.4	5.45	角型高台をばり付け、口 縁端部内面に沈線を巡ら す	外面荒いヘラミガキ、内 面ヘラミガキ、見込み、 連結輪状文4個	灰色	2mmの砂粒 含	"	1/4	"	008-02
105	"	"	"	"	6.5 (高台径)	—	角型高台を2重にばり付 ける	内外面ヘラミガキ、見込 みは平行ヘラミガキ	暗灰色	0.5mmの砂 粒若干含	"	3/4 (底部)	"	008-01
106	SK9	K-10 SK3	土師器	皿	8.0	1.5	非常に厚い底部から屈曲 して立ち上がる口縁部をも つ	底部外面未調整、他はナ デ	淡橙褐色	1mmの砂粒 多含	"	完形	口縁内面に橙褐 色に変色部あり	025-02
107	"	"	"	"	8.4	"	底部から内湾きみに立ち 上がる口縁部をもつ	ナデにより調整	白褐色	やや砂質	"	1/4	"	025-03
108	"	"	瓦器	碗	14.6	4.5	三角高台をばり付け口縁 端部内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	濃灰色	精良	"	1/4	外面の一部にい ぶしの弱い部分 あり	034-01
109	"	"	"	皿	8.0	1.3	底部より屈曲して立ち上 がる口縁部をもつ	"	"	"	"	"	"	025-05
110	"	"	"	"	8.6	1.6	"	外面ナデ、内面ヘラミガ キ	"	"	"	1/4	"	025-04
111	SE1	M-11 井戸1	土師器	皿	9.6	1.15	"	外面未調整、内面ナデ	橙色	0.5mmの砂 粒若干含	"	1/4	"	008-04

表 I - 2 浮田遺跡B地区出土物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
112	SE1	M-11 井戸1	瓦器	椀	14.8	4.3	三角高台をはり付け口縁 端部内面に沈線状の段を もつ	外面未調整、内面荒いヘ ラミガキ	外内 灰色 黒褐色	3mmの砂粒 含	良好	1/6	外面にいぶしの かからない部分 あり	008-06
113	"	"	"	"	14.6	3.6	三角高台をはり付け口縁 端部内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	灰白色	1mmの砂粒 含	不良	1/6	いぶしが一部し かかかっていな い	009-01
114	SK1	K-10 SK5	土師器	皿	8.4	1.7	底部より丸味をもって立 ち上がる口縁部をもつ	外面未調整、他をナデ	淡橙色	0.5mmの砂 粒多含	良好	1/6		026-03
115	"	"	瓦器	椀	14.8~ 15.4	4.65	三角高台をはり付け口縁 端部内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面やや荒 いミガキ	暗灰色	2mmの砂粒 若干含	"	完形	外面に三ヶ月状 にいぶしのかか らない部分あり	026-02
116	"	"	"	"	15~ 15.4	4.7~ 4.9	三角高台をはり付け口縁 部は稜をもって外反し、 内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	灰色	1mmの砂粒 含	"	1/6		026-04
117	"	"	"	"	15.6	4.4~ 4.6	三角高台をはり付け口縁 端部内面に沈線を巡らす	外面未調整、内面やや雑 なヘラミガキ	"	2mmの砂粒 含	"	1/6		026-01
118	"	"	"	"	15.0	4.4	"	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	淡灰色	1mmの砂粒 含	"	1/6	見込みにはラセ ン陪文あり	027-02
119	"	"	"	"	14.0	4.1	"	"	灰色	3mmの砂粒 若干含	"	1/4	"	026-05
120	"	"	"	皿	8.8	1.65	底部より丸味をもって立 ち上がる口縁部をもつ	"	"	2mmの砂粒 含	"	1/4		027-03
121	"	"	"	"	8.9	1.6	底部より屈曲して立ち上 がる口縁部をもつ	"	暗灰色	1mmの砂粒 若干含	"	ほぼ完形		027-01
122	"	"	"	"	9.4	"	底部より丸味をもって立 ち上がる口縁部で端部は 外反する	"	灰色	4mmの小石 含	"	1/6	口縁部内面にい ぶしのかかない 部分あり	027-04
123	SK10	K-12 SK3	土師器	"	8.2	1.65	やや厚手の底部から丸味 をもって立ち上がる口縁 部で端部はやや外反する	外面未調整、内面ナデ	淡黄色	2mmの砂粒 含	"	完形		019-01
124	"	"	"	"	8.0	1.7	やや厚手の底部から若干 屈曲ぎみに立ち上がる口 縁部	"	"	3mmの砂粒 含	"	1/6		019-05
125	"	"	"	"	"	1.5	底部から丸味をもって立 ち上がる口縁部をもつ	"	淡黄橙色	1mmの砂粒 若干含	"	ほぼ完形	油煙?が付着	019-04
126	"	"	"	"	8.8	1.7	"	"	"	精良	"	1/6		019-06
127	"	"	瓦器	椀	17.5	4.2	小さい三角高台をはりつ け、口縁端部内面は段を もつ	外面未調整、内面荒いヘ ラミガキ	淡灰色	0.5mmの砂 粒含	"	1/6		019-03
128	"	"	"	"	13.9	-	口縁端部内面に沈線に よる段をもつ	"	灰色	"	"	1/6		019-02
129	-	B-6 包	弥生土器	壺	-	-	やや胴の脹る形態で受け 口状の口縁部がつくもの と思われる	内外面ハケ目、内面上半 を後にナデ	外内 灰褐色 灰白色	5mmの小石 含	"	1/4		032-01
130	-	M-11 包	須恵器	蓋	14.2	4.6	平らな天井部から垂直に 下がる口縁部で端部内面 に弱い段をもつ	天井部のろをロクロケズ リ、他はロクロナデ	外内 暗灰色 灰色	"	"	1/6	ロクロ右回転	002-01
131	-	J-10 包	"	杯	11.4	5.3	立ち上がりは、やや短か く内傾し、端部内面に面 をもつ	底部のろをロクロケズリ し、他はロクロナデ	青灰色	"	"	ほぼ完形	"	016-05
132	-	L-10 包	"	"	11.6	4.8	立ち上がりは、やや短か く内傾し、端部は丸くお さめる	"	灰色	精良	"	1/6	"	002-02
133	-	F-11 包	"	"	13.0	4.75	やや扁平な形態である。 立ち上がりは高いが内傾 し、端部内面に面	底部のろをロクロケズリ し、他はロクロナデ	青灰色	1.5mmの砂 粒多含	"	1/6	ロクロ左回転	030-01
134	-	C-2 包	"	"	15.1	4.5	口縁部は若干外反ぎみ、 高台は外につぶれた形態	ロクロナデによる	淡灰色	3mmの砂粒 含	"	1/6		030-02
135	-	F-11 包	土師器	"	12.0	5.7	平らな平部より丸味をも って立ち上がる口縁部で、 深い形態	ナデにより調整するが粘 土粗、接合痕を明瞭に残 す粗雑なもの	黄褐色	2mmの砂粒 多含	"	ほぼ完形		031-01
136	-	L-10 包	"	"	8.2	5.0	尖りぎみの底部から丸味 をもって立ち上がる口縁 部	外面未調整、内面ナデで 調整するが粗製である	橙色	0.5mmの砂 粒含	"	1/6		002-03
137	-	K-11 包	"	皿	16.4	2.4	底部より丸味をもって立 ち上がる口縁部	ナデによる	鈍橙色	"	"	1/6		016-06
138	-	K-12 包	"	"	9.0	1.9	底部より丸味をもち外へ 開く口縁部をもつ	外面未調整、他はナデ	"	1mmの砂粒 若干含	"	ほぼ完形		016-04
139	-	"	"	"	8.0	1.3	底部より屈曲して立ち上 がる口縁部をもつ	"	"	精良	"	完形		016-03
140	-	H-9 包	黒色A	椀	15.8	5.9	底部より内湾ぎみに立ち 上がる口縁部をもち高台 は高く外にふんばる	内外面ヘラミガキによる	暗褐色	2mmの砂粒 含	"	1/4		031-04
141	-	B-2 包	黒色B	托	10.3	3.35	筒状で上下端は外へ開く が、上部は水平近くまで 外反する	内面下半はナデ 他はヘ ラミガキ	黒色	3mmの砂粒 含	"	1/6		031-03
142	-	H-9 包	"	托上椀	21.0	10.3	椀と茶托を合体したもの で口縁端部は内傾しやや 肥厚する	内外面ヘラミガキによる 内側は7割で磨く	"	2mmの砂粒 多含	"	1/4		031-02
143	-	I-12 包	土師器	羽釜	23.6	-	「く」字に強く屈曲する 口縁部で端部は内に巻き 込む	ナデにより調整	外内 鈍橙色 灰赤色	1mmの砂粒 含	"	1/6		023-02
144	-	H-10 包	"	甕	24.8	-	頸部はあまり細ならず、大きく 水平に外反する口縁部で端部を つまみ上げる	内外面ハケ目	外 淡黄橙 色 内 黒灰色	"	"	1/6		023-01
145	-	L-12 包	"	甗	17	-	体部からそのまま直立する 口縁部をもち、端部はや や肥厚する	外面ハケ目、内面ナデ	鈍橙色	0.5mmの砂 粒含	"	1/6		003-01
146	-	B-5 包	瓦器	皿	9.9	2.05	底部より屈曲する口縁部 で端部はやや外反する	外面未調整、口縁部内面 ヘラミガキ、見込み格子 状に磨く	黒灰色	0.5mmの砂 粒多含	"	1/6	口縁内側、見込 みの順に磨く	030-03
147	-	L-12 包	"	椀	15.4	5.4	角型の高台をはり付け口 縁端部内面に沈線を巡ら す	外面荒いヘラミガキ、内 面ヘラミガキ	"	精良	"	1/6		002-04
148	-	J-11 包	"	"	14.4~ 14.8	4.5~ 4.6	三角高台をはり付け口 縁部は稜をもって外反し、 端部内面に浅い沈線	外面未調整、内面ヘラミ ガキ	灰色	"	"	完形	器壁、見込みの 順に磨く	023-03

(3) C, D, E, F 地区

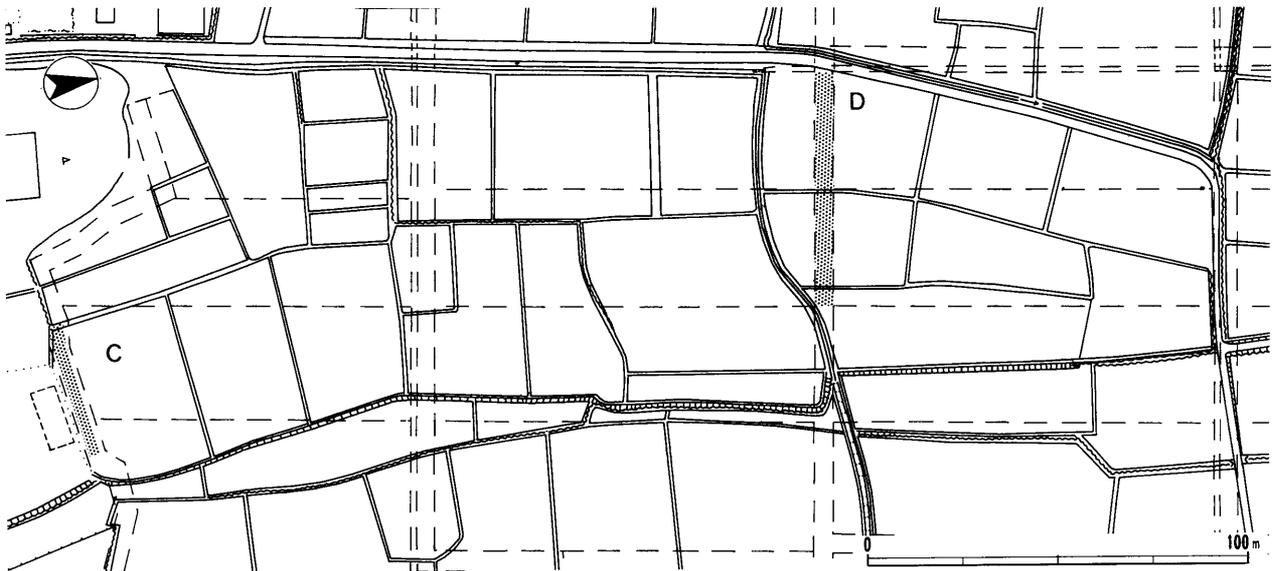
本調査に引き続き行われた立会調査は、C～Fの4地区に分かれる。それぞれ遺物包含層は認められたが、遺構が検出されたのはそのうちC地区とF地区で、集落に近いF地区にはピット群および溝状遺構が、本調査区に接続するC地区では本調査区で検出された溝状遺構の延長を確認した。

F地区で検出されたピット群は、建物として規則

正しく配列されたものではないが室町時代頃の遺物を出土させるものもある。(第I-40図)

F地区のピット群出土の遺物は、ほとんどが土師器皿(1~7)で、外面には指頭圧痕が目立つ。器壁が薄く口縁部も不整形で、部分的に歪みのみられるものが多い。完形のものはない。時期的には室町時代頃におさまるものと思われる。

他はすべて包含層出土の遺物で、C地区からは黒色土器(21)、D地区からは須恵器杯蓋(19)、土



第I-38図 調査区位置図(C, D地区) 1:2000



第I-39図 調査区位置図(E, F地区) 1:2000

師器皿 (13~16)、土師器碗 (12)、瓦器皿 (18) および土錘 (17) が、E地区からは瓦器碗 (20)、F地区からは土師器皿 (7~10)、陶器皿 (11) などが出土した。

このうちC地区の黒色土器 (21) は、内面のみ黒色処理をしたA類で、器壁が厚く高台も高い。内外面とも粗いヘラミガキが施されているが口縁部内面の沈線はみられない。高台の形態等から平安時代末葉頃に比定されるものではないかと思われる。

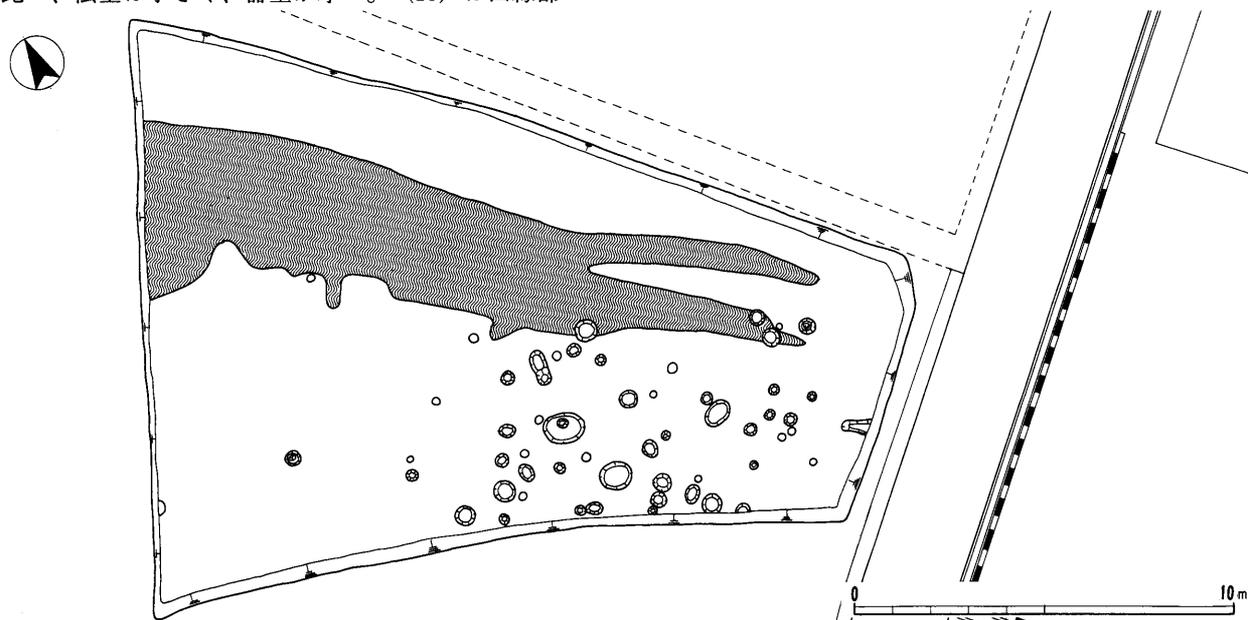
D地区の土師器皿 (7~10) は、F地区のものに比べ、法量は小さく、器壁が厚い。(15) は口縁部

に煤が付着しており、灯明皿として用いられていたと思われる。鎌倉時代後半頃の所産と考えられる。

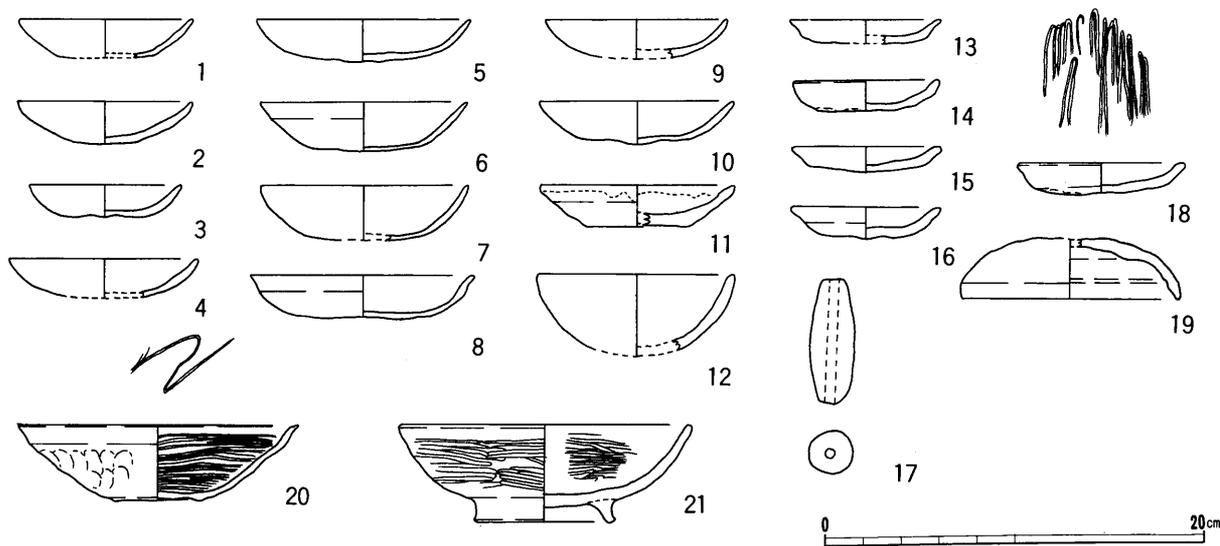
E地区の瓦器碗 (20) は、口径に比較して器高が低く、高台も形骸的なものとなっている。外面にはヘラミガキはなく、指頭圧痕が目立つ。内面の暗文も粗いが、口縁端部内面にはやや幅広の沈線がめぐる。山田猛氏の編年案によるⅢ型式2段階頃に相当するものと思われる。(竹内英昭)

[註]

① 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』1986



第I-40図 F地区 遺物平面図 1:200



第I-41図 遺物実測図 1:4

3. 高賀遺跡

(1) A・B 区

A. 遺構

A区の遺構

(1) 大溝

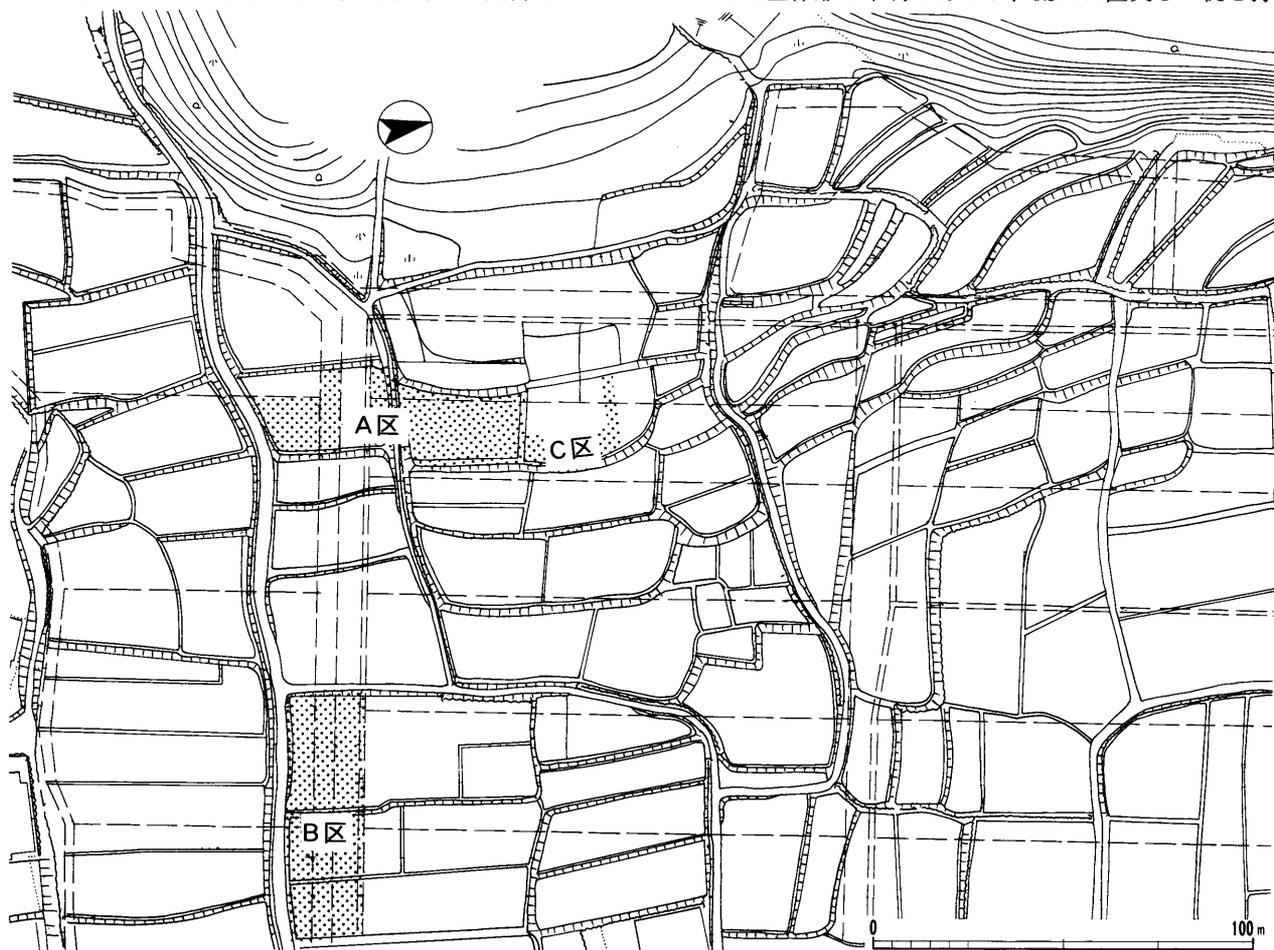
調査区の中央部東西7mほど道路部分保存による未調査部分があり、それを囲むかたちで幅約15mの大溝が走っている。この大溝を境とした調査区の北側では多くの遺構があるが南側では1基の土坑と自然流路を除いて遺構はなく、この大溝は集落を区画する機能を有していたものと想定される。大溝の層序(第I-47・48図)はその土質の差異から大きくは上層(暗黄褐色土、飛鳥~平安時代の層)・中層(暗灰色粘質土、須恵器を含む古墳時代の層)・下層(黒褐色粘質土、須恵器を含まない古墳時代前期の層)の3つに分層できる。地形的には傾斜地に

ある溝であるがとくに下層は土の粘性が強く、流れが極めて緩やかであったものと思われる。溝内からは多量の土器、木製品が出土した。木製品は、大溝の北側では大部分が下層から出土しているが、南側では下層とともに中層からも出土した。

この大溝には、関連遺構として大溝に設けられたしがらみや杭列がある。

しがらみ1 大溝の関連施設である。未調査部分にかかるため全体形は不明だが、流れに直行して杭を打ち込み石を組んである。このため一定量の水が滞水することとなり、自然木とともに槽(155)などの木製品もここに止まった状態で出土した。杭は中層から打ち込まれており、ここに止まっていた木製遺物もこの時期に堰き止められたものである。

しがらみ2 しがらみ1の東側(下流)にある。残存度が悪いこととこれも北側が未調査部分にかかるため全体形は不明であるが、流れに直交して杭を打



第I-42図 調査区位置図(S=1:2,000)

ち込み板木を横に立てて組んである。これに関連して溝の右岸（南側）にも板木を組んである。いささか弱い気がするが護岸のためであろうか。

杭列 小さな自然流路がそそぎ込んでいる大溝の右岸に沿って、11個の杭が地山に打ち込まれていた。おそらく護岸に関するものであろう。

(2) 竪穴住居

4棟確認されたがほとんどが調査区東端の落ち込み部に存在したため、全体形が知れるのは1棟のみである。また、重複して近接した時期の掘立柱建物が存在したがそれに伴う柱穴は検出面上面で発見できずすべて竪穴住居床面でしか押さえられなかった。従って竪穴住居出土遺物には掘立柱建物柱穴の遺物が混入しているものと思われる。

SH1 周溝を持つ建物の西南部を確認した。北側はC区まで延びて後世の溝等で壊されているが、西面の径は約5mである。SH2に伴う焼土の下から南側の周溝が検出されているため、SB2より古いものである。埋土より奈良時代の土器が出土している。

SH2 東端を欠くが南北4m東西3.5m以上ある。深さも40m以上残っており遺存度は良い。一部欠けるものの周溝を持つ。カマドとしては確認できなかったものの北側に焼土面があり、そこから土師器の甕形土器が出土した。SH1より新しい。

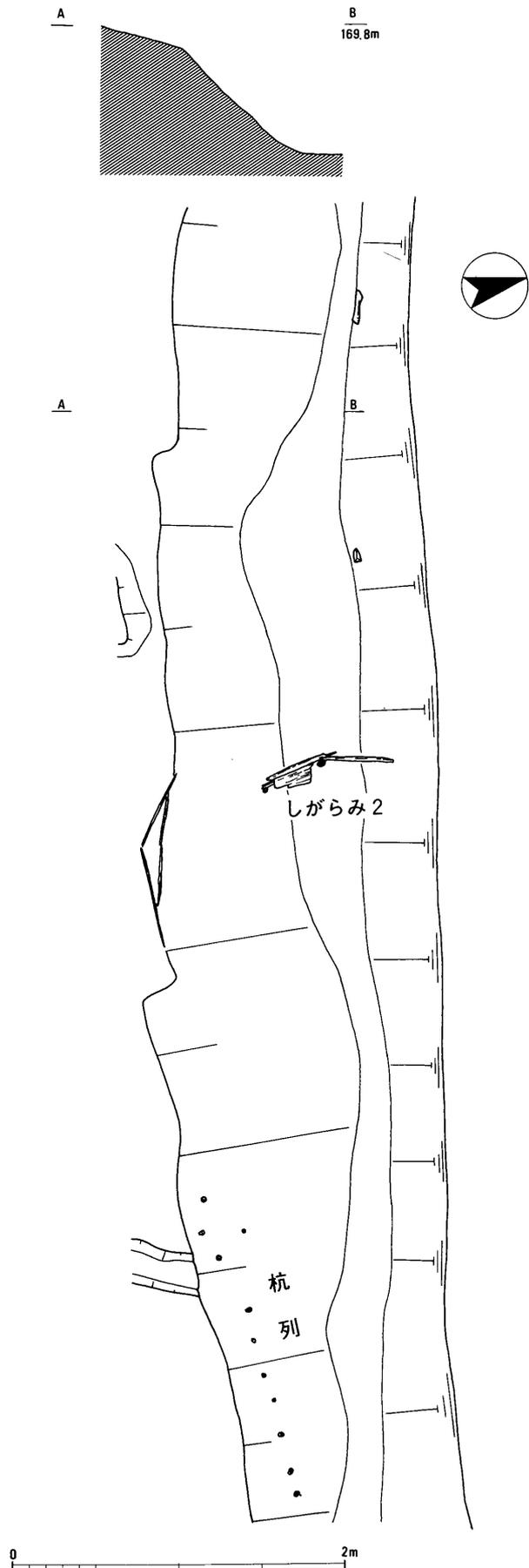
SH3 遺存度は悪いが最低でも2.5m四方の方形プランを有する竪穴住居で、SH2に切られている。周溝は確認できなかった。

SH4 唯一全体形を知れる住居跡で、他の竪穴住居と切り合い関係はなく単独で存在する。南北4m南北3.2mの長方形プランを有する。周溝や柱穴、カマドは確認できなかった。

(3) 掘立柱建物

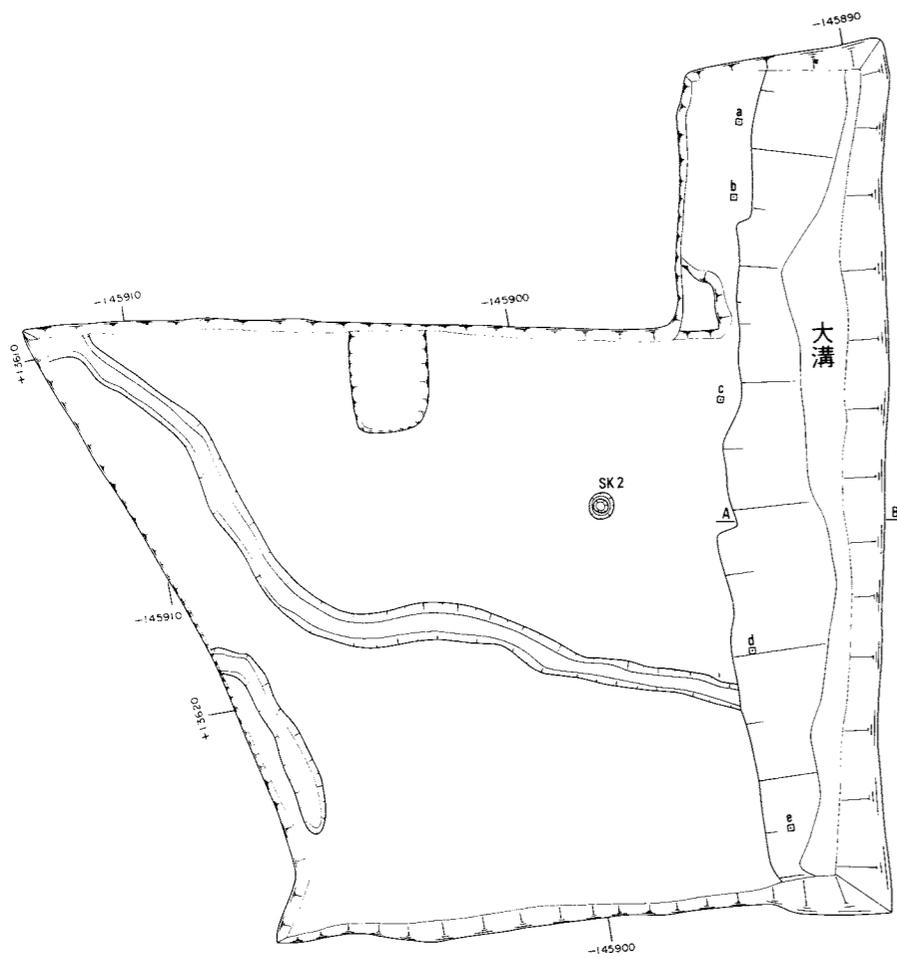
13棟確認したが竪穴住居の場合と同様、多くの建物が調査区東端の落ち込み部に存在したため全体形のわからないものが多い。

SB1 北側に隣接するC区へ延びるが、その成果と合わせると、桁行3間(4.2m)×梁行2間以上の総柱建物で、倉庫の可能性が高い。棟方向はN7°Eの南北棟と思われる。丁度、本調査部分と立会い調査部分の境となったことや、遺構の重複、後世



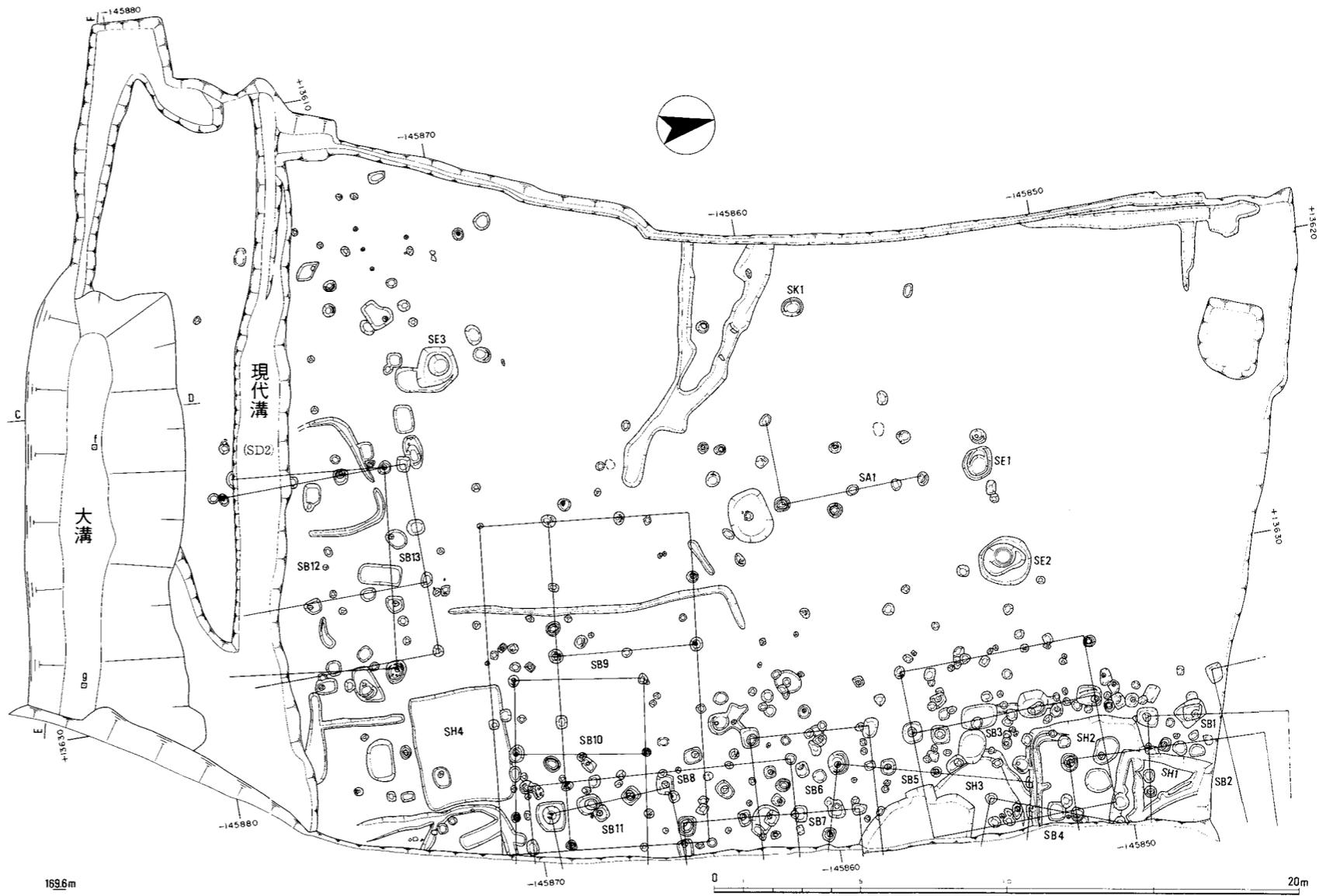
第I-43図 大溝南側実測図

(S=1:100)

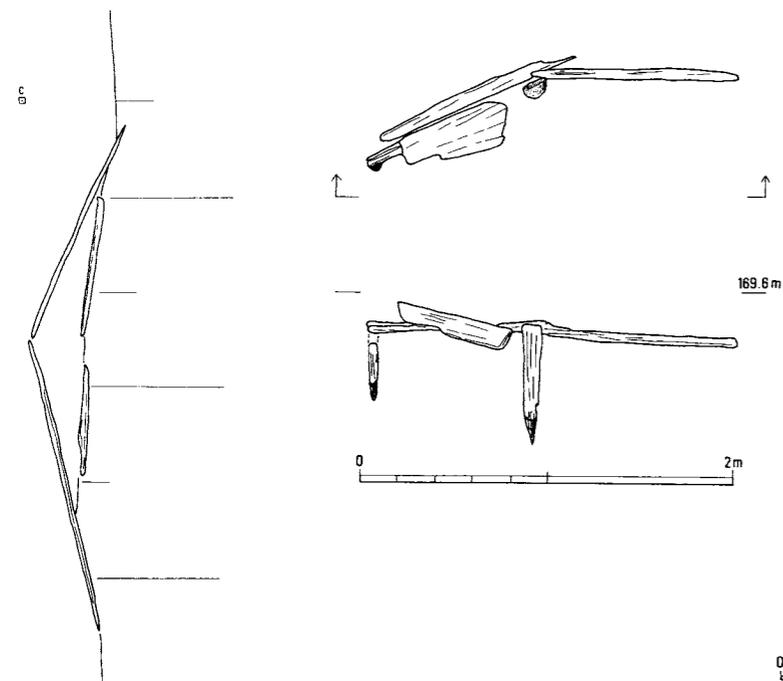


第I-44図 A区遺構平面図 (S=1:200)

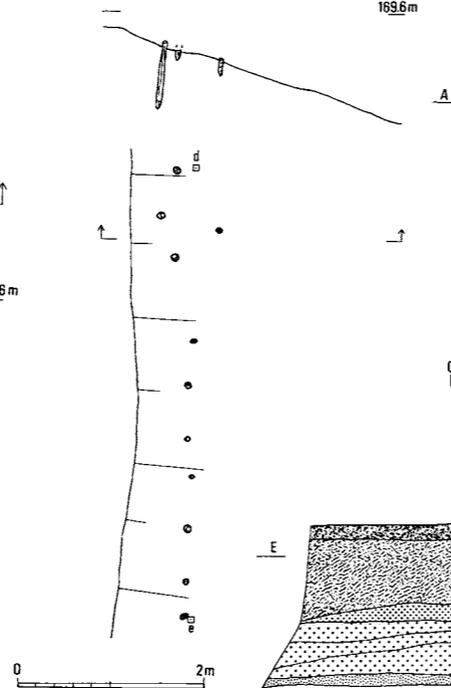
保存により未掘



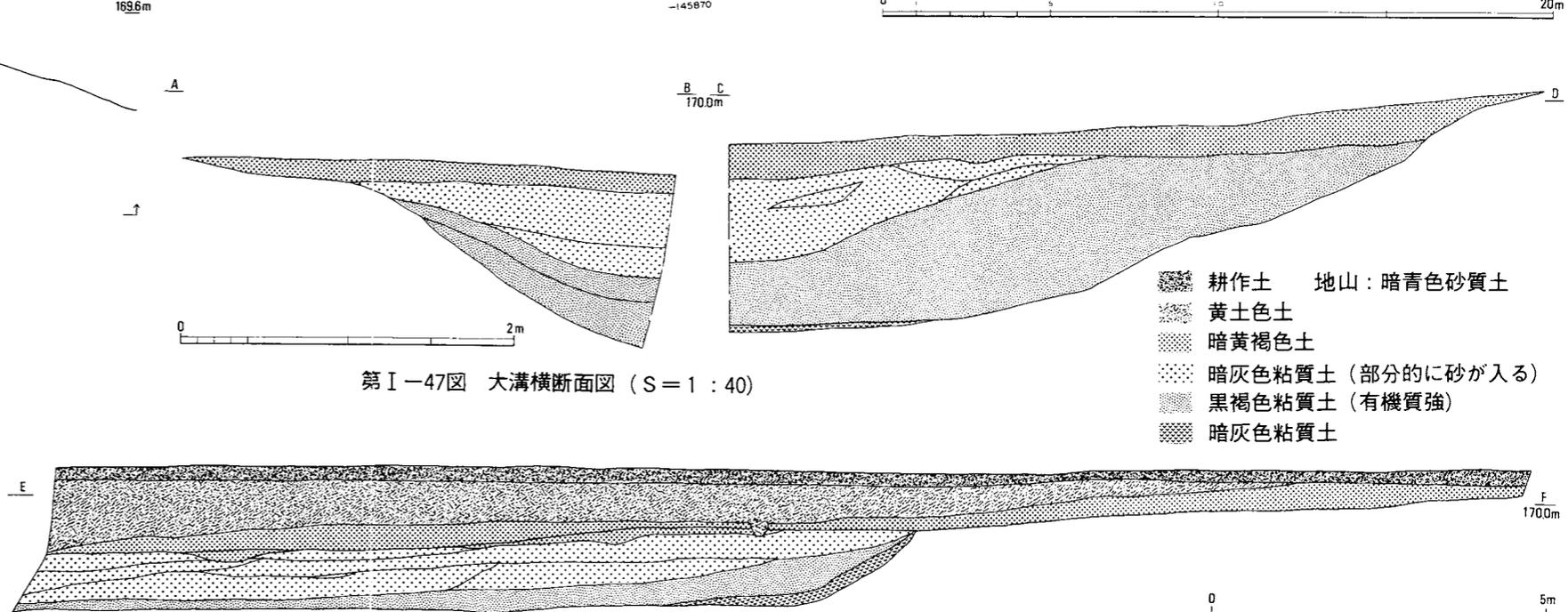
第I-47図 大溝横断面図 (S=1:40)



第I-45図 しがらみ2 実測図 (S=1:40)



第I-46 杭列実測図 (S=1:80)



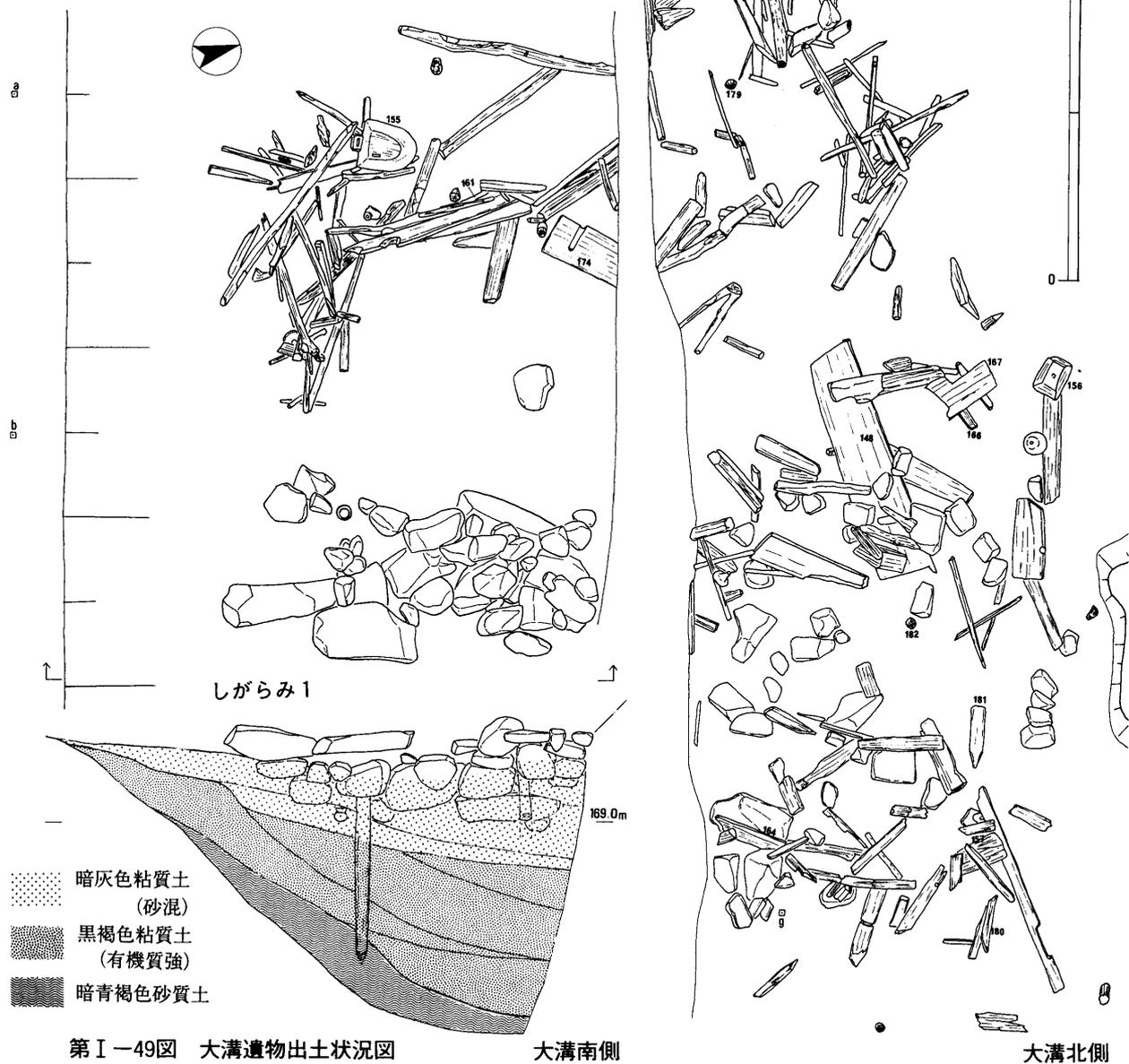
第I-48図 大溝縦断面図 (S=1:100)

- 耕作土 地山: 暗青色砂質土
- 黄土色土
- 暗黄褐色土
- 暗灰色粘質土 (部分的に砂が入る)
- 黒褐色粘質土 (有機質強)
- 暗灰色粘質土

の攪乱等により、すべての柱穴が確認されたわけではないが、柱間寸法は桁行1.6m等間、梁行1.2m等間になるものと思われる。柱掘形は径70~80cm位の方形または円形である。

S B 2 北側はC区へ延びるが、桁行4間(6.6m)×梁行1間以上の南北棟で、棟方向はN3°Eである。柱間寸法は桁行1.8+1.5+1.5+1.8m、梁行1.8m等間である。柱掘形は径50cm程度の隅丸方形を基本とする。

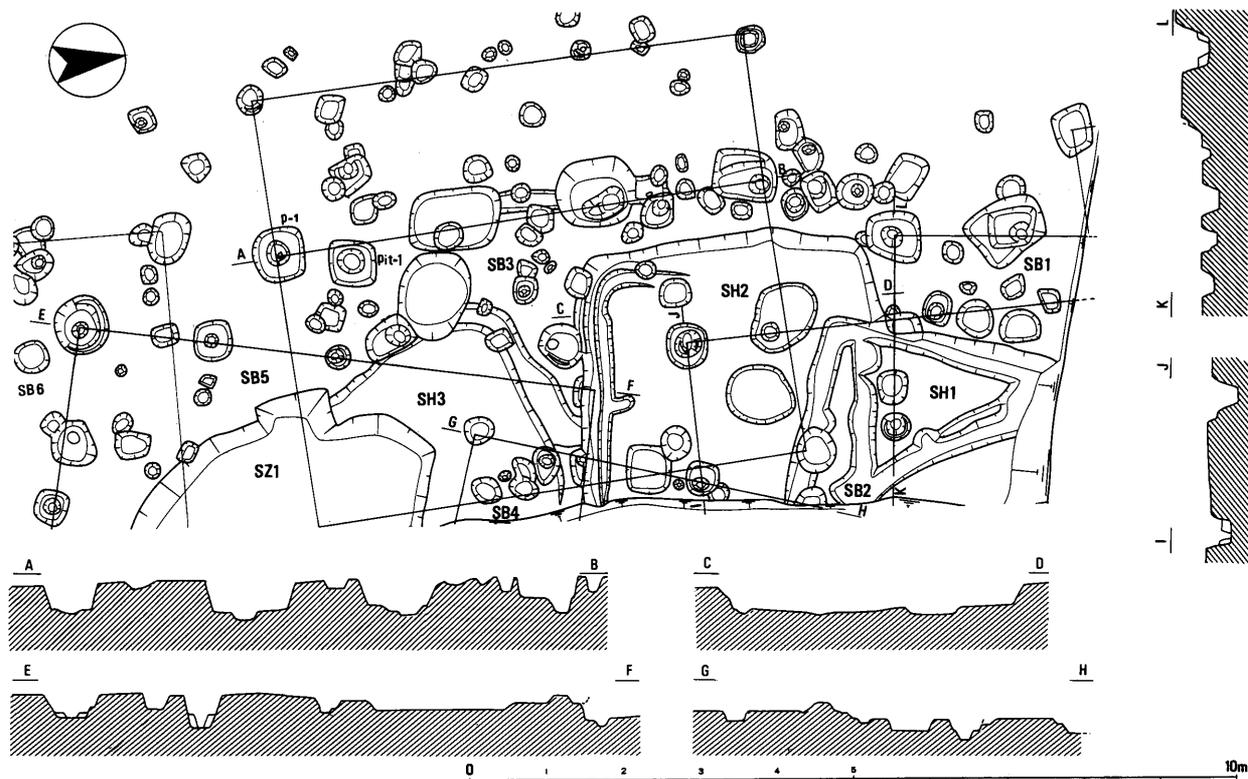
S B 3 身舎が桁行3間(6.6m)×梁行2間以上の南北棟で、西側に庇をもつ。棟方向はN1°Wであり、ほぼ真北に乗っている。柱間寸法は桁行2.2m等間、梁行1.3mの等間である。柱掘形は径80~120cmと当遺跡のなかでは最も大きいのが、庇となる西側



第I-49図 大溝遺物出土状況図

大溝南側

大溝北側



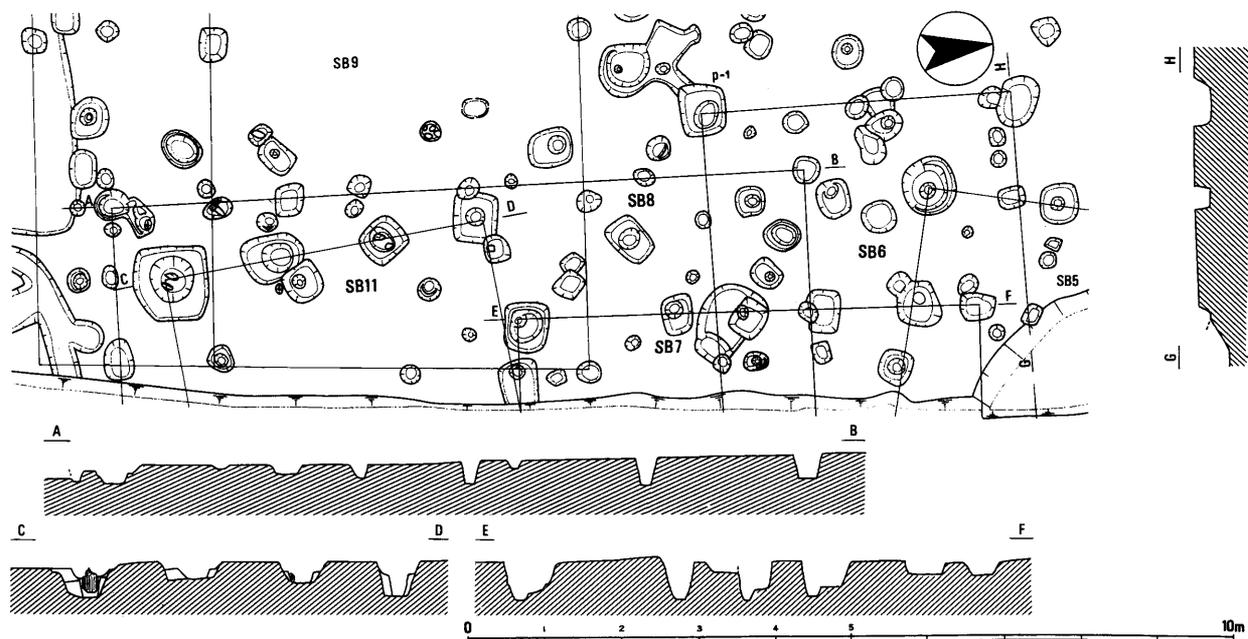
第I-50図 A区北端部遺構実測図 (S=1:100) 水糸高はすべて170.5m

の側柱は柱掘形が検出できず、柱痕だけを掘ったものであるが、小さい柱である。調査地区外であるが、東側にも庇が付く可能性もある。図示できなかったが、柱穴から奈良時代の土器が出土した。

SB4 東側が調査地区外で、南北棟と思われる建物の北側柱列のみが残る。桁行3間以上で、棟方向はN20°30'Eで、当遺跡のなかでは最も振れが大

きい。柱間寸法は1.5m等間である。柱掘方は径40~50cmの隅丸方形を基本とする。

SB5 東側は調査区外へ延びるが、桁行4間(6.6m)×梁行1間以上の南北棟で、棟方向はN15°EとSB4に次いで振れが大きいの。桁行の柱間寸法は1.65m等間、梁行は2.5mである。柱掘方は50cm前後の隅丸方形を基本とする。桁行の北から2番目の



第I-51図 SB6、SB7、SB8、SB11実測図 (S=1:100) 水糸高はすべて170.5m

柱穴が検出できなかった。

SB 6 東側は調査区外へ延びるが、桁行2間以上×梁行2間(4.2m)の東西棟で、棟方向はN 3° Eである。桁行の柱間寸法は1.5m等間、梁行は2.1mの等間である。コーナー部の柱掘形は径50~70cmと大きい、他の柱穴は小さいか、掘方を確認できず柱痕のみが残っていたものもある。柱穴より奈良時代の土器が出土している。

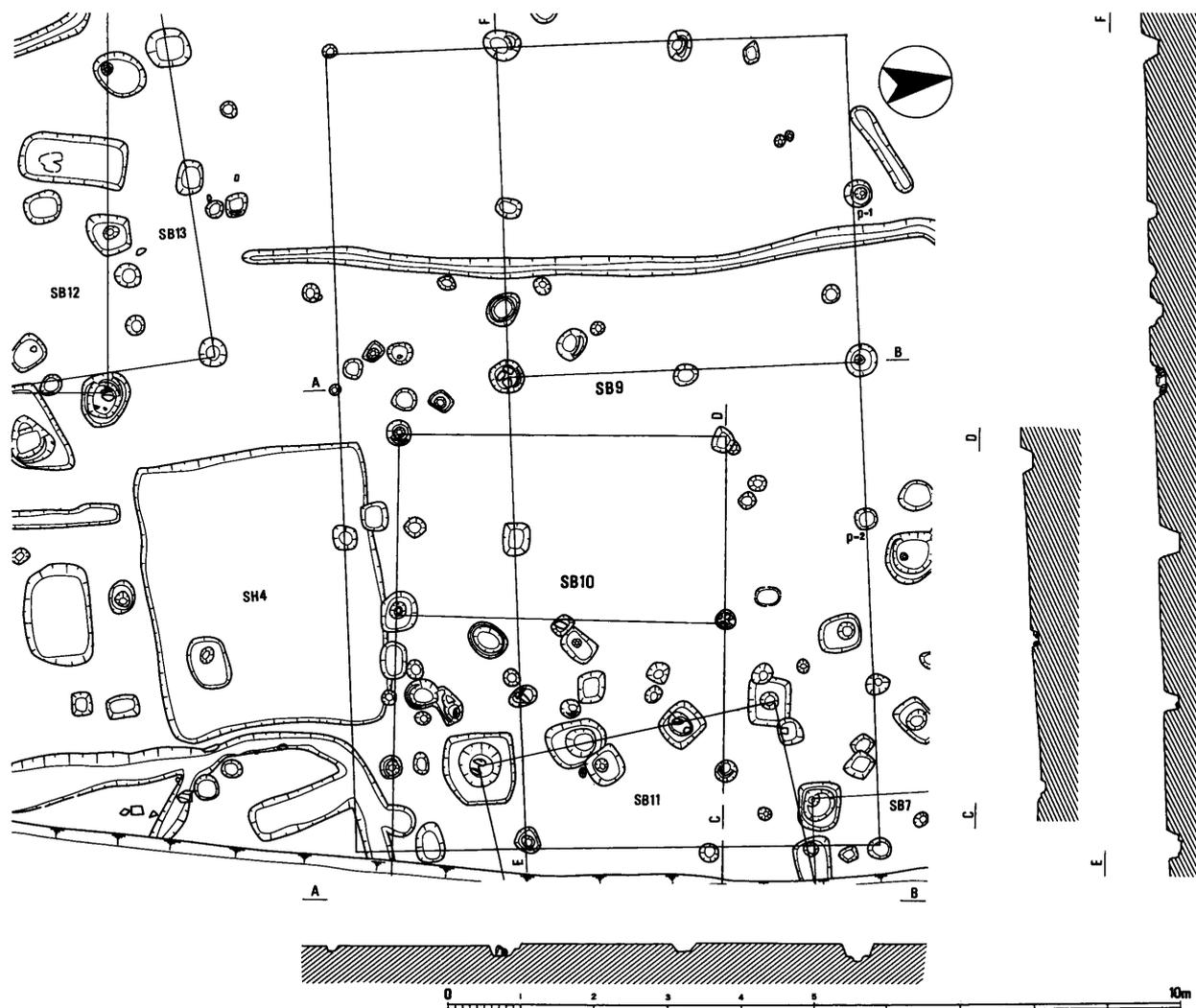
SB 7 東側の大部分は調査地区外へ延びるため西側に柱列3間(6m)が確認されただけであるが、桁行3間の南北棟の建物の西側柱になるものと思われる。そうした場合、棟方向はN 4° 30' Eである。柱間寸法は2mの等間である。柱掘形は径50cm程度の方形である。

SB 8 東側は調査区外へ延びるが、桁行4間(9.3m)×梁行1間以上の南北棟で、棟方向はN 4° Eである。桁行の柱間寸法は北側から2.1m+2.4m+

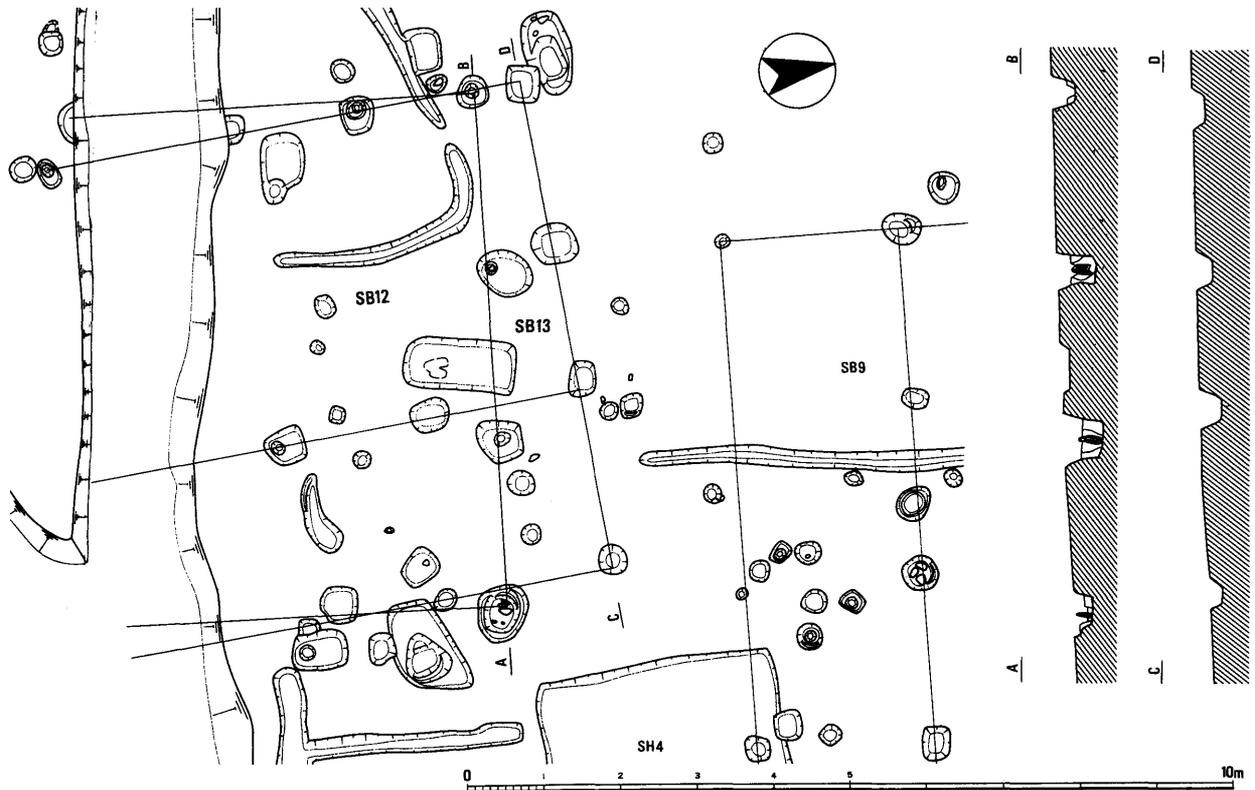
2.4m+2.4m、また梁行は2.1mである。柱掘形は大きさにややばらつきがあるが、径40cm程度の円形もしくは方形である。

SB 9 A区で唯一全体プランがわかる建物である。検出できなかった柱もあるが、桁行5間(11.2m)×梁行2間(4.8m)の東西棟の身舎に南庇をもつ。棟方向はN 5° Eである。柱間寸法は桁行2.25m等間、梁行2.4m等間で、桁行の西から3番目の柱筋に床束をもち、それを南側へ延ばすとSB 12の南側柱列の柱筋に一致する。柱掘形は径30~50cmと比較的小さい円形で、中には底に石を敷くものもある。柱穴より、瓦器が出土している。

SB 10 東側は調査区外へ延びるが、桁行2間以上×梁行2間(4.5m)の東西棟の建物と思われ、棟方向はN 9° Eである。柱間寸法は桁行は西側から2.4m+2.1m、梁行2.25m等間である。柱掘形は30~40cmとやや小さい円形である。



第I-52図 SB 9、SB 10実測図 (S=1:100) 水糸高はすべて171.0m



第I-53図 SB12、SB13実測図 (S=1:100) 水糸高はすべて171.5m

SB11 東側は調査区外へ延びるが、桁行3間(4.2m)×梁行1間以上の南北棟で、棟方向はN2°Wである。柱間寸法は桁行1.4m等間、梁行2.1mである。柱掘方は径80cm程度の方形を呈し、西側柱列の南から1番目の柱穴では径30cmの柱根が遺存していた。また、同じく1番目と3番目では根巻き石があった。なお、西側柱列を北に延ばすとSB3の西入側柱列とほぼ柱筋を揃える。

SB12 南側が落ち込みと現代溝による攪乱のため多くの柱穴が検出できなかったため、柵列の可能性も残るが、一応掘立柱建物として考えると桁行3間(6.9m)×梁行2間もしくは3間の東西棟の建物が推定され、そうした場合は棟方向はN6°Eである。柱間寸法は桁行1.3m、梁行は東側柱で考えると2.1m等間となる。柱掘形は径60cm程であるが形状は一定しない。北側柱3本では柱根が遺存している。東側柱とSB9の西側から3筋目の柱列が柱筋を揃える。

SB13 南側が落ち込みと現代溝による攪乱のためとくに南東側の柱穴が検出できなかったが、桁行3間(6.2m)×梁行2間(4.2m)の身舎に東庇をもった東西棟である。棟方向はN1°Eで、SB7やS

B15と直交する。柱間寸法は桁行が北側より2.2m+1.8m+2.2m、梁行が身舎2.1m等間に庇が2.4m出る。柱掘方は50cmの方形を基本とするが、底部の柱穴は小さい。

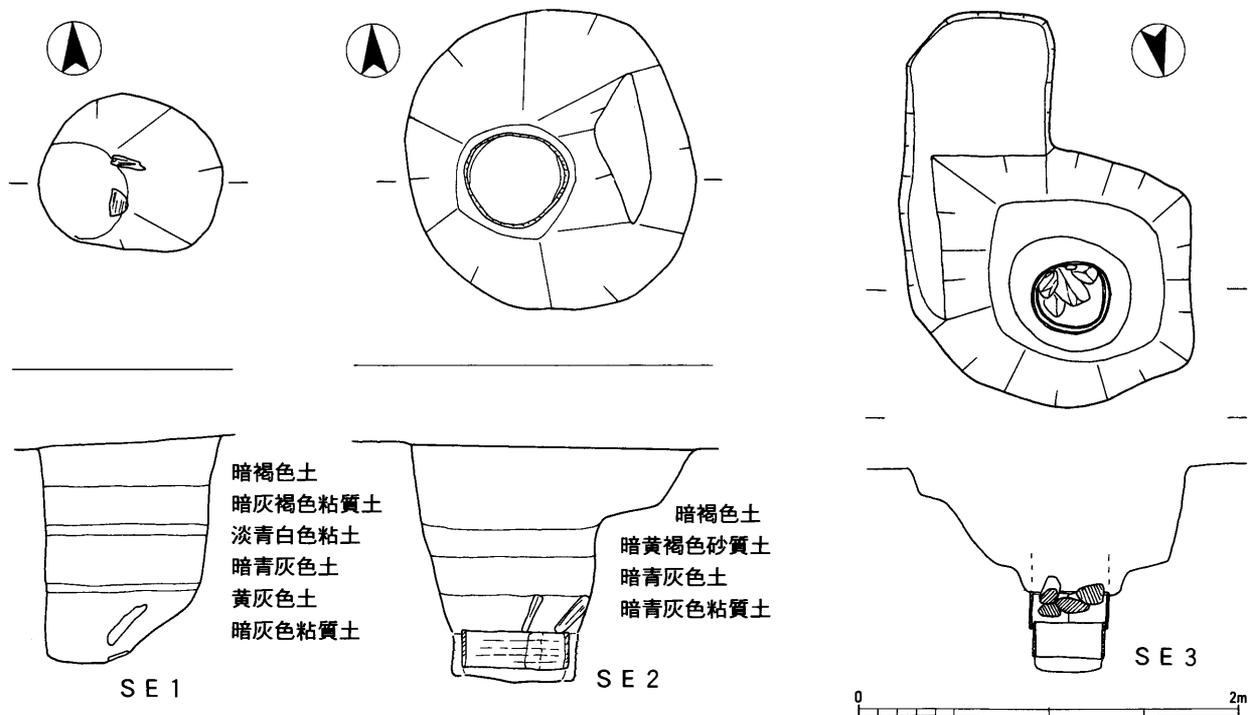
(4) 柱列

SA1 東西1間、南北2間のL字状の柱列で、柱間寸法は東西3m、南北2.4m等間である。偶然の所産かもしれないが、SB3、11、13と方位が同じで、柱穴こそすべて検出できなかったが掘立柱建物である可能性も強く、一応柱列として拾っておく必要がある。

(5) 井戸

SE1 東西95cm×南北80cmの素掘りの井戸で、底までほぼ同じ大きさで下がっていく。検出面から底まで1.2mと浅い。

SE2 東西168cm×南北174cmの堀形をもち、それが底に行くに従って逆円錐状に次第に狭まっている。東側の、検出面から30cm程下ったところにテラスをもつ。深さは検出面から122cmとやや浅い。底に径56cm、深さ20cmの曲物が遺存していた。このことより、少なくとも6段以上の曲物を使用して井戸枠としたものが、最下段のみが残っていたものと思われる。

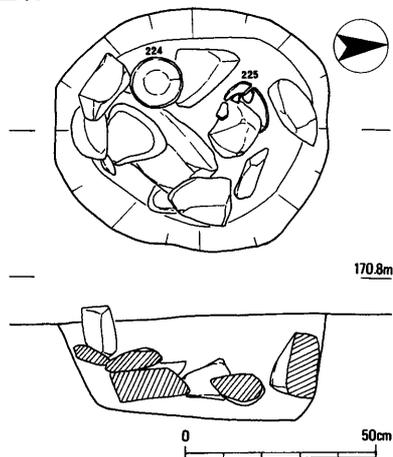


第I-54図 井戸実測図 (S=1:40) 水系高はすべて171.5m

埋土中より瓦器が出土している。

SE 3 掘形は2段に掘り込まれており、検出面では東西130cm×南北136cmの方形プランを呈し、50cm程度下がったところで東西94cm×南北86cmの方形プランのテラスをもつ。深さは検出面より1m強と浅い。底に幅38cm、深さ20cmの曲物があり、さらにもうひとつそれを覆うように幅42cm、深さ20cmの曲物が遺存していた。このことより、少なくとも5段以上の曲物を使用して井戸枠としたものが、下から2段まで残ったものと思われる。また、曲物内には人頭大の石が詰まっており、故意に井戸を埋めようとしたことが窺える。

(6) 土坑



第I-55図 SK 1 実測図 (S=1:20)

SK 1 東西64cm、南北72cmの楕円形をなし、深さは検出面より30cm程である。人頭大よりやや小さい位の石が詰まっており、それに挟まったかたちで瓦器碗が2個出土した。とくに焼土等は認められなかった。

SK 2 大溝より南側で自然流路以外の唯一の遺構である。東西65cm、南北60cmの隅丸方形を呈し、そのなかに土師器の甕が1個入っていた。墓など何らかの意図で埋設された可能性がある。

B区の遺構

(1) 掘立柱建物

SB 14 B区では掘立柱建物が同一地点に何回か重なって建てられているところが約20m離れた東西2ヶ所で認められるが、これは西側の群のなかで最大の建物である。東西棟の建物で、桁行5間(12m)×梁行4間(8.8m)の総柱の身舎に、東庇をもつ。棟方向はN12°Eである。身舎の柱間寸法は桁行が西側から2.55m+2.1m+2.7m+2.4m+2.25m、梁行が2.2m等間で、桁行は若干不揃いであるが柱通りはよい。底部分は幅3.2mとやや広いが、北側2筋目までと南側に床束と考えられる東柱をもつ。柱掘形は40cm程度の円形である。切り合い関係からSB 15、16より新しい。平安時代後期の土器が出土している。

S B 15 桁行4間(西側柱列で8.8m)×梁行3間(7.2m)の南北棟の建物で、北側と東側に庇をもつ。棟方向はN10° Eである。西側柱と東側柱の柱間寸法がやや不等間になるため、やや歪んだプランになる。柱掘形は30～50cmの円形である。切り合い関係からS B 14より先行する建物である。平安時代後期の土器が出土している。東側3mのところと並行してS A 2がある。

S B 16 桁行4間(7.6m)×梁行2間(3.5m)の東西棟で、棟方向はN14° 30' Eである。柱間寸法は桁行が西側から2m+1.8m+2m+1.8m、梁行が1.55m等間である。梁行の西側から2番目と4番目の柱筋に東柱をもつ。柱穴は20～30cmの小さい円形で、柱掘形を検出できず、柱痕のみを掘ってしまったものもある。切り合い関係から、S B 14より先行する。

S B 17 やや変則的な建物で、桁行3間(7.2m)×梁行2間(4.4m)の南北棟に、南東隅に一間分の張出部分が付属する。棟方向はN13° Eである。柱間寸法は、桁行が2.4m等間、梁行が西側から2.4m+2mである。柱掘形は40cm程度の隅丸方形である。

S B 18 桁行4間(9.3m)×梁行2間(4.4m)の東西棟で、棟方向はN11° Eである。柱間寸法は桁行が西側から2.2m+2.4m+2.4m+2.3m、梁行が2.2m等間である。梁行の東側から2番目と4番目の柱筋に東柱をもつ。柱掘形は40cm程度の円形を基本とし、平安時代後期の土器が出土した。

S B 19 桁行6間(13.9m)×梁行2間(4.8m)の東西棟で、棟方向はN8° 30' Eである。南側柱の西から2番目の柱が検出できなかったが、北側柱で桁行の柱間寸法をみると西側から2.4m+2.3m+2.4m+2.3m+2.4m+2.1mでやや不等間、梁行は2.4m等間である。梁行の西側より2番目と6番目の柱筋に東柱をもつ。柱掘形は、確認できなかった柱穴もあるが50cmの円形で、そこに根石を持つものもみられる。北側柱の西から4番目の柱穴から黒色土器と瓦器椀がほぼ完形の状態で出土した。

S B 20 桁行5間(11.8m)×梁行2間(5m)の東西棟で、棟方向はN11° Eである。柱間寸法は、桁行が2.3m～2.4mでほぼ等間、梁行も2.5mの等間

である。梁行の西側から2番目の柱筋に東柱をもつ。柱掘形は30～40cmの円形のを基本とし、根石をもつものもみられる。柱穴から、平安時代末の土器が出土している。

S B 21 桁行5間(北側10.9m、南側10.7m)×梁行3間(6.9m)の東西棟の身舎に、南庇と東側柱の北半分に1間(2.1)×2間(4.5m)の張出部が付く。棟方向は、N7° 30' Eで、柱間寸法は桁行が北側柱で西側から2.5m+2.1m+2.1m+2.1m+2.1m、梁行が2.3mの等間である。柱穴は径30m程の円形を基本とし、根石をもつものもあるが、面積的に大きい建物であるわりにはそれを支える柱穴の数、大きさともに華奢な印象をうける建物である。

(2) 柱列

S A 2 S B 15の東側に、5間(8.3m)の南北方向の柱列があり、棟方向はN11° Eである。柱間寸法は、北から3間は1.3m等間、残りの2間は2.25m等間と、北側3間の寸法が狭い。S B 15とほぼ並行することと、S B 15の東面から東へ3.1mの位置にあり、一尺を30.3cmと考えるとほぼ10尺となることから、S B 15に伴うものと考えられる。

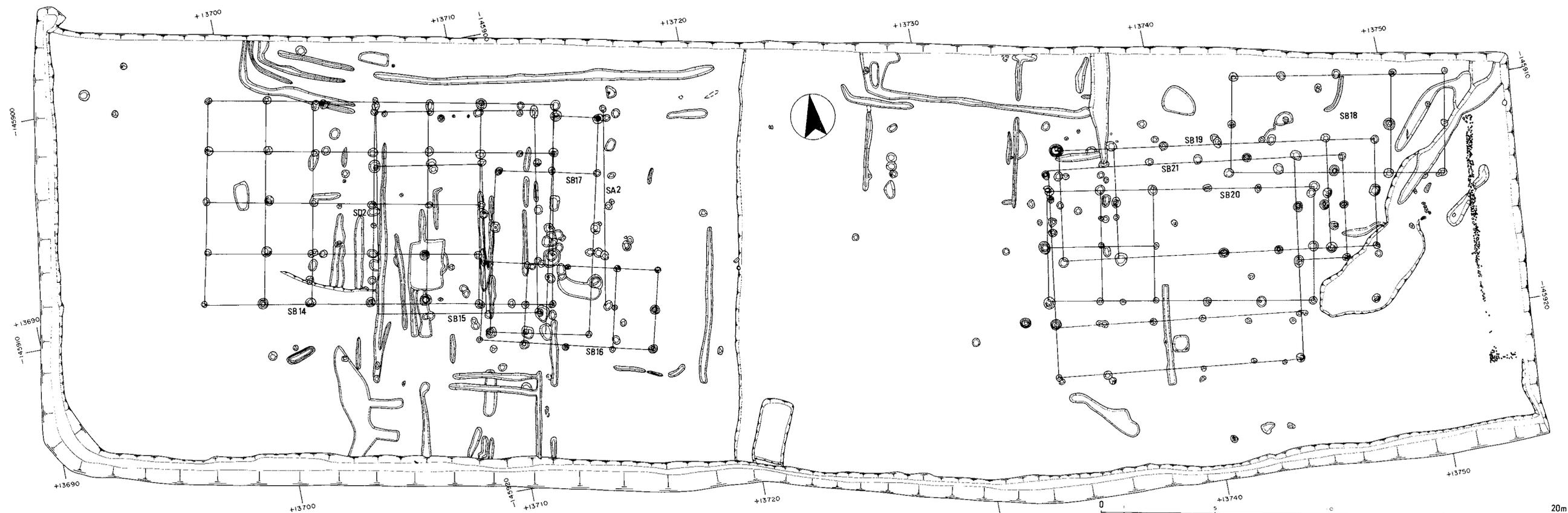
(3) 溝

S D 3 S B 14に重複して南北方向に走る長さ3m強、幅40cm、深さ5cm程の小溝。埋土中より瓦器が出土している。

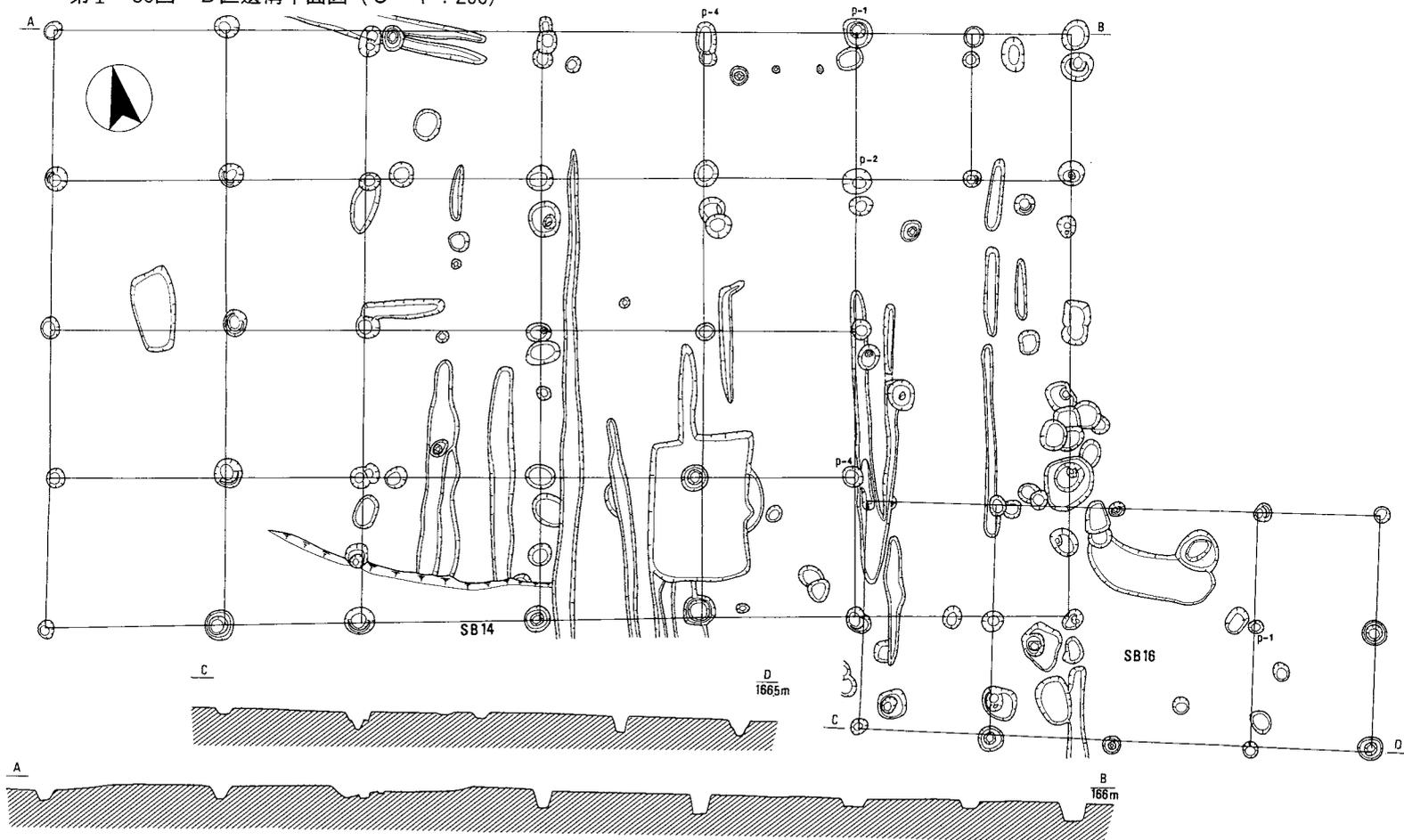
また、S B 14やS B 15の北側、S B 17の東側にこれらの建物に伴って小溝が走っている。建物の雨落ち等の施設あるいは建物の区画溝の可能性も考えられるが、S B 14等の北側を走る東西方向の小溝は調査区端で北側へほぼ直角でカーブしており、調査区北隣にさらに別建物があってそれに伴うものである可能性も考えられる。

(4) その他

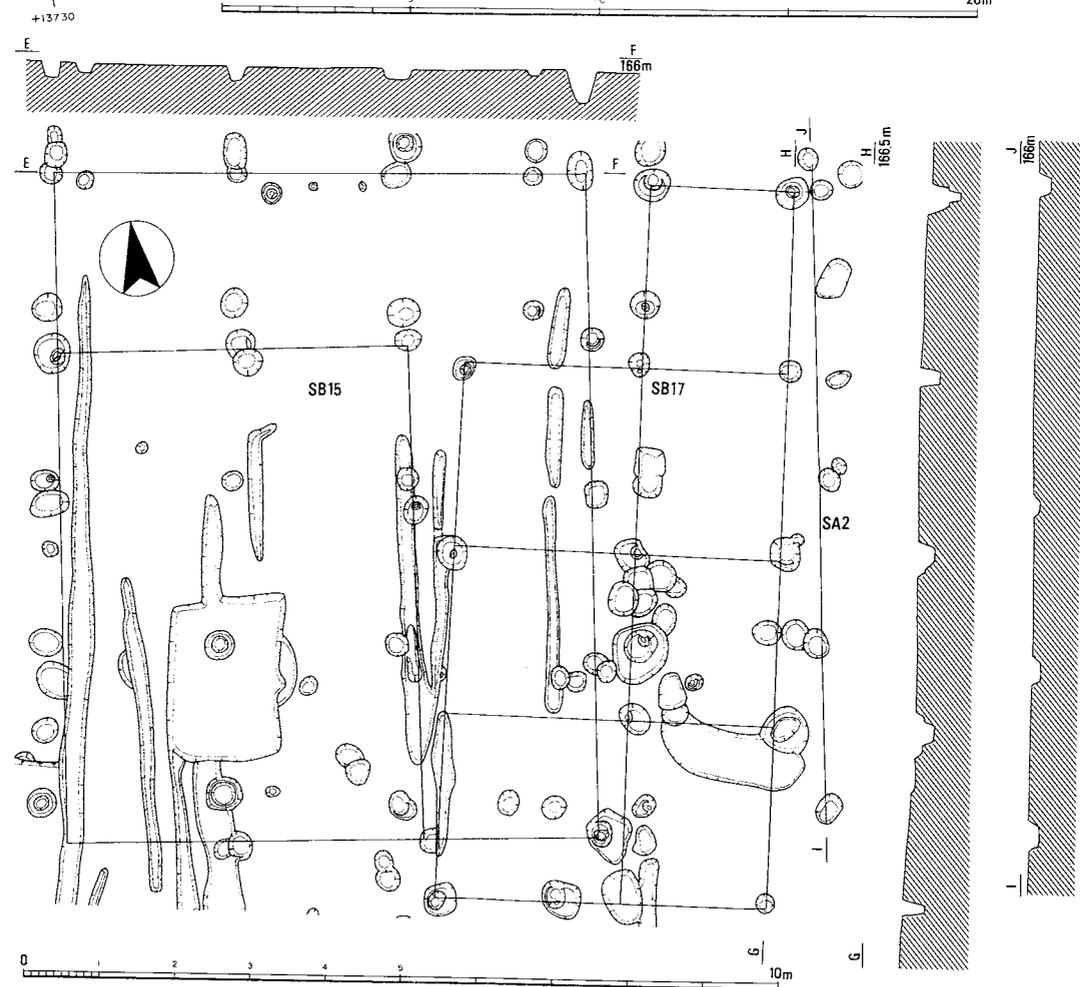
石敷1 S B 22の東側柱の外側に小石を敷き詰めた石敷がある。南へ11mほどいくとL字状に東側におれる。時期不明であるが、S B 22もしくはS B 23に伴う雨落ち等の施設である可能性がある。



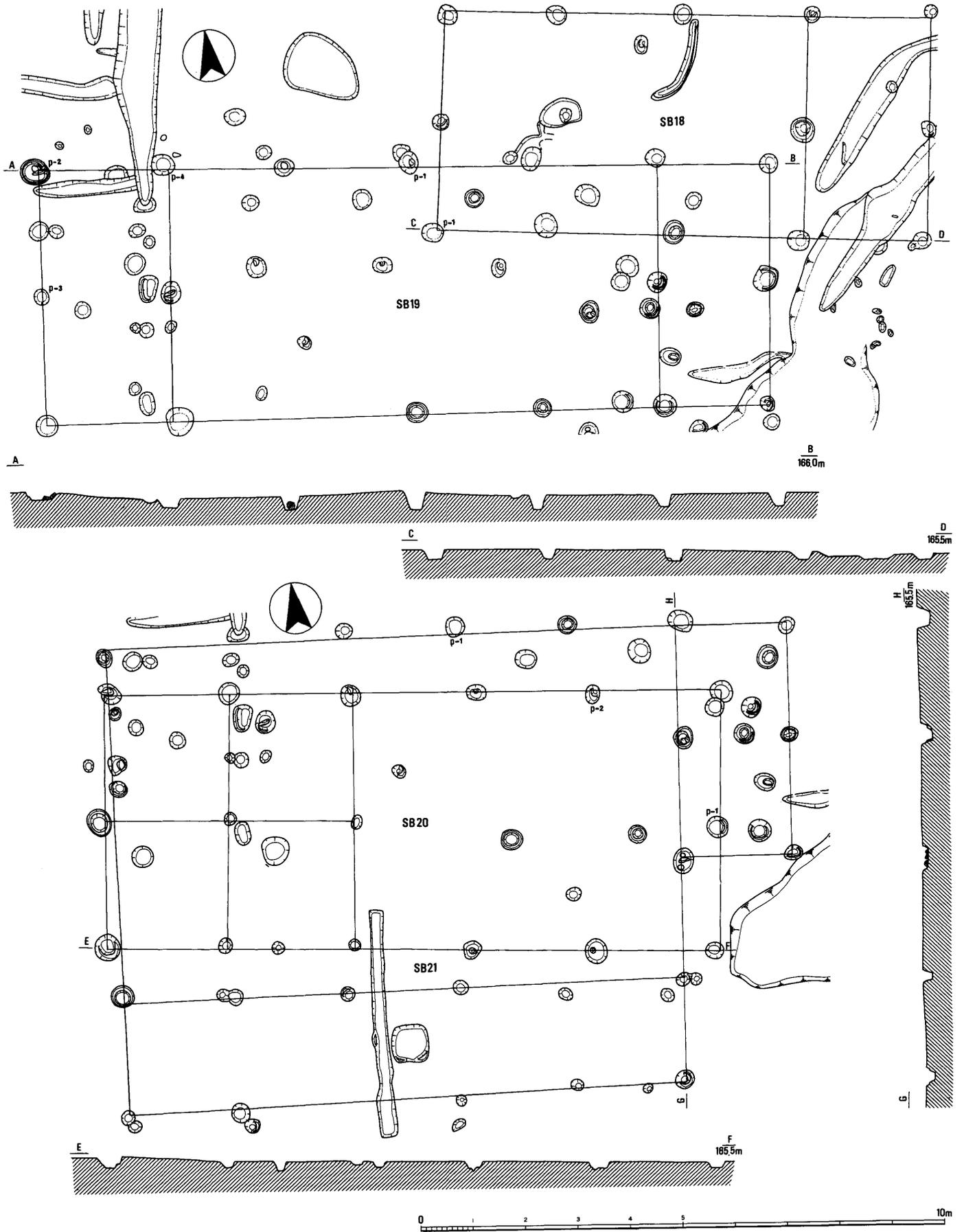
第 I - 56 图 B 区遗构平面图 (S = 1 : 200)



第 I - 57 图 SB14 · SB16 实测图 (S = 1 : 100)



第 I - 58 图 SB15 · SB17 实测图 (S = 1 : 100)



第I-59図 SB18~SB21実測図 (S=1:100)

B. 遺物

A区出土の遺物

A区出土遺物の大多数は、大溝からの土器と木製品である。また、竪穴住居埋土と掘立柱建物の柱穴埋土の峻別が困難であったため、両者が切りあっているところでの掘立柱建物の柱穴は、竪穴住居床面でしか検出できなかった。従って、掘立柱建物柱穴の遺物の一部が、竪穴住居埋土に混入している可能性をこわっておきたい。

(1) 大溝出土遺物

A、土器

結果的に大きく上層（飛鳥～平安）、中層（須恵器を含む古墳時代）、下層（古墳時代前期）の3層に分層できたが、当初は上層（飛鳥以降）と下層（古墳時代）の2層に分けて土器の取り上げを行ったため、若干の混乱が生じた。また、主として上層に下層の遺物が混入している場合があった。従って、ここでは大溝出土土器として一括して報告することとし、取り上げた層位は土器観察表を参照されたい。

a、土師器

二重口縁壺（1～3） 1、2は口縁部が大きく外反する。2のほうが頸部がすぼまっている。これに対し、3は口縁部が短く立直しており、体部をハケメ調整する。

広口壺（4～11） 調整手法からは、タタキを残してハケメ調整する4～5、ハケメのみの6・8・11、ミガキが入る7・9～10に分けることができるが、形態的には口縁部の外反度が強い4～6・10と、弱い7～9・11に分けることができる。また、4～7・9は口縁部外面に面をもつものに対し、8・10は端部を丸くおさめ、11は内面に面をもつ。

小形広口壺（12） 口縁部が一度短く立直してからまっすぐ外側へ開く。体部外面はミガキ調整である。

ひさご形壺（13～14） 口縁部が内弯気味に立ち上がる。口縁部、体部とも外面に縦方向のミガキを施す。

小形壺（15～18） 16は肩部があまり張らない。15は体下部に穿孔を有する。

小形丸底壺（19～38） 他器種のミニチュア品の

なものや、平底に近いものもあるが、一括した。調整はオサエ、ナデを中心とするが、ミガキやケズリ、ハケメの入るものも一定量存在する。完全に丸底化していない平底的な底部をもつ比較的雑なつくりのものも多く、古い時期に特徴的な口縁部が大きく開くヘラミガキ調整の例はない。37は体部外面に篋状工具による線刻をもつものである。若干の欠損部分があるものの、羽を広げた水鳥を描いているものと考えられる。⁴¹⁾

小形手づくね土器（39～40） 手づくねによる小さな土器である。

甕A（41～50・54～67） 「く」字形口縁部をもつものを一括したが、調整や器形の差によって細分できる。

41～50はタタキをもつものである。このうち、41～44はハケメでタタキを消す度合が小さいか、タタキだけのものである。46は若干長胴で丸底の底部をもつ。47は底に台をもつものであるが、タタキをほどこした体部と台が同一個体内で一緒にある例は珍しい。内面調整はナデ、オサエ、ハケメによるものが多く、ヘラケズリによるものは少ない。54～67はタタキがないか、痕跡をのこさないもので、ハケメ、ミガキ、ナデのいずれかによる。内面調整もヘラケズリによるものはなく、ナデ、板ナデ、ハケメによる。65は底部に台が付く可能性がある。

甕B（51～53） 受口状口縁部をもつものである。口縁部は刻み列をもつ。体部はハケメ調整で、体上部に同一原体によるヨコハケを加え、文様効果をだしている。

鉢A（68～71） 甕形土器の体下半部だけを独立させたような器形を呈し、法量から大小に分かれる。68～69は底部に焼成前の穿孔があり、蒸し器として使用されたものと思われる。

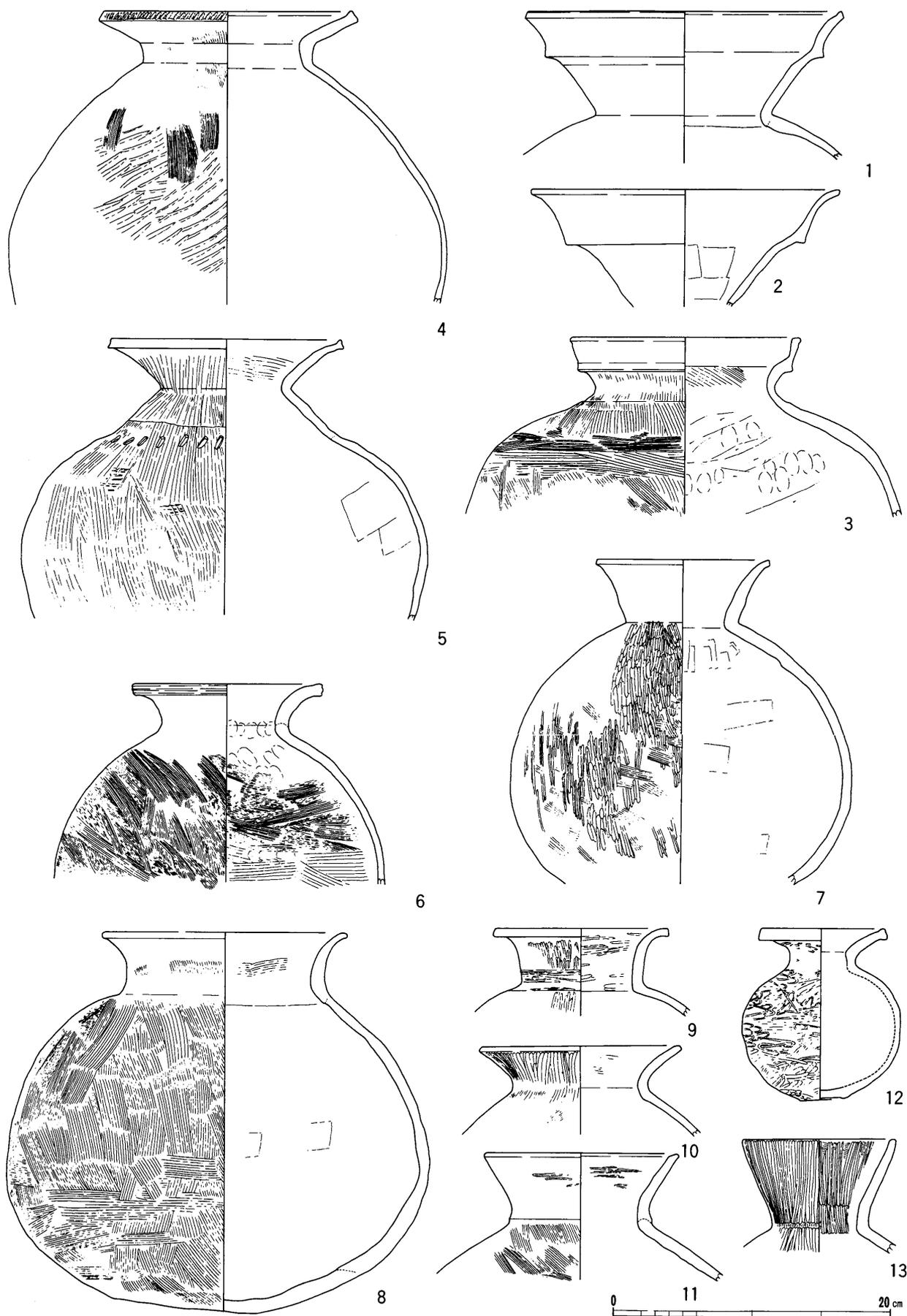
鉢B（72） 底部が広く洗面器状の器形を呈する。

鉢C（73） 器高の低い甕状の器形である。外面底部にケズリを施す。

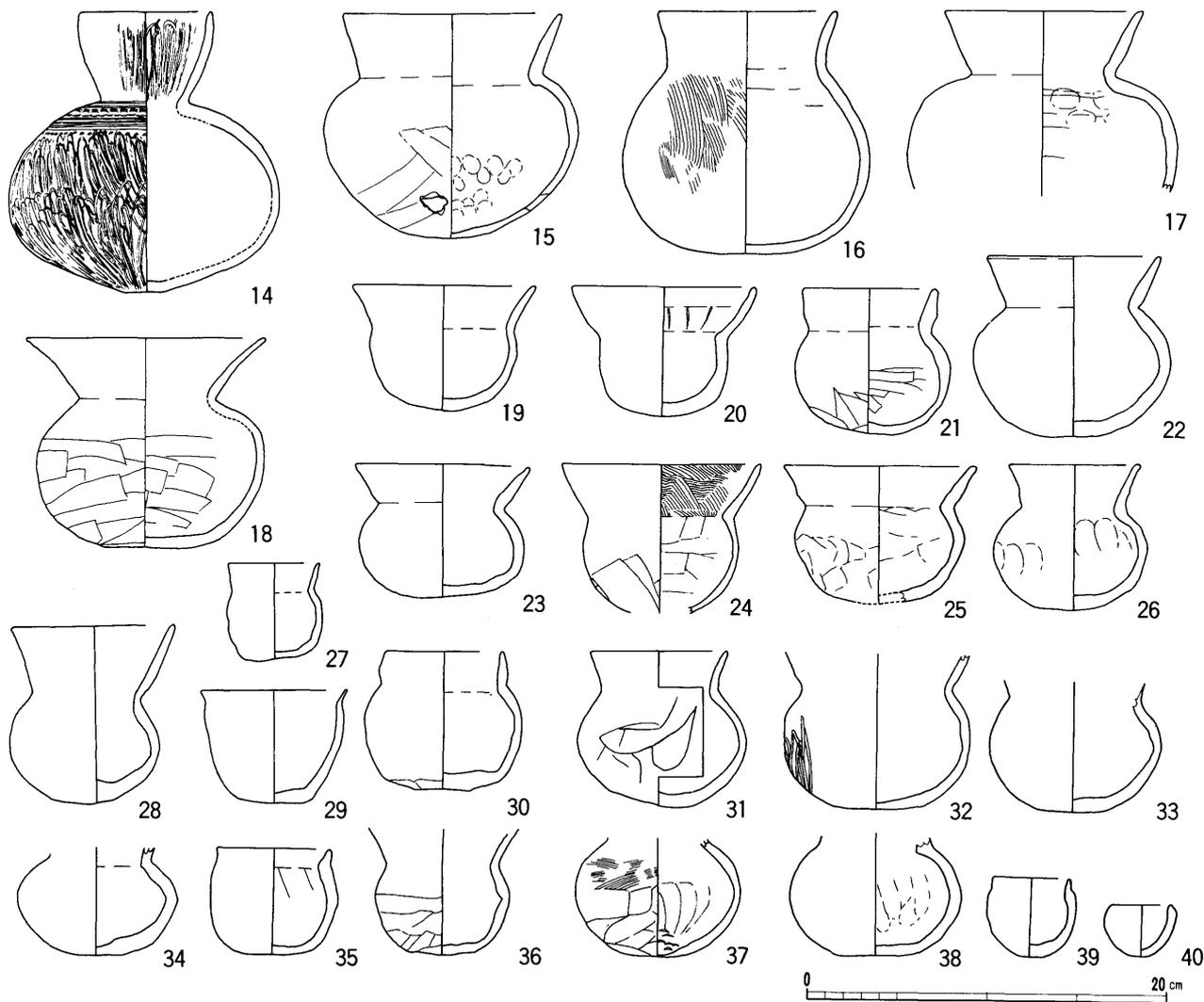
椀（74～83） 口縁部が外側へ屈曲する74～76と、まっすぐにおわる77～83がある。

小形器台（84） 1点のみが確認できた。つまみ上げにより口縁部をつくる。

高杯



第 I - 60 图 A 区大清出土遗物 (1) (S=1:4)



第I-61図 A区大溝出土遺物(2) (S=1:4)

杯部の形態から、杯部が2段に屈曲するA類、1段屈曲するB類(B類はさらに内弯気味に開くB₁類と直線もしくは外反気味に開くB₂類に細分できる)、屈曲をもたないC類の大別3類型に分かれる。

高杯A(87) いわゆる「加飾高杯」で脚部も2段屈曲する。口縁部に粘土を貼付して拡張する。杯部内外面や脚部外面を櫛描波状文や円形浮文で飾る。

高杯B₁(88) 脚部は段をもたず、すぼまりながら収まる。口縁端部内面に面をもつ。外面全体をヘラミガキする。

高杯B₂(89~91. 94~95. 95~115) 出土した高杯の大部分を占める。脚部内面に注目すると、脚柱部に粘土が詰まっている90や91と、ナデ調整による112、脚柱部を工具を一周させることによってヘラケズリを施し脚裾部との間に稜をもつ105や109等の差がみられる。また、105~107. 114は杯上部と杯下部の境に三角状の隆帯を貼付している。99は杯部内面

や脚部外面に横方向の細いヘラミガキを施している。

高杯C(92) 杯部内外面に幅広のヘラミガキを施している。

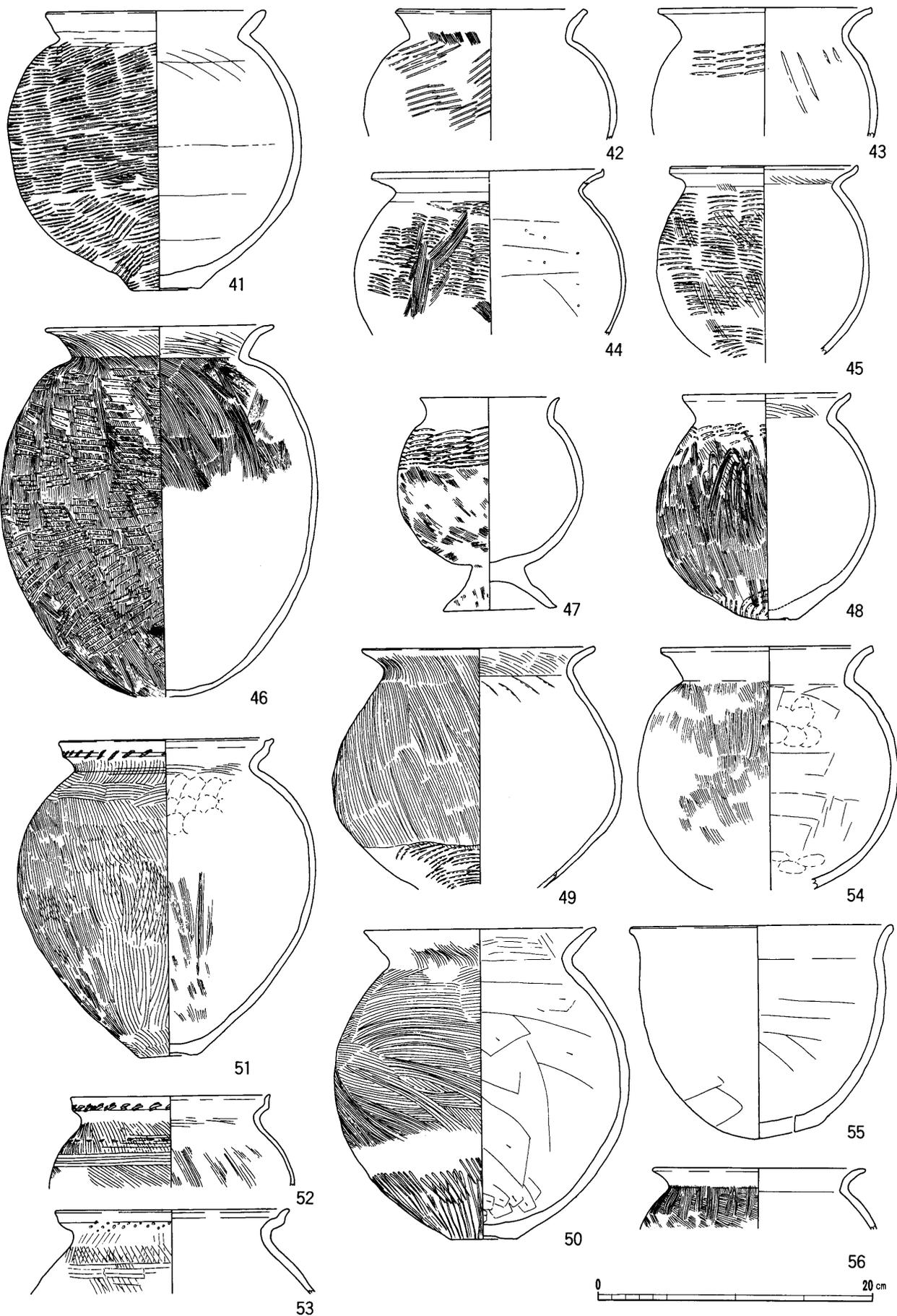
高杯脚部(85~86. 93. 96~98) 脚部だけのものを一括した。このうち、85~86は脚裾部内面に布状圧痕をもっている。繊維の目は95のほうが粗い。96~97は脚裾部がすぼまりながらおさまる。B₁類に伴う脚部であろう。97は脚上部に櫛描横線文が施されている。

土管状土製品(116) 突帯が高く、体部に黒斑をもつ。器財埴輪の脚台部とも考えたが、器形がやや小さすぎる。

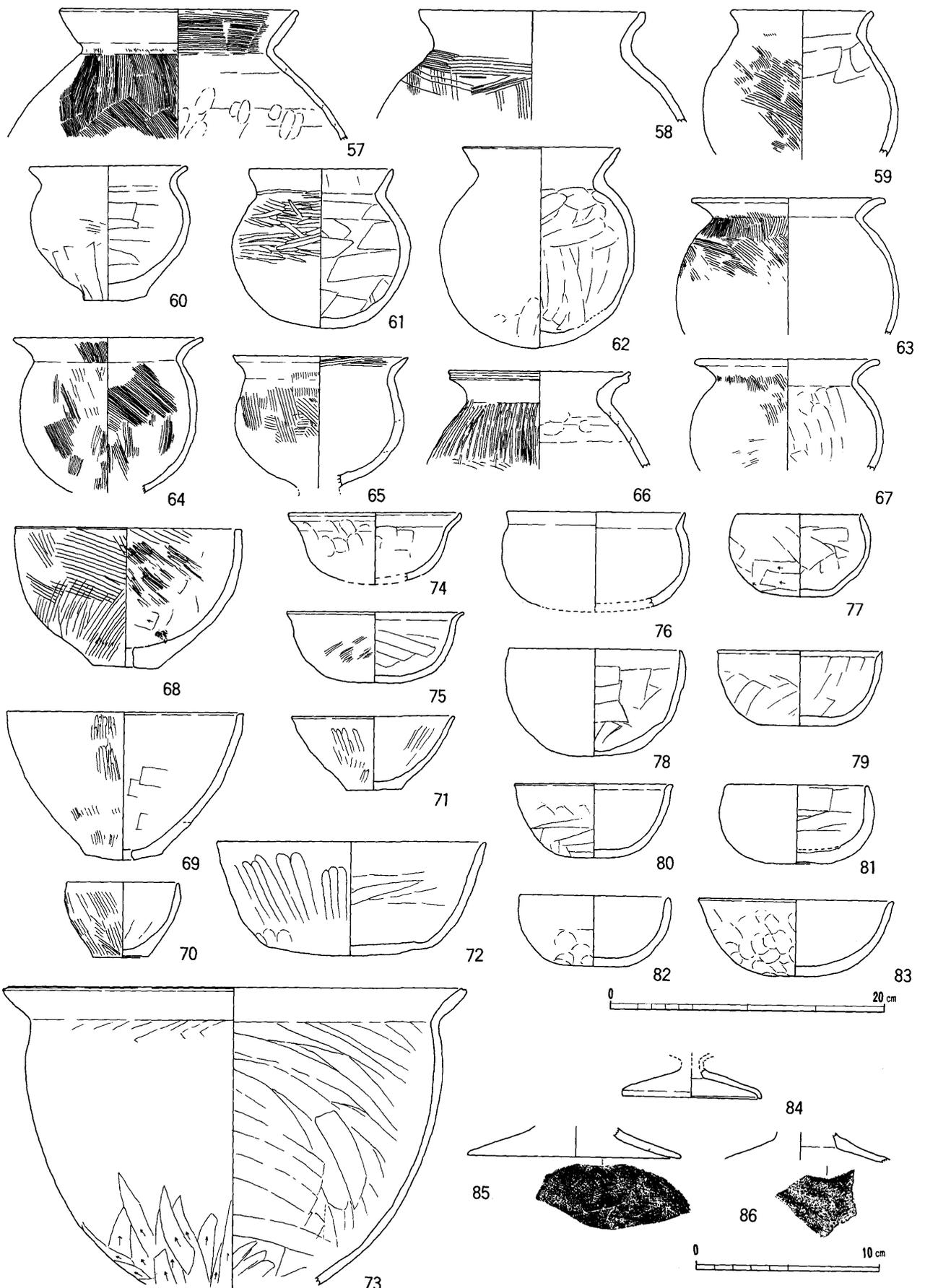
b、須恵器

甗(117) 頸部が細くすぼまり、口頸部に2段にわたって波状文を施す。体下半部の一部にケズリがされている。

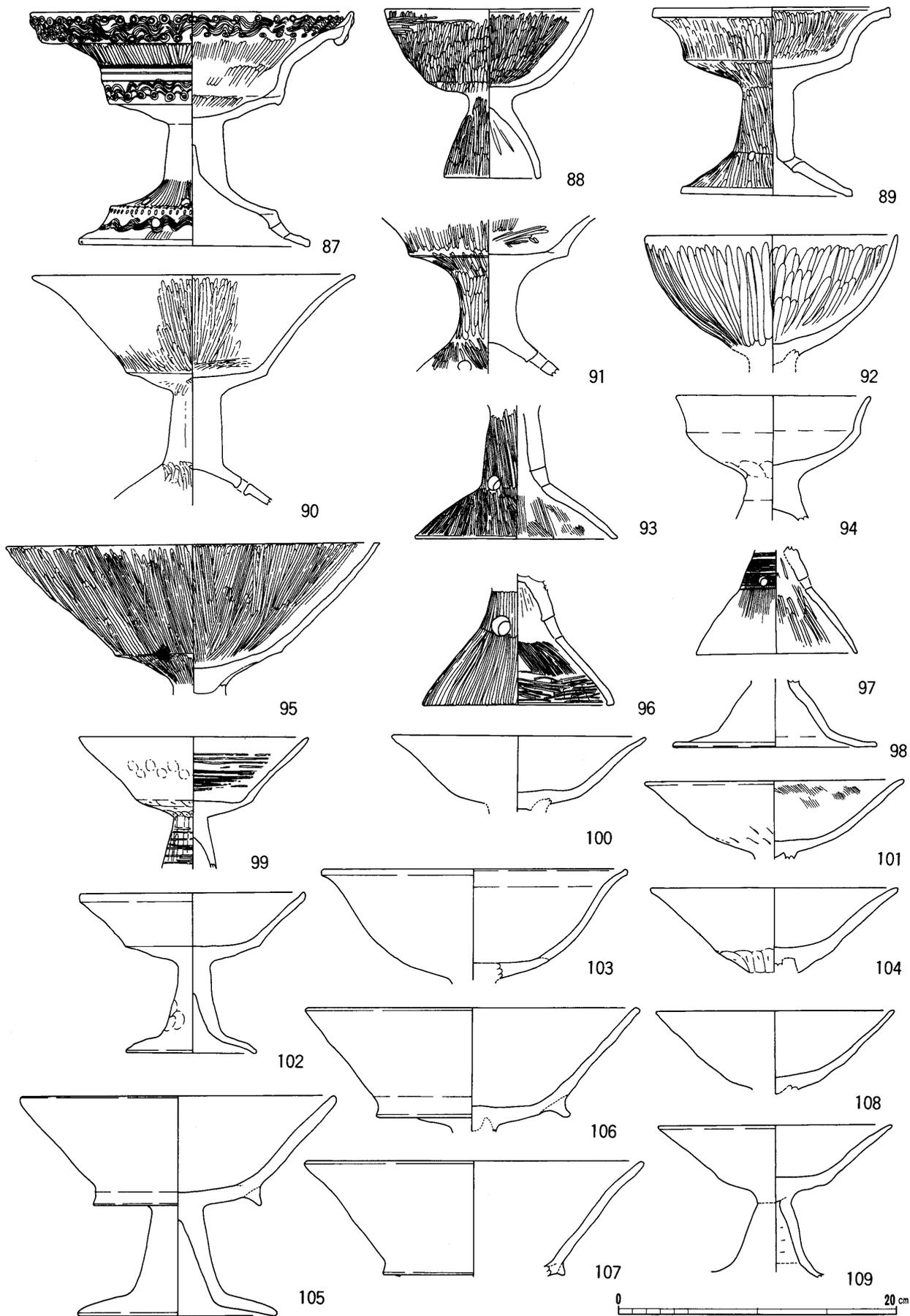
杯蓋A(118~127) 古墳時代に属する蓋で、それ



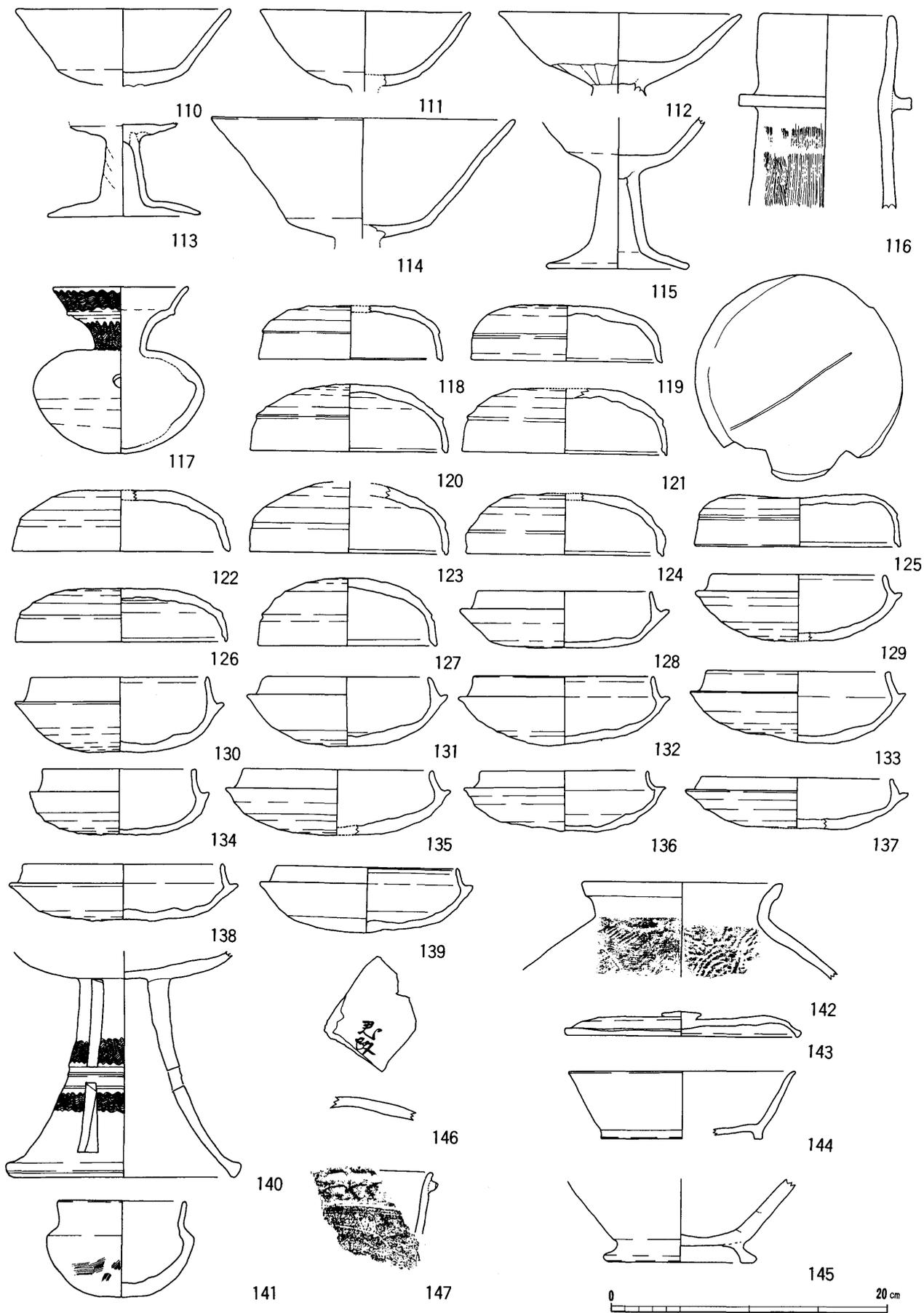
第 I - 62 图 A 区大满出土遗物 (3) (S = 1 : 4)



第I-63図 A区大溝出土遺物(4) (S=1:4、84~86のみ 1:3)



第 I - 64 图 A 区大沟出土遗物 (5) (S = 1 : 4)



第 I-65 图 A 区大沟出土遗物 (6) (S=1:4)

ぞれ法量や天井部外面のヘラケズリ調整などに若干の差異はあるものの、ほぼ6世紀代のものである。

杯蓋B (143. 146) 143は、天井部、つまみともに偏平で、口縁端部は厚く丸みをもつ。天井部の約3分の2をヘラケズリする。146は破片であるが、外面に墨書をもつ。「郡政」もしくは「君政」と判読できるが、「郡政」の可能性が高い。²⁾

杯身A (128~139) 杯蓋Aに対応するものである。法量、底部のヘラケズリの範囲、受部の立ち上がりの程度、口縁端面の作りなどでそれぞれ若干の差異はあるものの、ほぼ6世紀代のものである。

杯身B (144) 口縁部は外側に開きながら端部でわずかに外反する。高台は断面方形で、底部端につけられ立直する。

台付高杯 (140) 長脚2段透かしの高杯で、2段に波状文をもつ。脚部と杯部との接合部の幅は広く、脚裾端部は断面3角形状を呈する。

埴 (141) 口縁部は薄く、やや外側へ直線的に開く。内面と外面上部に回転ヨコナデ、外面体下半部には静止ヘラケズリを施す。

壺 (142.145) 別個体である。142は口縁部が肥厚し、外面はタタキのあとカキメ、内面は同心円状のタタキのあて具痕が残る。

c、その他の土器

縄文土器 (147) 1点のみであるが、縄文土器片を確認した。混入であろう。突帯文深鉢の口縁部で、突帯は口縁端部よりやや下がったところに位置し、突帯上には刻みが施されている。

B、木製品

今回の調査で注目できる遺物として木製品があげられる。以下、代表的なものについて報告する。

1、農耕具

平鍬 (158) 保存状態はよくないが、基部から側縁部、刃部の一部が遺存している。頭部の断面はほぼ正方形を呈する。全体に厚みがあり、まだ削り込んでいない未製品と考えられる。

三股鍬 (159) 遺存度は悪いが、身の残存部の大きさと、わずかに残る刃基部の大きさより三股になるものと判断した。笠形の突起から刃基部までは内弯気味の弧を描く。

2、生活用具

槽 (155) スコップ状の平面形を呈する。一木造りで、造り出された把手と脚台が付く。脚台は長方形で、三個付くが、うち二つが欠損しその痕跡のみを残すものである。

案 (167~170.172~175) 167~170、172.173は脚材である。167と168は一对になるものと思われる。基本平面は台形状であるが、下部に抉りを入れる。上部に三角状の突起が造り出されているが、台部の溝に差し込み易くするためであろうか。169と170は大きさ、形状ともに若干異なり、セットにはならないが、ともに基本平面が長方形で、下部に台形状の抉りを入れる。172と173も脚材になると思われる。欠損しており全体形は不明だが、抉り部がゆるやかな弧を描く。172は一部焼けている。

174と175は台材で、下面を図示した。174は、長さがやや揃わないものの断面方形の溝が2本あり、ここに脚材がはめ込まれるものと思われる。175は溝の部分が逆台形のいわゆる「アリ溝」状を呈している。

3、武器もしくは武器形祭祀具

刀形もしくは剣形木製品 (161) 刀もしくは剣をかたちどった形代で、刀身部分の大部分が欠損している。刀身基部は断面長方形であるが、鞘を表現したものか、鞘をとった抜身で表現したものかはいまひとつ明瞭でない。柄部分の造りは精巧である。

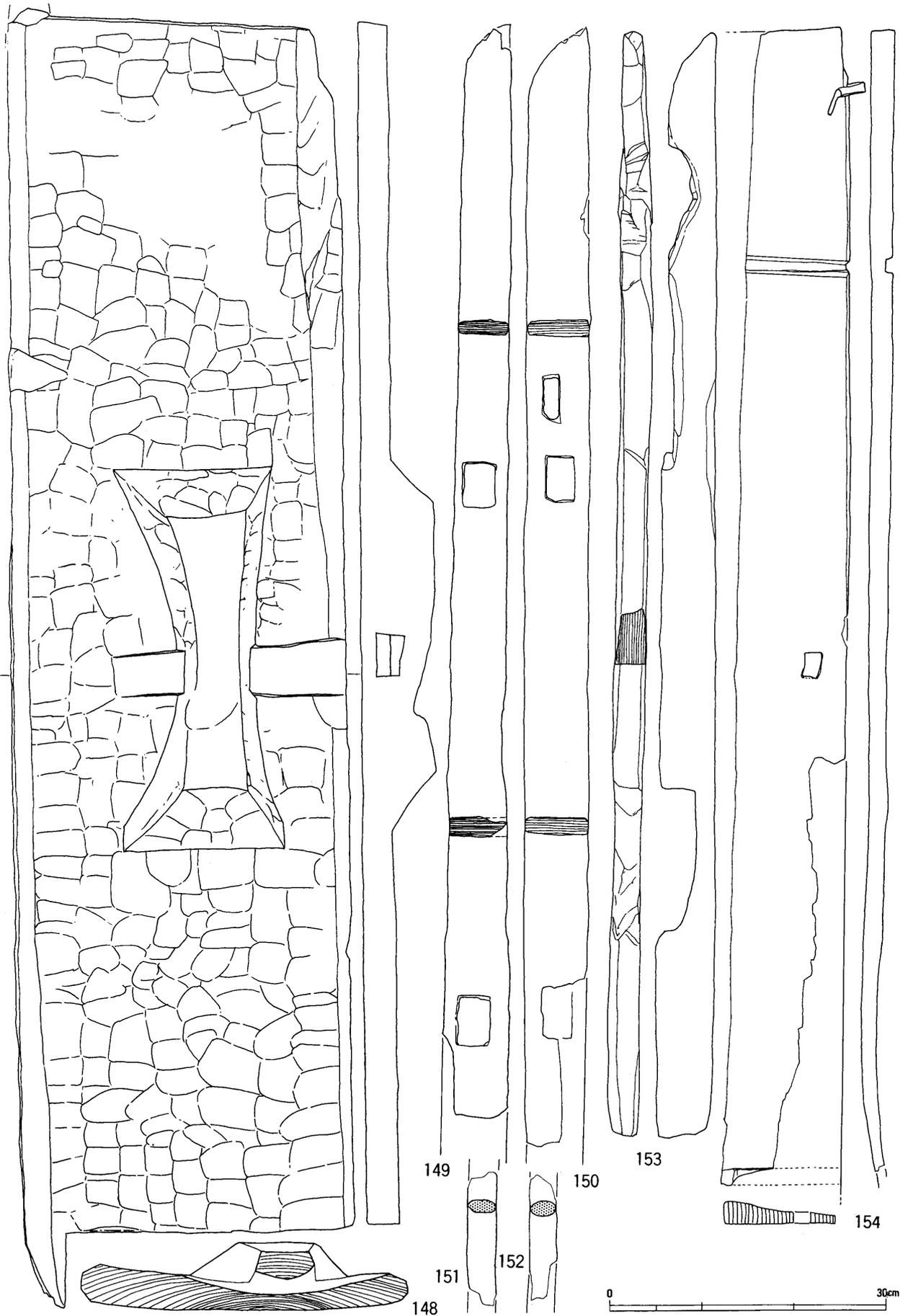
刀の鞘口 (162) 外面を黒彩、竹管状の沈線の部分を朱彩する。精巧な作りである。また、朱の成分は硫化水銀である。

刀の鞘 (160) 丸木を割いて薄く削り出したものである。別の抉りの入った木と緊縛することによって鞘の役目を果たしたものと思われる。

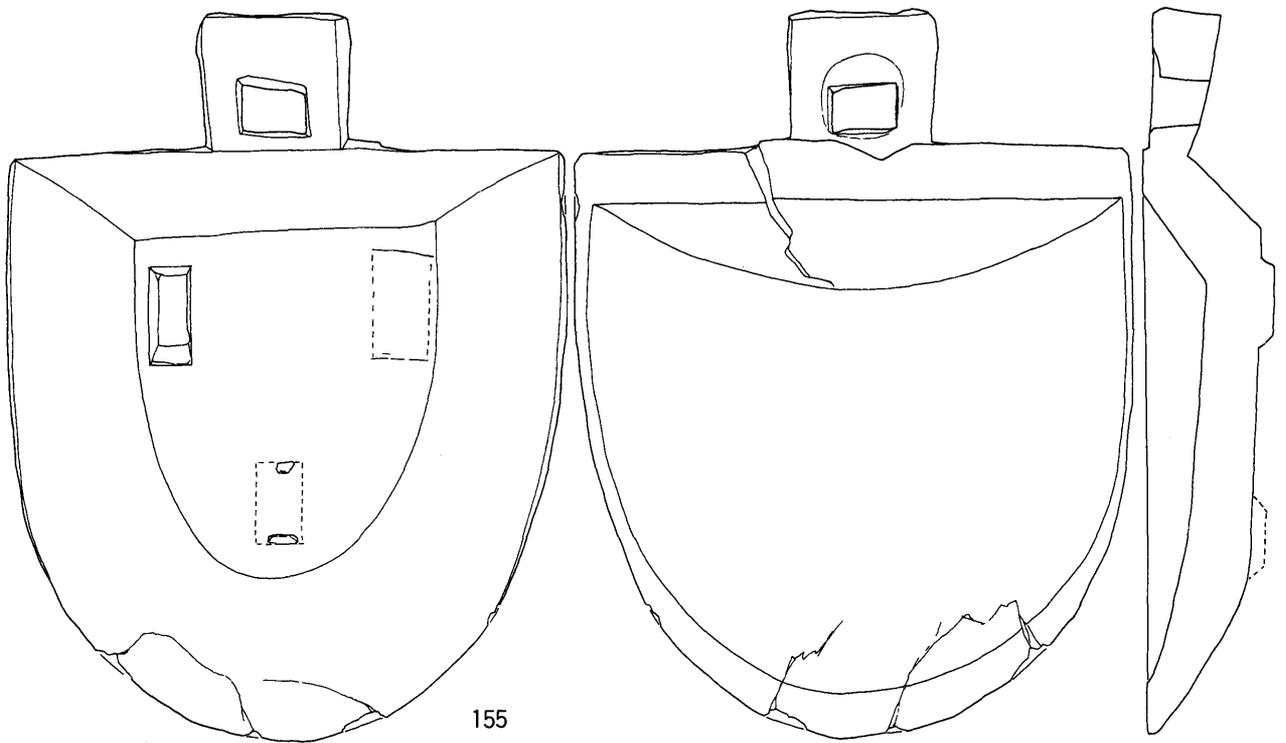
4、建築部材

扉 (148) 片方の軸部が欠損するが、ほぼ完形である。軸部側の側縁が厚くなっており、一本作りである。把手中央部に門穴があり、さらにその下には溝がくり抜かれている。仮に上下関係が正しいとするなら、二個一对の観音開きの扉の向かって左側の扉で、高床等に使用されたものであろう。

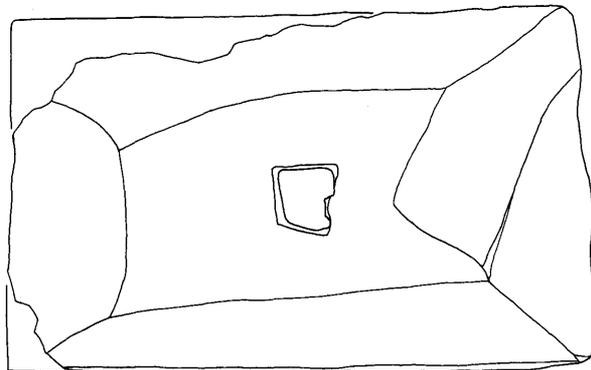
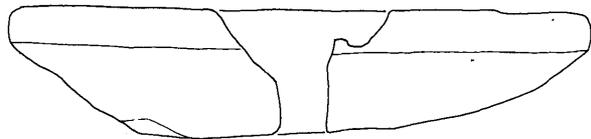
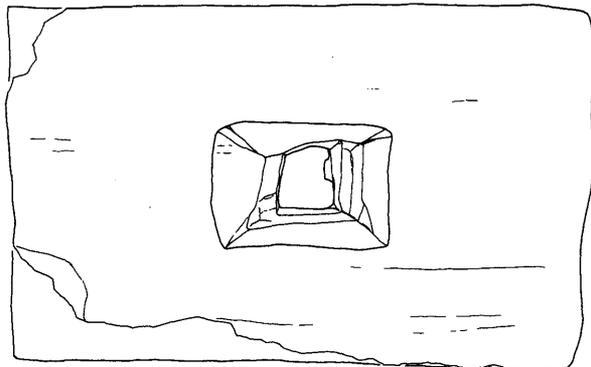
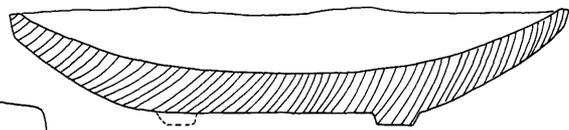
垂木 (179) 上端近くに断面台形状の抉りが残る。上端部も刻まれており、後に杭に転用された可能性がある。



第 I -66 图 A 区大沟出土遗物 (7) (S=1:6)

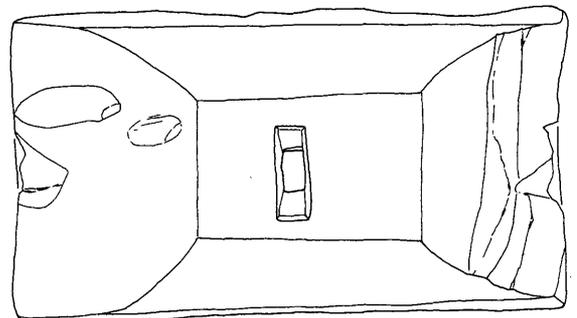
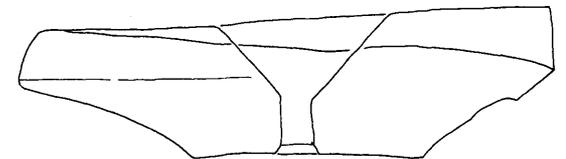
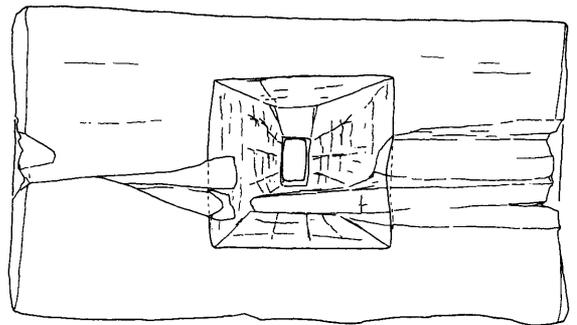


155



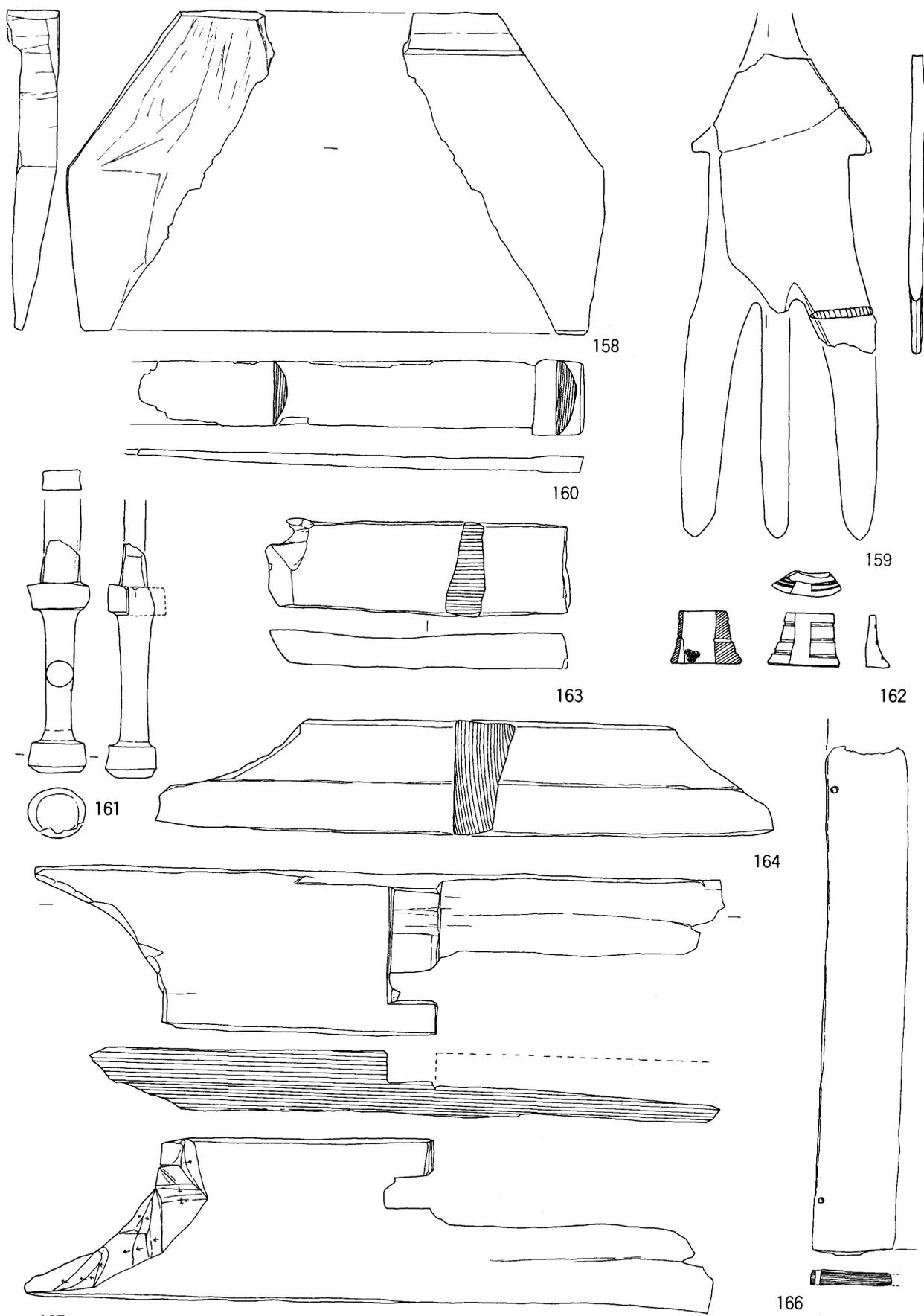
0 20 cm

156



157

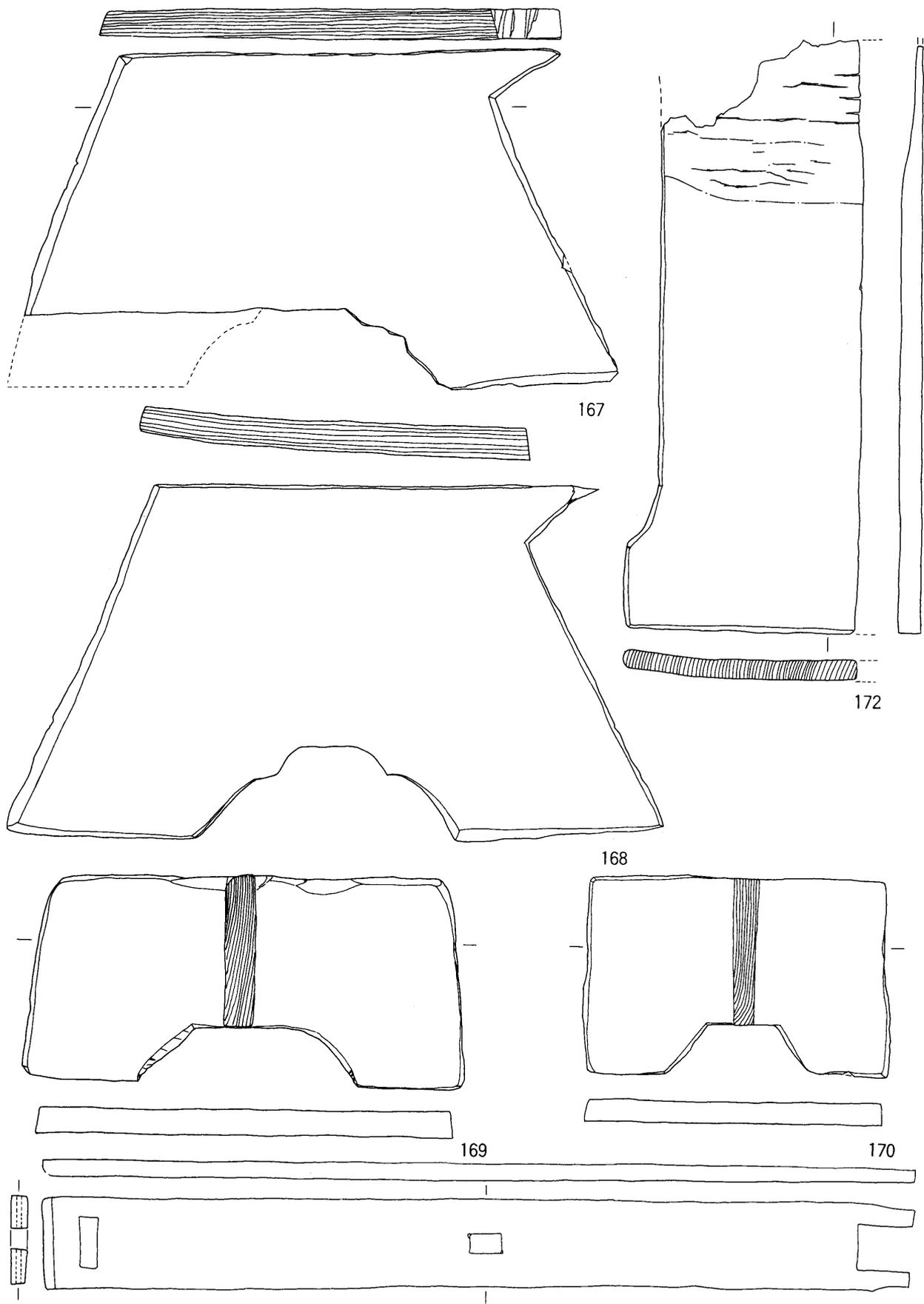
第 I -67 图 A 区大沟出土遗物 (8) (S=1:4)



165

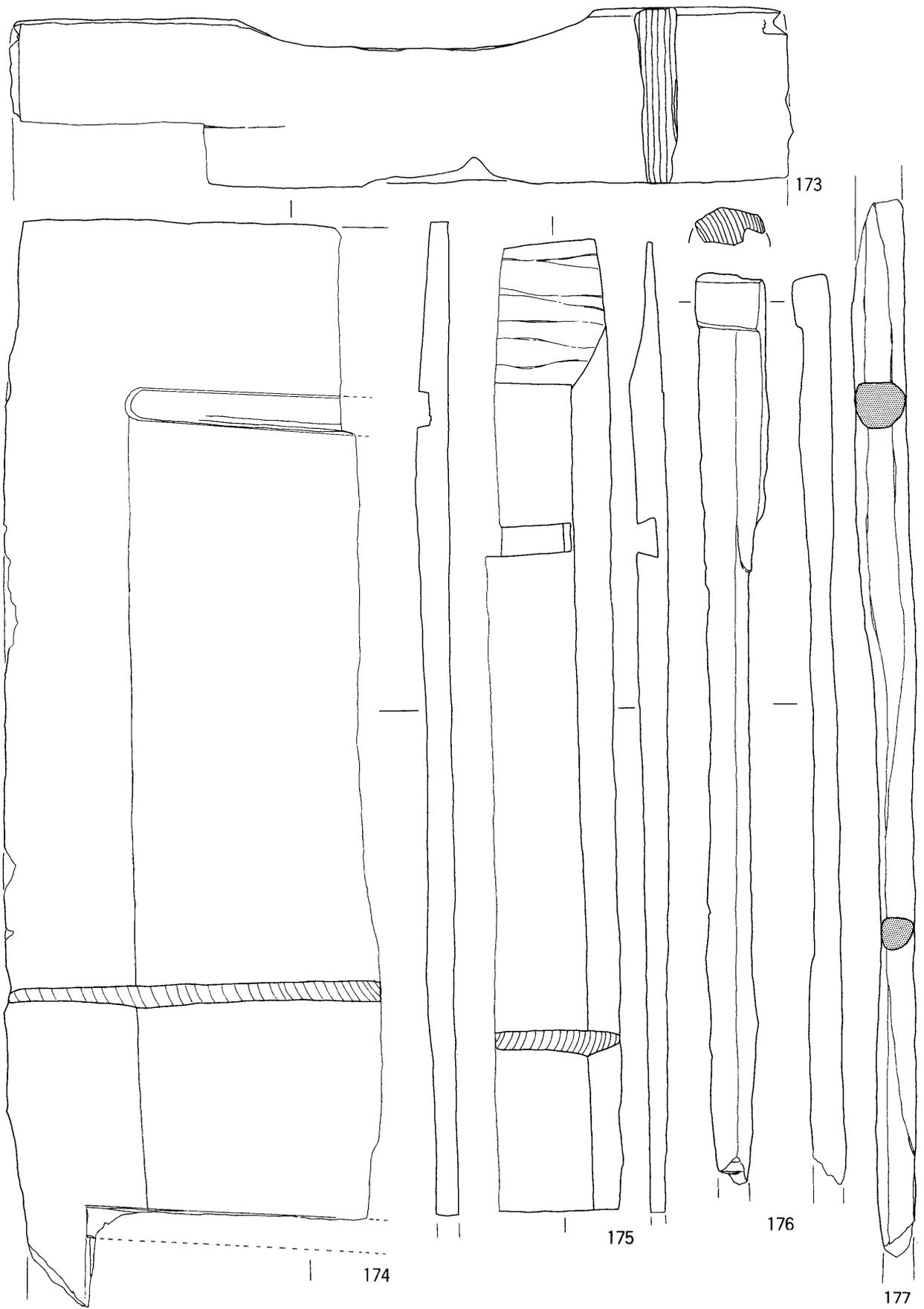
第 I - 68 图 A 区大冢出土遗物 (9) (S = 1 : 4)

0 20 cm



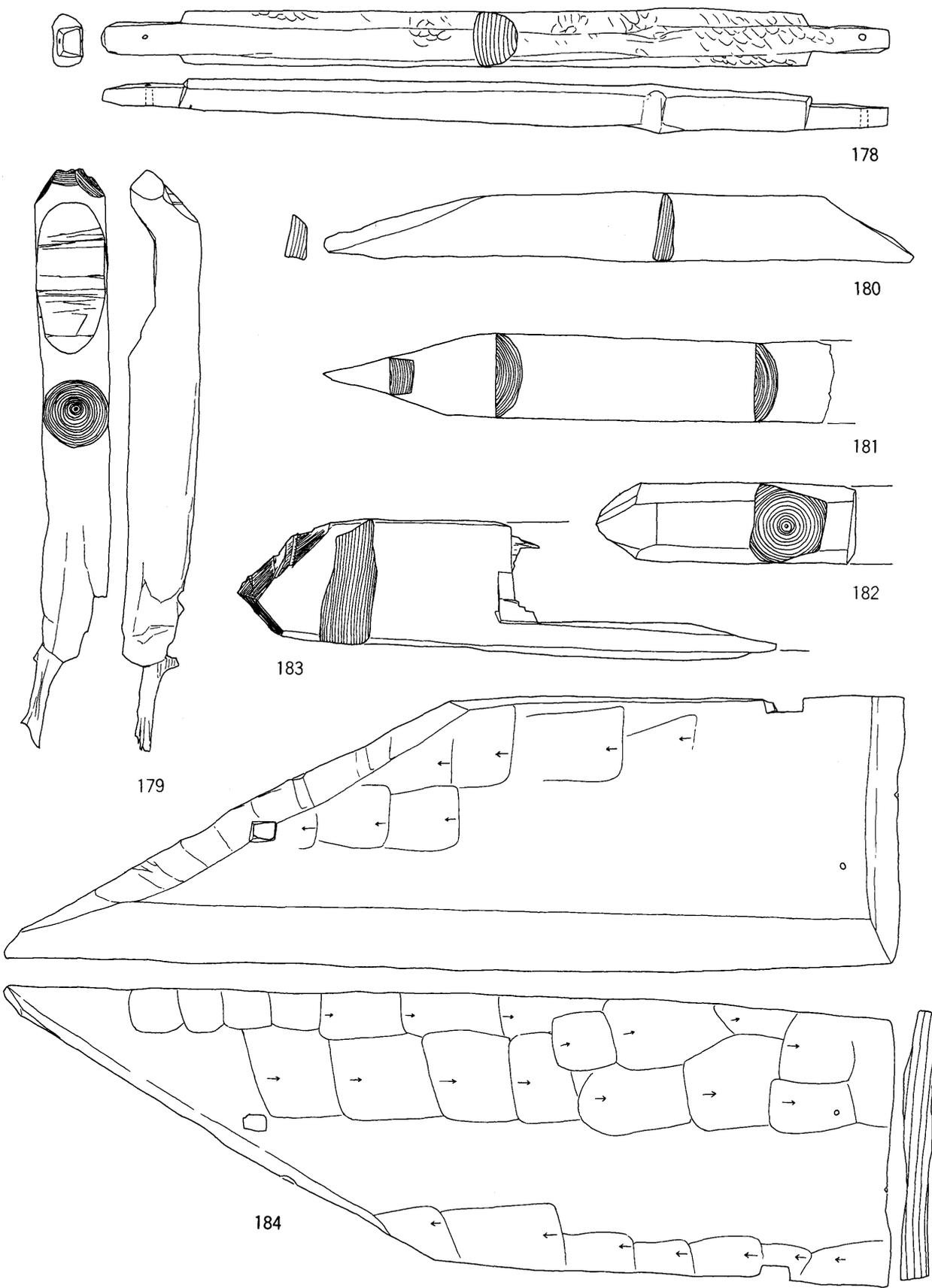
171 第 I-69 图 A 区大溝出土遺物 (10) (S=1:4)

0 20 cm



第 I - 70 图 A 区大冢出土遗物 (11) (S = 1 : 4)

0 20 cm



第 I - 71 图 A 区大沟出土遗物 (12) (S = 1 : 4)

不明部材 (165.183) 積極的にどの部材かはわからないが、大きさや挟りから建築部材である可能性はある。ともに、先端が尖っているのは後に杭として転用されたものと思われる。片側縁より方形の挟りが入っており、別の部材と組み合わせられたことがうかがえる。

5、その他

運搬具? (149~152) 149と150が重なり、その柄穴に151と152が挿入された状態で発見された。151と152は先端部がスケートの板状に反っており、同じ位置に方形の柄穴が二つ開く。150はさらに一個の方形の小孔が開く。木馬状の運搬具の可能性を考えたが、器壁がやや薄く疑問も残る。

挟入角材 (153) 断面長方形の角材で、片短辺の2ヶ所に挟りが入る。先端はスケートの板状に反っており、焼けている。

有溝板 (154) 二条の溝があるが、一条は欠損部分である。溝と溝の間に柄穴が穿たれている。

有孔板 (166.184) 166は片側縁に沿って小さい丸孔が開けられている。184は2箇所の柄孔が見られる。形態的に略台形状をしているのは後に矢板に転用された可能性がある。

有頭棒 (176) やや歪んでいるが半截した材の先端を刻み込み、頭部を作り出している。

棒状木製品 (177) 断面が円形で、農耕具の柄である可能性も考えられるが、両端を欠いており断定できない。

板状木製品 (163~164.180) 163と164はやや厚みがある。用途はわからない。

転用杭 (181~182) 181は丸木を割いた材、182は角材の先端部を尖らせてある。ともに当初は別の用途の材であったものを転用したと思われる。

用途不明木製品 (156~157.171.178) 156と157は同じ種類で、156のほうが磨耗度が進んでいる。側面形は逆台形状を呈し、内側に反っている。上面中央部から穿孔されており幅を狭めながらほぼ中央からは垂直に開く。鼠返しや上野市石山古墳の家形埴輪に線刻されているような斗といった建築部材である可能性や、あるいは全く天地逆となって何らかの台座である可能性もある。171は二箇所柄穴をもつ長方形の板材で、片側短辺は中央に方形の挟りが

入っている。材中央の側縁部から柄穴には木釘が打ち込まれたと思われる小孔が貫通している。178は断面略台形状の棒で、両端部に方形の柄状の突起を削り出しそこに貫通孔を有する。紡績に伴う経巻具もしくは布巻具といった織機である可能性もあるが、わからない。

(2) その他の遺構出土遺物

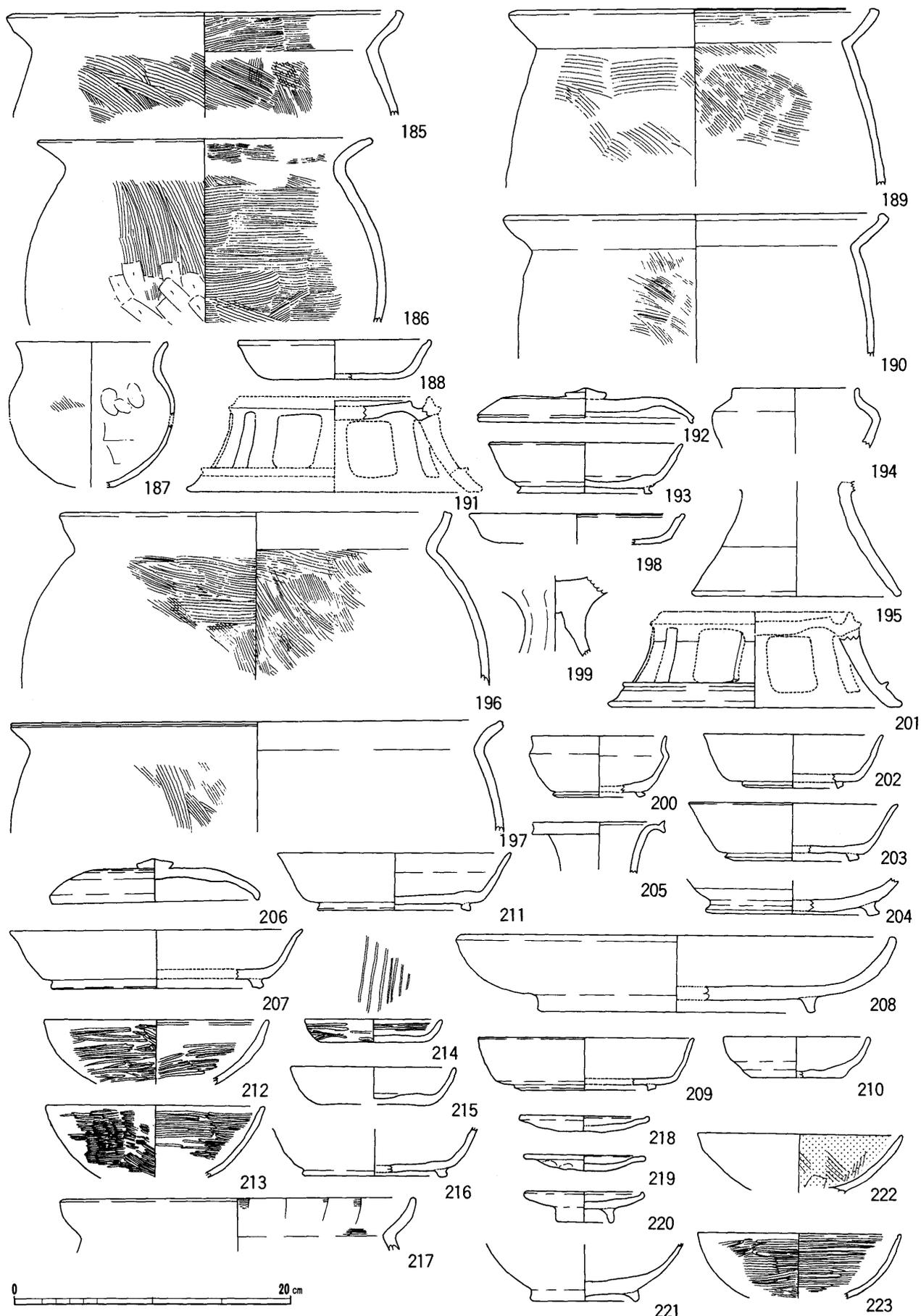
SH1 出土土器 (185~188) 大形甕には、口縁部が外側へ内弯気味に立ち上がり、体部内外面をハケメ調整、口縁部内面をヨコハケする185と、口縁部が外反しながら立ち上がり、体部外面タテハケ後半部をヘラケズリする186がある。188は坏で、口縁部は外側に開き、端部でさらに外側へ屈曲する。奈良時代のものであろう。

SH2 出土土器 (189~195) 大形甕 (189.190) は焼土付近でかたまって見つかった。いわゆる「近江型」甕で、口縁部が外側へ内弯気味に開き、体部をハケメ調整する。191は円面硯で、陸から海の部分が残るが、混入の可能性が高い。192は坏蓋で、つまみ、天井ともに偏平でわずかに内側につき、断面方形でわずかに外側へ開く。194は短頸壺、195は須恵器の脚部である。

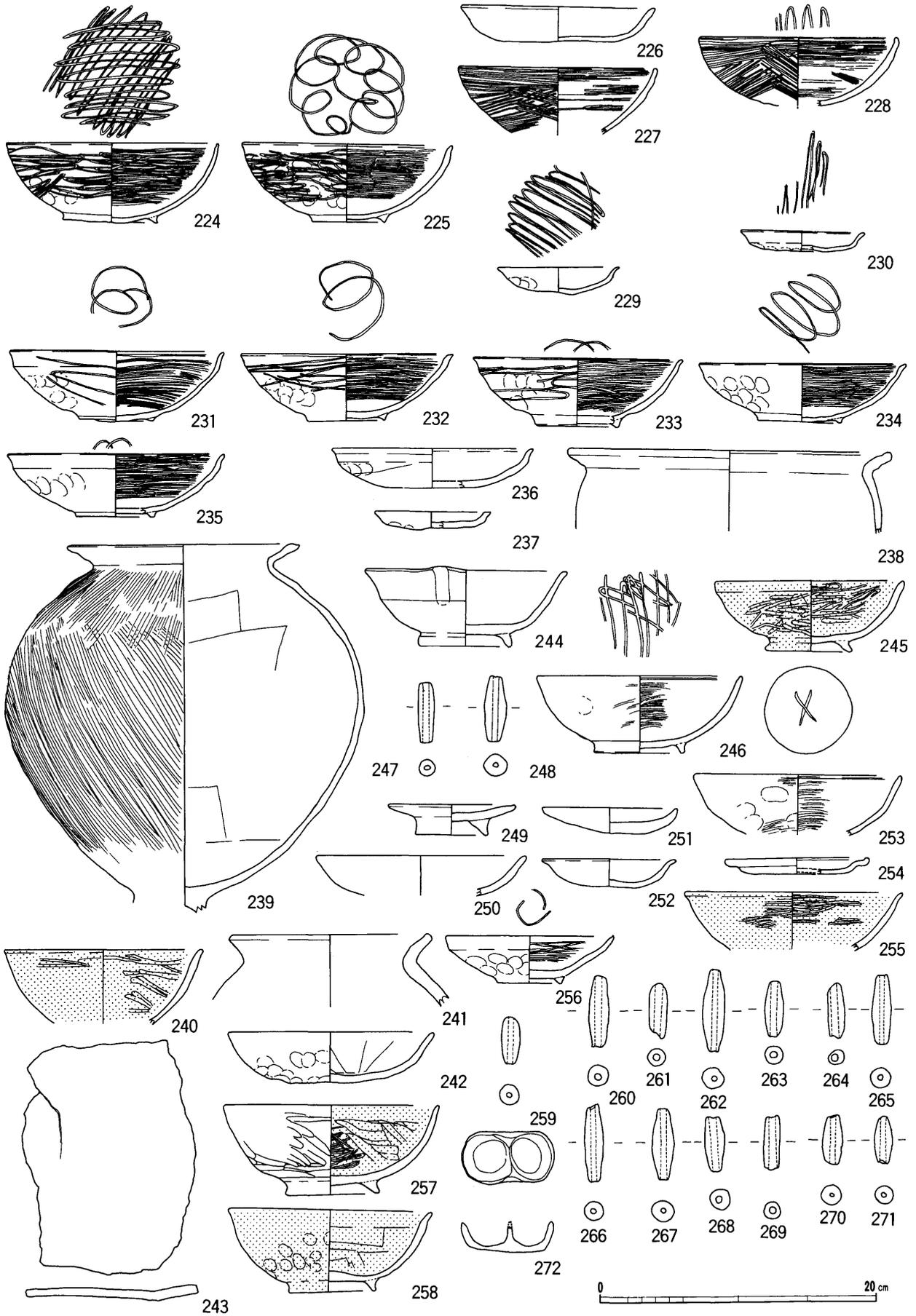
SH3 出土土器 (196~205) 大形甕196はやや丸みをもつ胴部に、外側へ内弯気味に開く口縁部がつくのに対し、197は口縁部が外反し、体部内面をナデ調整する。土師器皿198は、口縁部に緩いヨコナデをもち、端部内面に1条の沈線を有する。199は土師器高坏の脚部で、面取りをする。200は小形の埴で、外側へ開く高台をもつ。201は円面硯の脚部で、方形透かしをもつ。透かしは大小のものが交互に並び、計12穿たれていたものと思われる。202・203は須恵器坏身で、口縁部が外側に開き、端部で外反する。高台は断面方形で、底端部より内側につき、わずかに外側に開く。205は明らかな混入品で、灰釉陶器の壺の口縁部である。

SH4 出土土器 (206~207) 206は須恵器坏蓋で、天井部が笠状で器高が高い。207は須恵器坏身で、口縁部が丸みをもって外側へ立ち上がり、端部で外反する。

Pit1 出土土器 (208~209) 208は土師器台坏大皿で、口縁部は内弯しつつ立ち上がる。



第 I - 72 图 A 区遺構出土遺物 (S = 1 : 4)



第 I - 73 图 A · B 区出土遗物 (S = 1 : 4)

S B 3 出土土器 (210) 須恵器杯で、高台をもたず、底部はナデ調整する。

S B 6 出土土器 (211) 須恵器杯身で、口縁部は直線的に外側へ開き、高台は底端部のやや内側に付けられている。

S B 9 出土土器 (212~214) 212と213は瓦器碗で、沈線が口縁端部よりやや下がったところに施され、器壁は厚手である。214は瓦器皿で、内外面にミガキが施されている。

落ち込み S Z 1 出土土器 (215~217) 216は須恵器杯であり、高台はやや外開きで、底端部よりわずかに内側に入ったところに付く。

S D 2 出土土器 (218~223) 後世の攪乱による溝という性格上、時期的にはまとまらないが、調査区よりも高所から流れてきたものと考えられ、地区外の様子を知るうえで、参考になる。218~220は土師皿、221は山茶碗、222は黒色土器A類、223は瓦器碗である。

S E 2 出土土器 (229~237) 229.230は瓦器皿で、薄いつくりで口縁部はヨコナデされ、底部内面には平行ジグザク暗文を施す。231~235は瓦器碗である。外面のヘラミガキが粗ら(231~235)、もしくは消失して指頭圧痕がのこるもの(234~235)がみられる。236は土師器杯で、口縁部がヨコナデされている。237は土師皿で、口縁上端面にヨコナデによる平坦面をもつ。238は土師器甕で、最終的にナデ調整により仕上げられている。

S E 3 出土土器 (226~228) 226は土師器坏で、薄手でナデ調整する。227.228の瓦器碗は、底部は欠損しているが、厚手で器高が高く、口縁部内面の沈線は明瞭でない。

S K 1 出土土器 (224~225) とともに瓦器碗で器高指数が高く、高台は断面三角状をなすが、224の見込みが格子であるのに対し、225では連結輪状文である。時間的に連続する二つの型式が同一遺構内で共伴した例といえよう。

S K 2 出土土器 (239) 「S字甕」で、台の部分のみがない。内面調整は工具によるナデが施されている。台部は故意に割られたのかもしれない。

包含層出土遺物 (272) 小さな杯状のものが二つ接合された形態をとる。

B 区出土遺物

掘立柱建物柱穴からの出土遺物が中心である。個々の遺物は観察表を参照されたい。

S B 14 出土遺物 (240~243.260) 240は黒色土器B類で、内外面にミガキを施している。243は銅製板である。柱の支えとして使用されたものであろう。241の甕は、体部はナデ調整で、口縁端部がわずかに肥厚する。

S B 15 出土遺物 (253.265) 253は黒色土器B類で、12世紀に比定されよう。

S B 16 出土遺物 (250) 土師器杯で、ナデ調整による。

S B 18 出土遺物 (244) 山茶碗であるが、口縁部に輪花を有し、外反する。底部は糸切り底で、しっかりとした高台が付く。

S B 19 出土遺物 (245~249) 245の黒色土器B類の碗と246の瓦器碗は同じ柱穴から出土している。245は内外面にミガキを施し、底部外面にヘラによる「X」文をもつ。246は風化が激しいが、体部は大きく弯曲しながら立ち上がり、見込みは格子状で、逆台形の高台をもつ。

S B 20 出土遺物 (253~254.261) 253は瓦器碗で、風化が激しい。口縁部内面の沈線は端部よりわずかに下がったところに施されている。254は土師皿で、口縁部が玉縁状になる。

S B 21 出土遺物 (251~252) とともに土師皿であるが、251は厚手で口縁部が内弯するのに対し、252は薄手で口縁部が外反する。

S D 3 出土遺物 (256) 器高が低く、外面のヘラミガキはなくなって指圧痕が顕著で、口縁部内面の沈線が消失したものである。高台部が欠損している。

土錘 (247.248.259~271) B区の掘立柱建物柱穴や包含層を通して15個もの土錘が出土した。単純な形ながら、266のように長細いものから270のようにずんぐりとしたものまでみられる。

包含層出土土器

257は黒色土器A類、258は黒色土器B類で、内外面に捺痕がある。(穂積裕昌)

高賀遺跡 A・B地区出土土器観察表（番号は実測図No.に対応）

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土(mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
1	土師器 壺	大溝南第III層	口径 22.7	口縁部ヨコナデのち不定方向ナデ、外面外部ナデ	～1石英、長石、ウンモ多含	黒褐色	口縁>1/6	二重口縁	29-3
2	〃	大溝南井関2連	口径 12.2	口縁部ヨコナデ、頸部内面イタナデ	～1石英、長石、ウンモ多含	淡黄～にぶい黄褐色	口縁のみ残	〃	47-2
3	〃	大溝北第III層	口径 16.4	口縁部ヨコナデ、外面体部ハケメ内面体部ユビオサエのちケズリ	～3石英、長石多含	外一灰黄褐色 内一灰褐色	口縁>1/2	〃	26-1
4	〃	大溝北第II層	口径 18.7	外面体部タタキ後ハケメ内面体部ハケメ?	～4の石英、長石、ウンモ多含	外一橙～褐色 内一淡褐色	口縁>1/4		1-1
5	〃	大溝北第II層	口径 16.4	外面体部タタキ後ハケメ内面体部ナデ	～3小石多含	外一褐灰色 内一黄褐色	体下半欠	体部上方刺突	9-1
6	〃	大溝北最下層	口径 13.4	口縁部ヨコナデ体部ハケメ、頸部内面ユビ層	密～1石英、長石多含	明褐灰色	口縁>1/2		3-1
7	〃	大溝南第III層	口径 12.4	口縁部ヨコナデ外面体部ハケメのちヘラミガキ	～1石英、長石多含	褐色	1/6	体部下方 黒斑あり	40-1
8	〃	大溝南第III層	口径 17.2 高さ 28	口縁部ヨコナデ外面体部ハケメ、内面体部イタナデ	～1石英、長石少含	灰白色	1/6		37-1
9	〃	大溝北第II層	口径 12.2	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ	粗～3石英、長石多含	にぶい橙色	口縁>1/2	黒斑あり	10-1
10	〃	大溝南井関2下	口径 14.4	外面口縁から頸部ミガキ外面体部ハケメ	～2石英、長石、ウンモ多含	灰色～褐灰色	口縁>1/2	口縁歪み	44-1
11	〃	大溝北第II層	口径 13.6	頸部ヘラミガキ外面体部ハケメ	～3石英、長石多含	橙色	口縁>1/2		10-3
12	〃	大溝南第II層	口径 9.0 高さ 12.4	外面頸部から体部ミガキ底部ユビオサエのちミガキ	～2石英、長石、ウンモ多含	褐色	ほぼ完	胴部に焼成 前穿孔あり	38-1
13	〃	大溝南井関2下第III層	口径 11.0	内外面口縁から頸部ハケメのちミガキ	～1.5石英、長石、ウンモ多含	明褐灰～褐灰色	口縁のみ残		44-2
14	〃	大溝北第II層	口径 7.5 高さ 15.2	外面ミガキ、体部上方クンガキ	～3石英、長石、ウンモ多含	橙褐色	口縁一部欠		22-1
15	土師器 小形壺	大溝南第II層	口径 12.2 高さ 12.6	口縁部ヨコナデ、内面体部ユビオサエ	～1石英、長石、ウンモ多含	淡黄～黒褐色	ほぼ完	内面に炭化物 穿孔あり	31-2
16	〃	大溝南第II層	口径 10.0 高さ 13.6	口縁部ヨコナデ、外面体部タテハケ、内面体部イタナデ	粗～3石英、長石、ウンモ多含	外一暗褐色 内一淡黄褐色	口縁一部欠		52-3
17	〃	大溝南	口径 11.2	口縁部ヨコナデ外面体部イタナデ	～2.5石英、長石、ウンモ多含	黄褐～淡褐色	1/6		41-1
18	〃	大溝南	口径 13.2 高さ 11.8	口縁部ヨコナデ体部イタナデ	～2石英、長石、ウンモ多含	淡黄～灰黄色	口縁1/2欠	外面に炭化物が付着?	43-2
19	〃	大溝南第III層	口径 9.9 高さ 10.5 7.0	口縁部ヨコナデ外面体部オサエ内面体部ナデ	～2石英、長石多含 6.0の小石有	淡黄～にぶい褐色	完形		36-1
20	〃	大溝南	口径 10.0 高さ 7.25	口縁部ヨコナデ、口縁内面イタナデ、体部ナデ	～1.5石英、長石少含 4.0の小石	外一黒褐色 内一褐灰色	1/6		7-3
21	〃	大溝南イゼキ2東	口径 7.4	口縁部ヨコナデ、外面体部上部オサエ、下部イタナデ、内面体部ナデ	1長石、石英、雲母多含 4.0の小石	灰黄色	口縁1/2欠	全体に歪み大	47-4
22	〃	大溝南土	口径 9.6 高さ 10.1	口縁部ヨコナデ、口縁内面ヨコナデ後オサエ、体部ナデ	密～0.5雲母、石英、長石	外一黒褐色 内一にぶい褐色	口縁若干欠		33-2
23	〃	大溝南イゼキ2下	口径 9.7 高さ 7.5	口縁部横ナデ、外面体部ナデ内面体部ケズリ	1石英、長石多含 金雲母多含	にぶい褐～黒褐色	口縁一部欠	黒斑あり	13-4
24	〃	大溝南イゼキ2東	口径 11.0	口縁部ヨコナデ、口縁内面ハケメ。外面体部おさえ、底部イタナデ	～2長石、石英、雲母多含	にぶい黄褐色	1/6		47-6
25	〃	大溝南第III層	口径 10.8	口縁部ヨコナデ、外面体部と内面体部上部イタナデ、内面体部下ナデ	～2.5石英、長石、金雲母多含	外一黒～褐～黄灰色 内一黒色	1/6	黒斑あり	42-2
26	〃	大溝南第II層	口径 7.4 高さ 8.1	口縁部ヨコナデ内面体部指オサエ後ナデ	粗～5石英、長石	灰白色	完形	口縁反転	20-2
27	ミニチュア 土器	大溝北第II層	口径 5.0 高さ 5.45	口縁部ヨコナデ外面体部オサエ内面体部ナデ	0.5長石、雲母多含	外一灰黄色 内一灰黄～暗灰色	口縁若干欠	手づくねによる	15-2
28	〃	大溝南第III層	口径 9.0 高さ 9.95	口縁部ヨコナデ体部ナデ	～2.0雲母、長石、石英	灰黄褐色	口縁1/2欠	口頸部外面に黒斑らしきものあり	7-5
29	〃	大溝南第III層	口径 8.0 高さ 6.35	口縁～内面体部ナデ外面体部オサエ	～2.5石英、長石多含	灰黄褐～黒褐色	1/6	外面体部二次焼成痕あり 手づくねによる	14-4
30	〃	大溝南第III層	口径 6.4 高さ 7.8	外面体部オサエ、外面底部ケズリ内面ナデ	～2.0石英、長石、雲母多含	明褐灰～黒褐色	1/6	口縁少し歪み	14-2
31	〃	大溝南第III層	口径 7.4 高さ 8.7	口縁部ヨコナデ、外面体部オサエ内面体部ナデ	0.5雲母多含	明褐灰色	1/6 口縁は一部残	へら描あり 全体に歪み大	14-1
32	〃	大溝南第III層		口縁部ヨコナデ、体部ナデ底部オサエ	～2.0長石、石英多含 5.0の小石	灰褐一部灰赤色	1/2	棒状工具によるあたりが一部あり	15-1
33	〃	大溝南イゼキ2東		口頸部ヨコナデ体部ナデ	～1.5長石、石英、雲母多含	橙～にぶい黄褐色	体部のみ残存		47-5
34	〃	大溝北第II層		口頸部ヨコナデ外面体部ケズリ後ナデ内面体部ナデ	～2.0石英、長石、雲母多含	灰黄橙～赤褐色	体部のみ残存		14-5
35	〃	大溝南第II層	口径 6.4 高さ 5.9	口縁部ヨコナデ体部ナデ	～1.0石英、長石、金雲母多含	灰褐色	口縁部以外完形	手づくねによる	34-2
36	土師器 小形壺	大溝北第II層		口縁部ヨコナデ外面体部ハケ後ナデ内面体部ナデ	1.0長石、石英多含 3.0小石少量多含	灰黄色	体部1/6 口縁一部残存	黒斑あり 粘度接合痕あり	14-6
37	〃	大溝南イゼキ2東		外面体部上部ハケ目下部ケズリ内面体部上部オサエ下部ナデ	～1.0長石、雲母	外一黄灰～灰色 内一暗灰色	体部のみ1/6	内面底部に半円の工具の当たりあり	47-3

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
38	土師器 小形 ミニ チュア土器	大溝北第Ⅱ層		口頸部ヨコナデ、外面体部オサエ 内面体部ナデ	～2.5長石、雲母多 2.0の赤色砂粒含	褐灰～黒褐色	体部のみ $\frac{1}{2}$		14-3
39	小形てづく ね土器	大溝南第Ⅱ層	口径 4.2 高さ 4.4	口縁部～外面体部ナデ・オサエ。内面 体部器具によるナデ後ナデ・オサエ	密～0.5 雲母多	橙色	$\frac{1}{2}$ 口縁は一部残		54-2
40	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 3.4 高さ 2.9	口縁～外面オサエ 内面ユビオサエ	密～0.5長石、金雲母含	灰黄褐色	完形		19-3
41	土師器 壺	大溝北第Ⅱ層	口径 16 高さ 35.7	口縁部ヨコナデ外面体部タタキ 内面体部ナデ	粗～5 長石・石英、雲母 含	外～にぶい橙色 内～褐灰色	完形	口縁部反転	4-1
42	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 13.4	口縁ヨコナデ 外面タタキ、内面オサエ・ナデ	長石の微粗粒を含む ウンモ含	灰白色	$\frac{1}{2}$ (口縁 $\frac{1}{2}$)	頸部～体部 所々に煤付着	19-5
43	〃	大溝南イゼキ2	口径 15.6	口縁ヨコナデ 外面タタキ内面板ナデ	～1mmの石英・長石を多く 含む。ウンモをやや多く含 む	橙～黒色	$\frac{1}{2}$ (口縁 $\frac{1}{2}$)	外面煤付着	49-4
44	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 13.4	外面細タタキ後ハケ 内面ヘラケズリ	0.5～2mmの長石・石英を 含む	外～灰褐色 内～灰色	体上部 $\frac{1}{2}$ (口縁端 部欠)	外面 煤付着	
45	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 15.6	外面細タタキ後ハケ 内面ハケ・フデ	1～3mmの長石・石英・ウ ンモを含む	灰黄色～灰黄褐色	$\frac{1}{2}$	外面煤付着	17-3
46	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 16.4 高さ 27.3	口縁ハケ・ヨコナデ 外面タタキ後ハケ・内面ハケ・フデ	1～3mmの長石・石英・ウ ンモを多く含む	灰黄褐色～灰黄褐色	ほぼ完形	外面 煤付着 内底部炭化物付着	6-1
47	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 10.2 高さ 15.6 底径 8.3	外面タタキ後ハケ 内面ナデ	0.5～2.5mm、7mmの石英・ 長石・ウンモを含む	淡褐色・黒斑あり	完形	方に黒斑	21-1
48	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 12.3 高さ 15.5	外面タタキ後ハケ 内面ハケ・ナギ	0.5～3mmの石英・長石・ ウンモを多く含む	黄灰白色～褐色	ほぼ完形 (口縁 $\frac{1}{2}$ 欠損)		22-2
49	〃	大溝南しがらみ第 Ⅱ層	口径 17.0	外面タタキ後ハケ 内面ハケ板ナデ	0.5～2mmの長石を含むウ ンモ含む	にぶい褐色	底部欠		11-1
50	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 6.6 高さ 22.8 底径 4.5～5	外面タタキ後ハケ 内面ナデ板ナデ	～4mmの長石・石英を多く 含む。0.5～1mmのウンモ を含む	淡黄褐色～橙色 外面下部褐灰色	$\frac{1}{2}$ 口縁わずか	外面タタキの上に ハケ目	16-1
51	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 17.6 高さ 23.2	受け口口縁に刺突 外面タテハケ内面オサエ・タテハケ	0.5～2.5mmの長石・石英・ ウンモを含む	淡褐色～褐色	完形	肩はヨコハケ	5-1
52	〃	大溝南イゼキ2下	口径 14.5	口縁ヨコナデ口縁外面及び外面体部肩 に刺突文、外ハケ内ナデ	0.5mm程の長石・ウンモを 含む	外面～明褐色～黒 褐色 内面～灰黄色	口縁 $\frac{1}{2}$	外面炭素吸着	44-3
53	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 17.0	口縁ヨコナデ、口縁外部刺突 外面ハケ、内面ナデ	～1mmの長石・石英を多く 含む ウンモを含む	灰褐色 内面黒褐色	$\frac{1}{2}$		29-2
54	〃	大溝南	口径 15.6	口縁ヨコナデ外面ハケナデ、内面オサ エ板ナデ	0.5～2.5mmの長石・石英・ ウンモ含む	暗褐色	底部欠 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口縁の一部に炭素 付着	38-2
55	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 19.4 高さ 15.6	口縁ヨコナデ 外面内面ナデ	1～2mmの長石・石英 赤色粒を含む	にぶい橙色～明赤褐 色 黒斑あり	完形	底部 ϕ 5.2の穴	30-1
56	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 15.4	口縁ヨコナデ 外面ハケ内面板ナデ	1～3mmの長石・石英・ウ ンモを多く含む	灰黄褐色	口縁 $\frac{1}{2}$	外面煤付着	17-2
57	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 17.2	口縁ヨコナデ口縁内面ハケ 外面ハケ内面ナデ、オサエ	1～3mmの長石・石英を多 く含む	灰褐色 外面一部黒色	口縁 $\frac{1}{2}$	口径不確定	51-1
58	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 16.6	口縁ヨコナデ 外面ハケ内面板ナデ	～0.5mmの石英・長石を含 む ウンモを多く含む	にぶい橙色	$\frac{1}{2}$	外面煤付着	49-3
59	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 10.4	口縁ヨコナデ外面ハケナデ内面板ナデ	0.5～1mmの長石を含む ウンモを若干含む	外面～黄灰色 内面～褐灰色	口縁 $\frac{1}{2}$	口縁歪	30-2
60	土師器 小形 (小形)	大溝南第Ⅲ層	口径 11.4 高さ 9.9	口縁ヨコナデ外面ハケ板ナデ内面板ナ デ	1～2mmの長石・石英・ウ ンモを多く含む	橙色～黒褐色	口縁わずかに欠 ほぼ完形	外面煤付着 調整不鮮明	35-2
61	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 10.4 高さ 11.7	口縁ヨコナデ外面ミガキ、ナデ 内面板ナデ	0.5～2mmのチョウ石含	外面～灰白色部分暗 灰色 内面～暗灰口 縁灰白色	口縁 $\frac{1}{2}$		12-4
62	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 11.7 高さ 14.7	口縁ヨコナデ外面ナデ 内面ナデ板ケズリ	0.5～2mmの長石・石英・ ウンモを多く含む	淡褐色～淡黄色橙色	口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	肩に黒斑あり	39-1
63	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 13.8	口縁ヨコナデ 外面タタキ、ナメハケ内面ナデ	1～2mmの石英・長石を多 く含む	淡黄灰色～灰褐色	口縁 $\frac{1}{2}$	外面煤付着	17-1
64	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 13.8	口縁ヨコナデ 内外面ハケ	2mm程の長石・石英を多く 含む ウンモを若干含む	暗褐色 内面にぶい褐色	$\frac{1}{2}$		8-2
65	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 12.8	口縁ヨコナデ、ハケ 外面ハケ目内面ナデ	～2mmの長石・石英を多く 含む。ウンモを含む	灰白色	$\frac{1}{2}$ 口縁 $\frac{1}{2}$	脚付か?	19-1
66	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 13.3	口縁ヨコナデ外面ナデ タテハケ内面ナデ	0.5～2.5mm (最大5mm) の 長石・石英を多く含む	外面～淡褐色～黄灰 色 内面～褐色	頸部付近で90%ほ どまわるが、口縁 は1cm残る		41-2
67	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 13.6	口縁ヨコナデ外面タテハケ ヨコハケ内面板ナデ	0.5～2mm(最大3mm)の長石・石 英・黒ウンモ・花崗岩粒を含む	暗褐色 一部黒褐色	$\frac{1}{2}$	外面調整 不明瞭	2-1
68	土師器 鉢	大溝北第Ⅱ層	口径 10.2 高さ 16.2 右径 4.6	口縁ヨコナデ外面ハケ底ナデ 内面ハケ・ヘラミガキ・板ナデ	2～3mmの長石・石英を多 く含む	灰白色～淡橙色	$\frac{1}{2}$ 口径 $\frac{1}{2}$	底部に径1.2cm穿 孔	10-4
69	土師器 鉢	大溝北第Ⅱ層	口径 17.2 高さ 10.8	口縁ヨコナデ外面ミガキ・ハケ 内面板ナデ	1mmの長石・石英を多く含 む ウンモを含む	にぶい黄褐色 外面に黒斑	$\frac{1}{2}$ 口径 $\frac{1}{2}$	底部径1.2cm 内から外へ穿孔	33-1
70	土師器 鉢	大溝南第Ⅱ層	口径 8.2 高さ 5.5	口縁ヨコナデ外面ハケナデ 内面板ナデ底面ナデ	0.5～1mmの長石・石英・ ウンモを含む	灰黄褐色	口縁端部以外はほ ぼ完形		34-1
71	土師器 鉢	大溝南第Ⅱ層	口径 11.8 高さ 5.4	口縁ヨコナデ内外面ミガキ ナデ底面ナデ	0.5～2mmの長石・石英・ ウンモを含む	外面～にぶい褐色 内面～明褐色～褐 色	口縁部以外完形	ミガキは不明瞭	34-3
72	土師器 鉢	大溝南第Ⅲ層	口径 19.6 高さ 8.3	口縁ヨコナデ外面ヘラミガキ 底面ナデユビオサエ内面工具ナデ	1～2mmの長石を含む	にぶい褐色 黒斑あり	底部欠	底部に放射状の圧 痕あり	28-2
73	土師器 鉢	大溝北第Ⅱ層	口径 33.2	口縁ヨコナデ外面板ナデ・ナデ 下半分ケズリ内面工具ナデ	0.5～2mmの長石・石英・ ウンモを含む	淡褐色	$\frac{1}{2}$		25-1
74	土師器 碗	大溝	口径 12.65	口縁ヨコナデ外面板ナデ ユビオサエ・ナデ・内面板ナデ	3mm程の小石を含む 0.5～1.5mmの長石・石英・ ウンモを含む	黄褐色	$\frac{1}{2}$	黒斑あり	41-4

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
75	土師器碗	大溝北	口径 3.0 高さ 5.2	口縁ヨコナデ外面ハケナデ内面工具ナデ	1mm程の長石・石英を含む	にぶい橙色～灰褐色	ほぼ完形		28-1
76	土師器碗	大溝北第III層	口径 13.0	口縁ヨコナデ外面オサエナデ内面ナデ	1～2.5mmの長石・ウンモを多く含む。4mmの小石混る	黄灰色	1/4口縁端部残存わずか		27-2
77	土師器碗	大溝南第II層	口径 9.0 高さ 6.1	口縁ヨコナデ内外面工具ナデ	1～1.5mmの長石・石英を多く含む。3mm前後の長石	淡黄色～橙色 口縁端部一部黒色	1/6	歪あり	32-1
78	土師器碗	大溝南第II層	口径 12.4 高さ 7.8	口縁ヨコナデ外面オサエナデ内面工具ナデ底面ケズリ	0.5mm前後の長石・石英・ウンモを含む 1.5～3.0mmの長石・石英を含む	外面-淡黄色 内面-黒色	1/6	歪あり	31-3
79	土師器碗	大溝北第III層	口径 12.0 高さ 5.4	口縁ヨコナデ外面オサエケズリ内面工具ナデ	0.5mm程の長石・ウンモを少量含む	灰褐色	1/6	歪あり	27-4
80	土師器碗	大溝北第III層	口径 11.6 高さ 5.4	口縁ヨコナデ外面ケズリ内面ナデ?	0.5～1.5mmの長石 0.5mm程のウンモを含む	灰褐色	1/2	内外面磨耗のため調整不明	27-1
81	土師器碗	大溝南第III層	口径 10.2 高さ 5.75	口縁ヨコナデ・外面ナデ内面ナデ	0.5～2mmの長石・石英・ウンモを多く含む	外面-にぶい橙色～褐色 内面-にぶい黄褐色～黒色	1/6	表面刻彫のため調整不明	50-3
82	土師器碗	大溝	口径 11.2 高さ 5.15	口縁ヨコナデ外面のユビオサエ ナデ内面ナデ	0.5～3mmの長石・石英・ウンモを含む	黄褐色	1/6		41-3
83	土師器碗	大溝南表採	口径 14.4 高さ 5.6	口縁ヨコナデ体部ナデ	～2石英、全雲母、長石含	褐色	ほぼ完形 口縁一部欠		39-2
84	土師器器台	大溝北第II層		ヨコナデ	～2長石等含	淡橙色	脚部の一部のみ		
85	土師器高杯	大溝南第III層	底径 75.6	外面ヨコナデ内面布痕?	密 雲母微粒含	淡橙色	脚部1/6		
86	"	大溝南第III層		内外面 ヨコナデ	密 雲母・長石・石英	淡灰色	脚部の一部のみ		
87	"	大溝北第II層	口径 22.8 底径 16.4 高さ 17.2	杯部浄文、波状文、沈線脚部ナデ、刺突、穿孔、波状文	～2.0長石、石英含 赤色斑粒、黒雲母若干含む	淡黄褐色	口縁部1/6	加飾高杯	48-1
88	"	大溝北第III層	口径 12.2 底径 7 高さ 15.2	杯部口縁ヨコナデ体部ヘラミガキ脚部ヘラミガキ	～2.0石英、長石、多含 金雲母含	外-橙色 杯部内面-にぶい橙色	ほぼ完存		18-4
89	"	大溝北第II層	口径 17.4 底径 12.5 高さ 13.7	口縁部ナデ外面一杯部内面ミガキ脚部内面ナデ	～2.5石英、長石、金雲母含	黄褐～暗褐色	口縁1/4欠 脚部1/6残存	脚部に穿孔あり	21-2
90	"	大溝北第II層	口径 11.4	全面ミガキ、脚部一部ナデ	～3.5石英、長石、雲母多含	淡黄褐色	杯部のみ1/6	脚部に穿孔あり	23-1
91	"	大溝北第II層		外面～杯部内面ヘラミガキ脚部内面ナデ	～3石英、長石やや多含 金雲母含	にぶい橙色	1/6	脚部に穿孔あり	18-2
92	"	大溝北第III層	口径 18.2	口縁部ヨコナデ体部ミガキ	～1.0長石、雲母含	明褐色～灰褐色	杯部のみ残存	内・外面に黒斑あり 口縁歪みあり	7-2
93	"	大溝北第III層	底径 14.6	外面ヘラミガキ内面ハゲ目後ナデ	0.5長石含 微細金雲母若干含	灰白色	脚部のみ残存	外側から穿孔	33-4
94	"	大溝南第II層	口径 14.0	口縁部ヨコナデ体部ナデ	～1.5長石、石英含	灰褐色	杯部のみ1/6		31-4
95	"	大溝南第III層	口径 27.0	口縁部ヨコナデ体部ミガキ	1.0長石、石英若干含 4.0の石英1粒あり	灰黄色	杯部のみ口縁30%		20-3
96	"	大溝北第II層	底径 13.8	外面ミガキ内面ミガキ後ナデ	～2.0砂粒含 長石、雲母含	淡黄橙～灰褐色	脚部のみ裾部1/4欠	三方透孔あり 粘度剥離痕あり	16-2
97	"	大溝表採	底径 11.8	外面ミガキ後、ケン描横線、上からクン刺突、内面ミガキ	1.0 長石、石英	淡赤橙～橙色 断面黒褐色	脚部のみ	三方透孔あり クン刺突に至みあり	77-2
98	"	大溝南シガラミ第II層	底径 14.8	外面ナデ内面ナデ(?)ナデ	～1.0石英、長石多含 金雲母含	明褐色	脚部のみ裾部1/6		24-2
99	"	大溝南イセキ2東	口径 16.5	杯部外面ヨコナデ二次調整の指圧痕内面ミガキ脚部ケズリ	砂質 微細粒含 2.0長石含	外-明褐色～橙色 内-橙～にぶい橙色	杯部1/6	杯部内面に輪をえがくようなミガキ	47-1
100	"	大溝南第III層	口径 18.2	口縁部ヨコナデ杯部ナデ	～1.5長石、石英、雲母多含	灰橙～灰黄褐色	杯部のみ1/6		35-5
101	"	大溝南第III層	口径 18.6	口縁部ヨコナデ内面上部ハゲ目内面下部ナデ外面ナデ	～2.0長石、石英多含	灰黄橙～灰黄褐色	杯部のみ1/6		35-4
102	"	大溝南第III層	口径 16.2 底径 9.4 高さ 11.6	外面、内面ともナデり端部ヨコナデ	～2.0長石、石英含 金雲母含	にぶい橙色	完存	杯部反転復元	28-3
103	"	大溝南第II第III層	口径 22.2	杯部外面ナデ? 杯部内面ナデ	～1.5長石、長石含	淡褐色	杯部のみ1/6	外面剥離著しい	53-2
104	"	大溝南第III層	口径 15.9	杯部ナデ杯部外面下部ケズリ	～1.0長石、石英、雲母含。 2.0～2.5長石、石英多含	灰褐色	杯部のみ60%		35-1
105	"	大溝北第II層	口径 22.6 底径 14.2 高さ 15.9	杯部横ナデ脚部ナデ	～3.0石英、長石含 微細金雲母含	灰白～橙色	70%	杯部に黒斑あり	24-1
106	"	大溝南第III層	口径 24.0	外面、内面ともナデ	～2.0石英若干含 金雲母含	にぶい褐色	杯部のみ40%		34-4
107	"	大溝南第III層	口径 24.6	口縁部～内面イタナデ後ヨコナデ外面イタナデ	～1.5石英、長石含 1.5の赤色砂粒(くざれ礫?)	淡黄褐色	杯部のみ口縁1/6		53-1
108	"	大溝南第III層	口径 17.2	口縁～内面ナデ外面オサエ後ナデ	～2.5長石、石英、雲母多含	灰黄色	杯部のみ1/6	口縁歪み大	36-2
109	土師器高杯	大溝南イセキ2	口径 16.9	杯部ナデ杯部外面下部オサエ 脚部ナデ	～3.0長石、石英多含 1.0 雲母含	灰白～灰黄色 杯部内面-暗灰黄色	80%	全体に歪み表面荒れている	43-1
110	"	大溝南第II層	口径 15.4	杯部内面～口縁部ナデ杯部外面下部オサエ	～2.0長石、石英、雲母多含	にぶい黄褐色	杯部のみ1/6		50-5
111	"	大溝北	口径 15.2	口縁部ヨコナデ体部ナデ	1.0 長石、雲母 2.0小石少量	外-橙～灰白色 内-淡赤褐色	杯部のみ残存	黒斑、粘度接合痕、口縁歪みあり	7-1

No.	器 種	遺 構 (地区)	法 量 (cm)	調 整・技 法 の 特 徴	胎 土 (mm)	色 調	残 存 度	備 考	実測 No.
112	土師器高杯	大溝北第Ⅲ層	口径 17.5	杯部ヨコナデ 杯部外面下部ケズリ	～3.0長石、石英含 5.0の小石含	褐灰色	杯部のみ80%		35-3
113	〃	大溝南第Ⅲ層	底径 10.8	脚部ナデ 杯部内面底部ナデ	やや砂質 金雲母若干含	にぶい橙色	脚部のみ残存		28-4
114	〃	大溝南第Ⅰ層	口径 22.0	口縁ヨコナデ 杯部体部ナデ		にぶい黄橙色	杯部1/2	脚部あとの穴が左 にずれる	12-2
115	〃	大溝北第Ⅱ層	底径 10.0	杯部ナデ脚部外面上部オサエ、脚部ナ デ	～1.0長石、石英、雲母含	明褐灰色 杯部外面一部黒褐色	杯部20% 脚部100%	杯部の底に脚部を さし込む	27-5
116	土師器 筒型土製品	大溝南第Ⅲ層	口径 9.2	内面～外面上部ナデ 外面下部ハケ目	～1.5長石、石英、雲母含	外-灰黄～黒色 内-にぶい黄橙～灰 褐色	口縁端部1/2残	中央部に貼付あり	36-4
117	土師器碗	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 11.8 6.1	口縁部ヨコナデ 外面ナデ？ 内面板ナデ ナデ	粗 0.5～2.5の長石、石英 を多く含む 0.5mm程のウンモを多少含 む	褐灰色 灰褐色	1/2	表面磨耗のため調 整不明	32-2
118	須恵器杯蓋	大溝南第Ⅲ層	口径 高さ 13.3 3.9	口縁ヨコナデ (右天井部(外)ケズリ)	粗 0.5～2.5最大5.5の小 石、長石含む	外-黒灰色 内-灰色	1/2		45-4
119	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 高さ 13.8 4.1	口縁ロクロナデ 天井内面ナデ、天井外面ケズリ	密～2の長石を含む	灰色	ほぼ完了		19-2
120	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 高さ 14.2 4.9	口縁、内面ロクロナデ (左) 天井部外面ヘラケズリ	密1～2mmの長石をやや多 く含む	灰色	1/2		13-1
121	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 14.9	外面天井部ケズリ、外面～内面ロク ロナデ (右回り)	～4.0 長石含	青灰～暗青灰色	1/2		31-1
122	〃	大溝南第Ⅲ層	口径 高さ 15.8 4.4	口縁外面・内面ロクロナデ 天井外面ケズリ	やや粗 0.5～2、最大7の石英、 長石を含む	灰色	1/2 口縁1/2		46-2
123	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 14.4	口縁、内面ロクロナデ 天井外面ケズリ	やや密0.5～1.5の長石を含 む	灰色	1/2		42-3
124	須恵器杯蓋	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 14.2 4.4	内外面ロクロナデ 外面天井部ケズリ	0.5～1の石英、長石を含 む	淡灰色	1/2		46-1
125	〃	大溝	口径 高さ 15.1 3.8	内外面ロクロナデ 外面天井部ケズリ	0.5～1の石英と若干の小 石を含む	灰白色	ほぼ完形	ヘラ記号あり	77-1
126	〃	大溝南	口径 高さ 15.4 3.9	口縁ナデ内外面ロクロナデ、外面天井 部ケズリ	0.5～2.5の長石を含む	灰色	1/2		38-3
127	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 12.9 4.95	内外面ロクロナデ 外面天井部ケズリ	1前後の長石を含む 2～3の長石を少し含む	青灰色	1/2		50-2
128	須恵器杯身	大溝南第Ⅲ層	口径 高さ 12.6 4.1	内面及び口縁ロクロナデ 外面ケズリ	～1の長石含む 5大の小石まじる	淡灰色	1/2		50-1
129	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 12.4 4.8	内面及び口縁ロクロナデ 外面底部ケズリ	0.5～2の長石を含む	灰色	1/2		42-4
130	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 12.8 5.4	内面・口縁ロクロナデ ミコミ、タタキ、外面底部ケズリ	密 ～1の長石を含む ～3の石英を若干含む	灰色	90%		18-1
131	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 11.8 4.8	内面及び口縁ロクロナデ 外面底部ケズリ	密 0.5～1.5長石含	灰色	1/2		45-3
132	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 13.2 5.0	口縁ヨコナデ外面上部ナデ 下部ヘラケズリ内面ナデ	～2長石含	青灰色	口縁部1/2		12-3
133	〃	大溝北第Ⅱ層	口径 高さ 13.4 5.0	内面・口縁ロクロナデ、ミコミタタ キナデ、外面底部ケズリ	密 ～1の長石をやや多 く含む	灰色	70% 口縁1/2		13-2
134	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 11.8 5.0	内外面ロクロナデ 外面底部ケズリ	0.5～3の長石を含む	灰色	口縁1/2底部は残存		45-1
135	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 13.8	内面～口縁ロクロナデ 外面ケズリ	～1.5長石含	灰色	1/2弱		45-2
136	須恵器杯身	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 12.2 4.4	内面及び口縁ロクロナデ 外面底部ケズリ	密 0.5程の長石を若干含 む	暗灰色	口縁1/2		11-2
137	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 14.0 3.7	口縁ロクロナデ、ミコミナデ、外面底 部品ケズリ	密 0.5程の長石を若干含 む	灰色	口縁1/2		54-1
138	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 14.4 4.0	内面及び口縁ロクロナデ ミコミナデ 底部ケズリヘラ切り	密 1程の長石を若干含む	灰色	口縁1/2		33-3
139	〃	大溝南第Ⅱ層	口径 高さ 13.2 4.8	内外面ロクロナデ 外面底部ケズリ	0.5～4の長石を含む	内-青灰色 外-灰白色	口縁1/2その他ほぼ 完形		20-1
140	須恵器・台 付高杯	大溝南第Ⅱ層	底径 16.0	内外面ロクロナデ 二段に波状文	密 1以下の長石・石英若 干含	灰色	40% 底径1/2		54-3
141	須恵器 短頸壺	大溝南第Ⅰ層	口径 高さ 9.2 7.0	内外面ロクロナデ、内面底部ナデ、外 面底部静止ヘラケズリ	密 2程長石極少含	灰色	70% 口縁1/2	自然釉あり	49-1
142	須恵器 壺	大溝南第Ⅰ層	口径 14.4	口縁横ナデ外面タタキ後カキメ内面タ タキ	密 0.5前後の長石含	灰色	10% 口縁1/2		54-4
143	須恵器杯蓋	大溝南第Ⅰ層	口径 高さ 16.8 1.8	内面～口縁ロクロナデ 外面ケズリ	～2.5長石含	暗青灰色	1/2	歪みあり	36-3
144	須恵器杯身	大溝南第Ⅰ層	口径 高さ 16.4 4.9	内外面横ナデ 底部ナデ	密 ～1長石ごく少含	灰色	1/2		24-3
145	須恵器 壺	大溝南第Ⅰ層	底径 10.6	外面ケズリ、内面横ナデ 底部ナデ	密 1程度長石含	内面-灰色 外面-濃灰色	20% 底部1/2		18-3
146	須恵器杯蓋	大溝南第Ⅱ層	—	外面ヘラケズリ 内面ロクロナデ	0.5～1.0長石多含 2.0～3.0長石少含	青灰色	一部残	「郡政」の墨書	15-5
147	縄文 深鉢	大溝	—	外面 条痕？ナデ 内面ナデ	～4長石、石英、雲母多含	淡褐灰色	一部残	晩期夾帯文	
185	土師器甕	SH1	口径 28.0	口縁ヨコナデ、外面ハケメ 内面ハケメ	～1.5長石・石英・雲母含 赤色砂粒含	淡褐色	口縁～体上部1/2		61-1

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
186	土師器甕	SH 1	口径 24.0	口縁ヨコナデ外面上部タテハケメ下部ケズリ内面ヨコハケメ	0.5~1.5長石・石英含	内面-淡黄橙色 外面-にぶい黄橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 体上半部 $\frac{1}{2}$		60-4
187	"	"	口径 11.0	口縁ヨコナデ外面ハケメ内面板ナデ	~2長石・石英含	灰白色	口縁 $\frac{1}{4}$	内部に指圧痕あり	60-1
188	土師器杯	"	口径 13.9 高さ 2.9	内外面ヨコナデ外面底部指オサエ?内面底部ナデ	1.5~2.0長石・石英・雲母含	黄橙色	$\frac{1}{2}$		60-3
189	土師器甕	SH 2	口径 26.6	口縁ハケメ後ナデ外面ハケメ内面ハケメ	~2.5長石・雲母・石英	淡黄褐色	$\frac{3}{4}$		57-2
190	"	"	口径 28.2	口縁ヨコナデ外面ハケメ内面ナデ	~2長石・雲母・石英	淡黄褐色	口縁 $\frac{1}{2}$		57-3
191	円面碗	"		内面ナデ	~1石英・長石・雲母	淡灰色	陸~海の部分 $\frac{1}{2}$	スカシ孔は8個?	56-4
192	須恵器 蓋	"	口径 15.8 高さ 2.55	外面ケズリ口縁~内面ロクロナデ	密 ~1.5長石含	淡白色	口縁 $\frac{1}{4}$	ロクロ右回り自然釉あり	56-3
193	須恵器 杯	"	口径 14.2 高さ 3.7	内外面ナデ	密 ~1長石含	淡灰色	$\frac{1}{2}$		56-1
194	須恵器短頸壺	"	口径 9.3	ロクロナデ	~2.5石英・長石・雲母含	淡灰色	$\frac{1}{2}$	外面、ウグイス色の自然釉	56-2
195	須恵器 脚	"	底径 15.2	ロクロナデ	粗含 ~4石英・長石・雲母	灰色	$\frac{1}{4}$ 端部は $\frac{1}{2}$		56-5
196	土師器甕	SH 3	口径 28.7	口縁ヨコナデ内外面ハケメ	~3石英・長石・雲母多含	内面-淡黄色 外面-淡橙色	口縁 $\frac{1}{2}$		64-2
197	"	"	口径 36.0	口縁ヨコナデ外面ハケメ内面ナデ	~3.5石英・長石・金雲母含	橙色	口縁 $>\frac{1}{2}$		64-1
198	土師器皿	"	口径 15.8 高さ 2.2	内~外面ナデ底部指オサエ後ナデ	2以下石英・長石・金雲母赤色砂粒(くされ礫)含	淡橙色	口縁 $\frac{1}{4}$		57-1
199	土師器高杯	"		杯部ナデ脚部内部シポリ後工具によるナデ	密 ~1長石・金雲母含	橙色	脚部の一部	脚部12面取り	65-1
200	須恵器杯?	SH 3	口径 9.8 高さ 4.45	ロクロナデ	密 ~1長石含	灰白色	$\frac{1}{4}$	自然釉あり	63-2
201	須恵器円面層	"	底径 21.6	ナデ	~1.5石英・長石、黒色岩石含	淡灰色	脚部のみ	191と同一個体か?	63-1
202	須恵器杯	"	口径 13.2 高さ 3.9	体部ロクロナデ口縁部ヨコナデ	密 ~1の長石含	灰色	$\frac{1}{2}$	貼付高台	63-3
203	"	"	口径 15.4 高さ 4.2	全体ナデ	密 ~1石英・長石含	灰色	$\frac{1}{2}$	"	63-4
204	"	"	底径 12.6	内面底部イタナデ外面底部ケズリ	~1長石、石英含	灰白色	底部 $\frac{1}{2}$	"	63-7
205	灰釉 壺	"	口径 9.6	ロクロナデ	密 1以下長石含	灰白色	$\frac{1}{4}$	内面に自然釉	63-6
206	須恵器杯蓋	SH 4	口径 15.0 高さ 3.2	口縁~内面ロクロナデ外面ケズリ	密0.5~1.5長石、石英含3.0の小石含	灰白色	90%の口縁端部少量欠く		61-4
207	須恵器 杯	"	口径 21.2 高さ 4.3	底部ナデ	密 1の長石少含	灰白色	10%		61-5
208	土師器	Pit 1	口径 31.0 高さ 5.7	体部ヨコナデ底部ナデ	1.0~2.0長石、石英含微細粒多含	橙色	$\frac{1}{4}$		70-4
209	須恵器 杯	"	口径 15.7 高さ 3.85	体部ロクロナデ底部ナデ	1.0以下長石含	青灰色	$\frac{1}{2}$		70-3
210	須恵器 杯	SB 3 P-1	口径 10.6	内面~外面ロクロナデ底部ナデ	0.5~1石英・長石やや多含金雲母若干含	外面-灰白色 内面-うすい灰色	40% 口縁 $\frac{1}{4}$	底部若干いびつな円形	59-2
211	"	SB 6 P-1	口径 17.2 高さ 4.2	内面~外面ロクロナデ底部ナデ	部0.5程、長石若干含金雲母ごく少含	灰色	30% 口縁 $\frac{1}{4}$		59-1
212	瓦器 碗	SB 9 P-1	口径 16.2	口縁部ヨコナデ内・外面ヘラミガキ	密 0.5石英・長石、金雲母含	暗灰色	10%		72-3
213	" "	" P-2	口径 15.8	口縁横ナデ内・外面ヘラミガキ	密 0.5程長石、金雲母若干含	灰~灰白色	30% 口縁 $\frac{1}{4}$		59-4
214	" 皿	" P-1	口径 10.0 高さ 1.7	口縁横ナデ外面ヘラミガキ内面ミガキ底部ナデ	密 1.0石英・長石ごく少含微細な金雲母含	灰~灰白色	25%		72-2
215	須恵器 杯	SZ 1	口径 12.0 高さ 2.75	内面~外面ロクロナデ外面底部ナデ	0.5~1.0長石含~3長石少含	青灰色	$\frac{1}{4}$		61-2
216	" "	"	底径 10.2	内面~外面ロクロナデ外面底部ナデ	~1.5長石、石英含	灰白色	高台部 $\frac{1}{2}$		60-2
217	土師器甕	" 最下部	口径 25.2	口縁ヨコナデ、外面ナデ内面ハケ後ナデ	粗 1.0~2.0長石、石英、多含0.5の雲母含	淡黄褐色	口縁 $\frac{1}{2}$		61-3
218	土師器皿	SD 1	口径 9.2 高さ 1.2	口縁ヨコナデ外面オサエ内面ナデ	~1長石・石英多含	淡黄褐色	$\frac{1}{2}$	全体に歪み大	66-4
219	"	"	口径 8.6 高さ 1.2	口縁ヨコナデ外面オサエ内面ナデ	~1長石・石英含	淡黄褐色	80%	外面に指圧痕	66-5
220	"	"	口径 8.6 高さ 2.3	口縁ヨコナデ外面ナデ	~1.5長石・石英雲母多含	淡黄褐色	完形	貼付高台	66-6
221	山茶碗	"	底径 7.4	内面、外面ロクロナデ糸切り底	密 ~0.5長石微量	灰白色	底部 $\frac{1}{2}$		66-1
222	黒色土器碗A類	"	口径 14.8	口縁ヨコナデ内面ハケ後ナデ	~1長石・石英・雲母含	内面-黒色 外面-淡黄褐色	$\frac{1}{4}$		66-2

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
223	瓦器碗	SD 1	口径 14.8	口縁ヨコナデ 内・外面ミガキ	～1長石少含	灰色	口縁部 $\frac{1}{4}$		66-3
224	〃	SK 1	口径 15.2 高さ 5.8	口縁ヨコナデ外面オサエ後ミガキ 外面底部ナデ内面ミガキ内面底部ナデ 後ミガキ	～1長石少含	暗灰～灰白色	口縁端部少量欠	多少の歪み	67-2
225	〃	〃	口径 15.2 高さ 5.65	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ミガキ 外面底部ナデ内面ミガキ内面底部ナデ後 ミガキ	～1.5長石少含	暗灰色	完形	少量の歪み	67-1
226	土師器 杯	SE 3	口径 14.0 高さ 2.5	口縁・体部ヨコナデ 底部ナデ	密 金雲母微粒	明褐色	15%		75-5
227	瓦器 碗	SE 3	口径 14.4	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ミガキ 内面ミガキ	0.5砂粒、金雲母若干含	淡灰色	25%		75-4
228	〃	〃	口径 14.4	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ミガキ 内面ミガキ	1.0石英0.5砂粒若干含	暗灰色	$\frac{1}{4}$ 高台部無し		75-2
229	〃 皿	SE 3	口径 8.6 高さ 1.8	口縁ヨコナデ 外面指オサエ後ナデ	密 0.5～1.0砂粒含	灰白色	70%	精円形歪みはげしい	75-1
230	〃	〃	口径 9.0 高さ 1.5	口縁ヨコナデ 外面指オサエ後ナデ	密 0.5砂粒、金雲母含	灰白色	30%		75-3
231	〃 碗	〃	口径 15.4 高さ 5.2	口縁ヨコナデ後ミガキ外面ナデ指オサ エ後ミガキ内面ミガキ	密	外面—黒灰色 断面—灰白色	40%		74-1
232	〃	〃	口径 15.2 高さ 4.9	体部指オサエ内面ミガキ	密 0.5砂粒若干含	黒灰色	完形		73-4
233	〃	〃	口径 15.2 高さ 5.0	外面指オサエ後ミガキ、内面ミガキ 底部ハケ後ミガキ	密	暗灰色	50%		74-4
234	〃	〃	口径 15.0 高さ 4.3	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ナデ底部 ナデ内面ミガキ	密 0.5～1.0長石若干含	外面—黒灰又は灰白 色 内面—灰白色	50%		74-2
235	〃	〃	口径 15.8 高さ 4.6	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ナデ 底部ナデ内面ミガキ	密	外面—灰白又は黒灰 色 内面—黒灰色	35%		74-3
236	土師器 皿	〃	口径 14.6 高さ 2.9	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ナデ 内面ナデ	0.5～4長石若干含	にぶい黄褐色	30%		73-2
237	〃	〃	口径 8.4 高さ 1.2	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ナデ 内面ナデ	密 1.0石英含 0.5長石、金雲母若干含	淡褐色	口縁部 $\frac{3}{4}$		73-1
238	土師器 甕	〃	口径 23.6	口縁ヨコナデ体部ナデ	粗 0.5～1.0長石、石英、 雲母含	外面—褐灰 内面—にぶい橙褐色	口縁部25%	外面に工具痕あり	73-3
239	〃	SK 2	口径 16.8	口縁ヨコナデ外面ハケメ 内面工具によるナデ	0.5～1.0長石含	外面—橙 内面—褐灰又は黒褐 色	50%	内外面ともススが 付着	62-1
240	黒色土器 碗 B類	SB14 P-1	口径 14.4	口縁ヨコナデ 内外面ミガキ	密	濃灰(黒)色	10%未満 口縁 $\frac{1}{4}$		76-1
241	土師器 甕	〃 P-2	口径 14.2	口縁ヨコナデ、外面ナデ 内面板ナデ	密 0.5以下石英・長石含 微細雲母やや多含	にぶい褐色	10%未満 口縁 $\frac{1}{4}$		59-3
242	土師器 杯	〃 P-3	口径 14.8 高さ 3.65	口縁ヨコナデ外面指オサエ 内面板ナデ	1.5長石含 0.5雲母含	浅黄褐色	$\frac{3}{4}$	口縁歪みあり	70-1
243	銅板	〃 P-4	16.4×12.6 厚さ0.8			表面に緑青付着	完形		72-4
244	山茶碗 輪花碗	SB18 P-1	口径 14.6 高さ 5.5	体部ロクロナデ 底部糸切り	密長石等の微粒子含	灰白色	口縁 $\frac{1}{4}$	口縁に淡緑色の自然 釉	68-1
245	黒色土器 碗 B類	SB19 P-1	口径 14.0 高さ 5.2	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ミガキ内 面ミガキ後板ナデ底部ナデ	最大5、1.5～0.5 石英、長石、雲母含	外面—褐色 内面—黒褐色	ほぼ完形 口縁一部欠	ヘラ記号あり	68-2
246	瓦器碗	〃 P-1	口径 15.0 高さ 5.6	外面体部ミガキ外面底部ナデ 内面体部ヨコミガキ内面底部格子状に ミガキ	0.5～2.0、石英、長石含	黒灰色 底部灰域	口縁 $\frac{1}{4}$		68-4
247	土 錘	〃 P-2	4.35×1.2	手づくね	～1石英、長石含	褐～黒褐色	完形		68-6
248	〃	〃 P-3	4.7×1.7	手づくね	～1石英、長石含	褐色	完形		68-5
249	土師器 高台付小皿	〃 P-4	口径 9.2 高さ 2.25	外面ナデ内面ハケメ	0.5～1.5石英、長石 金雲母含	乳褐色～黒斑黒褐色	完形	黒斑あり	68-3
250	土師器 碗	SB16 P-1	口径 15.2	内外面ナデ	密 0.1～0.2石英、長石少 含 金雲母含	灰白色	10%未満 口縁 $\frac{1}{4}$		72-1
251	土師器 皿	SB21 P-1	口径 9.7 高さ 1.9	口縁ヨコナデオサエ外面ナデ 内面ナデオサエ	密 0.5～1.0石英、長石若 干含 微細金雲母やや多含	浅黄褐色	完形	歪みあり	59-6
252	〃	〃 P-1	口径 9.6 高さ 2.0	口縁ヨコナデ 体部ナデ	密 1.0以下石英、長石若 干含 金雲母やや多含	浅黄褐色	完形		59-5
253	瓦器碗	SB20 P-1	口径 15.0	口縁ナデ後ミガキ外面指オサエ 後ミガキ内面ミガキ(横、密)	0.5～1.0石英、長石、金雲 母含	暗灰色	口縁 $\frac{1}{4}$		69-2
254	土師器小皿	SB20 P-2	口径 10.6 高さ 1.15	口縁ヨコナデ外面指オサエ後ナデ 内面ナデ	0.5～1.0長石、金雲母含	乳黄灰色	口縁 $\frac{1}{4}$	口縁精円形	69-1
255	黒色土器 碗 B類	東C-2 P 2	口径 15.8	口縁ヨコナデ 体部ミガキ	～1長石少含	黒色	口縁 $\frac{1}{4}$	口縁歪み大 内外面とも炭素吸 着	70-2
256	瓦器 碗	東D-5 SD 2	口径 12.2	口縁ヨコナデ外面オサエ内面ミガキ 底部ナデ(外面にミガキあり)	～1長石、石英含	灰～暗灰色	$\frac{3}{4}$	歪みあり	66-7
257	黒色土器 碗 A類	東B-13 包	口径 15.5 高さ 5.5 ～5.4	口縁ヨコナデ外面ヘラケズリ後ミガキ? 内面工具ナデミガキ底部ナデ	～0.5長石等含	黒色 素地明灰褐色	90%	歪みあり 内外面とも炭素吸 着	55-6
258	〃 碗 B類	東B-13 包	口径 14.7 高さ 5.75 ～6.1	口縁ヨコナデ外面オサエ内面板ナデ 底部ナデ	密 0.5長石、雲母少含	外面—浅黄橙～黒褐 色 内面—黒色	口縁端部少量欠		55-1
259	土 錘	東B-12 包	3.45×1.4	手づくね	～1長石、石英含	淡黄色	完形		51-3

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
260	土 鍾	東B-4 P 5	5.15×1.5	手づくね	密 0.5長石等若干含	褐灰～黒褐色	ほぼ完形		76-2
261	〃	SB20	4.0×1.35	〃	～0.5石英、長石含	淡褐色	一部欠		69-5
262	〃	東B-15 P 2	6.0×1.6	〃	～1.5長石、石英等含	にぶい黄橙色	完形		71-2
263	〃	東C-12 P 4	4.0×1.45	〃	0.5×2.5石英、長石、全雲母含	淡褐色	一部欠		69-4
264	〃	東C-12 P 4	4.0×1.25	〃	～1.0長石、金雲母等含	暗褐色	ほぼ完形		69-3
265	〃	東C-5 P 2	5.05×1.45	〃	～1.5長石、石英等多含	褐灰色	完形		71-1
266	〃	東B-5 包	5.7×1.2	〃	密 1.0長石等少含	灰～暗灰色	完形		51-7
267	〃	東A-15 包	5.25×1.65	〃	密 0.5長石、雲母等含	淡橙～橙色	完形		51-6
268	〃	東B-4 P 5	4.0×1.45	〃	～1.0石英、長石等多含	浅黄橙～橙色	ほぼ完形		76-3
269	〃	東B-12 包	4.0×1.2	〃	～0.5長石、石英含 赤色斑粒含	灰白色	完形		51-2
270	〃	東B-10 包	3.6×1.5	〃	砂質1.0以下長石等含	灰白色 黒褐色 (炭素吸着のため)	完形		51-5
271	〃	東B-11 包	3.5×1.35	〃	1.0長石、石英含	灰白色	ほぼ完形		51-4
272	ミニチュア 土器	I-9 包		外面ナデ内面オサエ 底部オサエ	0.5長石、雲母含 1.5長石まじる	黒色	完形		55-4

(2) C 区

A区の北に接した拡張部にあたる部分で、地形的には北に向かって漸次傾斜面に移行し、遺構密度もA区に近い箇所ほど高く、北側では遺物包含層は厚くなるが遺構は少なくなる。

検出した遺構は、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物3棟を含んだ柱穴群、数条の溝状遺構などが新たに検出され、古墳時代後期～奈良時代に中心を置き、一部中世に下るものもある。

竪穴住居SH5は、一辺4.3m×3.7mで南北方向に長い長方形プランとなり、四周に壁溝がめぐる。削平が著しく、深さ5～6cmほどで床面に至る。竈はまったくその形状をとどめていないが、床面の東寄りに焼土および白色粘土が埋土に混在しており、その位置の推定が可能である。少量の土師器・須恵器等の遺物が出土した。奈良時代前期に比定できる。

掘立柱建物SB22は、南北2間、東西3間以上の規模をもつ。柱間間隔は、200cmほどで、柱穴は方形プランの掘形をもつ。

掘立柱建物SB23は、南北2間、東西4間以上と推定されるもので、柱間間隔が約240cmをはかり、やはり方形プランの掘形をもつ。

SB22とSB23とは、その切り合い関係からSB22がSB23より先行することが確認された。

掘立柱建物SB24は、南北3間、東西2間以上の規模をもつ。柱穴は、不整形な円形プランであり、

SB22あるいはSB23と比べ柱穴の規模はやや小さい。柱間間隔は、170～200cmをはかる。

また本調査区から続く、東南部のテラス状部分からは6世紀前半の須恵器・土師器が多く出土した。

調査区の北端には、数条の溝状遺構がみられた。一時的な流水の痕跡と考えられ、土師器片や瓦器片等が埋土中に含まれていた。

須恵器蓋杯(293～281)は、293～278が杯蓋で、まるく高い天井部とやや外反気味に開く口縁部からなり、天井部と口縁部の境には鋭さの欠いた稜をなす。279～281は杯身で、内傾する高いちあがりをもつ。口縁端部内面に浅い沈線をめぐらす。TK10型式にほぼ相当するものと思われる。

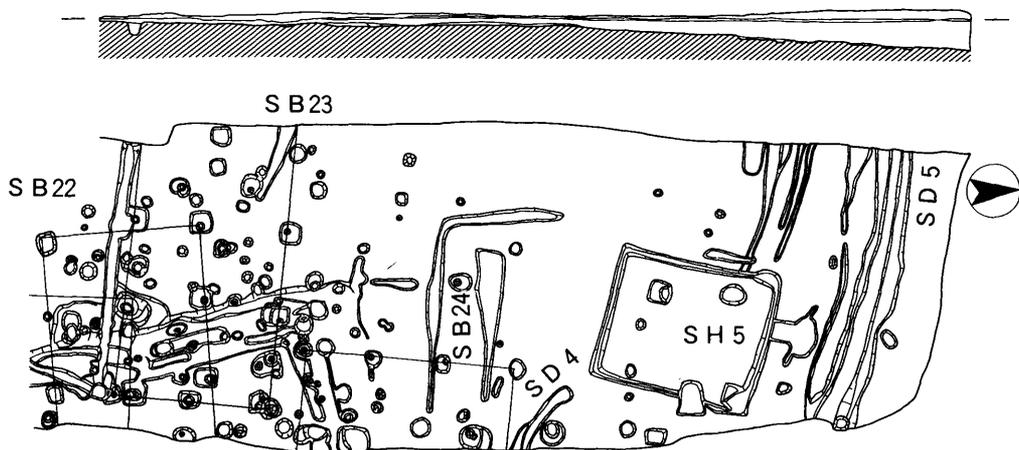
須恵器杯蓋(282～283)は、282が明瞭なかえりをもち、まるみを帯びた天井部からなるのに対し、283はかえりがなく、口縁部が垂下し、平坦な天井部からなる。ともにつまみ部は欠失している。

須恵器壺蓋(297)は、外上方に開く口縁部の小片で、端部は幅のある平坦な面をもつ。

土師器杯(284～286・289)は、いずれも風化が進み、調整等は明かではないが、無高台の284～286と貼付高台の289とがある。

土師器蓋(287～288)は、つまみ部を欠失するが、平坦な天井部で端部はまるく肥厚する。

土師器壺(290～292)は、口縁部がく字状に強く外反する290・291と、ゆるやかに外反する292がある。古墳時代後期のものと思われる。



第I-74図 C区遺構平面図 (S=1:200)

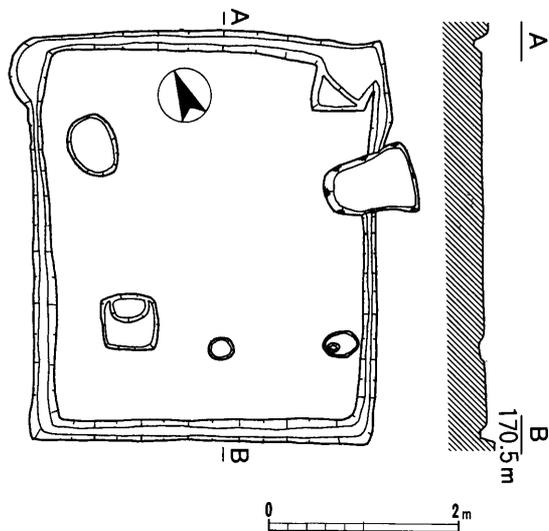


土師器甕 (293~296) のうち、296は口縁部を折り返して肥厚する、いわゆる布留系の甕だが、他は古墳時代後期~奈良時代のもので、小型のもの (293) と中型のもの (294~295) がある。

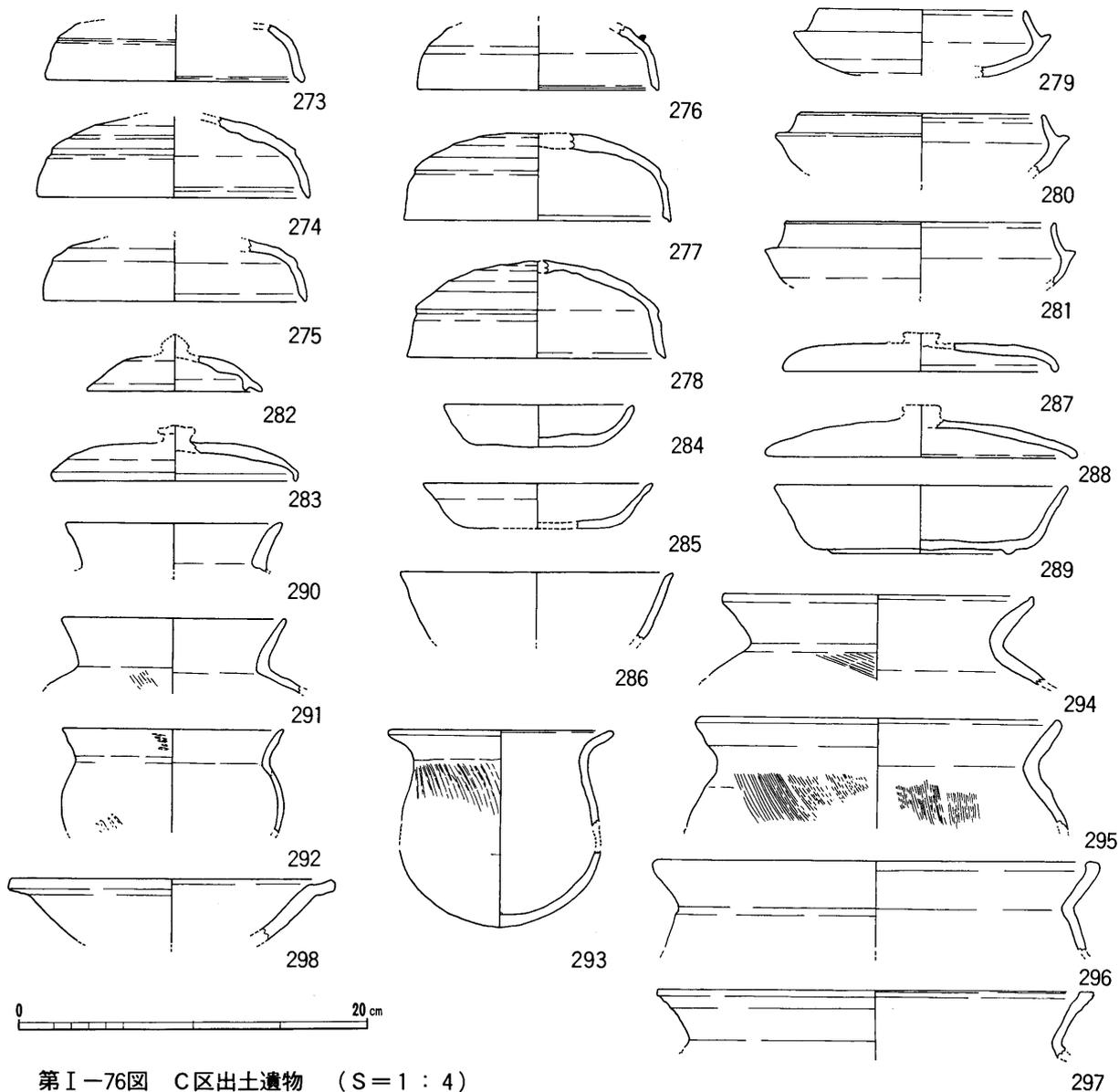
施釉陶器折縁皿 (298) は、外上方に開いた体部が口縁部で屈折するもので、緑灰色の釉薬が掛けられている。鎌倉時代後期の所産と考えられる。

このうち、(283) はSH 5、(295) はSD 4、(298) はSD 5からそれぞれ出土したほかは、テラス部を中心とした包含層からの出土である。

(竹内英昭)



第I-75図 SH 5 実測図 (1:80)



第I-76図 C区出土遺物 (S=1:4)

(3) 結 語

木津川左岸の丘陵端部に立地する高賀遺跡は、調査の結果、古墳時代前期から鎌倉時代にいたる複合遺跡であることが判明した。調査の成果と今後の課題を述べ、まとめとしたい。

遺構は、古墳時代初頭から平安時代まで存続する大溝と、奈良時代から平安時代の竪穴住居・掘立柱建物群、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物群と井戸に大別できる。

このうち、大溝は、集落の南を限る区画溝の性格をもっていたらしく、主要な遺構はすべて大溝の北側に存在している。ただし、この大溝の存続時期のなかの前半期、すなわち古墳時代の時期には、大溝の南側で検出された土坑1基を除いて古墳時代に遡る遺構は皆無である。したがって、大溝から出土した多量の土器や木製品が、ここに投棄されたか流れてきたものと考えれば、これらを使用もしくは製作した集団の居住地は、調査区西側の台地上に想定される。

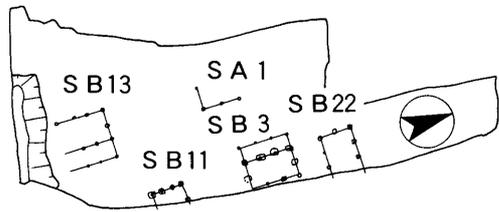
大溝から出土した土器の多くは、古墳時代前中期の土師器である。このうち、量的な主体を占めるものは、いわゆる庄内式併行期のものと、初期須恵器が伴うくらいの古墳時代中期（実年代では5世紀頃に相当か）頃の土師器で、典型的な布留式併行期のものは少ない。器種別に少しみてみると、庄内式併行期の甕形土器では伊勢地方で主体を占めるいわゆるS字甕はほとんどなく、台が付かずタタキ成形を行う近畿的なものが主体を占める。しかし、近畿地方の庄内式では一般的な内面ヘラケズリ調整のものは44など少数で、内面をハケメもしくはナデ調整するものが多い。高杯でも、88や92、96～97のような坏部は深く内湾湾気味に立ち上がり、脚部も屈曲せずすばまりながらおわる東海系の欠山式から元屋敷式的なものは存在するものの量的主体ではない。87の有段の加飾高杯をはじめ、89～91、93などは庄内式もしくはそれに近いものであろう。99は横方向に細いミガキを施した器形的にも布留式の特徴をもつ高杯である。100以下の高杯は、調整がミガキからナデもしくはハケメに変わっており、多くが布留式でも新相のものやそれ以降のものと思われる。105

～107のように、杯部の接合部に粘土を突帯状に張り付けた高杯はこの地域では通有のもので、同じ上野市の森脇遺跡では初期須恵器と共伴しており⁹³、高賀遺跡では117の須恵器甕などに伴うのであろう。5世紀代の在地の高杯といえる。その他の器種では、壺がやはり14のような東海的なものを含みながらもいわゆるパレス壺はなく、広口の直口壺や二重口縁壺など基本的に近畿的な様相を示す。31の小形丸底壺は布留式の新相以降のものと思われるが、線刻をもつ。若干の欠落部位があるが、首の長い水鳥を模したものと思われる。また、今のところ器台と思われる個体は84だけで、器種構成的には器台の出土が少ない。

木製遺物は、しがらみ1・2に伴う杭と板材、しがらみ1のところまで止まっていた155.161.162.174などが中層から出土した以外は、大溝の北側を中心に下層から出土した。図示しえたもの以外にも多くの杭や建築用と考えられる柱が出土している。完成品とともに未製品もあり、遺跡の性格を示す手掛かりになるかもしれない。注目される遺物の一つに把手付扉がある。近年類例が増えつつあるが門を挿入する把手の下を抉り込んでいる例は珍しい。

次に、A区とそれに北接するC区の奈良～平安時代の建物群についてみてみよう。建物の多くが東側の調査区外へも延びており、集落中心部よりもやや西に偏った部分が調査区になっていると思われる。竪穴住居は、出土遺物から、奈良時代のものと考えられる。

掘立柱建物は、建物の方位を基準にみると、真北からの振れが東へ10°以内に収まるA群と、それ以上のB群に大別できる。A群のなかでも、SB3とSB11、SB22は、西側柱もしくは身舎西側柱が柱筋を揃えており、相互の密接な関係を思わせる。建物方位も真北からの振れが西側へ1～2°とほぼ真北を基準として建てられており、これに同じ振れのSB13を加えた計4棟、（さらにSA1を入れることもできる）が同一の建物群を構成するものと考えられる。この建物群は、SB3やSB13が庇付の建物であること、SB3やSB11の柱掘形が他の掘立柱建物に比べて大きいことから、かなり有力な単位集団であることが考えられる。この建物群の時期



第I-77図 A・C区建物群 (S=1:1000)

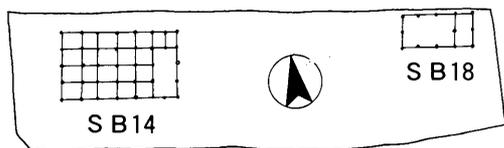
は、切り合い関係からSB23よりも先行すること、A群のなかでは建物方位が最も西偏したグループであること（しかもそれが最も真北に近い）、SB3の柱穴掘形より奈良時代と考えられる土器が出土していること等から掘立柱建物群のなかでは最も古く奈良時代と考えられる。しかし、同一場所に存在する奈良時代の竪穴住居との同時存在は当然不可能であり、竪穴住居廃絶後、おそらく奈良時代後半から平安時代初頭にかけて竪穴住居から掘立柱建物への転換がみられ、建物主軸をほぼ真北に揃えた掘立柱建物群が出現したものと考えられる。

この群以外の掘立柱建物では、SB9とSB12が方位の誤差が1°で、しかも柱筋をそろえることより同一の建物群を構成すると思われる。この建物群は、現状では、2棟の1単位が確認されるだけだが、調査区外の東側へも広がっている可能性が強い。時期はSB9の柱穴より瓦器が出土していることから、平安時代末から鎌倉時代と考えられる。

残りの掘立柱建物については、ほぼ同じ建物方位であっても近接しすぎたり、同一地点に占地していたりするなど建物群として捉えるにはやや困難をとまなうが、SB2とSB6・7・8のいずれかで1単位、SB10とSB23の1単位、SB1とSB12の1単位が一応想定可能である。

大溝の上層から出土した「郡政」と墨書された須恵器坏蓋や竪穴住居に混入したと思われる円面硯などは、上記の掘立柱建物群のいずれかに伴うものであろう。

B区では、東西2ヶ所で平安時代後期の掘立柱建物が同一地点に4回の切り合い関係が認められ、お



第I-78図 B区建物群(1) (S=1:1000)



第I-79図 B区建物群(2) (S=1:1000)

そらく継続して建て替えられたものと思われる。このうち、SB14とSB18は建物方位の誤差が1°で、しかもSB14北面とSB18妻柱がほぼ柱筋を揃えることから同一の建物群になる可能性がある。また、SB15とSB20及びSA2も建物方位の誤差が1°で、しかも南面の柱筋を揃えることから同一の建物群になる可能性が強い。ちなみに、敢えてこれらに完数値の与えられるところを探すと、SB14東面とSB18西面間の距離が30mではほぼ100尺の数値が求められ、SB15東面とSA2は距離3.1mで10尺、SB15東面とSB20西面間も22.5mではほぼ75尺の数値が与えられる。この両群の前後関係は、切り合い関係からSB14とSB18の群のほうが新しい。その他の掘立柱建物は、建物方位の誤差がやや大きく、時期的にはいずれも近接するものの建物群として抽出することはできなかった。

また、B区の掘立柱建物出土遺物では245と246のように、黒色土器と瓦器が同じ柱穴から完形で出土するなど、当該期の土器研究や、掘立柱建物柱穴に土器を完形で「埋納」?することの意義など興味深い問題も多いが、これらは今後の課題としたい。

(穂積裕昌)

[註]

- (1) 桜井市教育委員会 清水真一氏、榎原考古学研究所 寺沢薫氏の御教示による。
- (2) 小林秀氏の御教示による。
- (3) 平成元年度三重県埋蔵文化財センター調査。

付記 調査終了後のほ場整備事業施工時、保存のため調査範囲外として残した遺跡の一部が削られる事態が生じた。幸い、遺構上面が一部現れたところでことなきをえたが、その際、大溝はさらに10m程度は南側へまっすぐのびていることが確認された。



浮田遺跡B地区全景と神戸神社（北から）



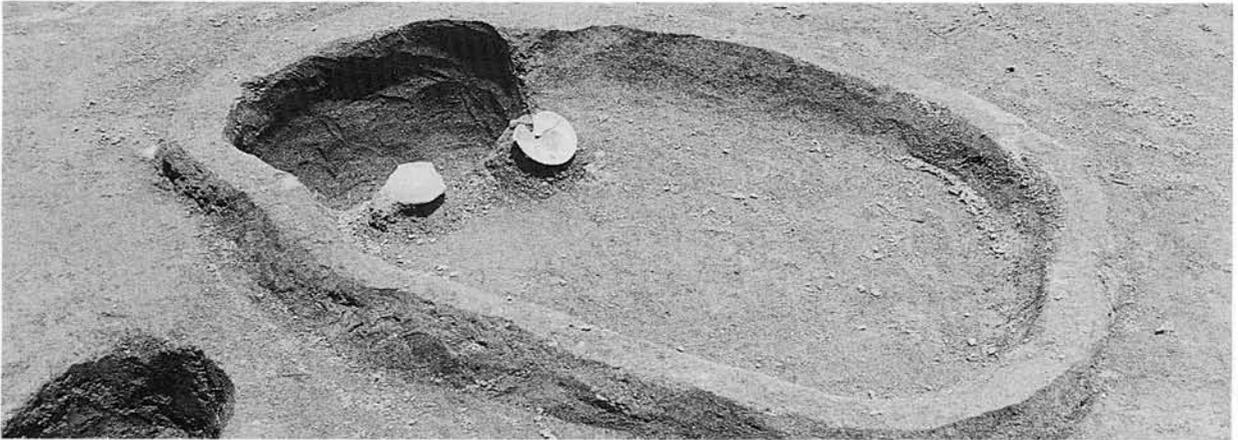
浮田遺跡B地区 SX3（東から）



浮田遺跡B地区土坑群とSH1（南から）



浮田遺跡B地区SK2（北から）



浮田遺跡B地区SK3（西から）



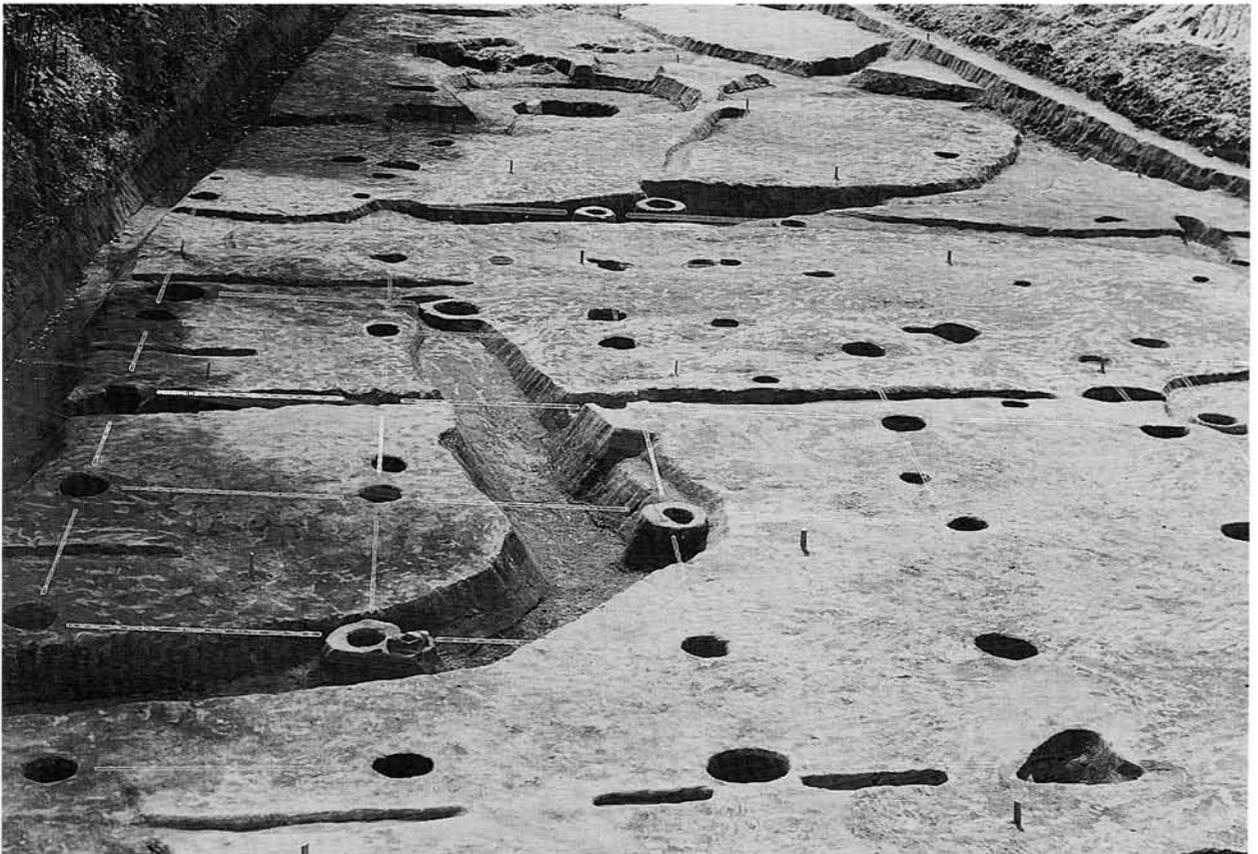
浮田遺跡B地区SK5（北から）



浮田遺跡B地区SK6（東から）



浮田遺跡B地区 SK16 (北から)



浮田遺跡B地区 SX2, SB1, SA1, 2, 3 (東から)



浮田遺跡B地区 SE1 (東から)



浮田遺跡F地区 柱穴群 (東から)



22



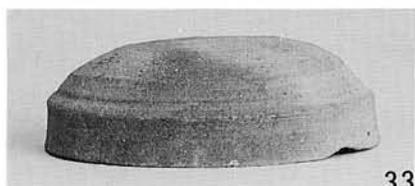
21



19



135



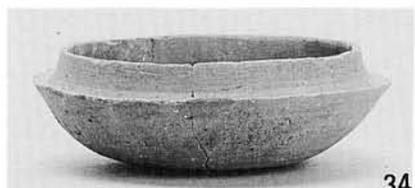
33



31



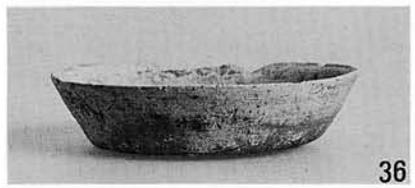
136



34



35



36



27



39

浮田遺跡B地区出土遺物写真 1 : 3



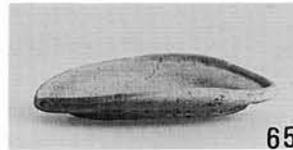
142



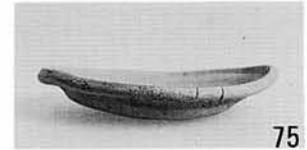
141



44



65



75



95



46



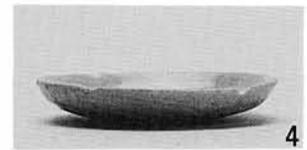
1



96



2



4



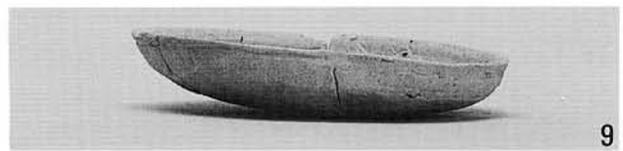
148



6



85



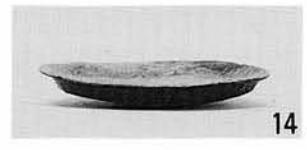
9



115



13



14



117



120



121



97



47

浮田遺跡B地区出土遺物写真 1 : 3



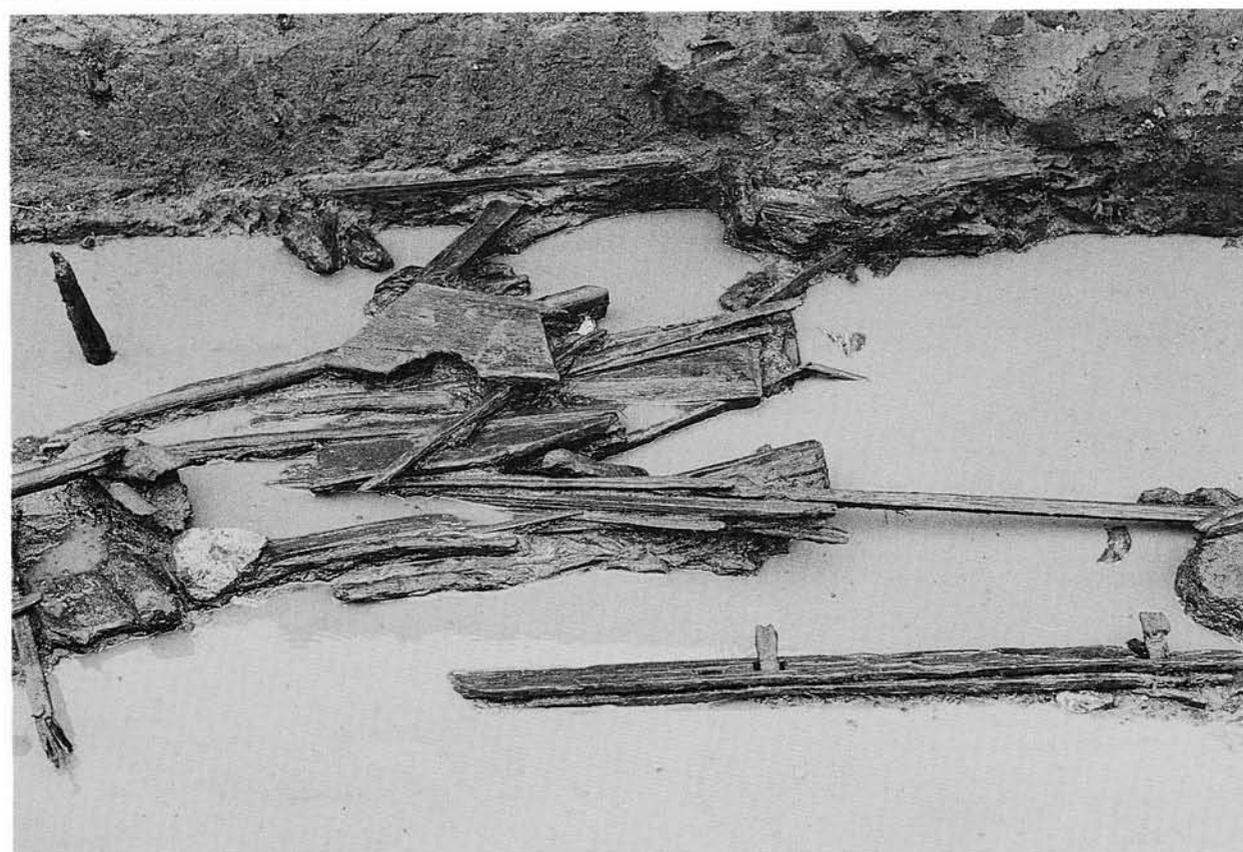
高賀遺跡調査前風景（A・C区東から）



高賀遺跡A区全景（北から）



高賀遺跡大溝北側遺物出土状況(1)



高賀遺跡大溝北側遺物出土状況(2)



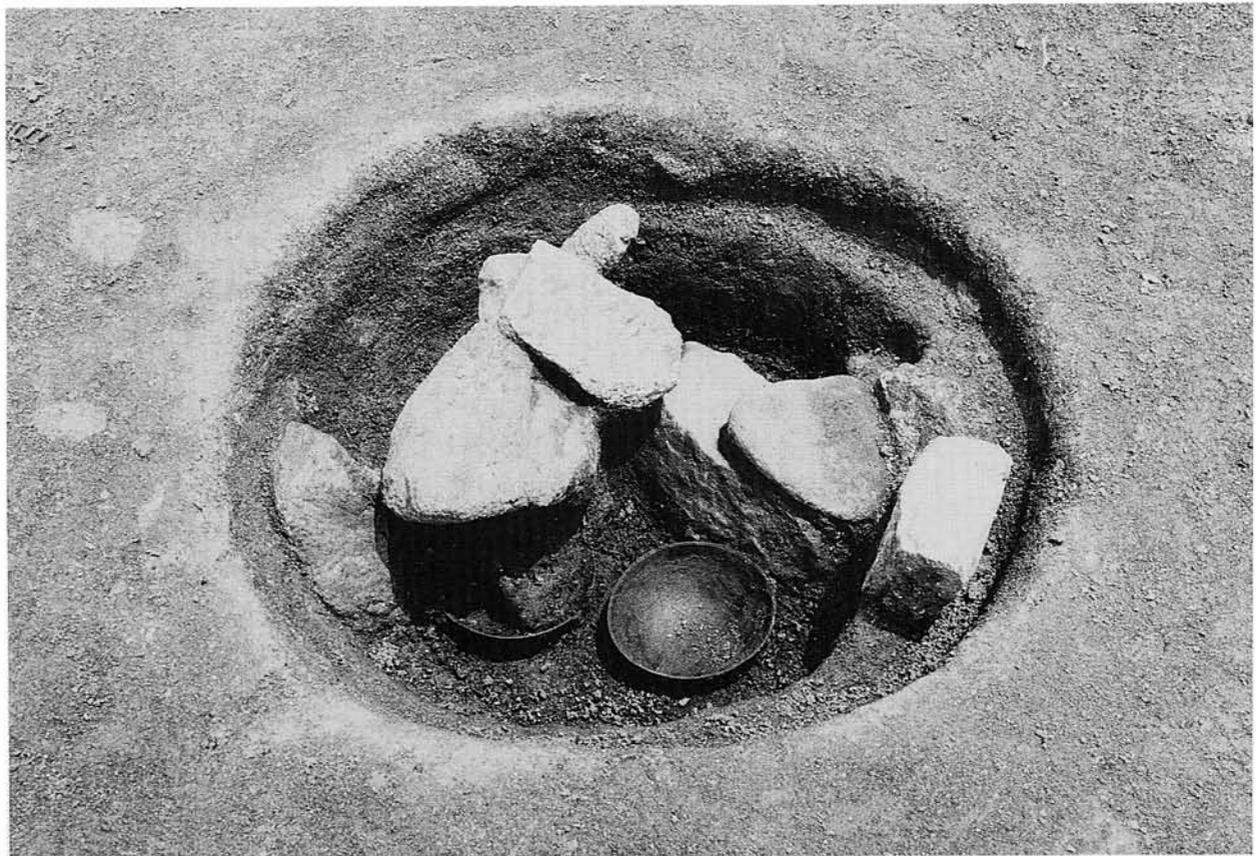
高賀遺跡大溝南側槽出土状況



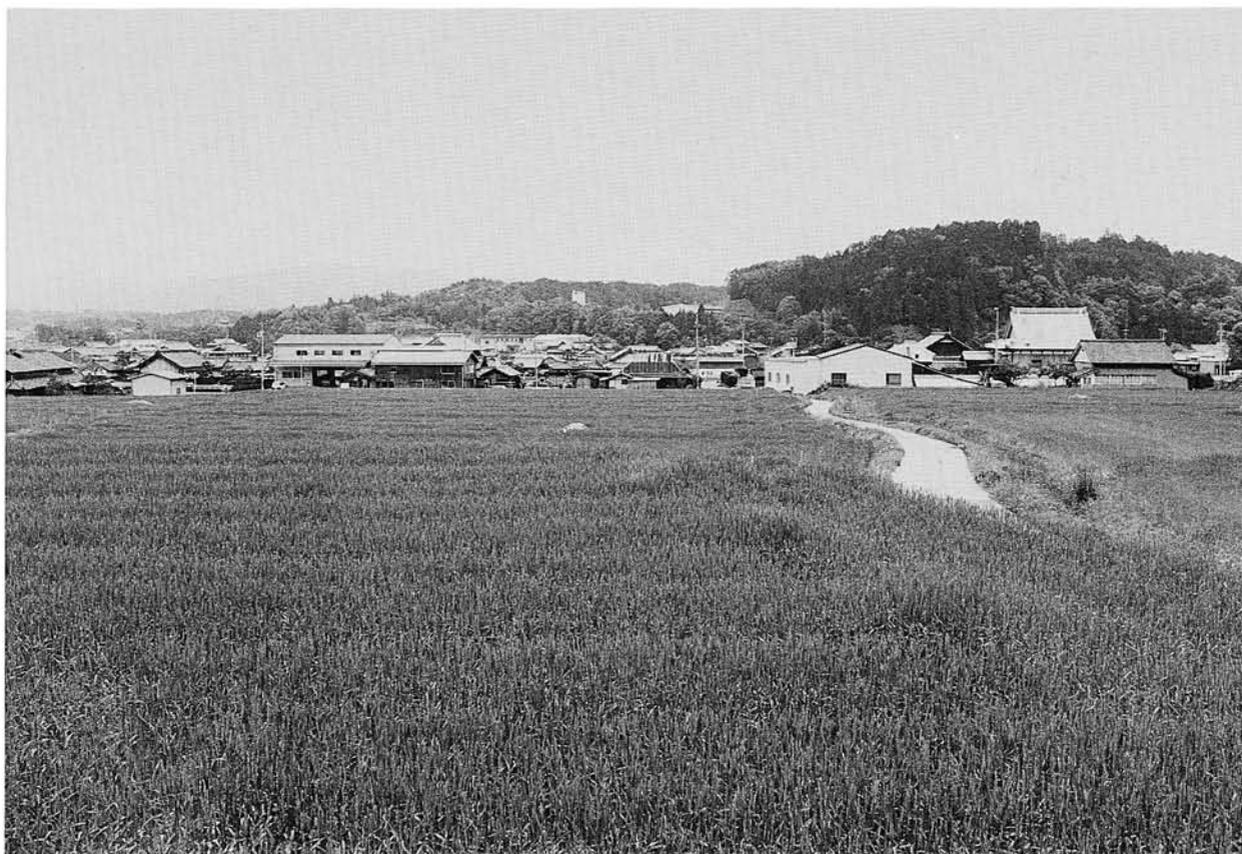
高賀遺跡A区北端部建物群（南東から）



高賀遺跡SH1, SH2 (東から)



高賀遺跡SK1 (西から)



高賀遺跡調査前風景（B区、西から）



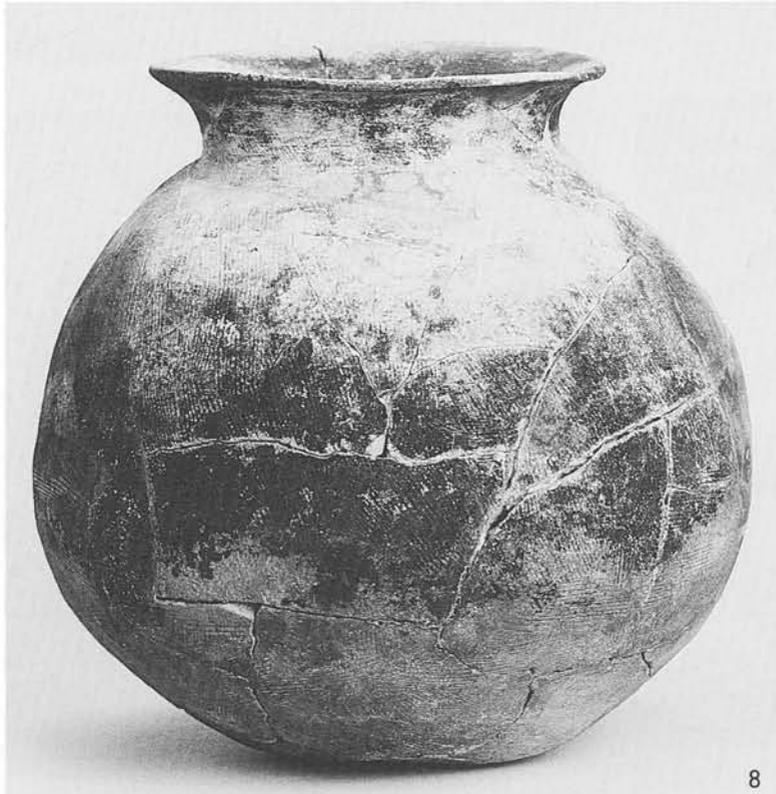
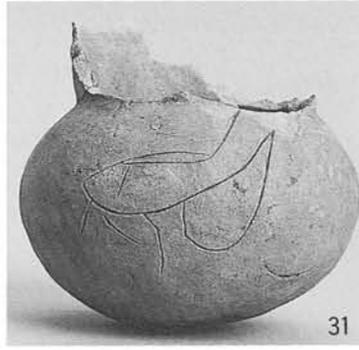
高賀遺跡B区全景（西から）



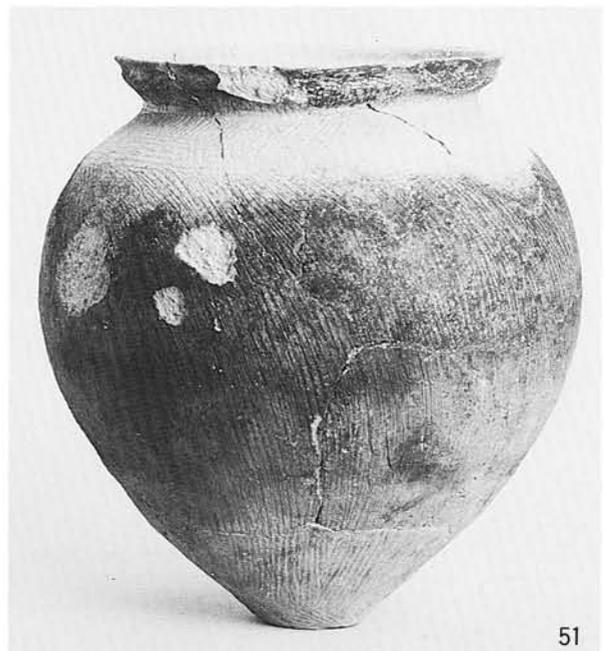
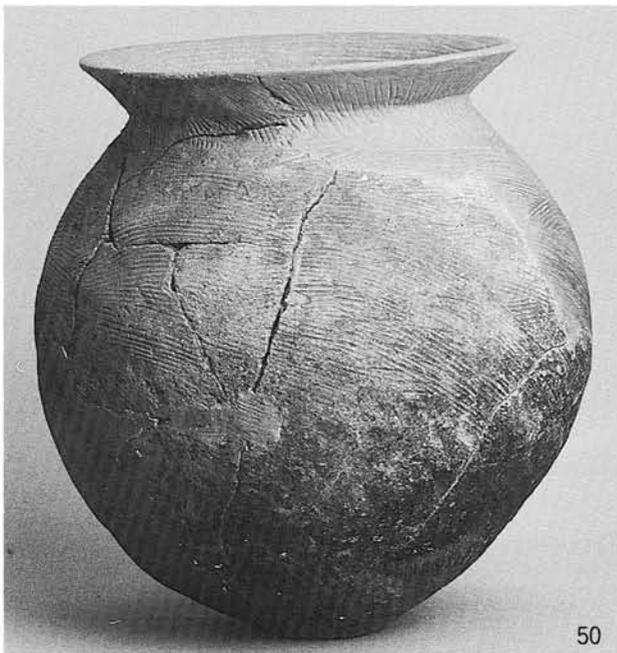
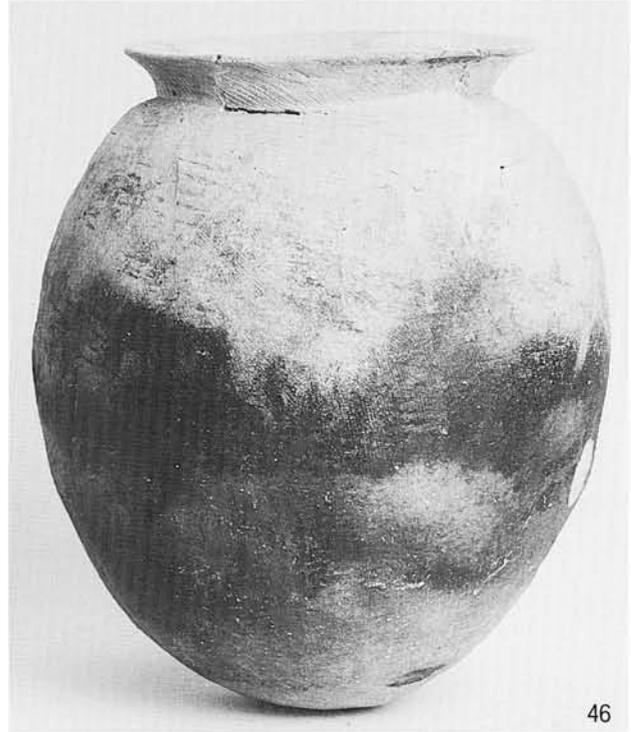
高賀遺跡C全景 (南から)



高賀遺跡SH5 (西から)



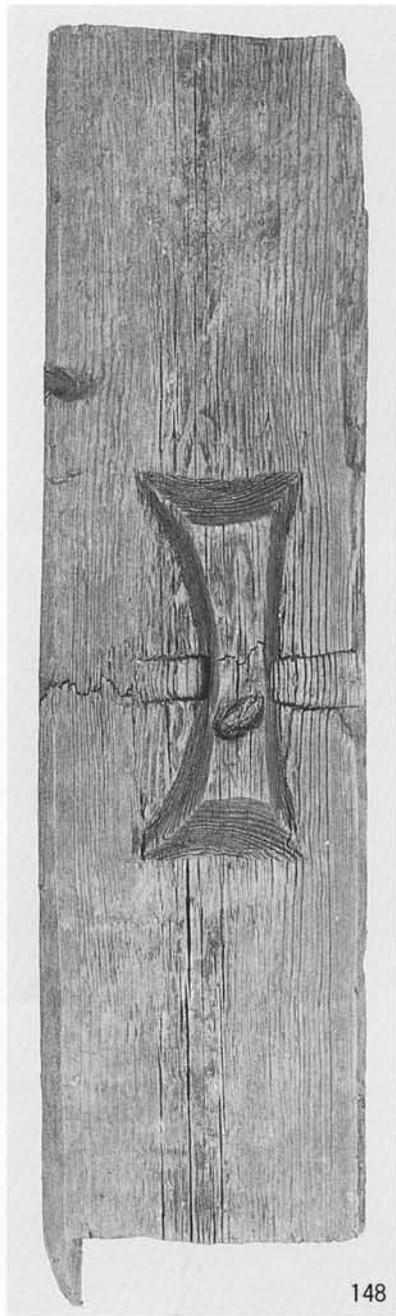
高賀遺跡大溝出土土器(1)



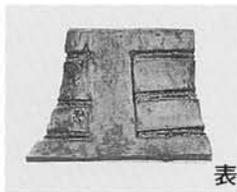
高賀遺跡大溝土土器(2)



高賀遺跡大溝出土土器(3) (146のみ S=1:2)



148



表

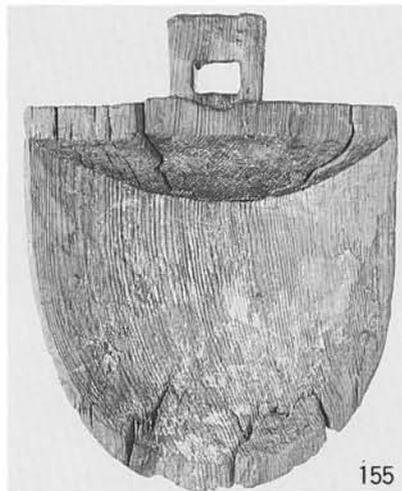


162

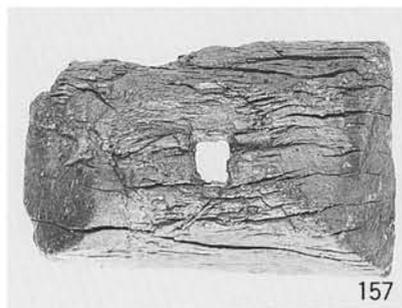
裏



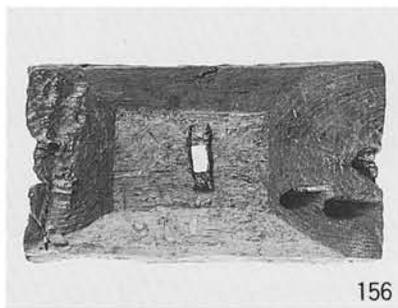
上から



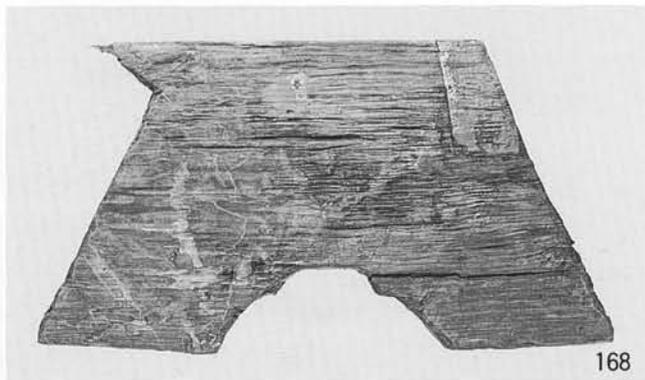
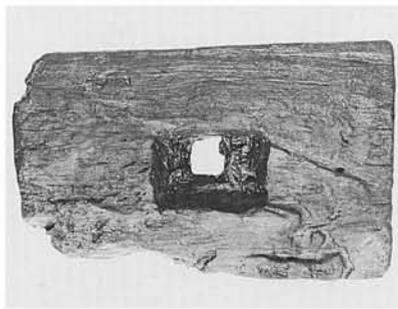
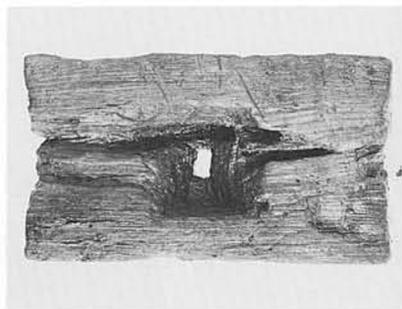
155



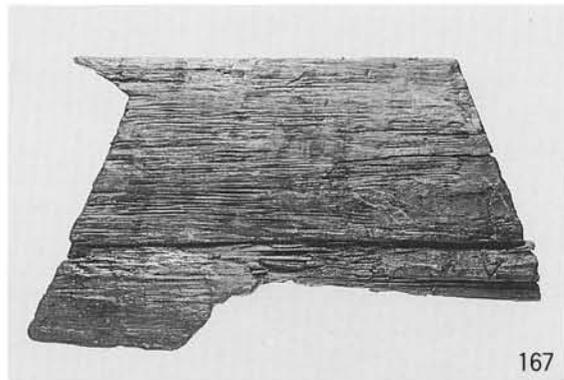
157



156



168



167

高賀遺跡大溝出土木製品

(148はS=1:8, 162はS=1:2, 他はS=1:6)

Ⅱ. 上野市才良

ざいりょう 才良遺跡

今年度調査区は、昨年度（平成元年度）の東側トレンチに続く南北に細長いA区と、その西側の小さいB区の2ヶ所の調査区がある。また、昨年度の東側トレンチから北へ連続する部分の立会い調査を行ったが、その部分をC区とし、その結果もあわせて報告する（位置関係は第Ⅲ-1図参照）。

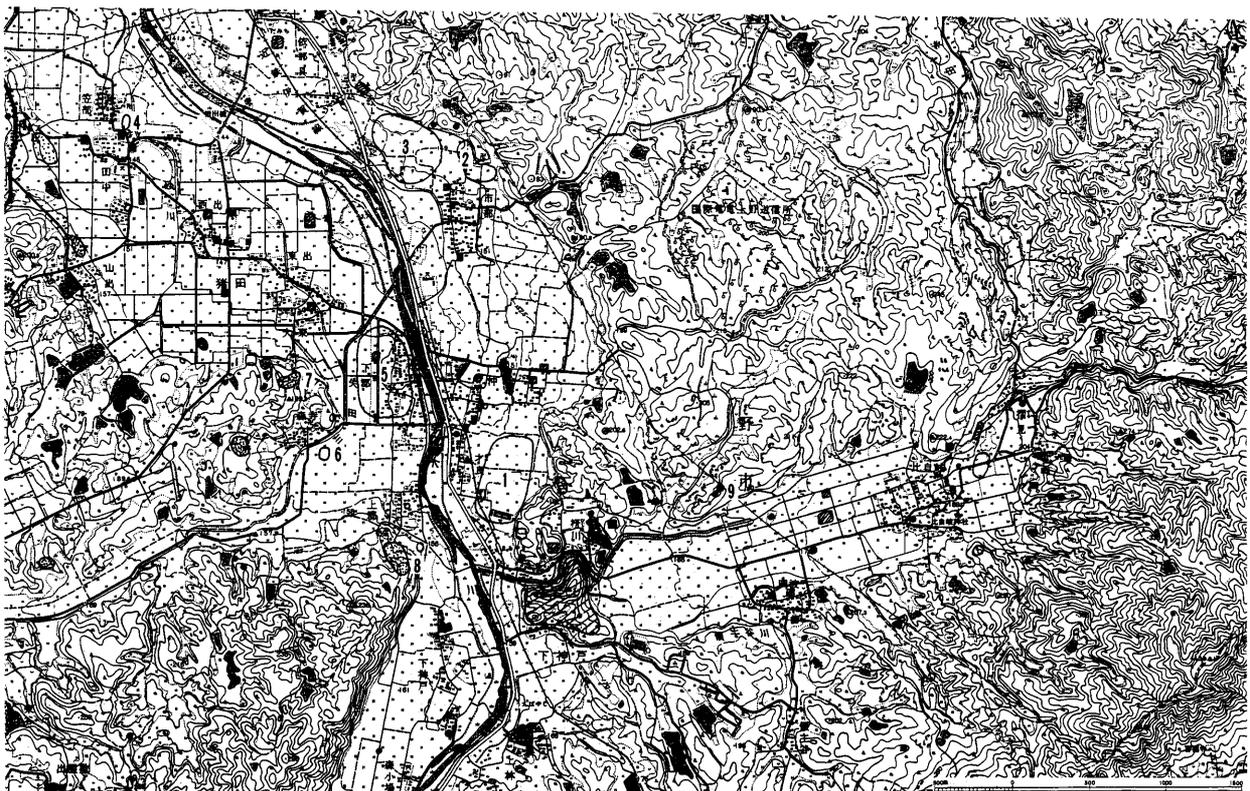
なお、当地域の歴史的環境については、昨年度と重複するため今年度は省略し、昨年度調査の成果概要と簡単な才良遺跡自体の研究史をのべるにとどめる。

才良遺跡は(1)、上野市立丸山中学校周辺一帯に広がる弥生時代後期から中世にいたる複合遺跡である。当地は、狭隘な神戸の集落を抜けて上野盆地中央部へ入ってすぐの木津川右岸の河岸段丘上にあり、東進して丘陵を越えると比自岐の小盆地へ至る。周辺には、東方2kmで著名な石山古墳、南南西へ2kmで浮田遺跡、2.5kmで高賀遺跡があり、丸山中学校東側の山上には帆立貝形古墳である観音寺古墳が所在

する。また、広い意味での才良遺跡に含まれるのであるが、丸山中学校西側の畑地には財良廃寺が存在し、古瓦が表採されている。なお、古くは伊賀国伊賀郡に属する。

この遺跡は昭和30年に宇佐晋一氏によって報告されており¹⁾、その段階ですでに丸山中学校敷地部分を中心とした場所での弥生時代後期の土器や瓦器の出土が報じられている。その後、同校修築に伴って昭和56年と57年に上野市教育委員会による調査が行われ、やはり弥生時代後期の土器が多数発掘されている²⁾。平成元年度の三重県埋蔵文化財センターによる調査は、ほ場整備事業に伴う排水路部分の調査であり、同校北側より真っ直ぐ北へ細長いトレンチをいれたが、その結果やはり弥生時代後期の土器を含む溝と瓦器を伴う中世の遺構群が確認された。

今年度の調査区は、昨年度からさらに北側へ続く部分である。



第Ⅱ-1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

(国土地理院「伊勢路」1 : 25,000から)

1. 遺構

(1) A 区

平安時代から鎌倉時代を中心とする遺構が検出されたが、調査区の幅の狭さに制約され全体形がわかる例は少ない。

SB 1 調査区南端で検出された。全体の規模は不明であるが、最小でも南北4間、東西2間はあり総柱建物と推定される。南北棟とした場合、棟方向はN10.5° Eである。

SB 2 全体形は不明であるが、最小でも南北3間はある。現況は建物の東面が出ているものと思われる。柱列にそって幅40cm程度の溝があるが、建物との関係は不明である。南北棟とした場合、棟方向はN11° Eである。

SD 3 **SB 2**の北側を東西方向に流れる幅1.5mの溝。さらに西北側で北流する溝があるが、同じ溝が未調査部分で直角に折れている可能性がある。瓦器片が出土している。

SZ 4 幅1.5m程で、埋土より瓦器が多く出土している。あるいは溝である可能性もある。柱穴等の遺構はこれより北側に集中しており、溝とすれば区画溝的な性格の強いものである。

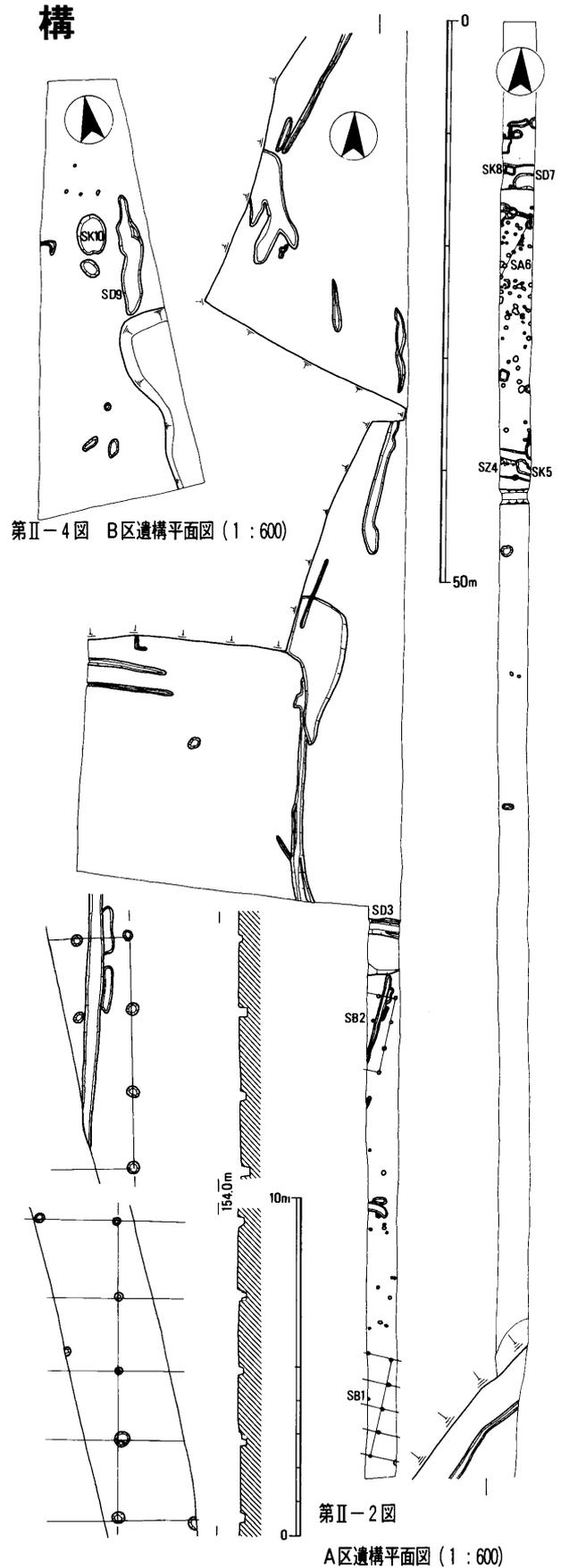
SK 5 **SZ 4**を切ってつくられた不定形の土坑であるが、東側は調査区外へ延びるため完掘していない。瓦器が出土している。

SA 6 南北方向2間の柱列ということから、規模は不明ながら東西に棟の主軸をおく掘立柱建物の梁行の柱穴である可能性もある。

SD 7 調査区北端を東西方向に流れる幅2m程の溝。主要遺構はすべてこの溝の南側にあるため、区画溝的な性格が強い。瓦器が出土している。

SK 8 **SD 7**と同地点にあった幅70cm×90cmの方形土坑。瓦器碗1個と瓦器皿2個があった。

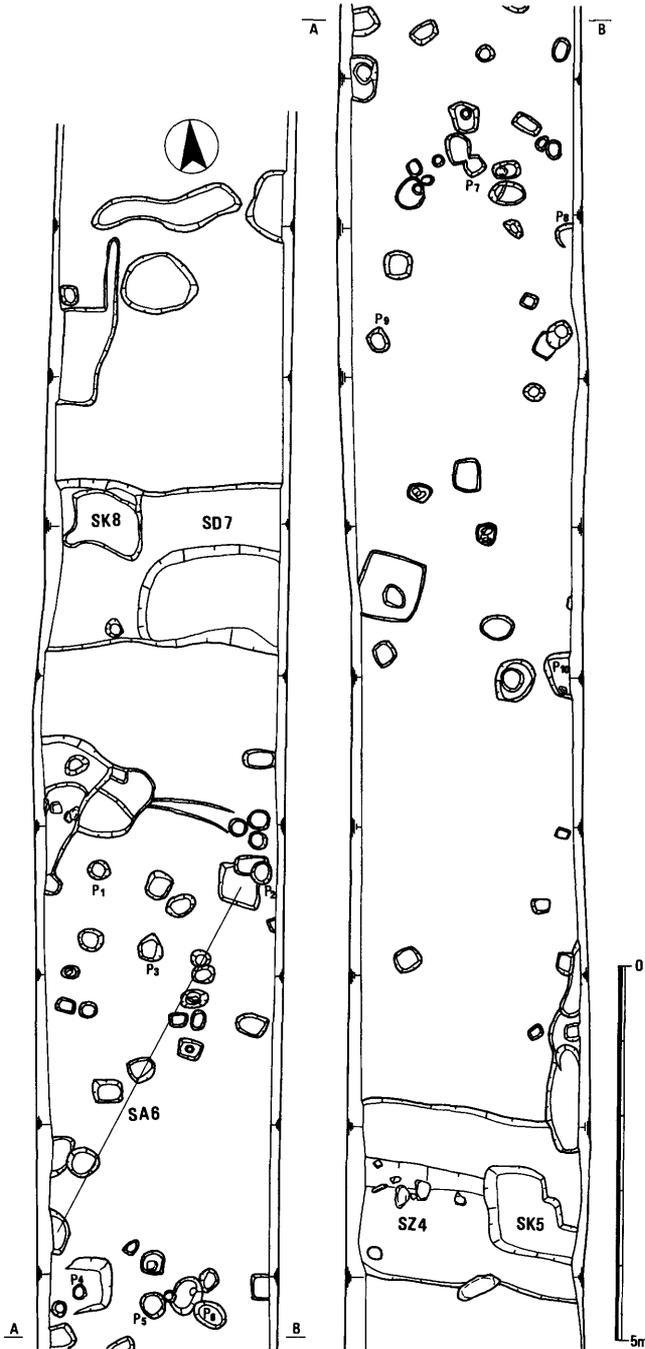
以上が主要遺構であるが、調査区北端には多くの柱穴があり、調査区の幅が狭いという制約のためその性格の不明なものが多い。このなかには、柱列としてはまとまらないものの完形の土器を出土した穴も多い（土器観察表の遺構Noと図とが対応）。



第II-3図 SB1、SB2実測図(1:200)

(2) B 区

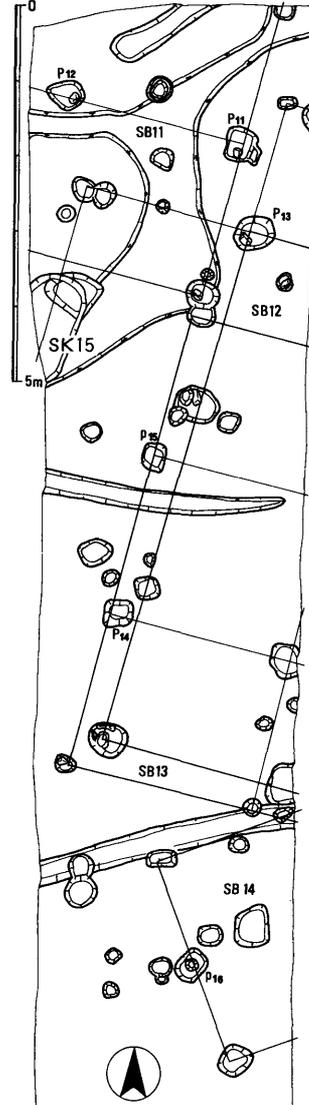
B区ではA区の遺構検出面に対応する面（第1検



第II-5図 A区北端部実測図 (1:100)

出面と仮称する)での遺構は検出できず、さらに深く掘り下げたところで再度遺構検出を試みた。その結果、僅かではあったが縄文時代後期に属すると考えられる遺構、遺物を確認した(この面を第2検出面と仮称する、第II-6図参照)。

SD9 幅1m、長さ4m、検出面から遺構最深部まで10cm程の小さい溝である。検出面の土より若干汚れており、やや粘性が強い。縄文土器がごく微量出土した。



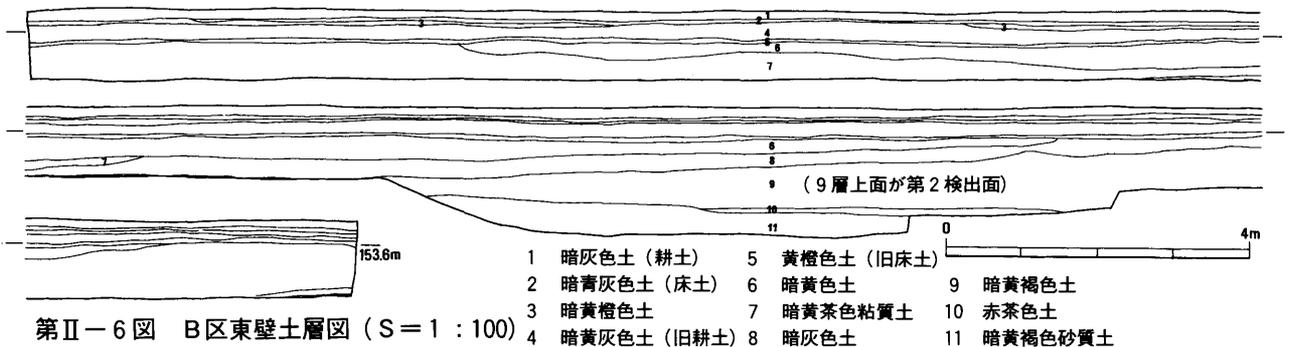
SK10 径1.5mほどの円形を呈し、検出面から遺構最深部まで10cm程度である。土器の出土はないが、SD9と同じ埋土であることとその層位的位置より縄文時代のものと判断される。

(3) C 区

本調査部分と同様、平安時代末~鎌倉時代にかけての遺構、遺物を検出したが、トレンチの幅が狭いため、建物の全体形を出すには至らなかった。

SB11 全体形は不明であるが、東西1間以上、南北2間以上の建物である。仮に南北方向を桁行とした場合、桁行2.1m等間、梁行2.4mである。柱穴から

第II-7図 C区遺構平面図 (1:100)



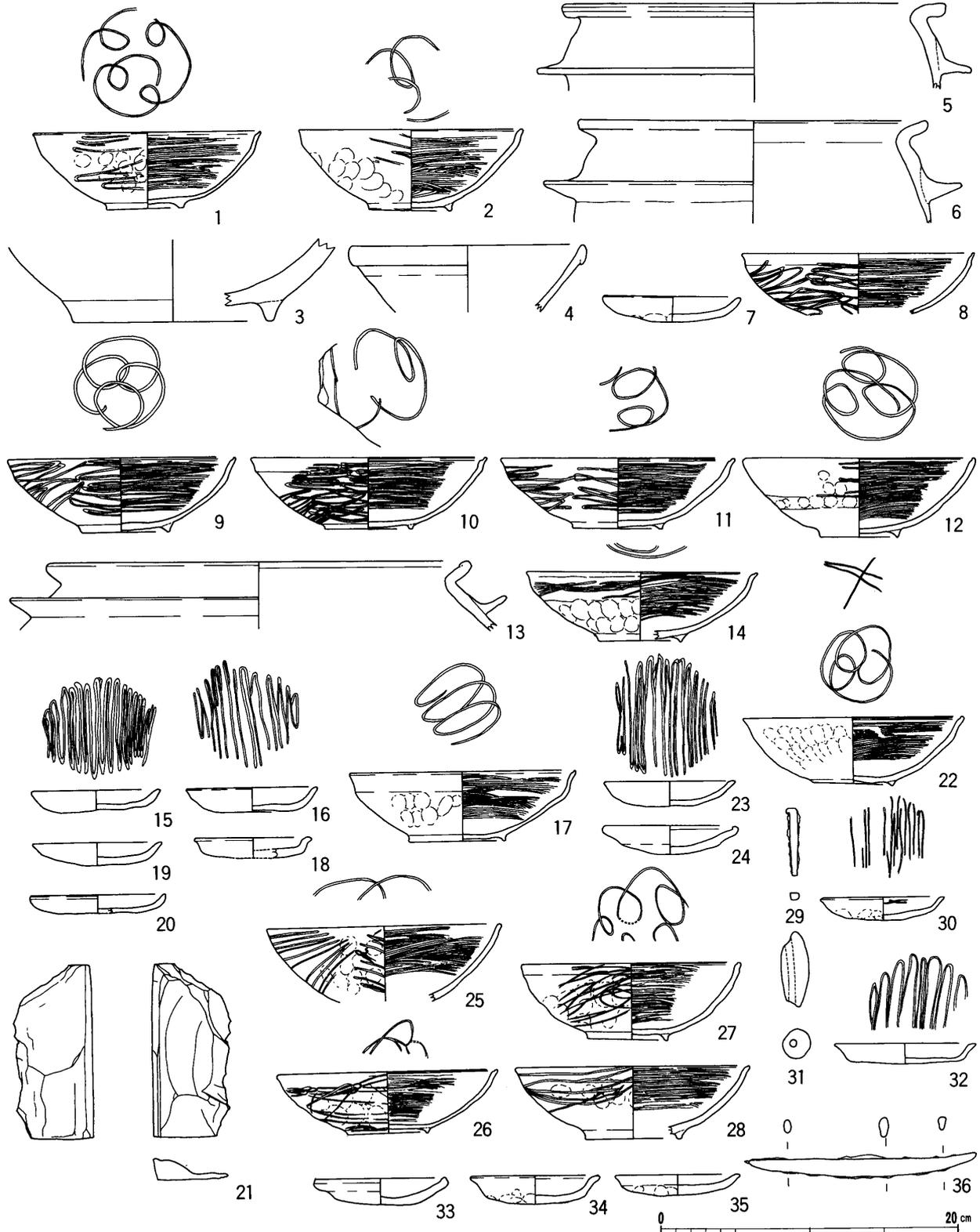
第II-6図 B区東壁土層図 (S=1:100)

土師器甕、瓦器が出土している。

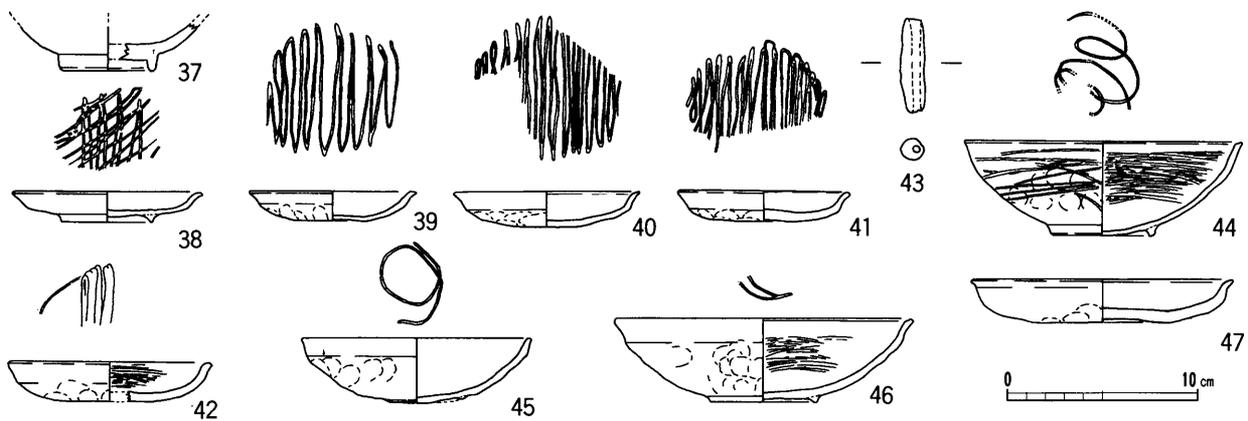
S B12 東西2間以上、南北5間以上の建物で、おそらく総柱建物になるものと思われる。南北方向を桁行とした場合、その柱間は南側より2.1m+2.4m+2.4m+1.8m、梁行2.4mである。最も北側の柱間

は幅が狭く、庇になる可能性も考えられる。柱穴から土師皿、瓦器が出土している。

S B13 東西1間以上、南北3間以上の建物である。仮に南北方向を桁行とした場合、桁行2.1m等間、梁行2.5mである。S B11から13は、同じ棟方向で、



第II-8図 A区遺構出土遺物

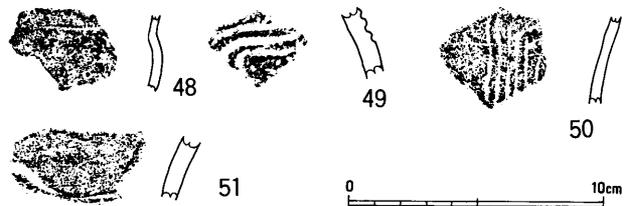


第Ⅱ-9図 A区包含層出土遺物

N14°である。柱穴より羽釜、瓦器が出土している。

S B14 東西1間以上、南北2間の東西棟の建物である。柱間は桁行1.8m、梁行1.5mで、他の3棟に比べてやや狭い。棟方向もN20°Wである。柱穴より瓦器皿が出土している。

S K15 西半分は調査区外へ延びるが、現況で南北1.4m、東西80cmを測る隅丸方形を呈する土坑。出土遺物として瓦器皿、土師器皿、刀子があり、中世



第Ⅱ-10図 B区出土遺物 (S=1:4)

の土塚墓である可能性が考えられる。

2. 遺物

今年度出土した遺物は、遺構・包含層ともに昨年多量の出土をみた弥生土器は出土せず、中世の遺物が中心である。個々の詳細は土器観察表に譲り、特徴的なものについて簡単に記す。

(1) A 区

S Z 4 出土土器 瓦器碗 (1~2)、白磁碗 (4)、陶器 (3)、土師器羽釜 (5~6) が出土している。白磁は玉縁の口縁部をもつ。羽釜はともに口縁部が大きく外側へ外反するものである。6の鏝部はやや上がり気味である。

S K 5 出土土器 瓦器碗 (8~12) と土師皿 (7) が出土している。瓦器碗はS Z 4 出土のものとは比べてやや浅く外開きになっている。12の底部外面にはヘラ記号がある。

S D 3 出土土器 羽釜 (13) と瓦器碗 (14) の2点だけを図示したが、この溝は破片ながら多くの瓦器が出土した。13は鏝が上向きについており、口縁端部は内側へ粘土を巻き込んでいる。14は外面のヘラミガキが粗になってきており、ユビオサエが顕著に

残る。

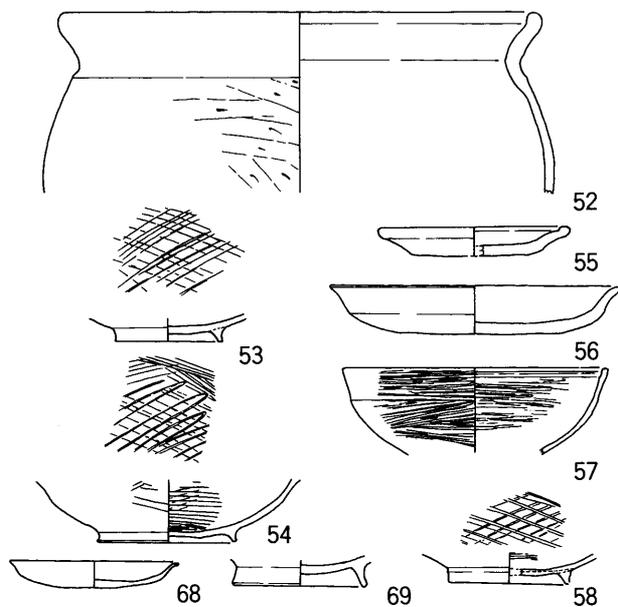
包含層出土土器 37~43はS X 4の直上から出土しており、このうちのいくつかはS X 4に伴うものかもしれない。38は瓦器皿であるがしっかりとした高台がついており、格子の暗文を施す。また、39~40は薄い、41~42は厚手である。45は暗文はあるものの内外面のヘラミガキが消失し、口縁部内面の沈線もない。偏平な高台が付いているが、高台では立たない。

(2) B 区

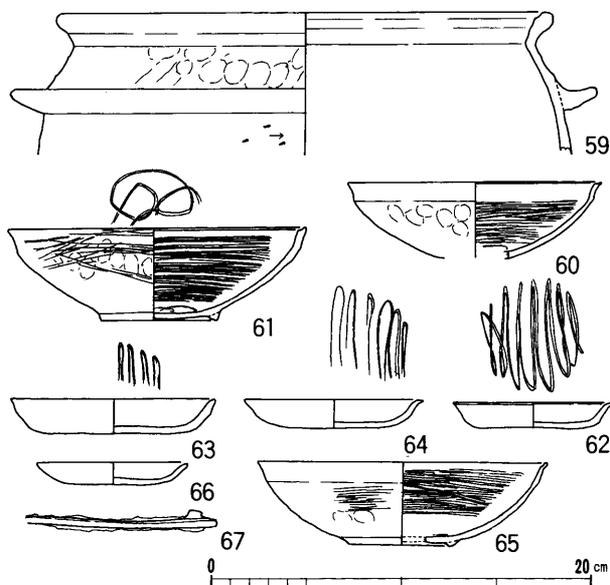
下層の縄文土器片4点を図示した。48~49はS D 9出土である。48は小形鉢の破片である。49は深鉢の肩部破片である。頸部は無文で、胴部には縄文(R L)が残る。これらは、後期中葉の北白川上層式と思われる。

(3) C 区

S B11柱穴出土土器 (52~54) 52は土師器甕で、体部外面ケズリ、内面ナデ調整を施し、口縁端部は丸



第II-11図 C区出土遺物



く肥厚する。53・54は瓦器底部で、高台は逆台形状に立ち、内面に格子状の暗文を施している。52, 53はP11、54はP12から出土した。

S B12柱穴出土土器 (55~58) 55は土師小皿で口縁端部が丸く肥厚している。56は土師皿で底部にユビオサエの痕跡がよく残る。57の瓦器碗は口径が14cmと比較的小さく、口縁部内面の沈線は端部よりやや下がったところに施されている。内外面のミガキは密である。58は瓦器碗底部であるが、57の続きと考えるには径が大きい。格子状の暗文を施し高台は逆台形状を呈する。すべてP13から出土した。

S B13柱穴出土土器 (59~62) 59は羽釜で、口縁部は外側へ屈曲して端部は丸くおさめ、鏝はやや上

向きに付く。内面はナデ調整であるが、外面は鏝をはさんで上はユビオサエ、下はケズリを施す。60の瓦器碗は、外面のヘラミガキが粗らになり、指頭痕が残る。61は60より小ぶりで、外面のヘラミガキがなく、指頭痕が顕著である。62は瓦器皿で底部に指頭圧が残る。60はP15、他はP14より出土した。

S B14柱穴出土土器 (63~64) 瓦器皿である。63は口縁部を丸くおさめるのに対し、64は上端部に面をもつ。両方共、P16の出土である。

SK15出土遺物 (65~67) 65は瓦器碗で、高台は低い逆三角形を呈する。67は鉄製品であるが、方形で小突起があり、釘と考えられる。

3. ま と め

才良遺跡の調査は排水路の調査区と面的調査区の極めて狭い部分の調査であったが、才良遺跡の性格をつかむうえでいくつかの重要な知見をえた。

今年度は南北に長い調査区にもかかわらず、昨年度に多量の出土をみた弥生時代の遺構・遺物は確認されなかった。従って、この時期の遺構は丸山中学校周辺を中心とし、あまり北へは広がらないことが推定される。

全体的に遺構密度は粗らであったが、B区の南端と北端やC区のように、平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺構群が部分的に集中している地点がみ

られた。このうち、B区北端の遺構群では、東西方向に走る南北の溝の間の範囲内で遺構が集中しており、B区南端の遺構群でもその北側に溝が走っていた。B区南端の遺構群の北側の溝と北端の遺構群の南側の溝とは約170mの距離がある。時期的には両群ともほぼ同じ時期であり、集落としては散村的な景観を示しているものとも考えられる。

今年度調査で特筆すべきは、遺構面が上下2層に分かれ、そのうちの下層が縄文時代の遺構面であることが確認されたことである。昨年度確認された弥生時代の遺構は中世の検出面と同じ面であった

が、今後の調査では、たとえ上層に遺構・遺物が確認されなくとも、下層に縄文時代の面がある可能性を念頭に入れる必要があろう。

遺物については、瓦器と共存関係にある甕や羽釜の出土があり、今後この地域の中世土器研究において貴重な資料を提示した。

(穂積裕昌)

[註]

(1) 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡調査概報」

『古代学研究12』 1955

(2) 西森平之「才良遺跡発掘調査報告―三重県上野市才良所在―」
上野市教育委員会 1983

(3) 本文中では触れられなかったが、第Ⅱ-8図36はほぼ完形の刀子である。出土遺構(P-6)は長径50cm程の長円形のピットであるが、中世墓に伴う土坑の可能性も考えられる。

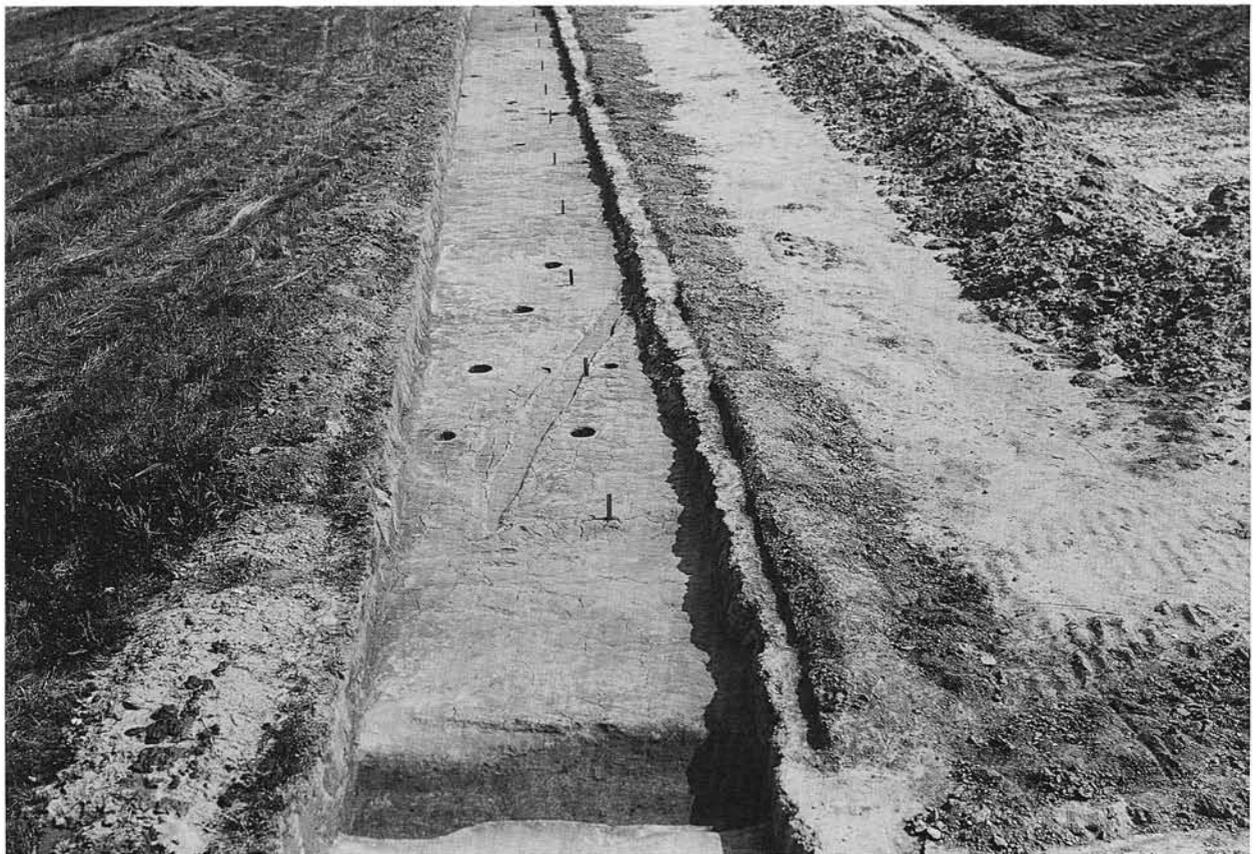
才良遺跡出土遺物観察表 (番号は実測図No.に対応)

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土(mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
1	瓦器 碗	SZ4	口径 15.2 高さ約 5.2	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ後ミガキ 外面指オサエ後ミガキ組	密	黒灰色	%	やや歪	3-3
2	〃 〃	〃	口径 15.0 高さ 5.5	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ後ミガキ	密	黒灰色 口縁付近一 部明褐色	一部欠	ラセン状のミガキ は器壁のミガキの 後	7-1
3	陶器 壺?	〃	口径 約13	内外面口クロナデ 座面高台ハソツケナデ	やや粗 1~3の石英長石多 含	白灰色	1/4		3-4
4	白磁 碗	〃	口径約15.4	内外面口クロナデ	密	灰白色	1/6	内外面釉	1-1
5	土師器 羽 釜	〃	口径約25.6	口縁ヨコナデ 内面板ナデ 外面ナデ	やや粗0.5程の長石 石英雲母含	外面-明褐色 内面-褐色	1/6		7-2
6	〃 〃	〃	口径約23.2	口縁ヨコナデ 内外面ナデ	やや粗 1 前後の石英 長石多含雲母含	明褐色 外面部黒暗褐色	1/4		1-2
7	〃 皿	SK5	口径 9.35 高さ 1.7	内面ナデ 外面ナデ、指オサエ	やや粗最大2.5 0.5~1の 石英長石雲母多含	淡黄褐色	ほぼ完形 口縁一部欠		9-3
8	瓦器 碗	〃	口径 15.6	口縁ヨコナデ 内面ナデ、ミガキ 外面指オサエ後ミガキ	やや密 1程の長石少含	暗灰色 基底灰白色	3/6	口縁歪 外面重焼のあと	5-1
9	〃 〃	〃	口径 15.1 高さ 5.0	口縁ヨコナデ 内面ナデ、ミガキ 外面指オサエ後ミガキ	密 1 前後の長石少含	暗灰色 素地灰白色	1/6 口縁約1/6 高台約1/6欠		4-2
10	〃 〃	〃	口径 15.8 高さ 4.85	口縁ヨコナデ 内面ナデ、ミガキ密 外面指オサエ後ミガキ座部ナデ		黒灰色	3/6		4-3
11	〃 〃	〃	口径 15.6 高さ 4.75	口縁ヨコナデ内面ナデ、ミガキ密 外面指オサエ後ミガキ粗座部ナデ、指 オサエ	密含 0.5前後の長石雲母少 含	内面-明青灰色 外面-暗灰色~明灰 色	3/6	歪 素地灰白色	4-1
12	〃 〃	〃	口径 15.4 高さ 5.35	口縁ヨコナデ内面ナデ、ミガキ密 外面指オサエ後ミガキ底部ナデ指オサ エ	やや密0.5~1.5前後の長石 石英少	灰色~暗灰色 素地 灰白色	3/6 口縁約1/6残存 底部全部残		4-4
13	土師器 羽 釜	SD7	口径 28.0	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面 板ナデ?	やや粗	淡黄褐色	1/6		12-1
14	瓦器 碗	〃	口径 15.7 高さ 4.7	口縁ヨコナデ 内面ナデ ヘラミガキ 外面 ヘラミガキ 指オサエ 底部ヨ コナデ	密 雲母少	暗灰色	3/6口縁1/6	外面のヘラミガキ は密であるが磨耗 のため不明瞭	2-4
15	〃 皿	SK8	口径 9.1× 8.6楕円 高さ約 1.5	口縁ヨコナデ 内面ミガキ 外面オサエ	やや密 1程の長石含	黒灰色	完形	口縁2対歪	9-8
16	〃 〃	〃	口径平均 8.8 高さ約 1.7	口縁ヨコナデ 内面ミガキ 外面指オサエ、ナデ	密	黒灰色	口縁一部欠	やや歪	1-3
17	〃 碗	〃	口径平15.2 高さ 4.7	口縁ヨコナデ 内面ナデ、ミガキ 外面指オサエ 底部ナデ	密 若干砂っぽい	黒灰色	3/6	外面の一部カー ボンのはがれ	3-1
18	土師器 皿	SK8	口径 7.6 高さ推定 1.4	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面ナデ? (ハケメ状のキズアリ)	やや粗、砂っぽく雲母含	明褐色 外面一部淡黒褐色	口縁1/6		3-2
19	〃 〃	P-3	口径 8.6 高さ 1.6	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面ナデ ユビオサエ	密0.5程の長石少 雲母多含	灰黄褐色 部分的に黒ずむ	3/6	歪大	6-3
20	〃 皿	〃	口径 9.0 高さ 1.25	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面ナデオサエ	密	灰白色	1/6		6-4
21	〃 硯	〃	12×5以上			暗灰色	一部欠		6-5
22	瓦器 碗	SA6中央柱埋土	口径 14.8 高さ約 4.5	口縁ヨコナデ 内面ナデ ヘラミガキ 外面指オサエ、ナデ 底部オサエ、ナ デ	密	暗灰色	%	歪若干	2-2
23	〃 皿	〃	口径 8.7 高さ 1.7	口縁ヨコナデ 内面ナデ ミガキ 外面ナデ、オサエ	密 雲母少	暗灰色	ほぼ完形		6-2
24	土師器 皿	〃	口径 8.8 高さ 1.95	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面指オサエ	並 砂っぽい 1 前後の雲母 長石石英多 2 程の長石含	淡黄褐色~橙色	1/6		5-3
25	瓦器 碗	P-8	口径 15.6	口縁ヨコナデ 内面ナデヘラミガキ 外面指オサエナデ ヘラミガキ	密 雲母少	暗灰色	3/6		6-1
26	〃 〃	P-7	口径 14.8 高さ 4.7	口縁ヨコナデ 内面ナデ ミガキ 外面指オサエ後ミガキ 底部ナデ	密	黒灰色	1/6弱		9-7
27	〃 〃	P-10	口径 14.8 高さ 5.2	口縁ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面指オサエ後ミガキ 外面ナデ	密	内面暗灰色 外面灰色	1/6弱		9-4
28	〃 〃	P-4	口径約15.6 高さ 4.9	口縁ヨコナデ 内面ナデヘラミガキ 外面指オサエ後ミガキ 底部ナデ	密	暗灰色	3/6		2-3
29	鉄 釘	P-9	長さ 幅 4.8 0.8				先端欠		9-6
30	瓦器 皿	〃	口径 8.4 高さ 1.6	口縁ナデ 内面ミガキ 外面指オサエ	やや密 0.5程の長石 雲母含	淡黄褐色	完形	ヨコ方向のミガキ ほとんど磨滅	9-5

No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土 (mm)	色調	残存度	備考	実測 No.
31	土錘	SD3	5.1×1.9	手づくね	並 最大1程の長石 石英 5大の小石泥	褐色	完形	重さ約16g	5-5
32	瓦器 皿	"	口径 9.6 高さ 1.85	口縁 ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面 指オサエ	密	灰白色～灰色	1/2		5-4
33	土師器 皿	P-5	口径 8.7 高さ 1.8	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ 外面 指オサエ	やや密 砂っぽい0.5～2の 長石 石英 雲母含	淡黄褐色～淡赤褐色	口縁端部少欠		5-2
34	土師器 皿	P-1	口径 8.8 高さ 1.9	口縁 内面 ナデ 外面 指オサエ	密 ～1長石雲母含	内面 淡褐色 外面 暗褐色	口縁欠		9-2
35	土師器 皿	P-2	口径 8.4 高さ 1.4	口縁 内面 ナデ 外面 指オサエ ナデ	密 ～1の長石雲母含	淡褐色	口縁欠	外面粘土接合痕	9-1
36	刀子	P-6	長さ 15.4 幅 1.2				ほぼ完形		8-2
37	白磁 碗	包含層 (SZ4上 面)	底径 4.8	内外面ロコナデ後軸 底部ケズリ	密	灰白色	底部弱残		10-2
38	瓦器 高台 付皿	" "	口径 10.0 高さ 1.65	口縁 ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面 高台ハリツケ後ナデ			底部弱残		10-3
39	" 皿	" "	口径 8.75 高さ 1.6	口縁 ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面 指オサエ	密 長石 雲母微粒含	外面 黒灰色 内面 黒灰色～灰色	完形		10-5
40	" 皿	" "	口径 9.8 高さ 1.8	口縁 ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面 指オサエ	密	黒灰色～暗灰色	弱	みがき1mm前後	10-6
41	" 皿	" "	口径 9.0 高さ 1.6	口縁 ヨコナデ 内面ナデ後ミガキ 外面 指オサエ	やや密	淡灰色～灰色	口縁欠		10-4
42	瓦器 皿	" "	口径 10.7 高さ 2.1	口縁 ヨコナデ 内面ナデ ミガキ 外面 指オサエ	やや密 0.5程の長石含	灰色 (断面灰色)	1/2	みがき幅1mm 弱内部底1.5mm	10-7
43	土錘	" "	5.0×1.2		やや密 0.5～1の石英 長石 雲母含	淡黄灰色	完形		10-1
44	瓦器 碗	" "	口径約14.6 高さ約5.0	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ ミガキ 外面指オサエ後ミガキ 底部 ナデ	密	黒灰色	1/2	内面ミガキ幅1.5mm 内面ナデは工具に よる	8-1
45	" 碗	" "	口径約12.0 高さ 3.4	口縁 ヨコナデ 内面ナデ 外面指オサエ	密	黒褐色	完形	高台部分痕跡 程度あり	7-3
46	" 碗	" "	口径 14.6 高さ 4.6	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ ミガキ 外面指オサエ 底部ナデ	密 母雲微粒含	黒灰色	1/2	暗文磨滅のため不明瞭	11-1
47	土師器 皿	" "	口径 13.8 高さ 2.3	口縁 ヨコナデ 内面ナデ 外面指オ サエ 外面底部ナデ	やや密 0.5～2.0の石灰 長石 雲母含	黄褐色	1/2		11-2
48	縄文土器 鉢	SD9	—	頸部ナデ 胴部縄文RL	～2mm長石・雲母等含	灰黄色	破片		13-1
49	" 深鉢	"	—	沈線 縄文	～2mm長石・雲母等含	淡褐色	"		13-2
50	" 深鉢	B区包含層	—	条線	～2mm長石・雲母等含	灰色	"		13-3
51	" 深鉢	"	—	内面ナデ	～2mm長石・雲母等含	灰色	"		13-4
52	土師器 甕	SB11 P-11	口径約24.8	口縁 ヨコナデ 内面 ナデ 外面ケズリ	～2長石雲母多	暗褐色 内面 淡褐色	口縁欠	スス付着	1-1
53	瓦器 碗	" "	底径 5.7	内面 底部 格子ミガキ	密	淡灰色	底部のみ (但し一 部欠)		1-2
54	" 碗	" P-12	底径 7.4	内面 底部 格子ミガキ	密	淡灰色	底部弱		2-3
55	土師器 皿	SB12 P-13	口径約9.6 高さ約1.5	口縁ヨコナデ 内面 ナデ 外面ナデ、オサエ	～1雲母 長石 多	淡灰褐色	口縁欠		3-4
56	" 皿	" "	口径約13.2 高さ約2.5	口縁ヨコナデ 内面 ナデ 外面ナデ	～1長石 クサリ礫等多	淡褐色	口縁欠		3-3
57	瓦器 碗	" "	口径約14.0	内外面ミガキ	密	暗灰色	口縁欠	口縁内面の沈線 端部よりやや下る	3-6
58	" 碗	" "	底径 6.4	内面底部	密	暗灰色	底部弱		3-7
59	土師器 羽 釜	SB13 P-14	口径約25.4	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面 ヨコナデ、ケズリ	～2雲母 石英 長石 多	淡褐色	口縁欠		3-1
60	瓦器 碗	" P-15	口径約13.4	口縁ヨコナデ 内面ミガキ 外面 オサエ	密	暗灰色	口縁欠	内面ミガキ下部は 粗	1-3
61	" 碗	" P-14	口径約15.8 高さ 4.9	口縁ヨコナデ 内面ミガキ 密 外面 オサエ後ミガキ粗	密	暗灰色	口縁一部欠		3-2
62	" 皿	" "	口径 8.4 高さ 1.4	口縁ヨコナデ 内面ミガキ 外面指オサエ	～1の長石粒含	灰色	完形		3-5
63	" 皿	SB14 P-16	口径 10.8 高さ 1.8	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面ナデ	雲母微粒含	黒灰色	口縁欠	内面剝離大	2-1
64	" 皿	" "	口径約9.4 高さ 1.5	口縁ヨコナデ 内面ナデ 外面ナデ 底部オサエ	雲母微粒少	黒灰色	口縁欠		2-2
65	" 碗	SK15	口径約16.4 高さ 4.4	口縁ヨコナデ 内面ナデ ミガキ 外面オサエ後 ミガキ	密	灰色	口縁欠		1-5
66	土師器 皿	"	口径 8.0 高さ 1.2	ナデ 底部オサエ	～2石英 雲母 長石多	淡黄褐色	完形		1-4
67	鉄釘	"	長さ9.8(残) 巾 0.5				先端欠		1-6
68	土師器 皿	C区包含層	口径 9.0 高さ 1.4	口縁ヨコナデ 内面ナデ 底部オサエ	～2石英 長石 雲母 含	淡褐色	ほぼ完形 口縁一部 欠		2-4
69	黒色土器 碗	"	底径 7.0	ナデ	～3長石・雲母 微粒含	暗黄灰色	底部のみ		2-5



A区全景（北から）



SB2とSD3（北から）



B区全景 (北から)



C区全景 (北から)

Ⅲ 上野市才良・沖 かいのし 貝野氏館跡・高田氏館跡 たかだ

1. はじめに

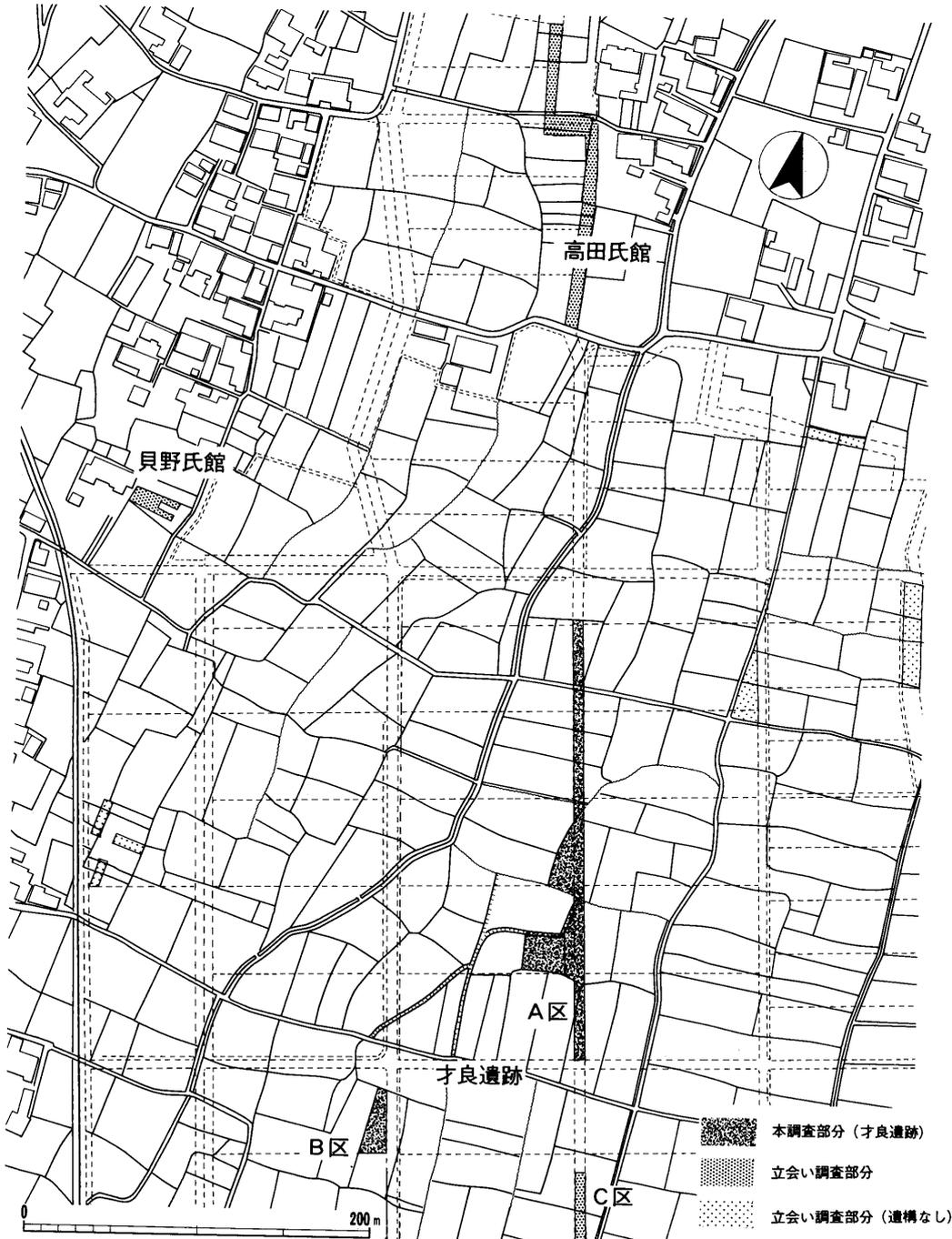
平成2年度県営ほ場整備事業に伴い、上野市才良及び沖地区で発掘調査を行った。このうち、才良地区は大きく才良遺跡に含まれるのであるが、才良遺

跡で遺構、遺物がでた地点についてはすでに報告した^①。それ以外の地点で遺構・遺物が確認されたのは今回ここで報告する貝野氏館跡と高田氏館跡だけ

であった。したがって、遺構・遺物が確認できなかったトレンチは位置を示すにとどめ（トレンチ配置図参照）、遺構等を確認した貝野氏館跡と高田氏館跡について報告する。

貝野氏館跡は才良地区と沖地区の境界に近い上野市才良字東浦499～471に所在し、高田氏館跡は上野市沖字深町に所在する。これらの遺跡では、館跡のすぐ脇を水路が通ることとなり、堀跡等の館関連遺構群がそれにかかることが予想されたため、発掘調査を行った。このため、平成2年9月11日から発掘調査を実施したが、三回にわたる台風の直撃をうけ困難をきわめ、約1ヶ月の期間を要した。

調査にさいしては、上野耕地事務所、上



第三-1図 才良・沖地区トレンチ配置図 (S=1:4,000)

2. 歴史的環境

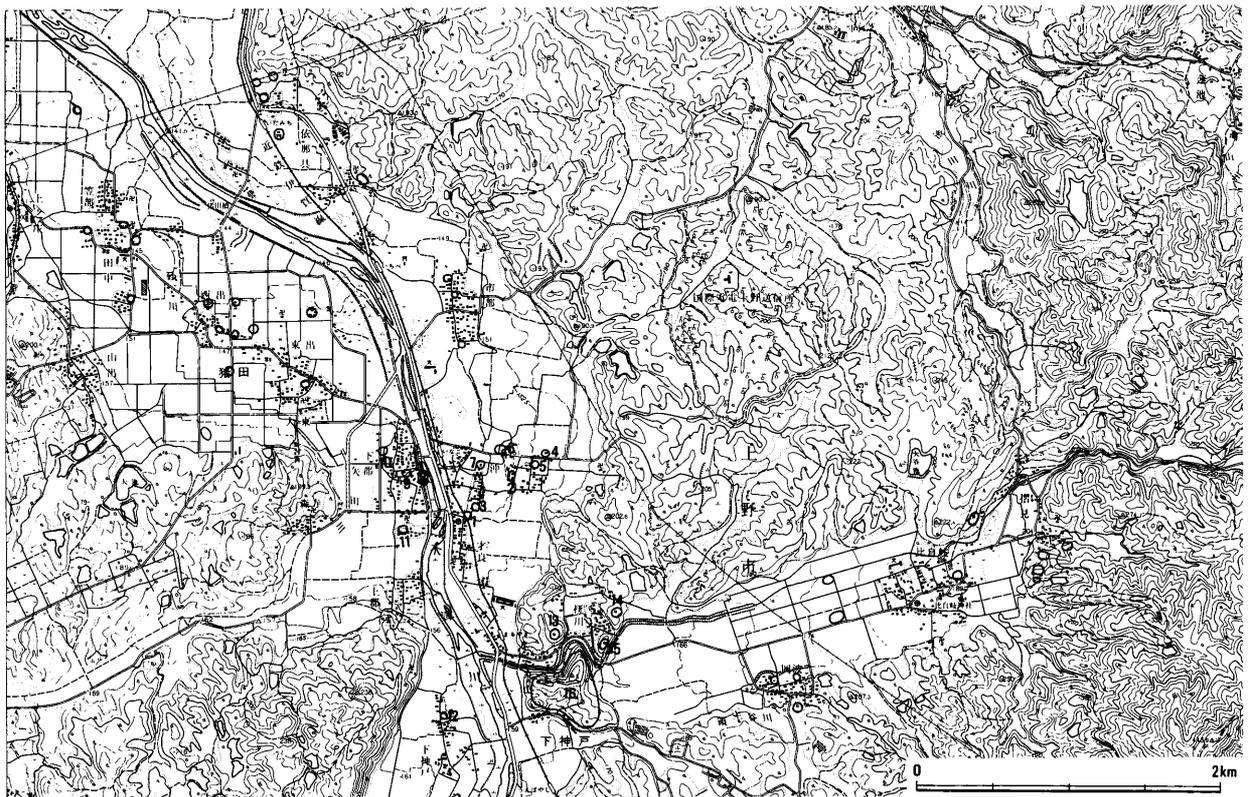
貝野氏館跡(1)と高田氏館跡(2)は、地区は異なるもののともに木津川右岸の沖積地に立地している。この地域には、沖地区で6ヶ所、川をはさんだ対岸の下郡地区で3ヶ所の館跡が確認されている⁽²⁾。また、現在の行政区域では才良地区に属する貝野氏館跡も、城館の分布からは、当時はより沖地区の館跡群との関係が深いことが考えられる。これらの館跡は、いずれも規模が100m以下のものであったと考えられ、伊賀の中世城館の規模としてはごく通常のものである。こうした小規模な城館が同一地域内に群在する状況が伊賀地域の城館分布のあり方として一般的なものである⁽³⁾。

伊賀地域には総数約550もの中世城館が確認されている⁽⁴⁾。このうち、盆地部に存在するものの多くが『館』と呼ばれ、山間部に存在するものについては『城』と呼ばれることが多いが、いわゆる「詰め城」的な存在を除き、丘陵・山間部では『城』といっ

ても機能的には館的な居住性を重視したものが、当初の姿であったと思われる。

多数の城館が存在する背景として、中世の伊賀では有力な大名勢力が成長しないかわりに、在地小領主が多数存在したことがあげられる。彼らは横に連合し最終的には惣国一揆体制をとるまでになる⁽⁵⁾。

こうした体制は、全国統一を進める織田勢力の伊賀侵攻によるいわゆる「天正伊賀の乱」まで続く。才良地区の南側の下神戸地区に伊賀地方最大の中世城館である丸山城(16)が存在するが、丸山城は伊勢の北畠氏により伊賀侵攻に際して築城されたとの伝承をもち⁽⁶⁾、縄張りの特徴からも織豊系城郭の特徴が指摘されている⁽⁷⁾。天正の乱以降、伊賀は近世へと進んでいくが、丸山城はそれ以前の伊賀の一般的な城館の規模は隔絶したものがあり、権力基盤の差を感じる。丸山城の築城は、伊賀の近世の幕開けを象徴するものといえよう。



第Ⅱ-2図 遺跡位置図(城館のみ、S=1:50,000国土地理院「伊勢路 1:25,000から」)

3. 貝野氏館跡

調査区の基本層序は、第1層が耕作土、第2層が黒色土、第3層が黒褐色土、第4層に暗茶色礫等の黄色系の砂質土が一定せず存在している。このうち、第3層は調査区東半しか存在せず、茶の根を多く含んでおり、茶を植えるために運んできた客土と思われる。第4層は遺物は少ないながらも包含層で、遺構は第5層上面で検出される。第5層は安定しておらず、礫が多く木津川の旧河道の可能性もある。

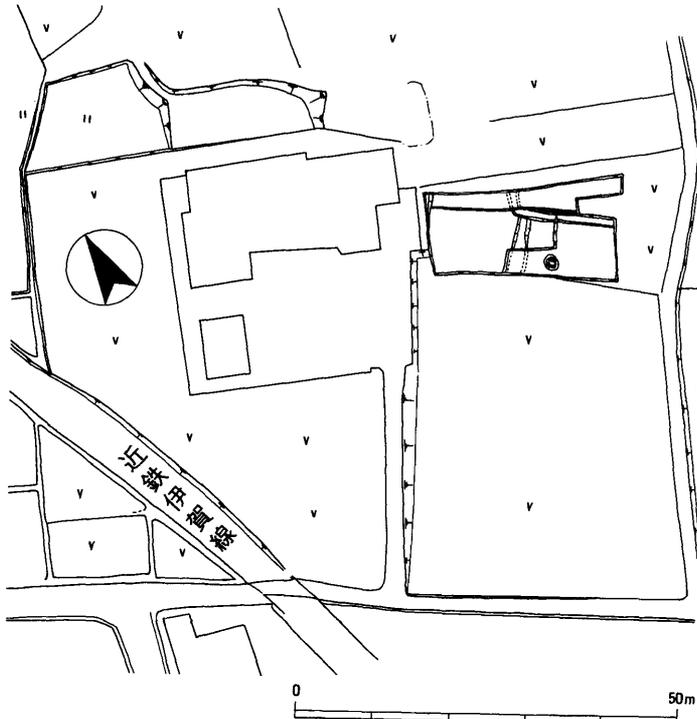
(1) 遺 構

SD1 調査区西端で検出された南北方向の溝であるが、検出できたのは溝の東肩の部分のみでその

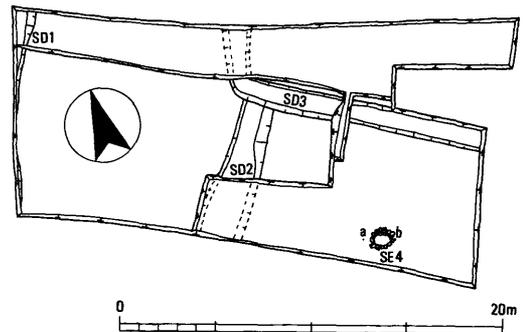
大部分は調査区外（西側、館推定部分）に延びる。当初このあたりに館に伴う堀の存在が想定されていたが、検出できた分の土層をみれば掘りであったことを窺わせる粘質土は存在していない。ただ、この部分の上の第4層の包含層は礫を含まず、やや粘性をもった土であり、あるいはこれが堀である可能性も残る。その場合、他の遺構と検出面が異なることになるが、それについては他の遺構とは時期が異なる（つまり、より新しいもの）と考えれば矛盾するものではない。しかし、堀とするには幅が広く、その可能性は薄い。SD1からの出土土器はなく、所属時期は不明である。

SD2 幅約1~2.5m、検出面からの深さ約20~40cmの南北方向の溝で、SD3に切られている。出土遺物がなく、時期はSD3以前としかいえない。

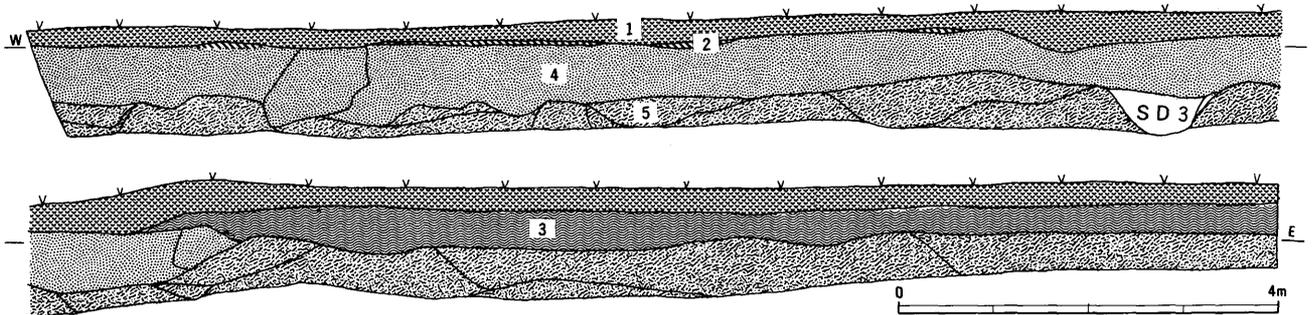
SD3 幅約1.3m、検出面からの深さ約40cmの溝である。南流してきた溝がほぼ直角に向きをかえ東流する。SD2を切っている。平安時代の遺物が出土している。



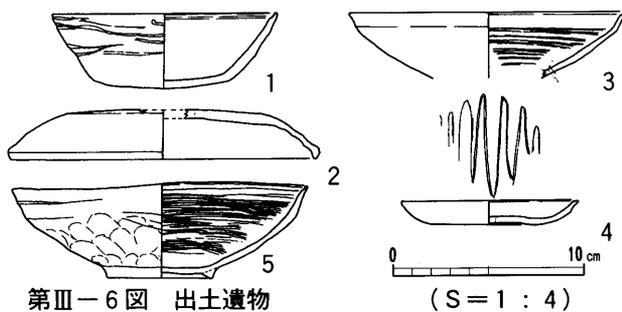
第Ⅲ-4図 調査区位置図 (S=1:1,000)



第Ⅲ-5図 遺構平面図 (S=1:400)



第Ⅲ-3図 トレンチ北面土層断面図 (S=1:80)



第Ⅲ-6図 出土遺物

(S=1:4)

SE4 掘形直径2.5m、本体幅約1.4m、検出面からの深さ1.5mの石組みの井戸で、円形プランを呈する。最大50cm弱までの大きさの石を使用している。埋土より瓦器が出土しており、鎌倉時代のものと思われる。検出面から約1.4m掘り進んだところで多量の湧き水があり、完掘できなかった。

(2) 遺物

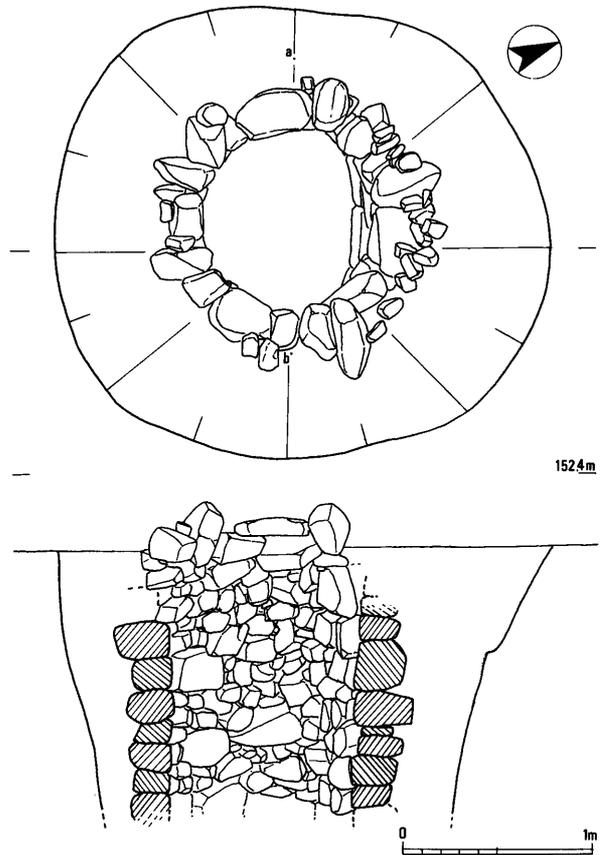
SD3 出土遺物 (1~2) 1は土師器碗である。口縁部内面に沈線があり、体部外面に粗いミガキを施している。2は須恵器坏蓋である。

SE1 出土遺物 (3~4) 3は瓦器碗である。器高が低くなり、外面のヘラミガキがなく指頭痕が顕著に残っている。4は瓦器皿である。口縁部上端にヨコナデによる面をもつ。

5は包含層出土の瓦器碗で、外面のヘラミガキは極めて粗らながら残っているが、指頭痕も顕著に残る。3に比べて器高がやや高く、内面のミガキも密であり、若干古い時期の所産であろう。

(3) 小 結

館跡と推定されている部分のすぐ東隣を発掘したが、一般に伊賀の中世城館の所属時期とされる室町期の遺構は確認できず、それ以前のもの为主体を占める。明確に館に伴うと思われる堀の存在も、調査区内では確認されなかった。ただ、調査区の西端を南北に走る溝(SD1)が若干その可能性を残すものである。また、遺構確認面が現地表より80cm程も低く、館に伴う時期の遺構は後世の開墾でとばされ、深いところにあったそれ以前の遺構だけが残ったことも考えられる。



第Ⅲ-7図 SE1 実測図 (S=1:40)

この調査に伴って、館跡推定地の平板測量を実施した(第Ⅲ-4図)。この結果、当初土塁の残存と思われていた東北隅の藪の部分は、意外に高まりがなく低平で、地元の話でも藪自体新しいものということであった。したがって、この部分は後世一見「土塁」状になったものと思われる。それに対し、家屋の北側の田は低く下がっており、藪の部分も含め北側の堀であった可能性が高い。また、家屋に続く西側の畑とさらに西側に続く田の間は1m程度の段差があり、館跡の西の境を示しているものと思われる。南側についてはだらだらと低くなってきており、境が明瞭でない。東側は発掘区であるが、先にみたとおり明確に館跡に伴う遺構は検出されなかった。さらに東側には段差も存在するため、現状では不明といわざるをえない。SD1を東側の堀の一部と考えると、発掘区のほとんどが館外になり、発掘区にその時期の遺構がないことも説明がつくが、SD1を堀と断定するには至らなかった。

4. 高田氏館跡

排水路部分の幅3.5mのトレンチ調査であった。
館跡と推定されている部分の西隣を南北に発掘し、

(1) 遺 構

SD1 瓦器等が混じる褐色砂をベースとし、それに掘り込んだ南北溝である。確認できた長さは95mに及び、検出面からの深さは最深部で55cmである。溝の西肩から中心付近迄は検出したが、東肩はトレンチ外へ延びるため検出していない。埋土は有機物を多く含んだ粘性の強い褐色土である。埋土より、信楽産摺鉢及び甕等の土器、陶磁器類のほか、木製のオオコが出土した。本来は溝の土層図を取るべきであったが、多量の湧き水と三度にわたる台風の襲

1本の南北溝を確認した。

来のためトレンチが崩壊、水没し、遺憾ながら果たせなかった。

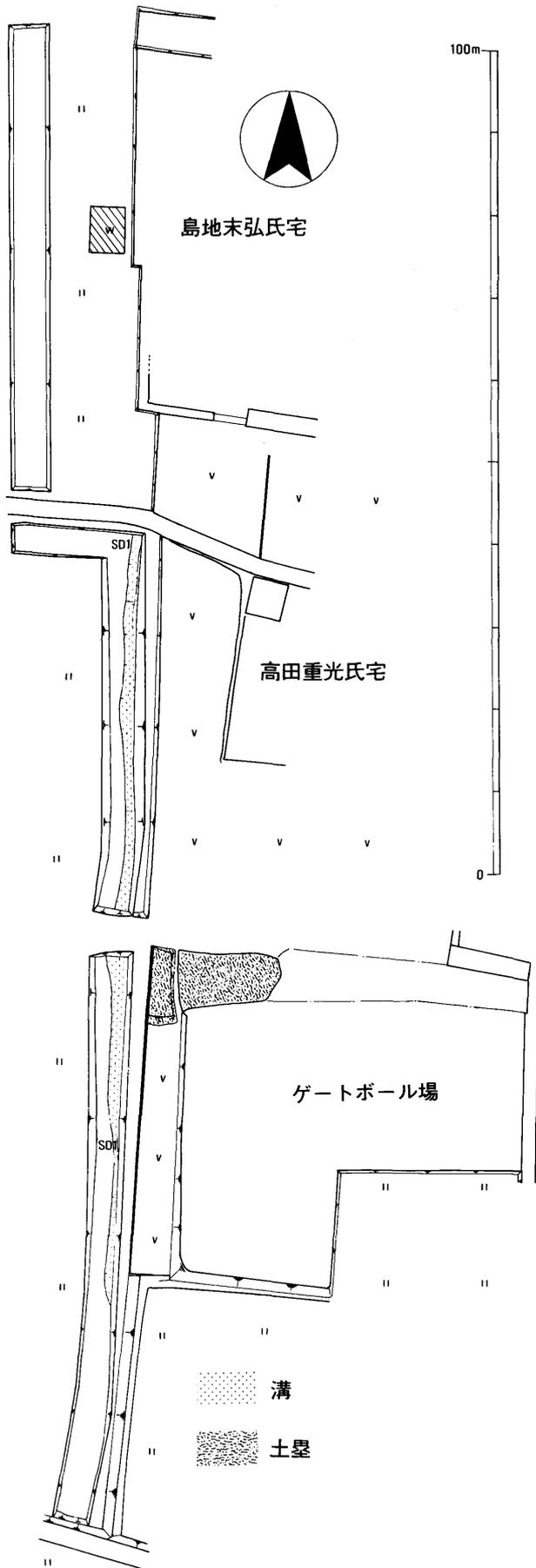
(2) 遺 物

SD1出土遺物(1~8) 1~2は青磁である。1は内面と外面、高台外面まで淡緑色の釉がかかっているが、底部内側へは及んでいない。内面に印刻がみられる。2は高台の内側まで淡緑色の施釉があるが、底部の高台を除く部分と体部内面の中心部は施釉されていない。どちらも、龍泉窯系の青磁である。3は灰色を呈する甕の口縁部で、口縁端部が丸



第三-8図 調査区位置図 (S=1:2,000)

(S=1:200)



第Ⅲ-9図 高田氏館遺構平面図 (S=1:800)

くおさめられている。常滑産の可能性はある。4は信楽産の甕の口縁部である。口縁端部が欠損しているが、内面に明瞭な段をもつ。5は瓦製の甕の口縁部であるが、口径を復元するには至らなかった。口縁上端面にヨコナデによる面をもつ。6は鏝の部分欠損しているものの、瓦製の羽釜であるが、同じく口径を復元するには至らなかった。7と8は信楽産の摺鉢であるが、別個体である。7の口縁部は上端面がほぼ平坦であるが、若干緩く膨らんでいる。8は体下半部が残る。一単位4本の筋目を持ち、内面の磨耗が激しい。

包含層出土遺物(9~12) この包含層はSD1によって切られており、遺物もすべてそれ以前の時期である。

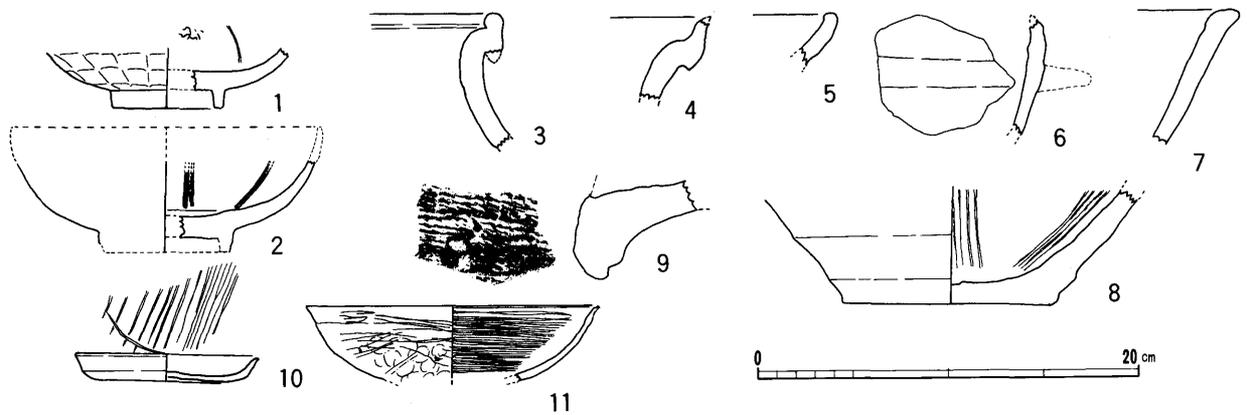
9は道具瓦片である。焼成は不良で、薄灰色を呈する。外面に縄タタキをもつ。10は瓦器皿であるが、いぶしがされておらず、淡黄色を呈する。ジシクザクの暗文のうゑに1条の横ミガキがある。11は瓦器碗である。外面のヘラミガキは粗らで、指頭痕が顕著に残る。

(3) 小 結

線的な細長い調査区であったが、1条の溝を検出することができた。これは、館に伴う堀とするのに何ら矛盾のないものである。しかし、この溝の総延長は現況でも95mあってさらに北へ延びてるようで、一般的な館を一つ想定するには若干規模の大きいものである。

当初館跡は、現高田重光氏宅の南前の畑が推定されていた。しかし、今回の調査で溝はさらに南側の現ゲートボール場のところまで続いていることが判明した。その溝は、カーブの状況から、その南端で東側へ屈曲するらしいことが想定される。そうした場合、現ゲートボール場は館の範囲として適当なもので、ここに館があったことが推定され、畑とゲートボール場の間に残る土塁はこれに伴うものと考えられる。

また、溝は、館跡の存在が推定された畑の西側にも伸びている。これも堀と考え、館は土塁をはさんで南北2郭にわたることになる。伊賀地方の場合、二つの館が隣接して存在していることはよ



第Ⅲ-10図 出土遺物

(S=1:4)

くみられるためその可能性も当然考えられるが、溝の北側は未調査部分へのびていて、館の堀へつながる用水であることも考えられ⁶⁾、その端が確定できない以上結論は保留せざるをえない。

現島地末弘宅の西側の田の部分もトレンチを開けた。南側で確認した溝がのびてきていることも当然想定されたが、発掘区がやや西側であったためかからなかった。この田は島地氏宅より一段低くなっていて湿気も多く、この田自体堀を思わせるものがある。島地氏は三国地誌等に記載はないものの、江戸時代は無足人であり、島地氏宅も館であった可能性が高い⁹⁾。

溝から出土した遺物は、数は少ないものの青磁や

摺鉢など城館の堀から出土するのにふさわしいものである。この溝の掘削時期を考えると、瓦器を含む包含層を切って造られていることより瓦器の存続時期以降であり、出土した甕などからは14世紀代に入ることも考えられ、遅くとも15世紀初頭には成立していると思われる。また、廃絶時期については、一般的に伊賀の城館の多くが天正伊賀の乱によって廃絶をむかえたといわれているが、図示はしなかったが江戸時代に下る摺鉢片も見つかっており、すくなくとも溝の機能としてはこの時期まで続いているものと思われる。

5. ま と め

貝野氏館跡および高田氏館跡の調査は、限られた部分の調査であったが、貝野氏館跡では館成立以前の遺構群を確認し、高田氏館跡では西側の堀と思われる溝を確認できた。

このうち、高田氏館跡の溝（堀）の出土遺物から

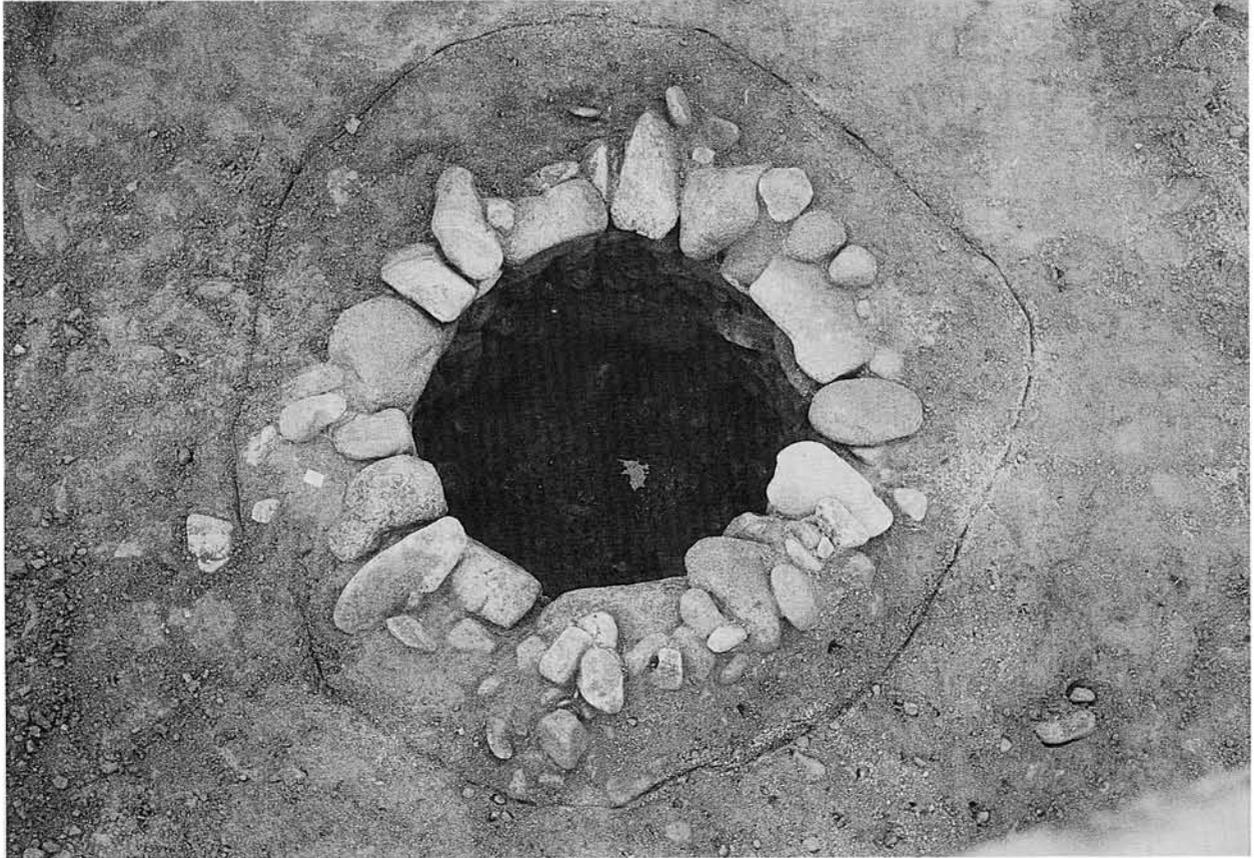
は、堀を掘削し、館として成立した時期が15世紀初頭、もしくは14世紀にまで遡る可能性のあることがわかった。今後、当地域の在り地構造を知るうえで貴重な成果といえよう。

(穂積裕昌)

[註]

- 1 本書第Ⅱ章参照
- 2 三重県教育委員会『三重の中世城館』1977
- 3 駒田利治「研究ノート 北勢四十八家」『日本城郭大系 10』1979
- 4 伊賀中世城館調査会の調査による。数値は平成3年正月現在。同会会長福井健二氏の御教示を得た。
- 5 石田善人「甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆」『史窓21』1963

- 6 菊岡如幻著・沖森直三郎編輯『参考伊乱記』1763
- 7 千田嘉博「織豊系城郭の構造一虎口プランによる縄張編年の試み一」『史林70巻2号』1987
- 8 上野市大野木の木津氏館跡に類例がある。森前稔「上野市大野木 木津氏館跡」『昭和54年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1980
- 9 福井健二氏の御教示による。



貝野氏館SE4



貝野氏館SE4 断面 (東から)

IV. 上野市市部 さわだ 澤田遺跡

1. 位置と環境

澤田遺跡(1)は、上野市の南の郊外、市部集落の北東に広がる遺物散布地である。上野盆地の西端部にあたり、北から東側には低い丘陵が迫っており、その丘陵から南東遠くの木津川に向かって流れる小河川が作り出した小規模な扇状地に、遺跡は位置している。五つに別れる調査区の内、A、B、C、

E地区は扇中央部に、D地区は扇頂部に近い丘陵裾野に位置する。現況はいずれも水田で、標高は、一番高いD地区で約154m、他は約150mである。

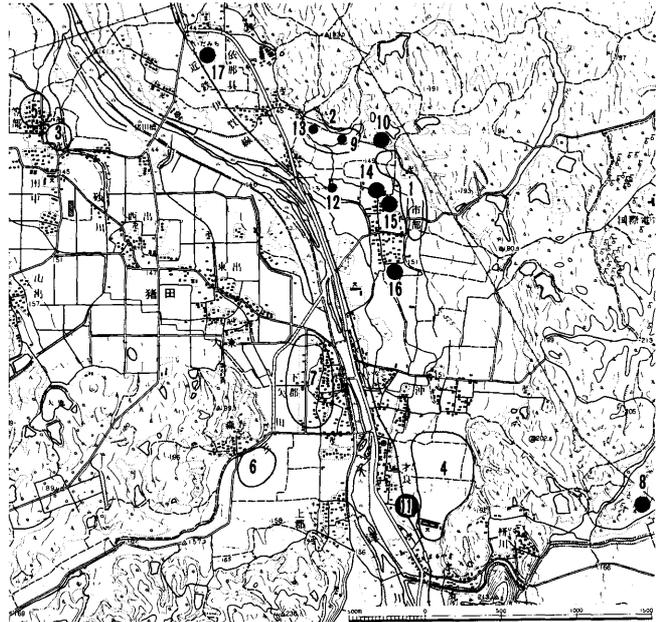
澤田遺跡周辺では、縄文時代以前の遺跡はあまり知られておらず、当遺跡西方500mの森脇遺跡(2)の発掘調査で、縄文時代晩期の貯蔵穴8基が検出さ



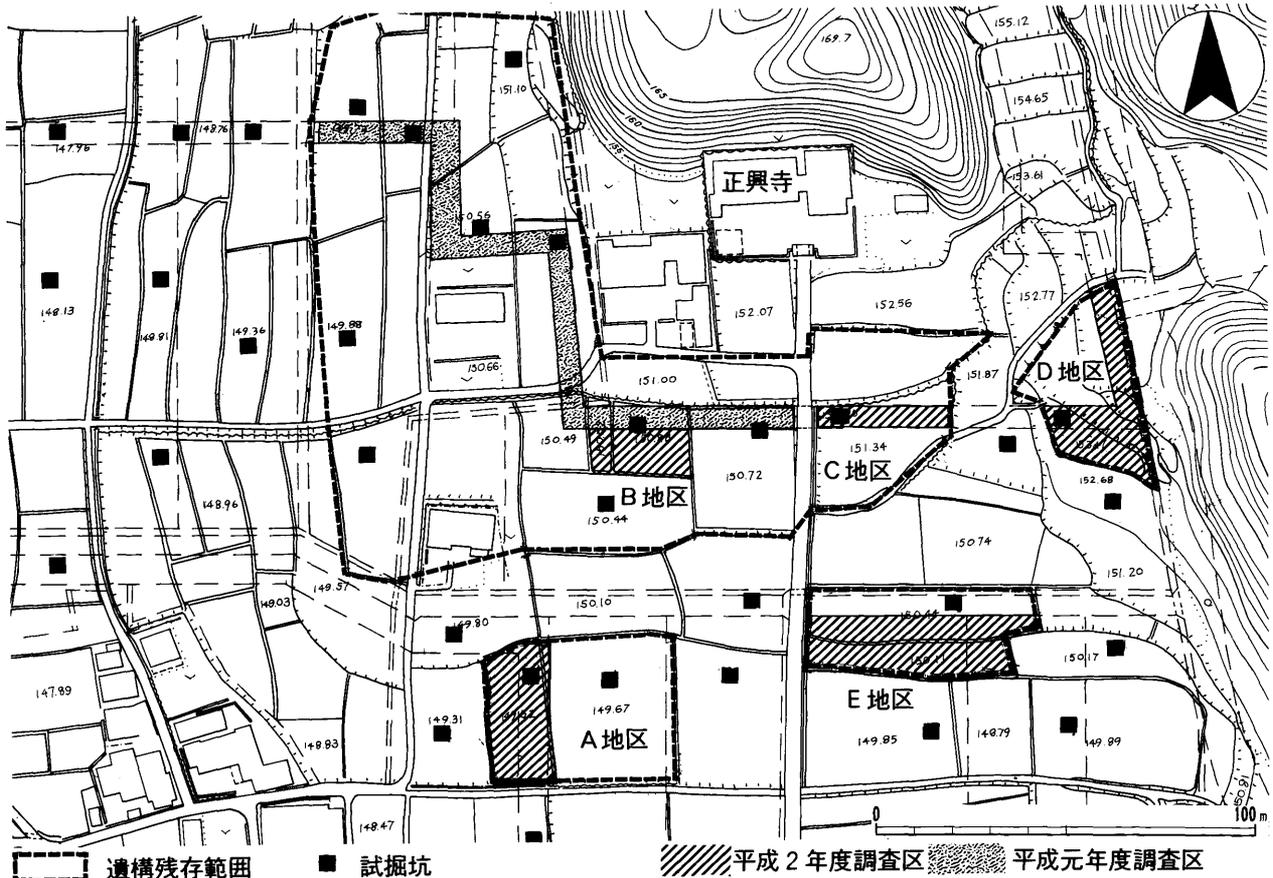
第IV-1図 遺跡地形図 1:5,000

れたほか、田中遺跡 (3)、才良遺跡 (4) があげられる程度である。弥生時代になると、才良遺跡、西浦遺跡 (5)、森寺遺跡 (6)、下郡遺跡 (7)、田中遺跡、など多くの遺跡が存在する。なかでも才良遺跡は周知の遺跡として古くから知られており、昭和57年度の発掘調査では多数の畿内系弥生土器が出土し、ここが畿内から強い影響を受けていた地域であることが再び確認された。古墳時代には、石山古墳 (8)、ぬか塚古墳 (9)、うま塚古墳 (10) をはじめ、周囲の丘陵上に多数の群集墳が築かれるが、集落跡については不明な点が多い。律令時代にはいると、白鳳寺院の財良廃寺 (11) や古郡、上郡、下郡など郡衙跡の存在を暗示するような地名、和歌の名所として伝えられる「たれその森」(垂園森、誰其森) (12)、「あわれその森」(哀園森、哀其森、淡令園森) (13) などが散在し、東大寺や藤原氏の荘園が設置されるなど、畿内との強い接触が続いていたようである。中世には、伊賀国に多数の城館が築かれるが、市部集落内にも西岡氏館跡 (14)、宮岡氏館跡 (15)、願興寺氏館跡 (16) が存在する。

小泉氏館跡 (17) は、昭和63年度にその一部を発掘調査され、城館の東西幅は堀の内側で約50mと推定されている。また、澤田遺跡に隣接する正興寺は、市部集落内の三つの寺を明治年間に合せて移したもので、その場所は神社跡とされている。



第Ⅳ-2図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院・伊勢路1:25,000)



第Ⅳ-3図 調査区位置図 1:2,000

2. A 地区

A地区の基本層序は、第1層；暗灰色土（耕作土）、第2層；明黄色粘土（床土）、第3層；暗茶色土（包含層）、第4層；淡黄色粘土（地山）である。表土上面から地山面までは20~40cmで、傾斜地を水田に開墾したためか、北側の包含層は削平され耕作土直下が地山である。

(1) 遺 構

主な遺構として、掘立柱建物4棟、土坑1基、溝1条を検出した。さらに調査区南側で多数の小規模な溝を検出したが、これらはいずれも後世の耕作に関連するものであろう。

A. 奈良時代の遺構

1. 溝

SD1 調査区西端を南北に走る溝で、南側はやや西に曲がりながら調査区外へ延びている。幅20cm、検出面からの深さ約10cmの小規模なもので、他に同時代の遺構が存在しないこともあってその性格は不明である。

B. 平安時代後期の遺構

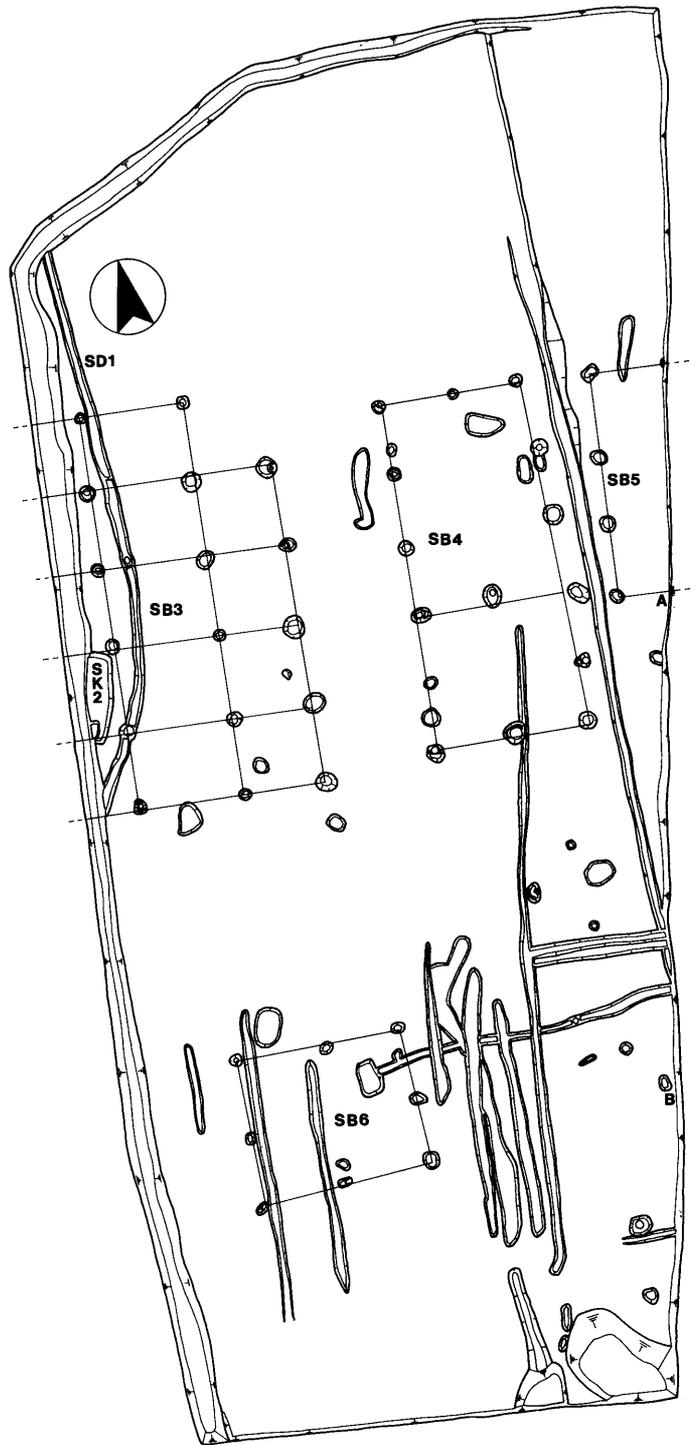
1. 土坑

SK2 調査区西端で検出したため全体の形態は不明であるが、一辺2.2mの小規模な竪穴住居の一部かもしれない。深さは検出面から5~13cmで、底部は平らである。南端には、深さ4~7cmほどの落込みがある。

C. 鎌倉時代の遺構

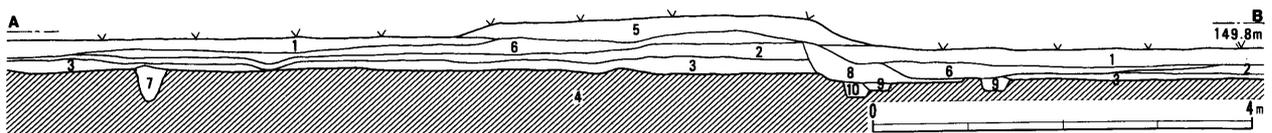
1. 掘立柱建物

SB3（第IV-6図） 調査区西端で検出したため全体の規模や棟方向は不明であるが、南北4間（8.4m）、東西2間以上の北と東に底を持つ総柱建物で

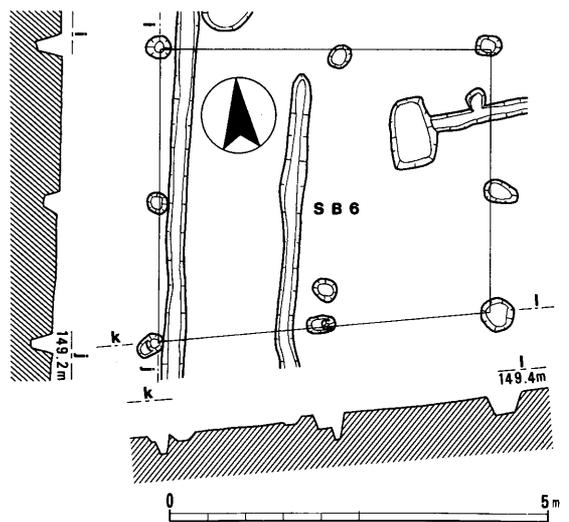
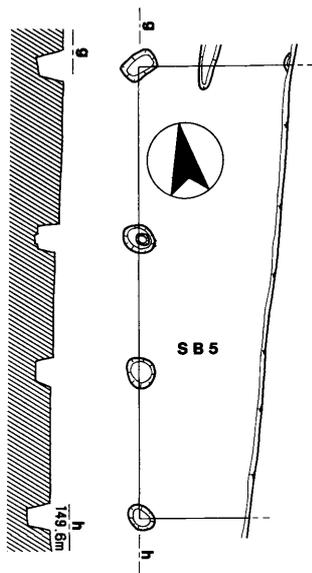
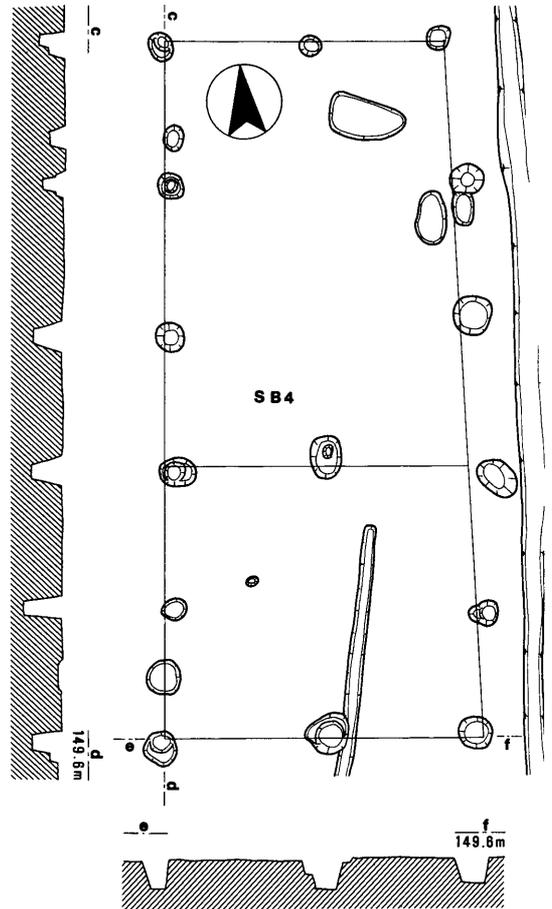
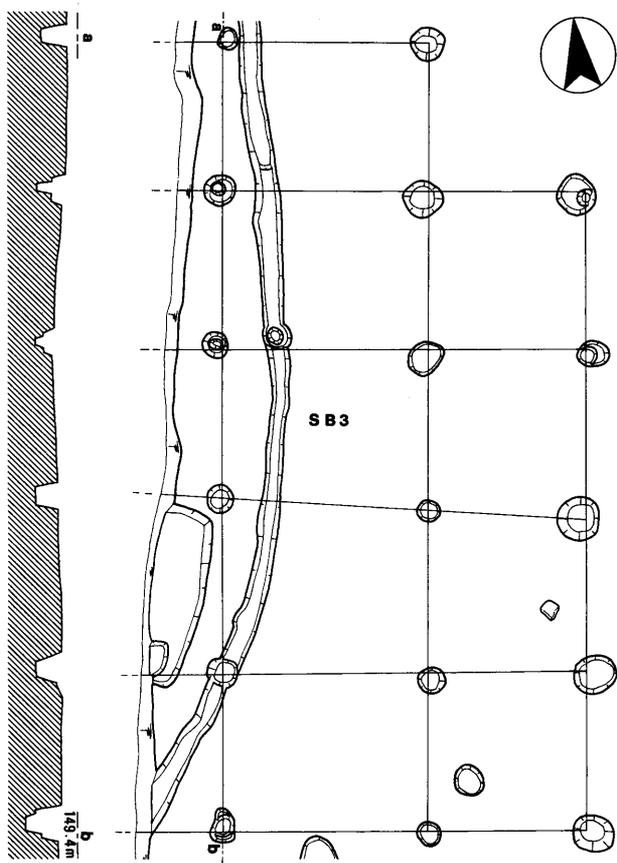


第IV-4図 A地区遺構平面図 1:200

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 暗灰色土（耕作土） | 5. 黒灰色土 | 9. 暗灰色土 |
| 2. 明灰色粘土（床土） | 6. 灰色土（旧耕作土） | 10. 灰黄色混り灰色土 |
| 3. 暗茶色土（包含層） | 7. 灰黒色土 | |
| 4. 淡黄色粘土（地山） | 8. 黄色土と茶色土の混り | |



第IV-5図 A地区土層断面図 1:80



第IV-6図 A地区 SB3, 4, 5, 6, 実測図 1:100

あることを確認した。仮に東西棟とした場合の棟方向はE7°Sで、桁行は2.7m、梁行は2.1mの等間である。北東隅の柱穴は、精査にもかかわらず検出できなかったので東と北の庇は、身舎より一間分少ないと考えられる。

SB4 (第IV-6図) 桁行5間(9.2m)である

が、梁行は2間(3.7,4.2m)で南側の広い歪んだ南北棟で、棟方向はN6°Eである。柱間は、桁行は1.8~2mでやや不等間、南側梁行は2.0mの等間、北側は1.8+1.9mである。梁行の南から2間目に束柱があり間仕切があったようである。

SB5 (第IV-6図) 調査区東端で検出したため

表IV-1 A地区出土遺物観察表

報告書番号	出土遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
1	SD1	C-1 SD1	土師器	杯	12.4	2.7	底部より屈曲して立ち上がる口縁部で端部は若干外反する	摩滅のため調整不明	暗灰褐色	2mmの砂粒多含	良	1/4		004-02
2	"	"	須恵器	"	13.4	3.7	底部から口縁部への屈曲部近くに高台をはり付け口縁端部は若干外反	底部へら切り未調整、他はロクロナデ	白灰色	砂粒多含	"	1/2		004-01
3	—	H-2 包	白磁	椀	4.8 (底径)	—	比較的高い削り出し高台をもつ	内側 ロクロナデ 底部外面 ロクローケズリ	灰白色	精良	良好	1/4 (底部)	釉色は緑白色 高台は無釉	004-03
4	SB3	C-1 P2	土師器	羽釜	26.4	—	体部より真直上へ立ち上がる口縁部で端部はやや内傾する	ナデにより調整	暗褐色	3mmの砂粒多含	"	1/2	外面鏝より上まで煤付着	006-01
5	—	C-2 包	"	杯	15	2.7	底部より外方へ開く口縁部で端部はさらに外反する	摩滅のため調整不明	暗灰褐 ～淡橙褐色	"	良	1/2	底部外面にへら記号「O」	004-04
6	—	F-1 包	石器	石鏃	—	—	凹基無基で側縁部は直線的で逆刺部は丸みをおびる	—	暗灰色	サスカイト	—	先端部欠損	0.5g	006-02

全体の規模は不明であるが、北側妻柱を調査区断面で確認したため、桁行3間(6.0m)×梁行2間の南北棟であると考えられる。棟方向はN8°Eで、他の3棟と方向が異なる。柱間は、桁行は2.2+1.8+2.0m、梁行は2.1mである。

SB6(第IV-6図) 桁行2間(4.3m)×梁行2間(3.5,3.8m)のやや歪んだ東西棟で、棟方向はE5°Sである。柱間は、桁行は2.3+2.0m、東側の梁行は1.75mの等間、西側は2+1.8mである。

(2) 遺物

遺物の出土は遺構、包含層とも少量であるが、中世の土師器、瓦器を中心に弥生土器、石鏃、須恵器、白磁、天目茶椀がある。

A. 奈良時代の遺物

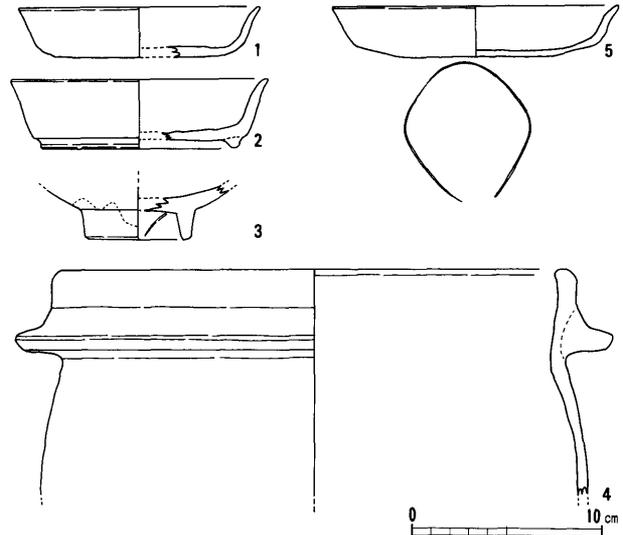
1. SD1出土の土器(第IV-7図)

(1)は、土師器の杯、(2)は、須恵器の杯である。(1)は、摩滅が激しく調整は不明、(2)は、ロクロナデの後、見込みを再びナデている。

B. 鎌倉時代の遺物

1. SB3柱穴出土の土器(第IV-7図)

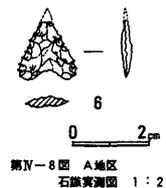
(4)は、土師器の羽釜である。外面に付着する煤は、口縁部近くまで付着している。



第IV-7 A地区出土土器実測図 1:4

C. 包含層出土の遺物

(第IV-7,8図)



第IV-8図 A地区石鏃実測図 1:2

(5)は土師器の杯である。摩滅が激しく調整は不明であるが、底部外面にへらによる円形の沈線が認められる。焼成前につけられたもので、記号であるかもしれない。

(3)は白磁の椀か壺の底部である。高い高台が削り出されている。釉は、高台まで及んでいない。

(6)は、凹基無茎の石鏃である。

3. B 地区

B地区は、調査区の北側で平成元年度の調査区と接し、その基本層序は、第1層；灰色土(耕作土)、第2層；淡灰色土(旧耕作土)、第3層；黄色混じり淡灰色土(床土)、第4層；淡黄色粘土(地山)である。表土上面から地山面までは50cmで、北側で

は、旧耕作土は、認められない。

(1) 遺構

主な遺構は、すべて中世期以降のもので、掘立柱建物9棟、土坑7基、井戸1基である。また、調査

の東側を南北に室町時代の自然流路が流れている。

A. 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

1. 掘立柱建物

SB1 (第IV—10図) 調査区西端で検出したため全体の規模や棟方向は不明である。一部検出できなかった柱穴もあるが、南北5間(12m)、東西2間以上の総柱建物であろう。仮に東西棟とした場合の棟方向はE12°Sで、桁行は2.4+2.6mで、東端が狭く、梁行は2.1+2.6+2.3+2.4+2.6mの不等間で、SB2,3,4,5と重複するが、柱穴の切合いはなく、その前後関係は不明である。

SB2 (第IV—12図) 桁行2間(5.3m)×梁行2間(5.1m)の東西棟で、棟方向はE1°Nである。南側の柱穴はSK13,16によって切られたためか検出できず、建物とするには疑問も多い。しかし、SB3,4,5と3棟の同規模の建物が同一場所で建替えられており、SB2もこれら一連の建替えとしてとらえることにした。柱穴から出土した瓦器により、建替順は一番古く平安時代内に収まるものとする。柱間は、桁行は2.65mの等間、梁行は2.5+2.6mである。

SB3 (第IV—12図) 東西2間(4.6m)×南北2間(4.9m)の総柱建物で、棟方向は不明である。仮に東西棟とした場合の棟方向はN14°Eで、桁行は2.0+2.9m、梁行は2.3mの等間である。SB2,4,5と共に一連の建替えとしてとらえられる。建替順は、SB2より新しいがSB4,5との前後関係は柱穴の切合いもなく不明である。しかし、柱穴より出土した遺物により、あまり時期差はないものと考えている。また、柱穴は直径20~30cmの円形または不整形で、他の3棟よりやや小さい。

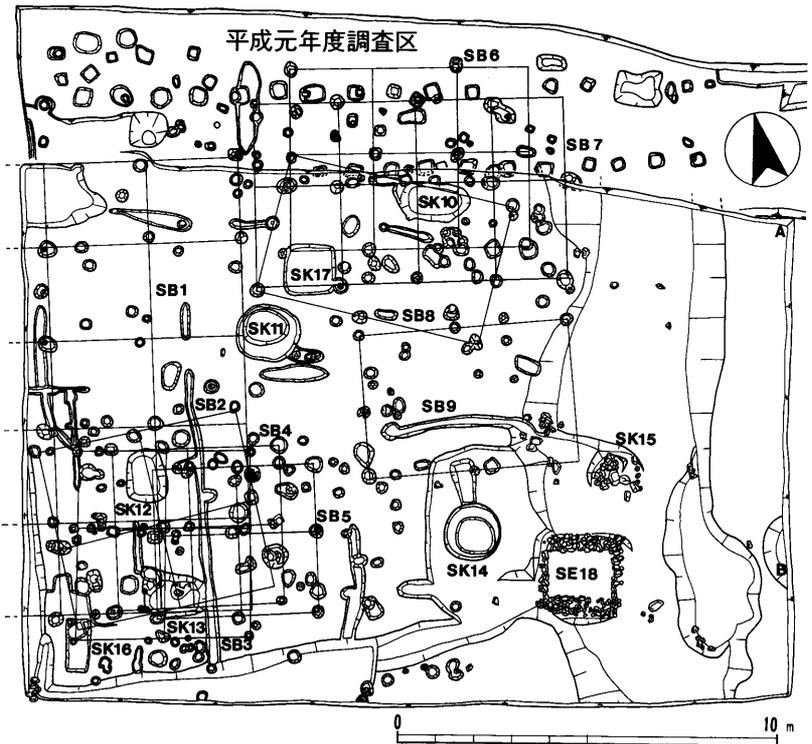
SB4 (第IV—12図) 東西2間(4.4m)×南北2間(4.2m)の総柱建物で、棟方向は不明である。仮に東西棟とした場合の棟方向はE13°Sで、桁行は2.0+2.4m、梁行は2.1mの等間である。前述したように一連の建替えとしてとら

えられるがSB3,5との前後関係は不明である。

SB5 (第IV—12図) 東西2間(4.2m)×南北2間(4.0m)の総柱建物で、棟方向は不明である。仮に東西棟とした場合の棟方向はE12°Sで、桁行は2.1mの等間、梁行は1.8+2.2mである。南東隅の柱穴には柱の一部が残っていた。前述したように一連の建替えとしてとらえられるが、SB3,4との前後関係は不明である。

SB6 (第IV—12図) 南側の柱列を検出したのみであるが、平成元年度の調査結果を合すると、桁行3間(6.2m)×梁行2間(4.9m)の総柱建物の東西棟に復元できる。棟方向はE10°Sである。柱間は、桁行は2.2+2.1+1.9m、梁行は2.6+2.3mである。SB7とは建替えの関係にあるが、その前後関係は不明である。西側の妻柱が、SB8の柱穴を切っている。

SB7 (第IV—12図) 平成元年度の調査結果を合すると、桁行4間(8.1m)×梁行2間(4.9m)の総柱建物の東西棟に復元できる。棟方向はE9°Sである。柱間は、桁行は2.2+2.0+2.0+1.9m、梁行は2.2+2.7mである。SB6とは建替えの関係にあるが、その前後関係は不明である。南側の柱列が、2ヶ所でSB8の柱穴を切っている。



第IV—9図 B地区 遺構平面図 1:200

SB 8 (第IV—12図) 柱穴が3ヶ所でSB6,7に切られて検出できず建物とするには疑問であるが、一応、桁行2間(6.0m)×梁行2間(3.8m)の東西棟に復元した。棟方向はE25°Sで、柱間は、桁行は2.8+3.2m、梁行は2.0+1.8mである。

SB 9 (第IV—13図) 桁行2間(5.4m)×梁行2間(3.8m)の東西棟である。棟方向はE13°Sで、柱間は、桁行は2.5+2.9m、梁行は2.0+1.8mである。南東隅と東側妻柱の柱穴は、自然流路に切られて検出できない。

2. 土坑

SK 10 調査区北部で検出した。長辺1.8m、短辺0.9mの長円形にちかい長方形を呈する。深さは検出面から60cm前後で、底部は平らである。

SK 12 長辺1.4m、短辺1.0mの長円形にちかい長方形を呈する。深さは検出面から15~18cmで、底部はやや中央が深い船底形である。

SK 13 長辺1.6m、短辺1.1mの隅丸長方形を呈する。深さは検出面から31~42cmで、底部は平らである。

SK 16 (第IV—14図) 長辺1.4m、短辺0.7~0.5mの南側がやや狭まる長方形を呈する。深さは検出面から18~4cmであるが、北側はさらに10cmほど深くなる。瓦器碗(1)が正立状態で出土した。完形ではないがもとは埋納されたものかもしれない。

B. 近世の遺構

1. 土坑

SK 11 直径1.4~1.6mの不整円形を呈する。埋土は淡黄色と暗茶色の混じりであるが、中央部に直径1.2~1.0mの楕円形に暗茶色の部分がある一見井戸の様な検出状況であった。深さは検出面から0.5mで井戸にしては浅すぎるようだ。SK14と形状が似ており、近世墓の可能性もある。

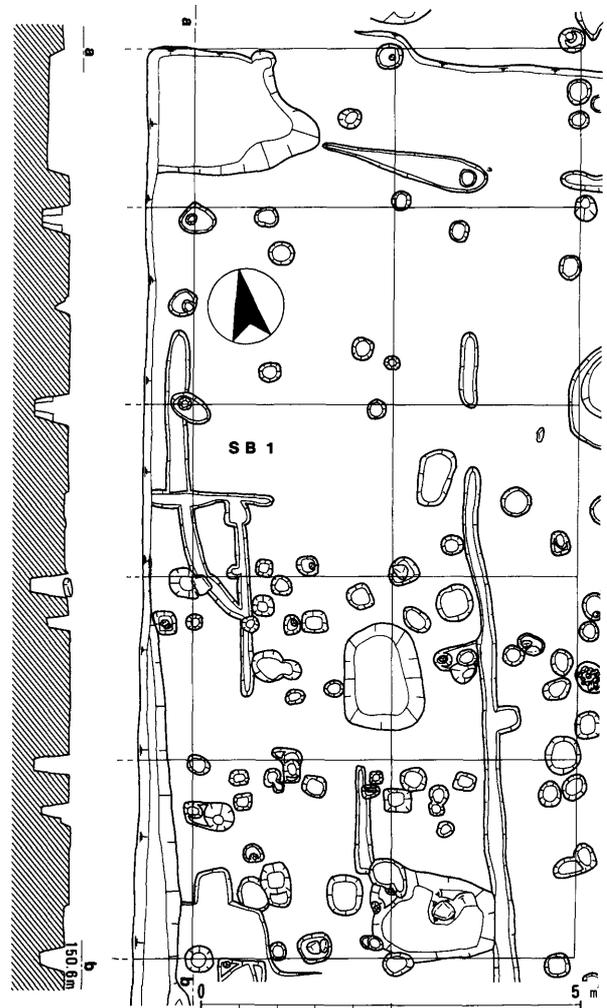
SK 14 直径1.2~1.3mのほぼ円形の掘形に直径1.0mの曲物が埋められていたようである。曲物は側面の一部が残るにすぎない。深さは検出面から0.3

mである。近世墓かもしれない。

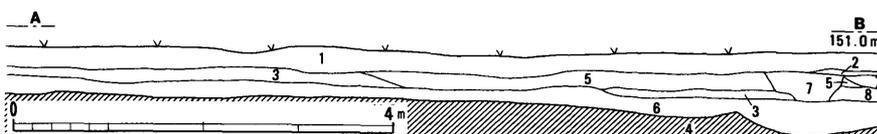
SK 15 自然流路と埋土が酷似しているためその形態と深さは不明確であるが、直径1.5mの円形を呈するものと思われる。40~20cmの石が多数埋土上部に集められていた。

2. 井戸

SE 18 (第IV—16図) 長辺1.7m、短辺1.1mの東西に長い長方形の石組井戸である。掘形は、自然流路と埋土が酷似しているためその形態は不明確であるが、東西2.6m、南北2.4mの長方形を呈するものと思われる。掘形の底に直径10cmの胴木を長方形に置き、その内側に、北側の中央、西側の北と南端、東側の北端、南側の東西の端と中央の計7ヶ所に直径5cmの杭を50cmほどしっかりと打込んで補強している。

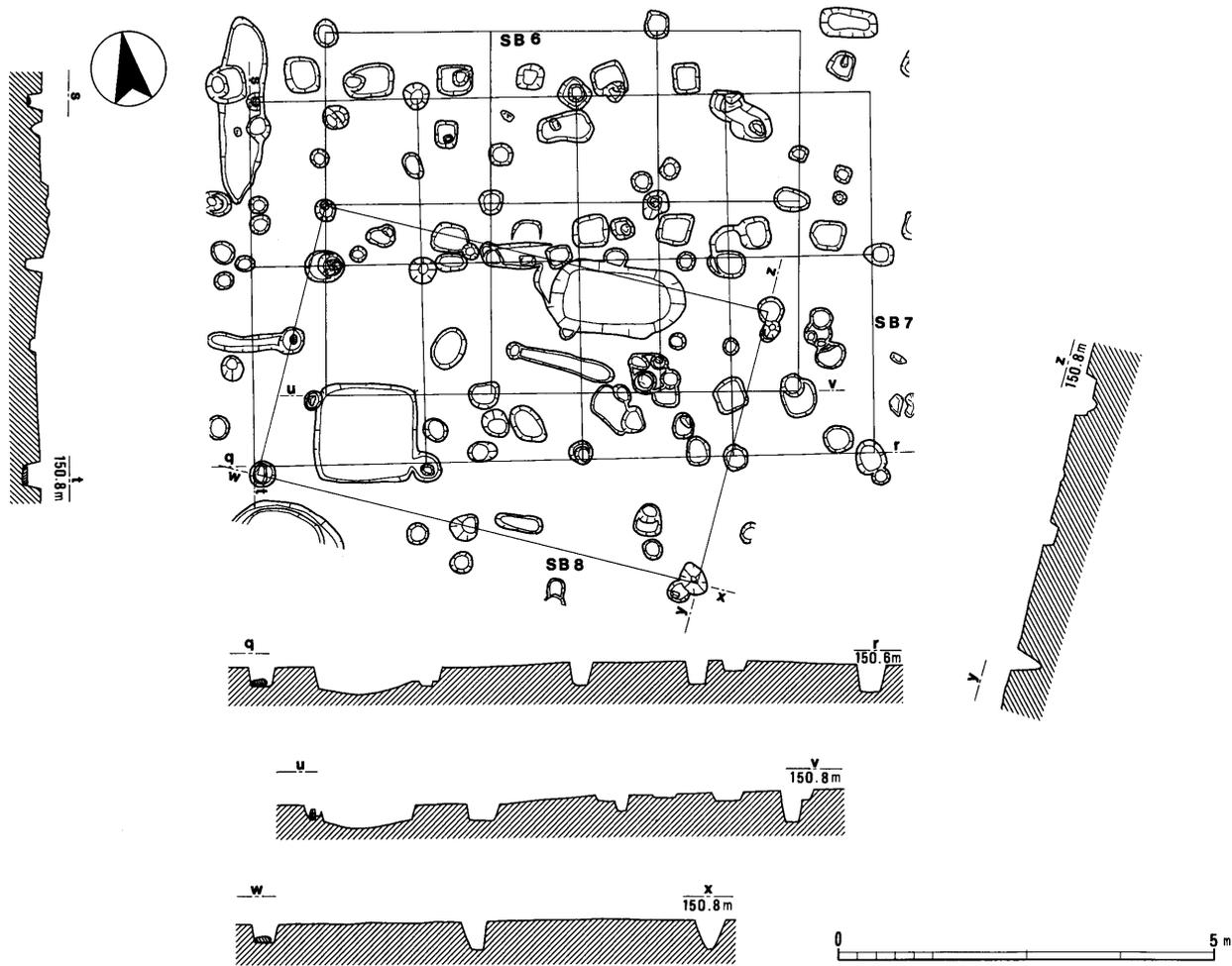
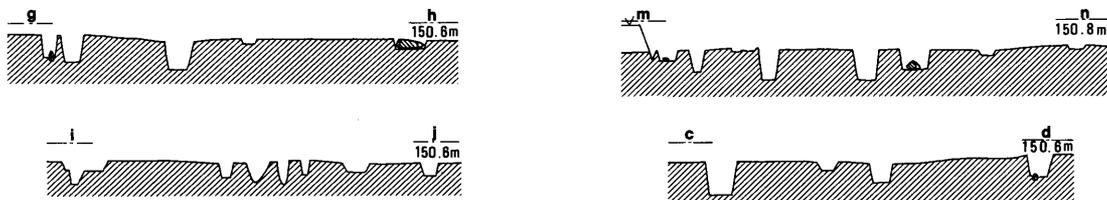
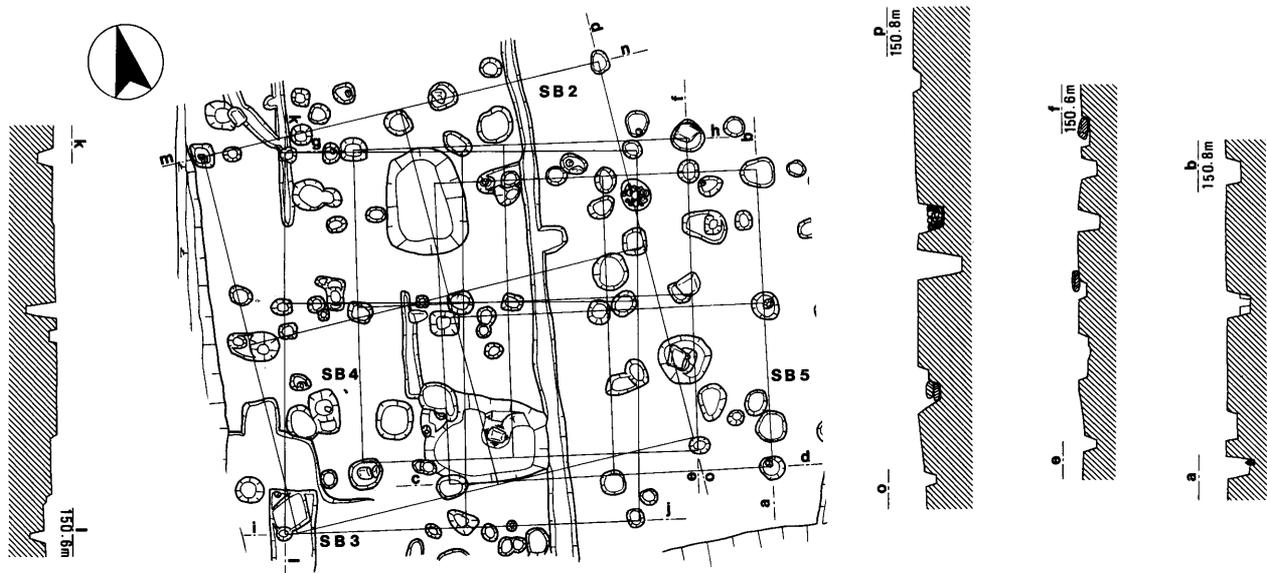


第IV—10図 B地区 SB 1 実測図 1 : 100



第IV—11図 B地区土層断面図 1 : 80

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 灰色土(耕作土) | 5. 赤灰色砂質土 |
| 2. 淡灰色土(旧耕作土) | 6. 黒灰色粘土 |
| 3. 黄色混じり淡灰色土 | 7. 暗赤灰色砂質土 |
| 4. 淡黄色粘土(地山) | 8. 暗灰色砂質土 |



第IV-12图 B地区 SB 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8实测图 1:100

る。胴木は、北側が一番長く230cmで東西に突出した形になり、西側と東側は144cm、156cmでいずれも南側に突き出ている。南側は162cmで東西の胴木の間にはまりこむ形になる。これらの胴木の上に25cmほどの石を組み、石と掘形の上に8cm前後の小石を詰込んでいる。石組は2段しか残存しておらず、井戸の深さは検出面から40cmしかない。それでも湧水があり井戸として十分機能したものと思われる。

(2) 遺物

出土した遺物は平安時代末期～鎌倉時代のものと近世のものがほとんどである。平安時代末期～鎌倉時代の遺物は、掘立柱建物柱穴内や小溝から出土したもので少量である。近世の遺物はSK14, SE18から比較的まとまって出土した。

A. 平安時代末期～鎌倉時代の遺物

(第IV—15, 17図)

土師器 (2)～(5)は、皿である。大型のもの(2), (3)と小型のもの(4), (5)がある。(3)の口縁部内外面は黒く変色している。油煙によるものかどうかわからない。

(6)は、小型の羽釜である。外面の鏝以下には、煤が厚く付着している。

(7)は、土錘であり重さは5.5gである。

瓦器 (1)は、碗であり、SK16に埋納されたものである。内面のミカギは疎らであるが、口縁部内面の沈線は残る。

陶器 (8)は、N字状口縁をもつ小型の甕である。内外面に鉄釉が掛かり赤茶色を呈する。

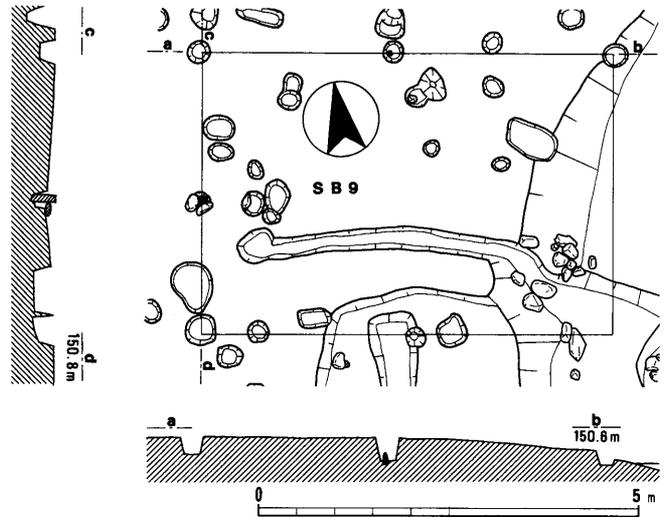
B. 近世の遺物

1. SK14出土の遺物 (第IV—17図)

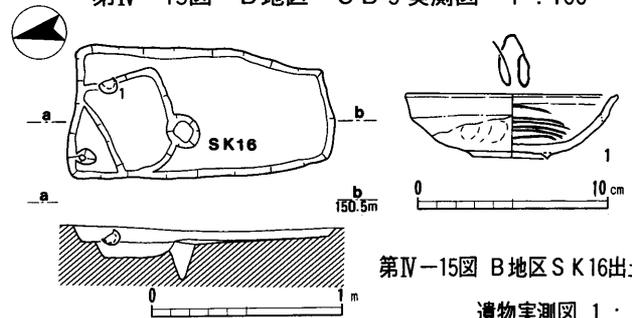
陶器 (10), (11)は、皿である。(11)は内面全面に施釉されているが、(10)は一部口縁部外面にまで及んでいる。(10)の内面にはトチンの痕跡がある。

(9)は、一对の環状把手が付く鍋である。口縁部は丸く折返され、その中は空洞になっている。内面全面と外面上半に施釉される。体部下半には、煤が厚く付着している。

石製品 (12)は、風字硯の陸部である。

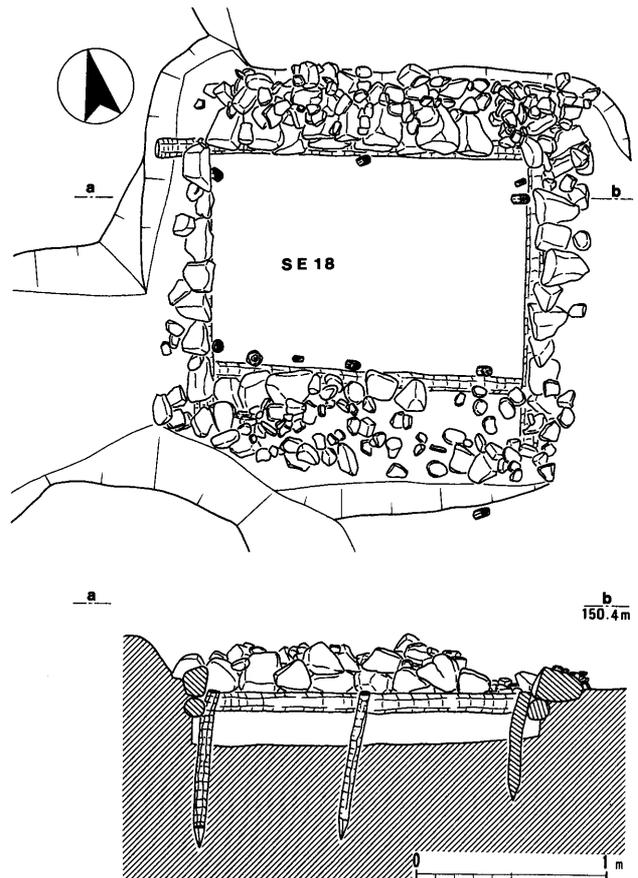


第IV—13図 B地区 SB9実測図 1:100

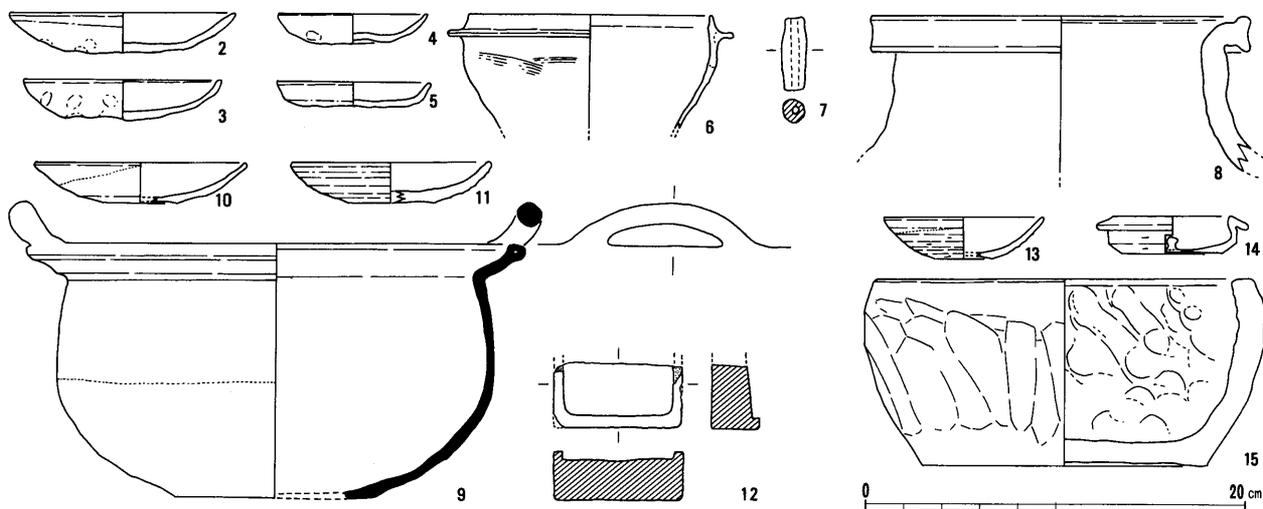


第IV—15図 B地区SK16出土
遺物実測図 1:4

第IV—14図 B地区 SK16実測図 1:40



第IV—16図 B地区 SE18実測図 1:40



第IV-17図 B地区出土遺物実測図 1:4

表IV-2 B地区遺物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
1	SK16	M-2 SK1	瓦器	碗	11.2	3.4	三角高台をはり付け、やや厚い器壁をもつ。口縁端部内面には沈線が残る	外面未調整、内面は荒いヘラミガキ。見込みは連結輪状文2個	黒灰色	精良	良好	3/4	内外面にいぶしの不良箇所あり	005-01
2	—	M-3 P5	土師器	皿	11.9	2.1	底部より丸味をもって外方へ立ち上がる口縁部をもつ	外面未調整、内面はナデ	明橙灰色	—	—	3/4		005-05
3	—	K-3 SD5	—	—	10.4	—	底部より丸味をもって外方へ立ち上がる口縁部で端部はやや内弯する	—	—	3mmの砂粒若干含	—	3/4	黒色に変色部あり	005-03
4	—	—	—	—	7.8	1.4	—	—	淡橙灰色	精良	—	3/4		005-04
5	—	J-4 P2	—	—	7.95	1.25	底部より屈曲して立ち上がる口縁部をもつ	—	—	3mmの砂粒若干含	—	完形	見込みの仕上げナデは右回り	007-02
6	—	L-4 SD10	—	羽釜	12.6	—	小型で口縁部近くに鈎をはり付ける	外面ハケ目、内面ナデ	乳褐色	精良	—	1/4	鈎より下に煤が厚く付着	007-01
7	SB1	L-1 P4	—	土錘	1.2	3.8	筒状を呈する。直径4mmの孔を空ける	ナデにより調整	暗茶色	—	—	完形	5.5g	007-06
8	—	J-1 SK2	陶器	甕	19.6	—	「N」字状 口縁をもつ	ロクロナデにより調整	赤茶色	2mmの砂粒含	—	1/4	内外面に施釉	005-02
9	SK14	L-4 SK9	—	鍋	24	13.6	一对の環状把手をもつ。口縁端部は内に巻き込み、筒状になる	ロクロナデにより調整し、体部上半に施釉	灰褐色	精良	—	1/4	釉色 淡黄灰色	008-01
10	—	—	—	皿	10.8	2.1	底部から直線的に外へ開く口縁部で端部は内に肥厚する	底部外面ロクロケズリ他はロクロナデ、口縁部と内面施釉	灰色	—	—	1/4	釉色 淡緑色 見込みにトチン痕あり	007-04
11	—	—	—	—	10.3	2.2	底部から丸味をもって、やや内弯しながら立ち上がる口縁部をもつ	外面口縁部近くまでロクロケズリ、他はロクロナデ、内面施釉	淡橙灰色	—	—	1/2	銹釉色 赤茶色 見込みに重焼痕あり	007-03
12	—	—	石製品	硯	—	—	小型の風字硯	—	明橙灰色	—	—	1/4		007-05
13	SE18	M-6 井戸1	陶器	皿	8.4	2.2	底部から直線的に外へ開く口縁部をもつ。杯に近いやや深い形態	外面口縁部近くまでロクロケズリ、他はロクロナデ、内面施釉	灰色	精良	良好	1/4	釉色 淡黄灰色 見込みにトチン痕あり	003-03
14	—	—	—	蓋	6.3	2.0	天井部は口縁部より屈曲して下がり、中央につまみをはり付ける	外面 ロクロケズリ、内面 ロクロナデ	灰白色	—	—	3/4	上部に施釉 釉色 褐色	003-04
15	—	—	瓦器	鉢	19.6	9.9	底部より屈曲して、やや内弯ぎみに立ち上がる口縁部をもつ	底部未調整、外面ヘラケズリ、内面指により強くナデる	黒灰色	—	—	1/4		003-02

2. SE18出土の遺物 (第IV-17図)

陶器 (13) は、皿である。内面全面と口縁部外面に施釉される。内面にトチンの痕跡がある。

(14) は、落蓋である。底部内面に粘土塊を張付け、つまみとしている。口縁部は折返され、その上

面と天井部全面に施釉される。

瓦器 (15) は、鉢である。非常に厚手で、内面はナデによる指の跡が明瞭に残り凸凹である。外面は口縁部近くを横方向に、他を縦方向に粗く面取り状にヘラケズリする。
(森川常厚)

4. C 地区

B地区、D地区の間に幅4m、長さ43mのトレンチを設定した。耕作土下27cmで地山と考えられる黄褐色砂質土に達したが、遺構は検出されなかった。

しかし、耕作土下14~27cmに堆積する青灰色粘土(砂質土混じり)の包含層で土師器、瓦器、須恵器、

陶器など若干の遺物が出土した。注目できるものとしては、調査区西端で出土した五輪塔の水輪(第IV-18図)がある。調査区北側に位置する正興寺との関連が考えられる。(小川専哉、宮崎宣光)

5. D 地区

D地区の基本層序は、第1層；暗灰茶色土（耕作土）、第II層；赤茶砂質土、第III層；暗紫色粘土（包含層）、第IV層；淡黄色粘土（地山）である。表土上面から地山面までは40cm～60cmである。

(1) 遺構

A. 弥生時代の遺構

1. 竪穴住居

SH10（第IV—21図） 南壁は削平され検出できなかったが、一辺4.5mの正方形を呈するものと思われる。炉灶や支柱穴は検出できず、またSD8に切られているようであるが明確ではない。

2. 溝

SD4（第IV—20図） 調査区南東隅を南北に延びる溝で、断面はテラスをもつ緩かなV字形である。幅は7m程になると思われ、深さは検出面から1.1mである。溝は、テラス部分までは弥生時代後期のうちに埋まったと考えられるが、上部は平安時代末期まで痕跡が残ったようである。調査区隅での検出のため、この溝の性格を知ることができず、自然流路の可能性も残っている。

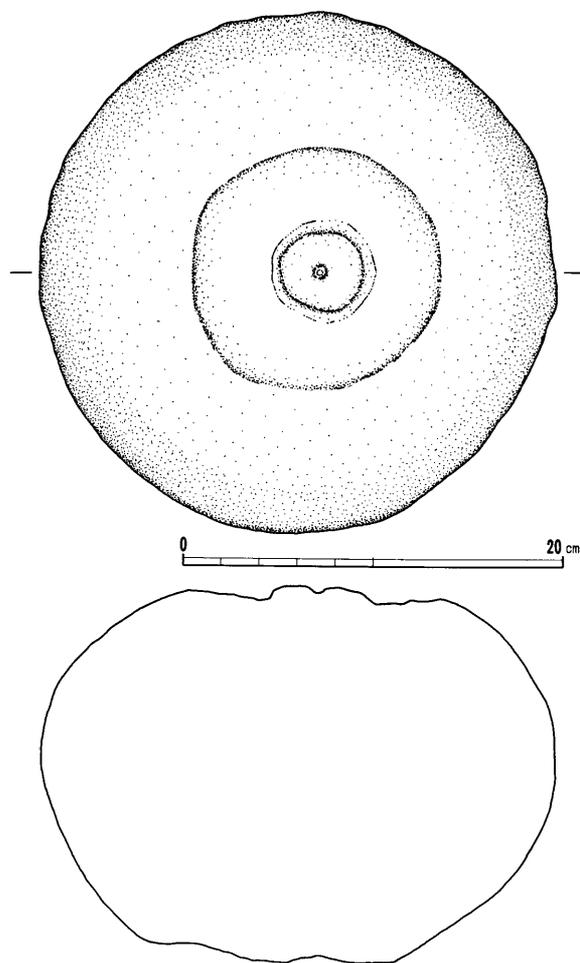
SD8 幅30cm、検出面からの深さ4～20cmの溝で、北側ほど浅くなり調査区端でとぎれてしまう。南側はSH10と重複しながら、真直ぐ調査区外へ延びている。

SD13 調査区北部で検出した。幅50～100cm、検出面からの深さ7～35cmで西側ほど深い。東側は調査区外へ延びているが、西側は3mほどで止まる。溝西端から直角に南に深さ7cm前後の浅い落込みが3mほど延びている。SD13と一連のものかもしれない。

B. 奈良時代の遺構

1. 竪穴住居

SH1（第IV—21図） 西壁は調査区外のため検出できなかったが、一辺3mの正方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは10cm前後で残りは



第IV—18図 C地区出土石造物実測図 1：4

悪いが、幅約20cmの周溝が巡っている。竈や支柱穴は検出できなかった。SH2の建て替えであろう。

SH2（第IV—21図） 大部分をSH1に切られているが、一辺3.6mの正方形を呈するものと思われる。SH1と同じように周溝が巡っているが、幅はやや狭く約16cmである。

2. 掘立柱建物

SB6（第IV—21図） 桁行2間（3.5m）×梁行2間（3.0m）の南北棟である。棟方向はN4°Eで、柱間は桁行は不等間、梁行は1.5mの等間である。

3. 土坑

SK11 一辺1.8mの正方形を呈するが、西側の一部が大きく脹らんでいて他の遺構が重複しているのかもしれない。深さは検出面から20cm程で、底部は平らである。

C. 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

1. 掘立柱建物

SB 5 (第IV—23図) 調査区外へ広がる可能性もあるが、桁行6間(13.4m)×梁行4間(7.6m)で北側2間分に庇がつく東西棟とした。棟方向はE 31° Sで、柱間は桁行、梁行とも不等間である。中央の東柱のひとつが検出できず、この部分が土間になっていたかもしれない。北西隅の柱穴から瓦器碗が2個(32), (33)出土した。

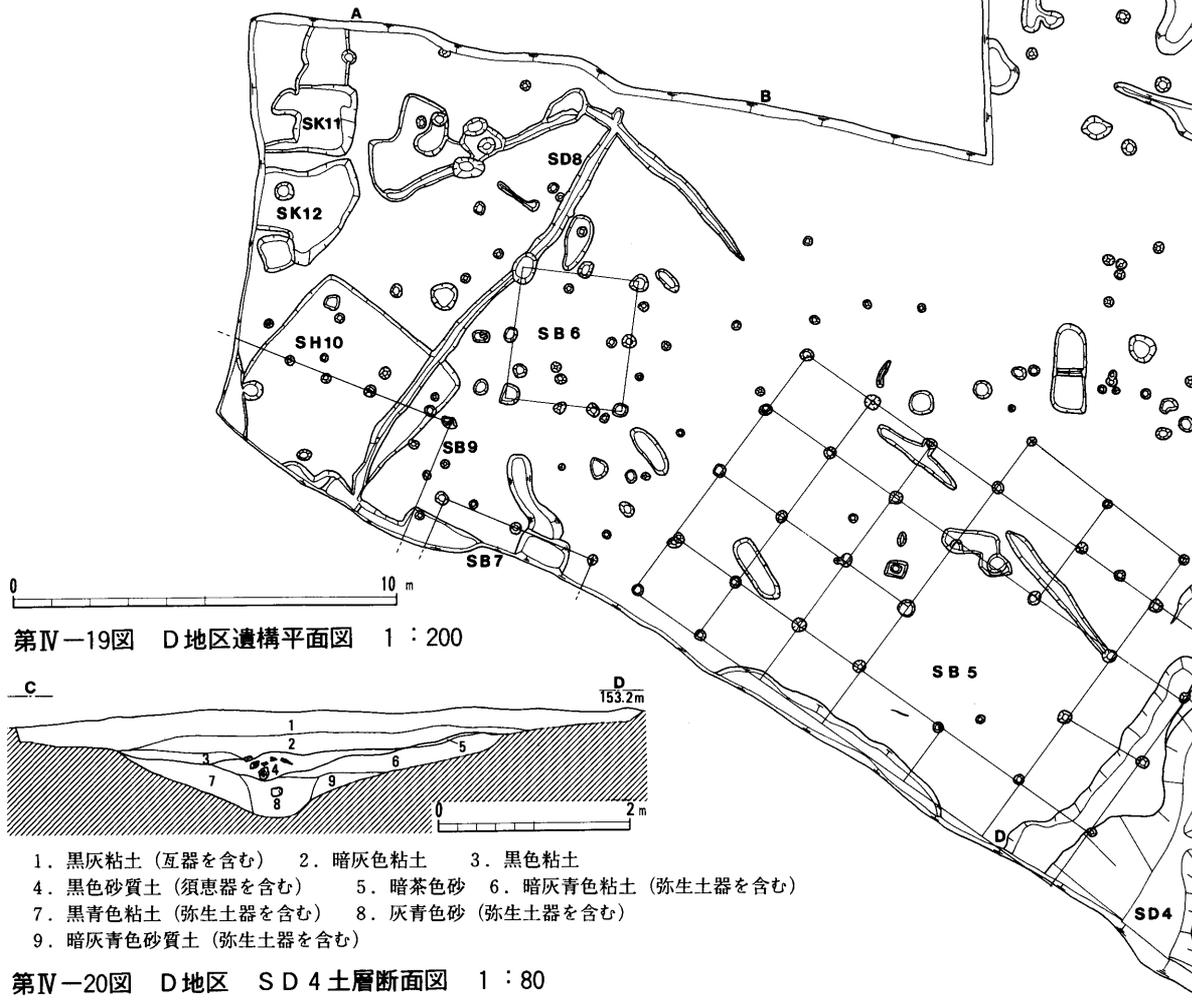
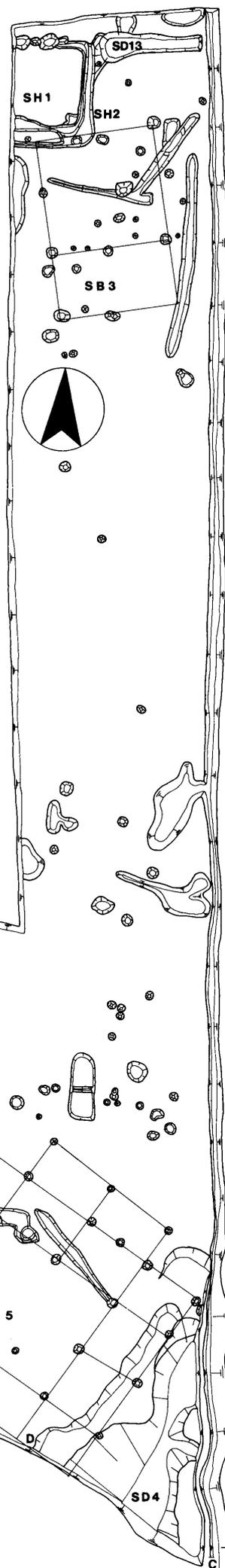
2. 土坑

SK 12 平面は不定形な形を呈し、西側は調査区

D. 時代不明の遺構

外へ広がっている。深さは検出面から2～10cmで底部は平らである。

時期決定の決め手がなく不明としたが、室町時代以降の遺物は包含層からも出土しておらず、奈良時代後期～平安時代初期か平安時代末期～鎌倉時代のいずれかに属するものと考えられる。



1. 黒灰粘土(瓦器を含む) 2. 暗灰色粘土 3. 黒色粘土
4. 黒色砂質土(須恵器を含む) 5. 暗茶色砂 6. 暗灰青色粘土(弥生土器を含む)
7. 黒青色粘土(弥生土器を含む) 8. 灰青色砂(弥生土器を含む)
9. 暗灰青色砂質土(弥生土器を含む)

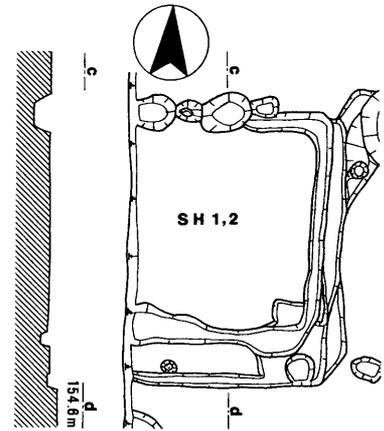
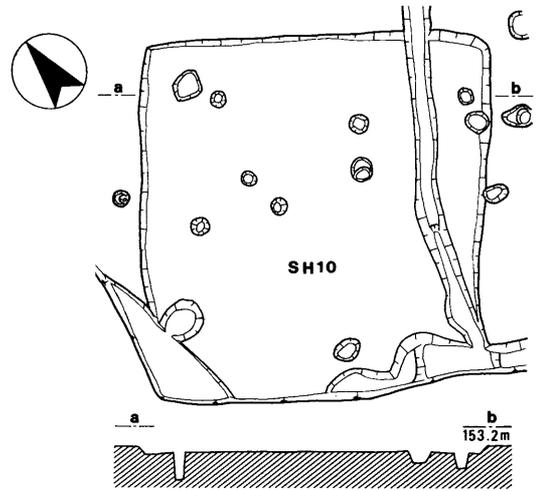
第IV—20図 D地区 SD 4 土層断面図 1 : 80

1. 掘立柱建物

SB 3 (第IV-21図) 桁行3間(6.3m)×梁行2間(4.1m)の南北棟で、南側1間分に間仕切がある。棟方向はN11°Wで、柱間は不等間である。東側桁行の通りが悪く、北側妻柱が検出できなかったことなど建物とするには疑問も残る。

SB 7 (第IV-23図) 調査区南端で2間分の柱列を検出した。柱間は、2.1mの不等間である。一応調査区外へ延びる南北棟の梁行としておく。その場合棟方向はN17°Eである。

SB 9 (第IV-23図) 調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、東西棟になると思われる。桁行2間以上で、2.2mの等間、梁行は1間分(1.5m)を検出した。棟方向はE19°Sである。

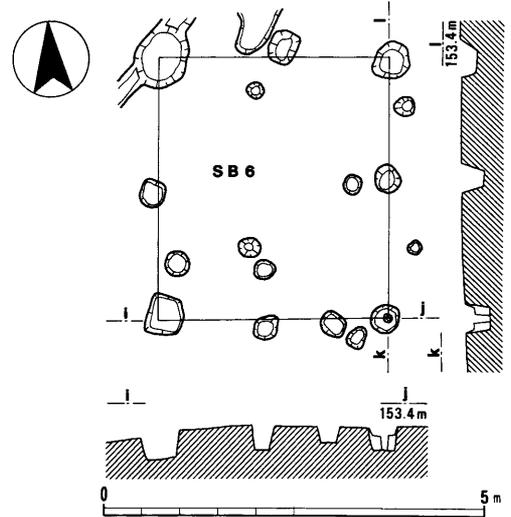
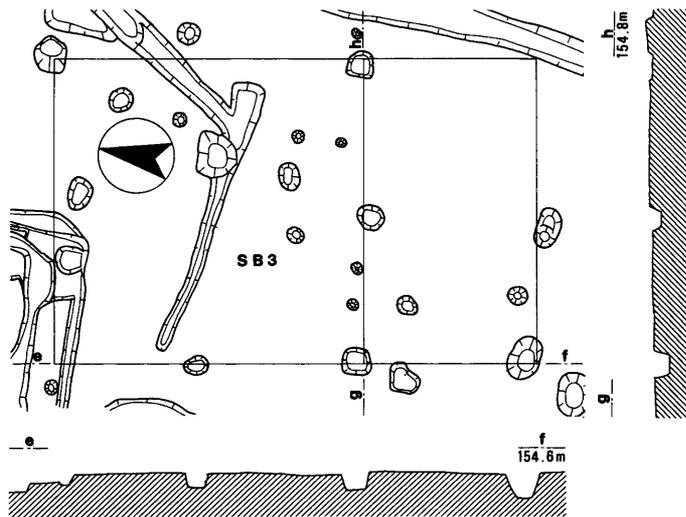


(2) 遺物

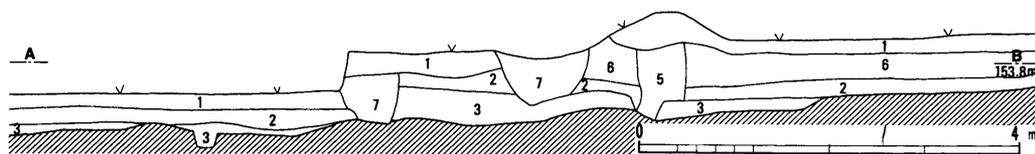
D地区の遺物は、弥生時代の土器、磨製石器、奈良時代後期～鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器などがある。特にSD4下層からは、弥生時代後期の遺物が多量に出土した。

A. 弥生時代後期の遺物

1. SD 4 下層出土の遺物 (第IV-24図)



第IV-21図 D地区 SB 1, 2, 3, 6, 10実測図 1:100

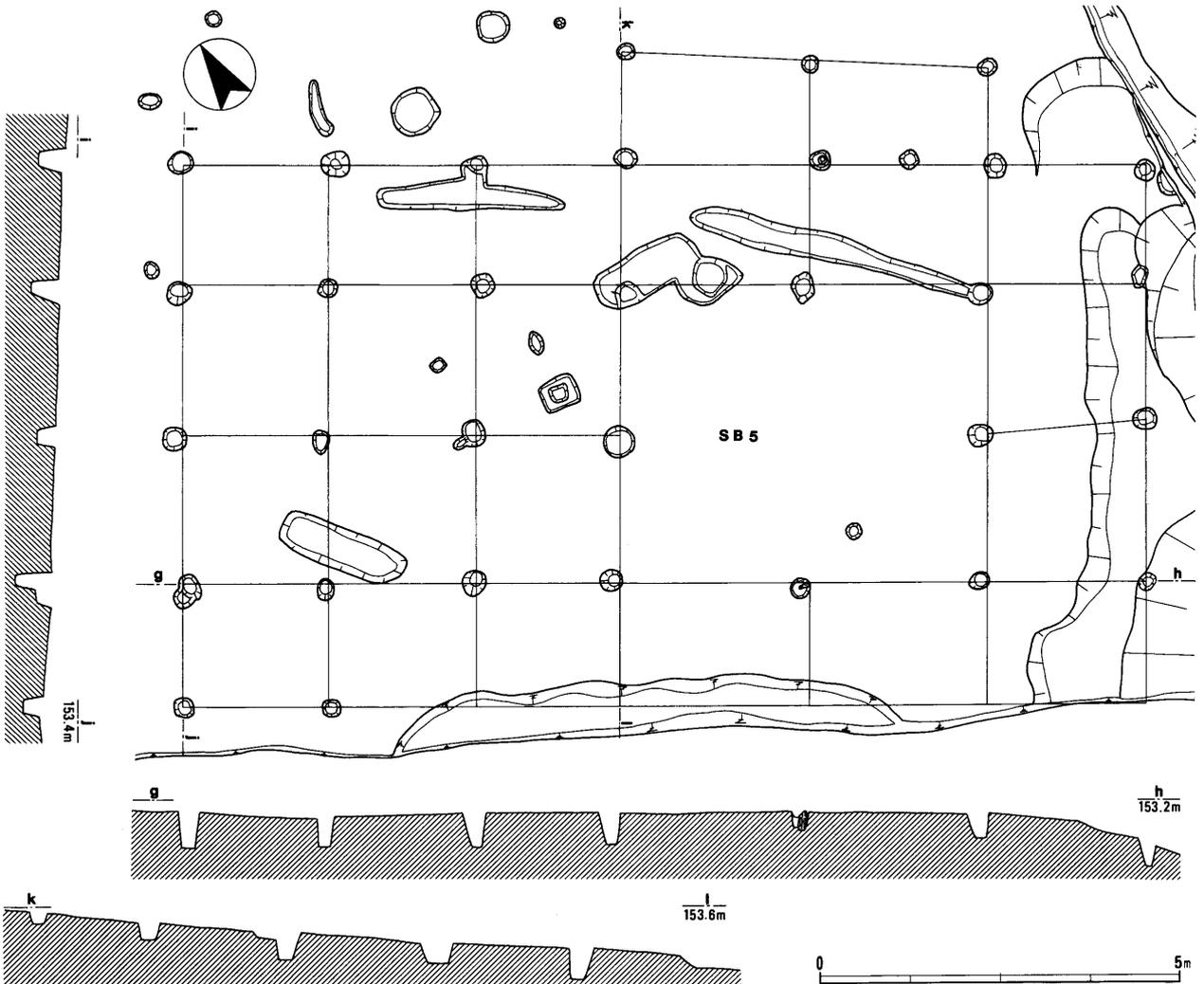
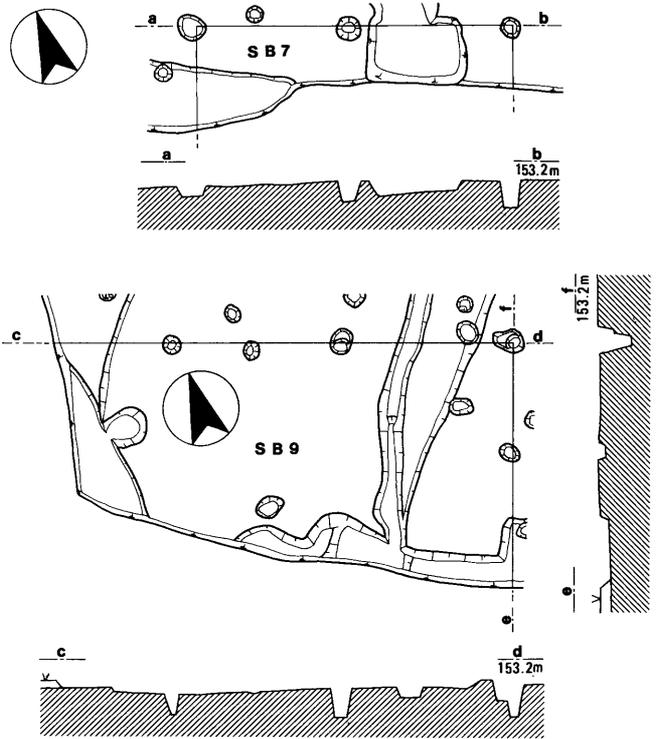


第IV-22図 D地区 土層断面図 1:80

1. 暗灰茶色土(耕作土)
2. 赤茶色砂質土
3. 暗紫色粘土(包含層)
4. 淡黄色粘土(地山)
5. 黄茶色土
6. 淡赤灰色粘質土
7. 淡黑色砂質土

弥生土器 (1) ~ (8) は、壺である。口縁部が大きく外反し水平に近くなるもの (1)、真直ぐ外へ開くもの (2), (3)、受け口状のもの (5), (7) がある。(1) の口縁部外面は、沈線を一条巡らしヘラによる刻目を施しており、(3) には、竹管文を2個ずつ7方に施している。(2) の体部外面にヘラによる沈線が刻まれている。記号であるのか絵画の一部なのかかわからない。(5) の口縁部外面には、3本/0.5cmの櫛状工具による羽状文が施されている。上段、下段の順に施文し、口縁下端には刻目をいれる。(7) は、丁寧にヘラミガキされた精製土器である。(4) の底部外面には、植物の圧痕が認められる。(6) は口縁部を欠損しているが、その割れ口は疑口縁となっている。肩部にはハケによる刺突文が三段に巡る。

(9), (10) は、ミニチュアの壺である。両方も摩滅のため調整が不明瞭であるが、ナデ中心の



第IV-23図 D地区 SB 5, 7, 9 実測図 1 : 100

調整でヘラミガキは行っていないものと思われる。

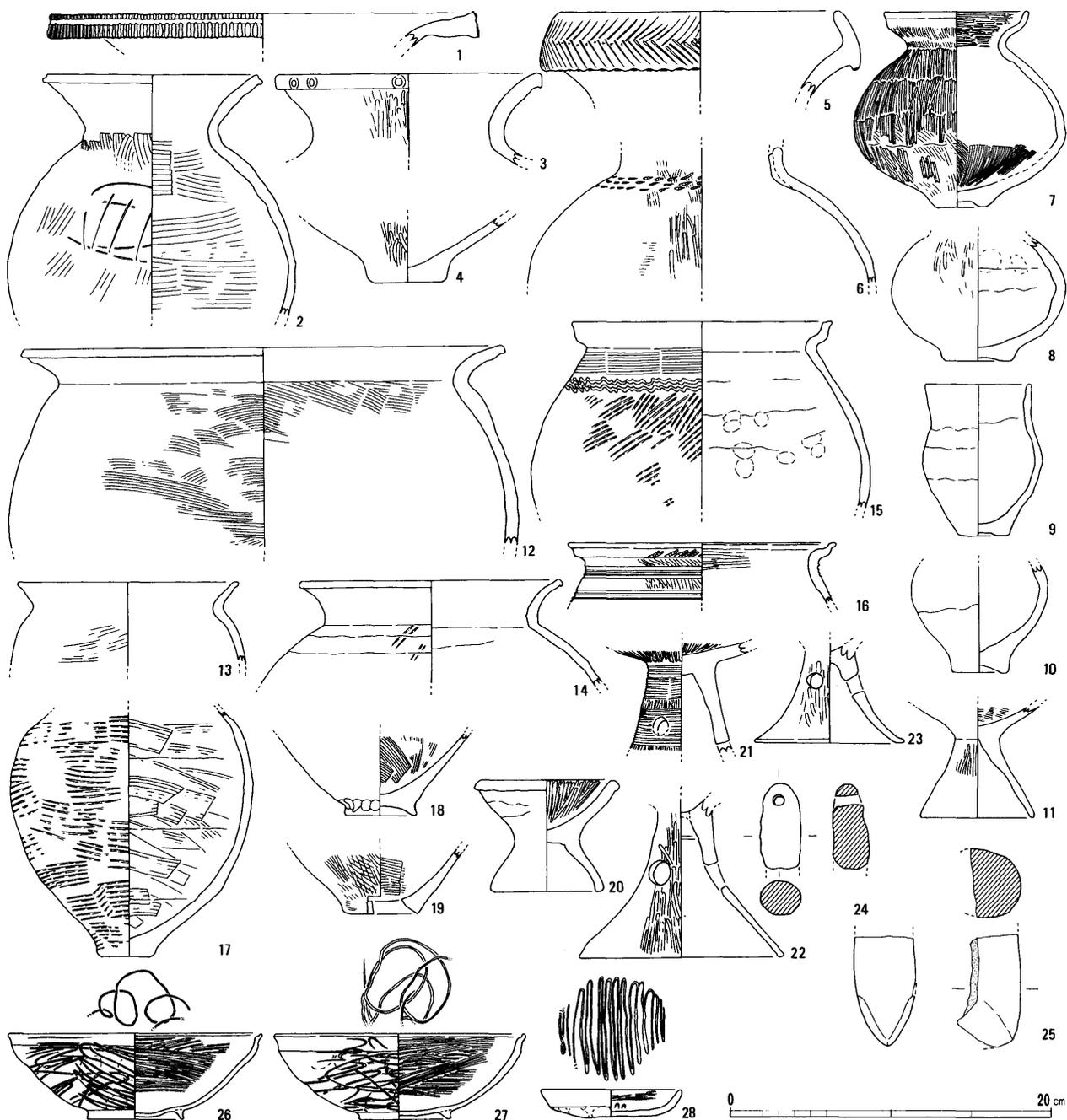
(11) は、脚付壺になるものと思われ、脚部外面にヘラミガキを施している。

(12) ~ (19) は、甕である。口縁部がやや外反ぎみに開くもの(12) ~ (14)、受け口状のもの(15)、「S字口縁」のもの(16)がある。口縁部以外のナデは、板状工具によって行われているものがほとんどである。(17)の内面は非常に浅いハケ目で、板状工具による強いナデととることできる。(15)の肩部には4本の波状文が施されているが、その上のハケ目(4本/0.6cm)と同一原体である

ようだ。(16)の肩部には、3本一組で2段以上に沈線を巡らし、口縁部外面には櫛状工具による刺突文を雑に巡らす。(19)の底部は燃成後穿孔されている。甕に転用されたのかもしれない。(12)、(15)、(17) ~ (19)の外面には煤の付着があり、(12)、(15)、(17)、(18)には内面にも炭化物の付着が認められる。

(20)は、台付甕の上半を省略した形態の土器である。内面をヘラミガキしていることから器台と思われる。

(21) ~ (23)は、高杯の脚部である。透し孔は



第IV-24図 D地区 SD4出土遺物実測図 1:4

すべて3方であるが、(21)の1個は、やや高い位置に穿たれる。

(24)は、土錘である。1/4ほど欠損しているが、直径5mmの紐通し穴が1対あけられるものと思われる。

石器 (25)は大半を欠損しているが、磨製の蛤

刃石斧である。

2. SD13出土の土器 (第四—25図)

弥生土器 受け口状の口縁部を持つ甕である。口縁部内外面に櫛状工具による刺突文を巡らし、さらに肩部にも2段に施す。

表IV-3 D地区遺物観察表

報告番号	出土遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
1	SD4	Z-6旧河道	弥生土器	広口壺	26.5	—	大きく水平近くまで外反する口縁部で端部は肥厚し外面をもつ	外面ナデ、内面ハケ目、口縁部外面に沈線と刻目を巡らす	褐色	4mmの砂粒多含	良好	1/6		013-06
2	"	Z-7旧河道	"	"	12.8	—	長球状の体部に「ハ」字に開く口縁部がつく	外面ハケ後ナデ、内面ハケ目、口縁部ヨコナデ	灰褐色	3mmの砂粒多含	"	1/4	体部外面にヘラ描の記号か絵?あり	010-02
3	"	Z-6旧河道	"	"	16.6	—	「ハ」字に外反する口縁部で端部外面に面をもつ	外面ヘラミガキ、内面も上半はヘラミガキか?口縁部外面に竹管文	褐色	5mmの砂粒多含	"	口縁部完存	摩滅がはげしい	013-01
4	"	"	"	壺	—	—	小さい円形の底部に球状に近い体部がつくものと思われる	板状工具によるナデ 後面はヘラミガキ	外内 褐色 暗褐色	4mmの砂粒多含	"	底部完存	底部に植物圧痕か?	012-02
5	"	"	"	広口壺	17.2	—	やや内傾する受け口状の口縁部をもつ	外面ハケ目?内面ナデ、口縁部外面にヘラ描状文と刻目を施す	褐色	3mmの砂粒多含	"	1/6		013-05
6	"	"	"	壺	—	—	長球状の体部に直立する口縁部がつくものと思われる	外面ハケ目後ヘラミガキ、内面ナデ肩部にハケ状工具による刺突文を施す	外 淡黄灰色 内 暗褐色	"	"	1/6	摩滅がはげしい	012-01
7	"	Z-7旧河道	"	広口壺	8.8	12.4	球状の体部にやや外に開く受け口状の口縁部がつく。底部は輪台状。	外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ、底部内面ハケ目、他はナデ	浅黄褐色	1.5mmの砂粒多含	"	ほぼ完形	精製土器	010-01
8	"	Z-6旧河道	"	壺	—	—	輪台状の底部に球状の体部が付く	外面上半ヘラミガキ、下半ナデ、内面板状工具によりナデ上げる	褐色	3mmの砂粒多含	"	1/2	摩滅がはげしい	013-04
9	"	Z-7旧河道	"	ミニチュア壺	6.4	9.55	張の小さい体部に直立する口縁部が付く。底部は輪台状	雑なナデ	灰褐色	4mmの砂粒多含	"	1/6	粗製土器	010-04
10	"	"	"	"	—	—	上げ底の底部に球状の体部が付く	"	"	3mmの砂粒多含	"	1/6	粗製土器 摩滅がはげしい	010-03
11	"	"	"	脚付壺	7.0 (脚径)	—	「ハ」字にまっすぐ開く脚をもつ	外面ヘラミガキ、脚部内面ナデ、底部内面ハケ目	褐灰色	2mmの砂粒多含	"	3/4 (脚部)		011-03
12	"	"	"	甕	29.7	—	「く」字に開く口縁部で端部外面に面をもつ	外面ハケ目、内面上半ハケ目、下半ナデ	明褐色	7mmの小石多含	"	1/4	内外面に炭化物付着	009-01
13	"	Z-6旧河道	"	"	13.8	—	「く」字に開く口縁部で端部は若干肥厚する	外面ハケ目、内面板状工具によるナデ	褐色	2.5mmの砂粒多含	"	1/6		012-04
14	"	Z-7旧河道	"	"	16.0	—	やや縮った頸部から「く」字に開く口縁部で端部外面に面をもつ	ナデにより調整 外面にタタキ残る	灰白色	3mmの砂粒多含	"	1/6		009-02
15	"	"	"	"	"	—	やや外に開く受け口状の口縁部をもつ	外面タタキ、内面ナデ、肩部ヨコ方向のハケと波状文を施す	鈍黄褐色	2mmの砂粒多含	"	1/4	外面煤付着	009-03
16	"	Z-6旧河道	"	"	16.6	—	締りのない頸部に「S」字状口縁が付く	内面ナデ、外面ハケ目の後 沈線と刺突文を施す	褐色	3.5mmの砂粒多含	"	1/6		012-03
17	"	"	"	"	—	—	小さい円形の底部に長球状の体部が付く	外面タタキ、内面浅いハケ目	黄褐色	2mmの砂粒多含	"	体部以下完存	内外面の一部に炭化物付着	011-01
18	"	Z-7旧河道	"	"	—	—	上げ底状の底部をもつ	外面ナデ、内面ハケ目、外面底部近くを下から上へ強く押さえる	外 褐灰色 内 黒褐色	3mmの砂粒多含	"	底部完存	内外面に炭化物付着	011-05
19	"	Z-6旧河道	"	"	—	—	平な底部をもつ。焼成後穿孔する	内外面ハケ目	外内 褐色 黄褐色	6mmの小石多含	"	"	外面に煤付着 甕に転用される	013-02
20	"	Z-7旧河道	"	ミニチュア器台	8.2	7.05	半球状の受部に「ハ」字にふんばる脚部が付く	外面、脚部内面ナデ、受部内面ヘラミガキ	黒褐色	5mmの砂粒多含	"	1/2		011-04
21	"	"	"	高杯	—	—	長い脚に3方の透し孔をもつ	脚部内面ナデ、他をヘラミガキ 脚部に櫛状横線文を施す	灰白色	4mmの砂粒多含	"	1/4		011-02
22	"	Z-6旧河道	"	"	12.7 (脚径)	—	大きく「ハ」字に開き、端部はやや内湾する脚部に3方透し孔をもつ	外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡黄灰色	"	"	脚部完存		012-06
23	"	"	"	"	9.35 (脚径)	—	大きく「ハ」字に開く脚部に3方透し孔をもつ	"	褐色	6mmの小石多含	"	1/6		012-05
24	"	"	"	土錘	—	—	両端に1対の円孔が空けられているものと思われる	手づくね	黄灰色	3mmの砂粒多含	"	1/4	残存重30.1g	013-03
25	"	Z-7旧河道	石器	石斧	—	—	蛤刃石斧	磨製	暗灰色	安山岩	—	1/6		010-05
26	"	"	瓦器	碗	17.8	5.4	口縁部は若干外反し、端部内面に沈線を巡らす。	内面ヘラミガキ、外面疎らなヘラミガキ、見込みは連結輪状文	黒灰色	精良	良好	1/4	器壁、見込みの順に磨く	014-02
27	"	"	"	"	17.65	"	口縁部は縁をもって外反し、端部内面に沈線を巡らす	内面ヘラミガキ、外面疎らなヘラミガキ、見込みの連結輪状文は渦巻状	"	1mmの砂粒多含	"	1/2		014-01
28	"	Z-6旧河道	"	皿	9.2~8.6	1.8	底部より丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ	外面未調整 内面、口縁部内面までヘラミガキ	"	精良	"	完形	歪みがはげしい	014-03
29	SD13	O-7SD2	弥生土器	甕	11.8	—	受け口状の口縁部をもち端部は肥厚する	内外面ハケ目、口縁部内外面と肩部に櫛による刺突文	淡橙灰色	2mmの砂粒多含	"	1/6		003-01
30	SH1	O-6タテ穴1	須臾器	杯	13.2	4.2	底部と口縁部の境より内側に偏平な高台をはり付ける	強いロクロナデのため、外面に強い稜が多数みられる	灰色	精良	"	1/6		001-04
31	SH2	O-6タテ穴2	土師器	甕	14.2	—	「く」字に屈曲する口縁部をもつ	内外面をハケにより調整	淡橙灰色	"	"	1/6		002-02
32	SB5	W-4P1	瓦器	碗	16	5.8	口縁部は縁をもって外反し、端部内面に沈線を巡らす	内面ヘラミガキ、外面疎らなヘラミガキ	黒灰色	2mmの砂粒多含	"	1/4		002-03
33	"	"	"	"	15.8	6	口縁部は弱い縁をもって外反し、端部内面に沈線を巡らす	"	黒色	精良	"	1/6		001-05
34	—	V-2SK2	石製品	石包丁	—	—	大小2対の孔を空けていたものと考えられる	—	淡青緑色	粘板岩	—	1/6		002-04

B. 奈良時代後期～平安時代初期の遺物

1. SH1出土の土器 (第IV—25図)

須恵器 (30) は杯である。強いロクロナデのためか体部外面は、凹凸が激しく、高台は偏平なものが体部との境から1cmほど内側に張付けられるなど全体に雑な仕上げである。

2. SH2出土の土器 (第IV—25図)

土師器 (31) は甕である。内外面をハケ目により調整する。

C. 平安時代末期の遺物

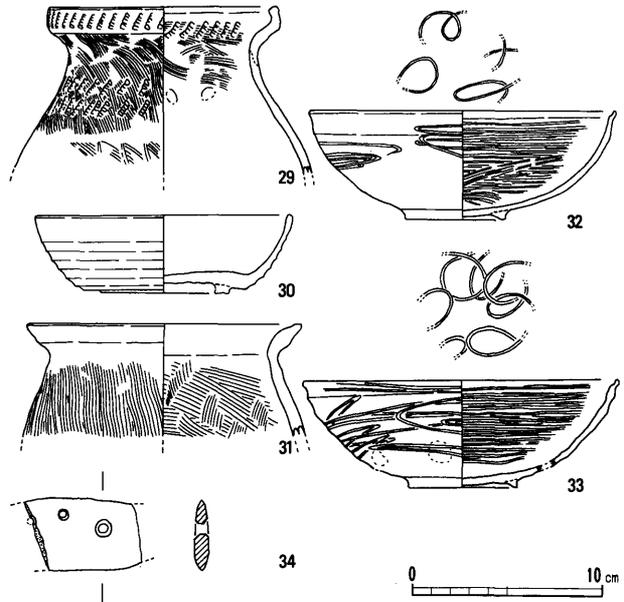
1. SD4上層出土の土器 (第IV—24図)

瓦器 (26), (27) は椀で、内面のミガキは、器壁、見込みの順に行う。(27)の連結輪状文は1単位が大きいため渦巻状を呈する。

(28)は皿である。直径8.6～9.2cmの楕円形である。

2. SB5柱穴出土の土器 (第IV—25図)

(32), (33)は、瓦器の椀である。外面には、疎らながらミガキが残る。



第IV—25図 D地区出土遺物実測図 1:4

D. その他の遺構出土の遺物 (第IV—25図)

(34)は、石包丁である。2/3を欠損しているが、残存部に直径9mmの紐通し穴が1個、6mmのものが2個残る。元は大小2対空けられていたものであろう。

6. E 地区

E地区の基本層序は、第1層；淡灰色土（耕作土）、第2層；淡黄色土（床土）、第3層；灰茶色土、第4層；暗紫茶色粘土（包含層）、第5層；黄色粘土（地山）である。表土上面から地山面までは40～60cmである。

(1) 遺 構

遺構密度は非常に稀薄で、すべて中世に属するものと思われる。

1. 溝

SD1 調査区北西隅を東西に延びる溝で、東西とも調査区外へ続いている。幅は30～50cm、深さは検出面から5～9cmの浅い溝である。埋土から瓦器碗の小片が出土し、平安時代末期～鎌倉時代の遺構であろう。

SD2 幅70～100cm、検出面からの深さ9～17cmの溝で、やや蛇行しながら南北に延びてSD7に続いているようである。SD3を切るが、同時に存在し

た可能性も残る。埋土から出土した瓦器碗の小片により、鎌倉時代に属するものと考えられる。

SD3 幅70cm、検出面からの深さ13cmで東側ほど浅くなり調査区中央でとぎれてしまう。西側はSD2に切られるが、前述のようにSD2から分流するのかもしれない。時代を推定できる遺物は出土しなかったが、包含層出土遺物等により鎌倉時代前後の遺構であろう。

SD5 調査区東端で検出したため幅は不明である。深さは検出面から10cmの浅い溝でSD6,8に続くものと思われる。

SD6 調査区東端で検出したため幅は不明である。深さは検出面から19～24cmの浅い溝でSD5に続くものと思われる。埋土から終末期の瓦器碗片が出土した。

SD7 調査区南端を8mほど東へ延びたあと大きく北へ曲ってSD2に続くものと思われる。幅50～80cm、検出面からの深さ6～13cmで、時代を推定で

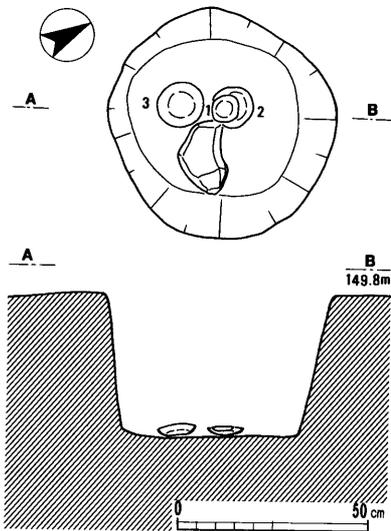
きる遺物は出土しなかったが、やはり鎌倉時代前後の遺構であろう。

SD 8 幅2.4~2.7m、検出面からの深さ14~22cmで真直ぐ北に延びてSD5に続くものと思われる。

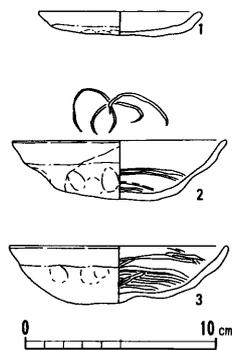
2. 土坑

SK 4 (第IV-28図) 直径60cmの円形を呈し、検出面からの深さ35cmで底部は平らである。底部中央に長さ20cm幅10cmの長細い石を置き、その両側に瓦器椀(2), (3)を1個ずつ正立状態で並べている。さらに北側の瓦器椀(2)の上には土師器の小皿が1個(1)、これも正立状態で重ねられていた。

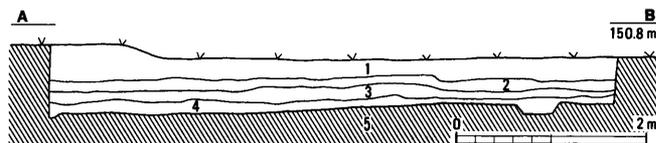
(2) 遺物



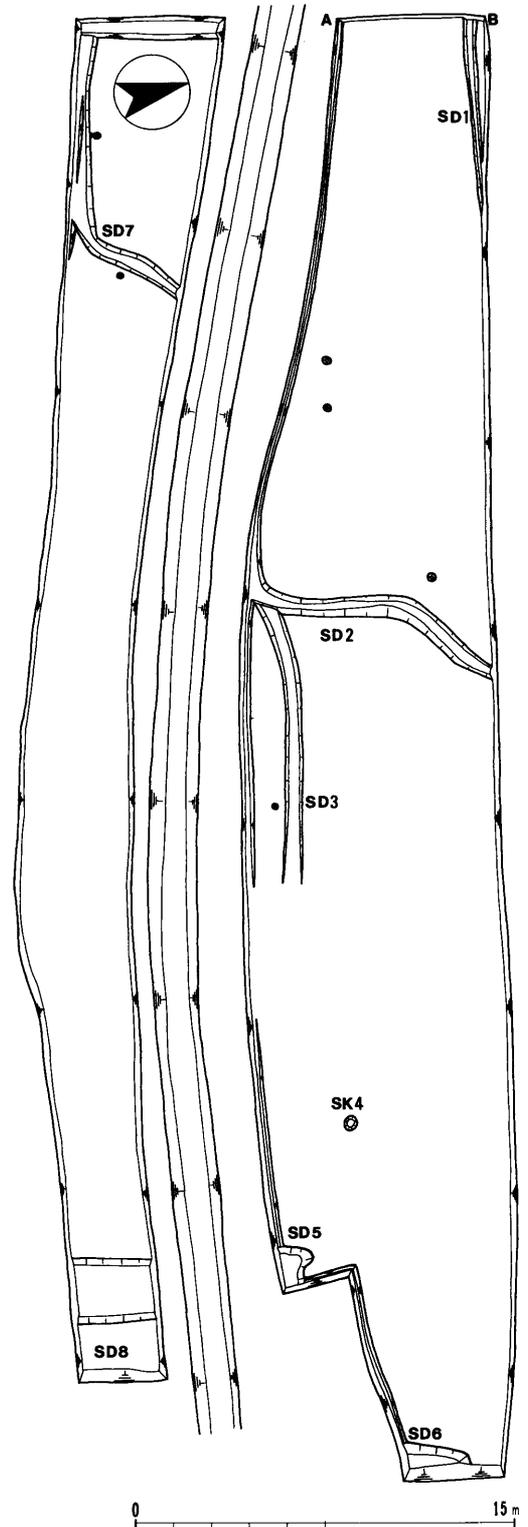
第IV-28図 E地区 SK 4 遺物出土状況図 1:20



第IV-29図 E地区 SK 4 出土遺物実測図 1:4



第IV-27図 E地区土層断面図 1:80



第IV-26図 E地区 遺構平面図 1:300

1. 淡灰色土 (耕作土)
2. 淡黄色土 (床土)
3. 灰茶色土
4. 暗紫茶色粘土 (包含層)
5. 黄色粘土 (地山)

表Ⅳ-4 E地区出土遺物観察表

報告 番号	出土 遺構	出土位置	器種	器形	法量 (cm)		観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録 番号
					口径	器高	形態の特徴	成形・調整技法の特徴						
1	SK4	P5	土師器	皿	8.4	1.3	底部よりやや肥厚しながら、丸味をもって外方へ開く口縁部をもつ	ナデ中心に調整する	鈍赤色	精良	良好	完形	外面全面に炭化物付着	001-03
2	"	"	瓦器	碗	11.2	3.1	底部より「ハ」字に外方へ開く口縁部をもち、端部はそのまま丸くおさめる	内面疎なナデ、外面未調整	黒灰色	"	"	"	内外面いぶし不良部分多い	001-01
3	"	"	"	"	11.3	3	"	"	"	"	"	"	"	001-02

E地区の遺物の出土は極めて少量で、整理箱1箱に満たなかった。しかし、SK4からは、埋納されたと考えられる土器が完形で出土した。

A. 鎌倉時代後期の遺物

1. SK4出土の土器 (第Ⅳ-29図)

土師器 (1) は皿である。外面全面に煤の付着

がある。

瓦器 (2), (3) は、終末期の瓦器碗である。高台は無く、内側のミガキは幅1.5mmの広いものを疎らに施す。(2) は、粘土紐の接合痕を明瞭に残す。両者とも内外面にいぶしの掛らない部分がかなり広い範囲に見られる。

7. 結 語

澤田遺跡は、市部集落の北から東側に広がる遺物散布地であるが、その散布面積にくらべ遺構が残存している範囲は僅かで、正興寺周辺に限られる。調査の結果、平安末期～鎌倉時代の集落跡中心の遺跡であること、B地区を除いてその密度は稀薄であること等が判明した。

平安末期～鎌倉時代の掘立柱建物は全部で14棟検出された。A地区のSB3,4,6は方向をほぼ揃えて建てられており、さらにSB3と4は南側を揃えている。SB5はやや方向は異なるもののSB4と北側を揃えており、南側はSB4の間仕切に合せているようである。よってA地区の4棟は同時に存在した可能性が考えられるが、その場合SB3は主屋、SB4,5は副屋、SB6は小規模な雑舎という建物配置の一部を垣間見ることができる。建替えがなく、出土遺物が少量であるなどA地区に人々が生活したのはごく僅かな時期に限られるものと考えられる。

一方B地区は、SB2,3,4,5、SB6,7が建替えの關係にあり、他の建物も重複して検出されており他の地区より人々の生活が長く続いていたようである。建物の方向により、SB1とSB9、SB6,7とSB3,4,5が対になり、それぞれ主副の關係にあるようである。

D地区では確実にこの時期の建物は1棟のみで、C、E地区や、正興寺南側を除く平成元年度の調査区からはこの時期の建物は検出されていない。全体としてみると大型のA地区SB3、B地区SB1、D地

区SB5の3棟が主的建物であろう。岡山県百間川米田遺跡では20m～30mのほぼ等間隔で大型の主的建物が存在することが報告されている^⑧。澤田遺跡の場合は、80m～100m間隔になる。これらの建物には若干の時期差を考えざるを得ないが、仮に同時に存在した期間があったとしても、かなり散在的な集落であったようである。

その他の時代では、弥生時代後期、奈良時代後期～平安時代初期、平安時代後期の遺構が若干検出されている。D地区のSD4下層からは、多量の弥生時代後期の土器が出土し、近くに集落の存在が想定できる。しかし、この時期の住居跡はSH10しか検出されなかった。SH10の西側はすぐ谷筋になり、試掘調査でも遺構は検出されていない。未調査区に住居跡を想定しても、面積的にあと3～4棟が限界だろう。したがってD地区東側の丘陵上に集落跡が存在する可能性が大きいものと考えられる。

遺物の出土は、極めて少量であるが、D地区SD4から弥生時代後期の土器が比較的まとまって出土したこと、E地区SK4から埋納された終末期の瓦器が出土したことが注目される。D地区SD4出土の土器は畿内、近江、東海地域の特色を有するものが混在し、隣接する各地域の影響を受けていることがうかがえる。E地区SK4出土の瓦器は、山田編年Ⅲ-3～4型式^⑨に属するものと考えられ、終末期の瓦器である。共存する遺物が土師器の小皿だけではある

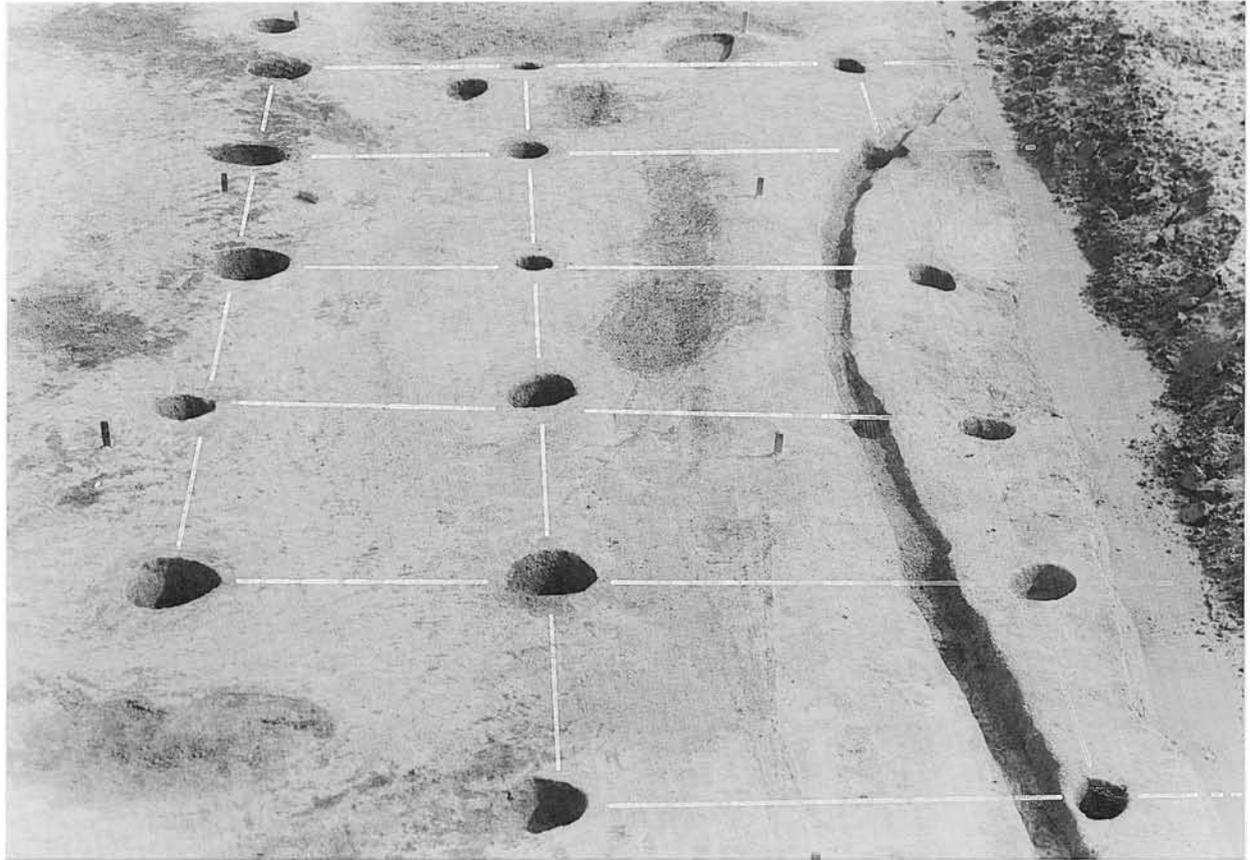
ものの、貴重な共伴例である。 (森川常厚)

[註]

- ① 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』 1989.3
- ② 西森平之『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会1983.3
- ③ 菊田如幻『伊水温故』上野市古文献刊行会
- ④ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』 1989.3
- ⑤ 中岡敏ほか『市部考』市部地区史蹟保存会
- ⑥ 岡本寛久ほか『百間川米田遺跡3』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74』建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1989
- ⑦ 山田猛『伊賀の瓦器に関する若干の考察』『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1986.12



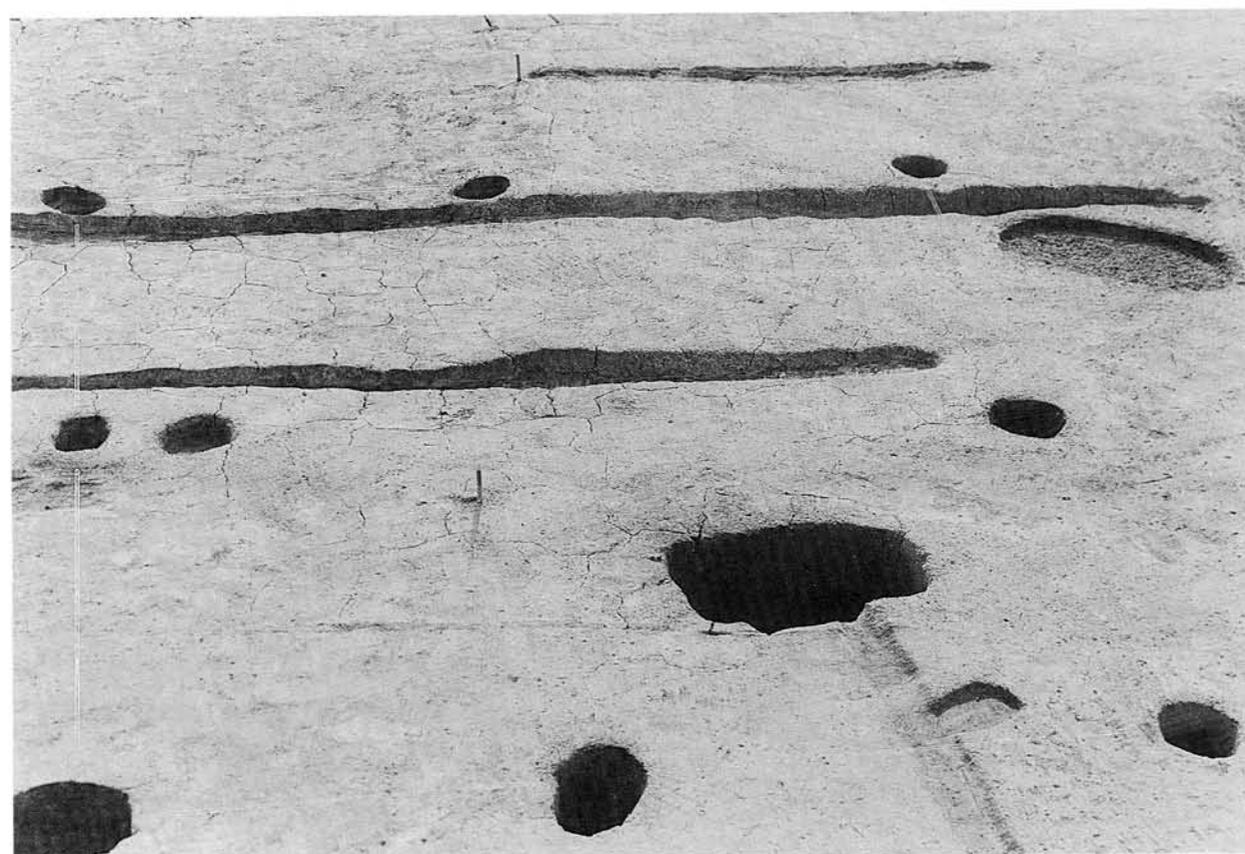
A地区 全景（北から）



A地区 SB3（北から）



A地区 SB4 (北から)



A地区 SB6 (東から)



B地区 全景（東から）



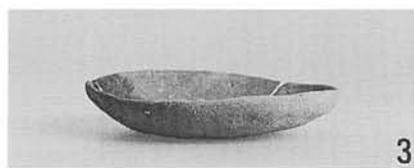
14



1



4



3



5

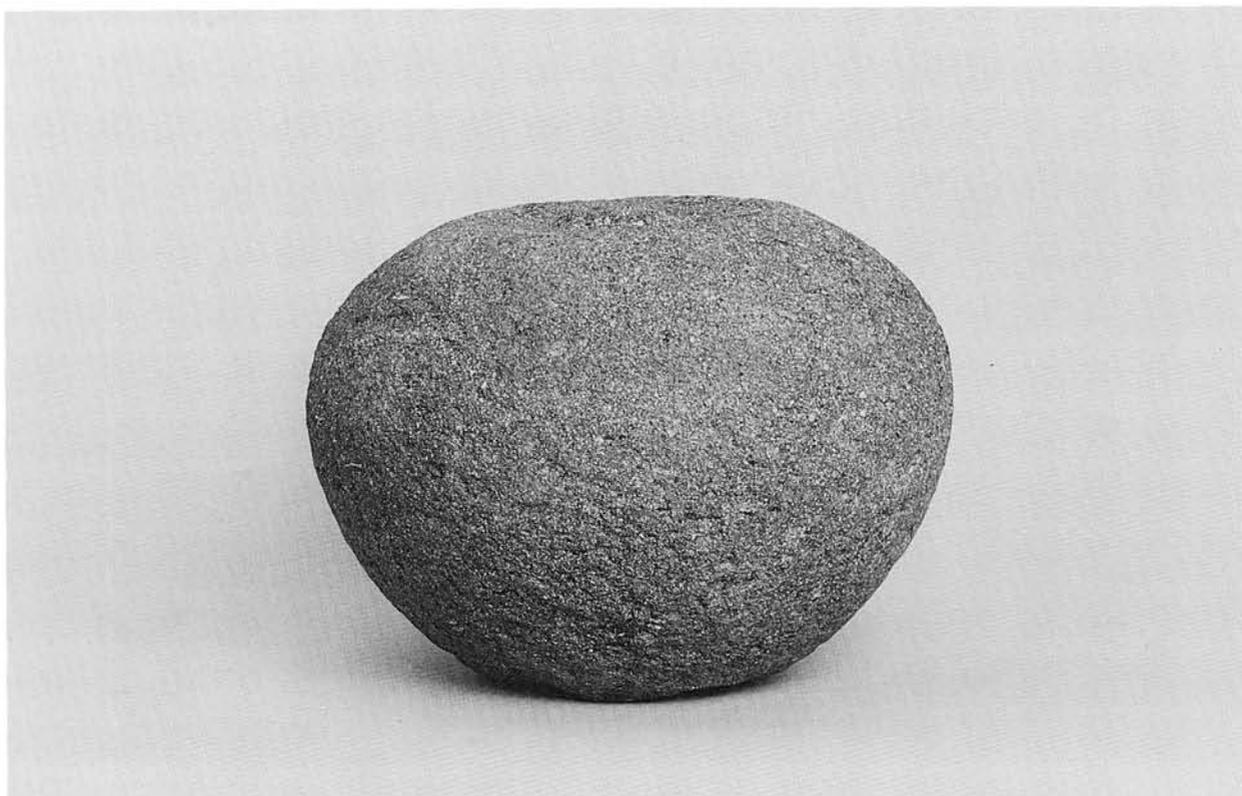


15



9

B地区 出土遺物 1 : 3



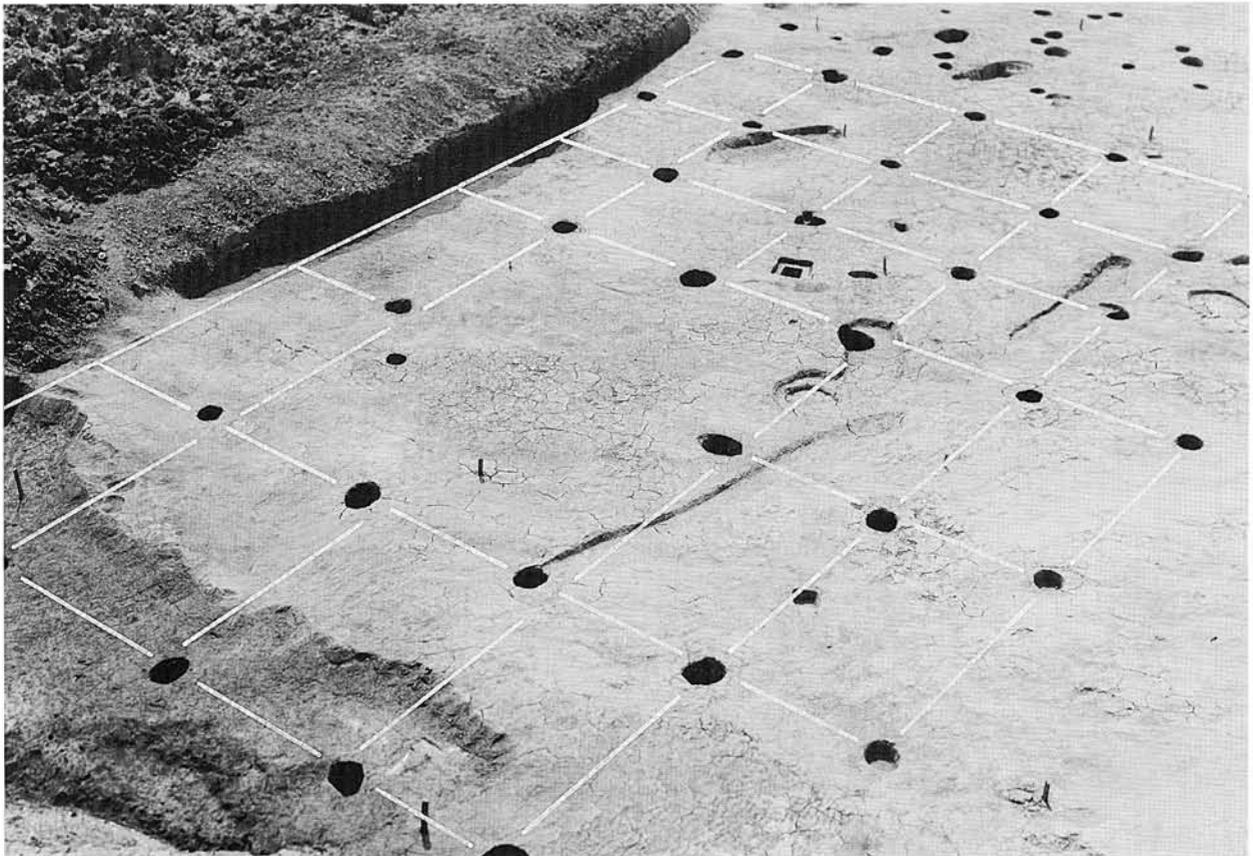
C地区 出土遺物 1 : 3



D地区 全景とSB3 (北から)



D地区 全景（東から）



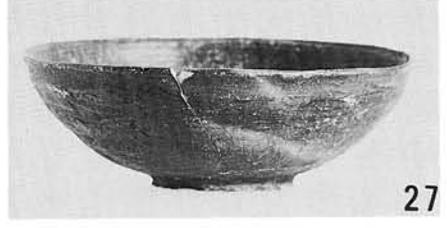
D地区 SB5 東から



28



26



27



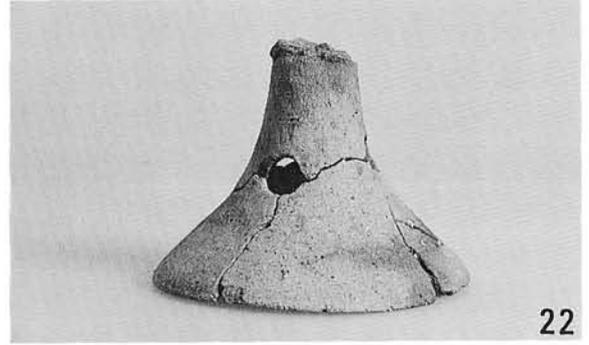
3



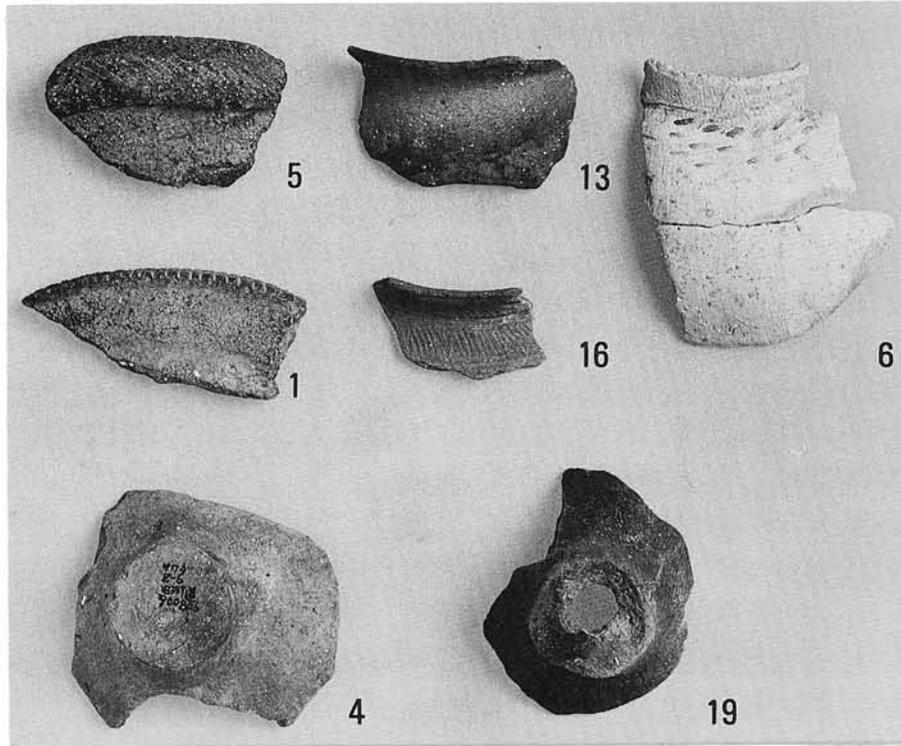
7



17



22



5

13

1

16

4

19

6

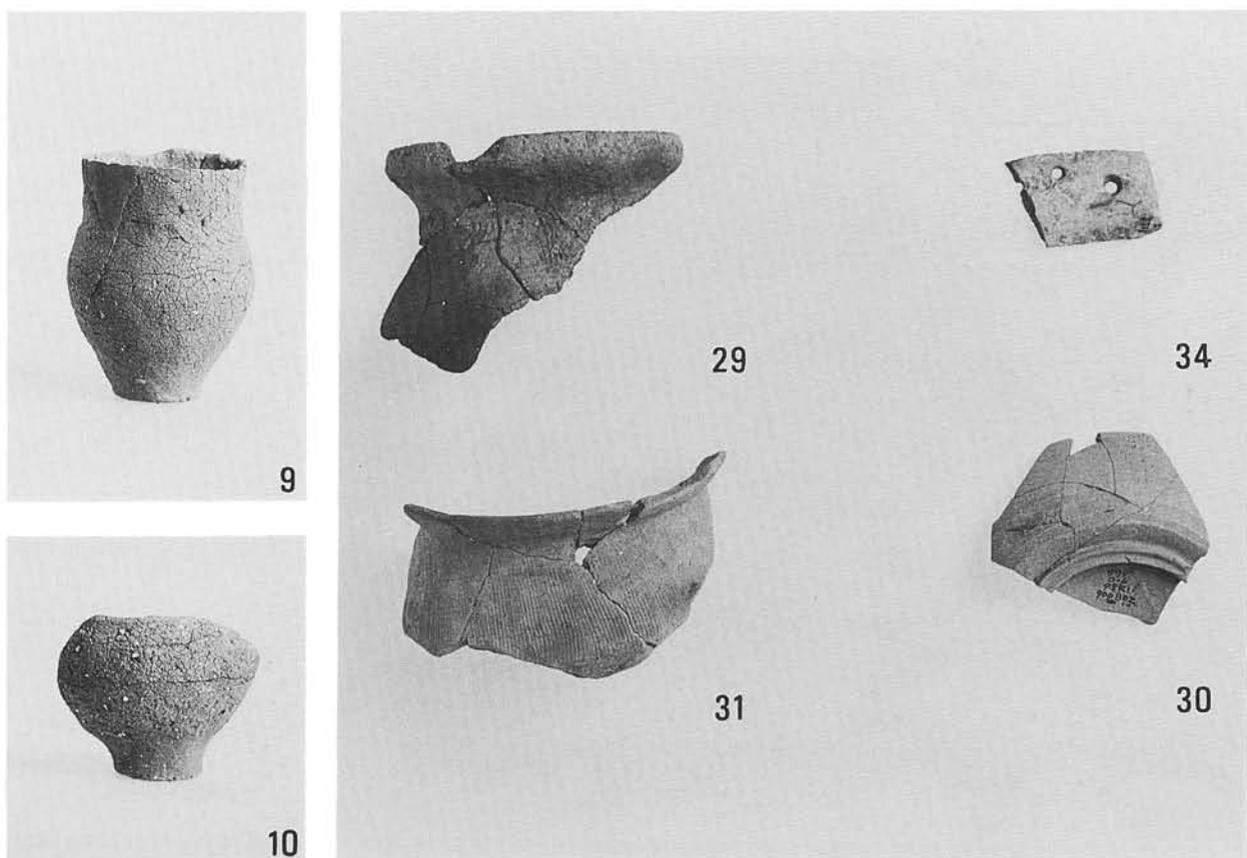
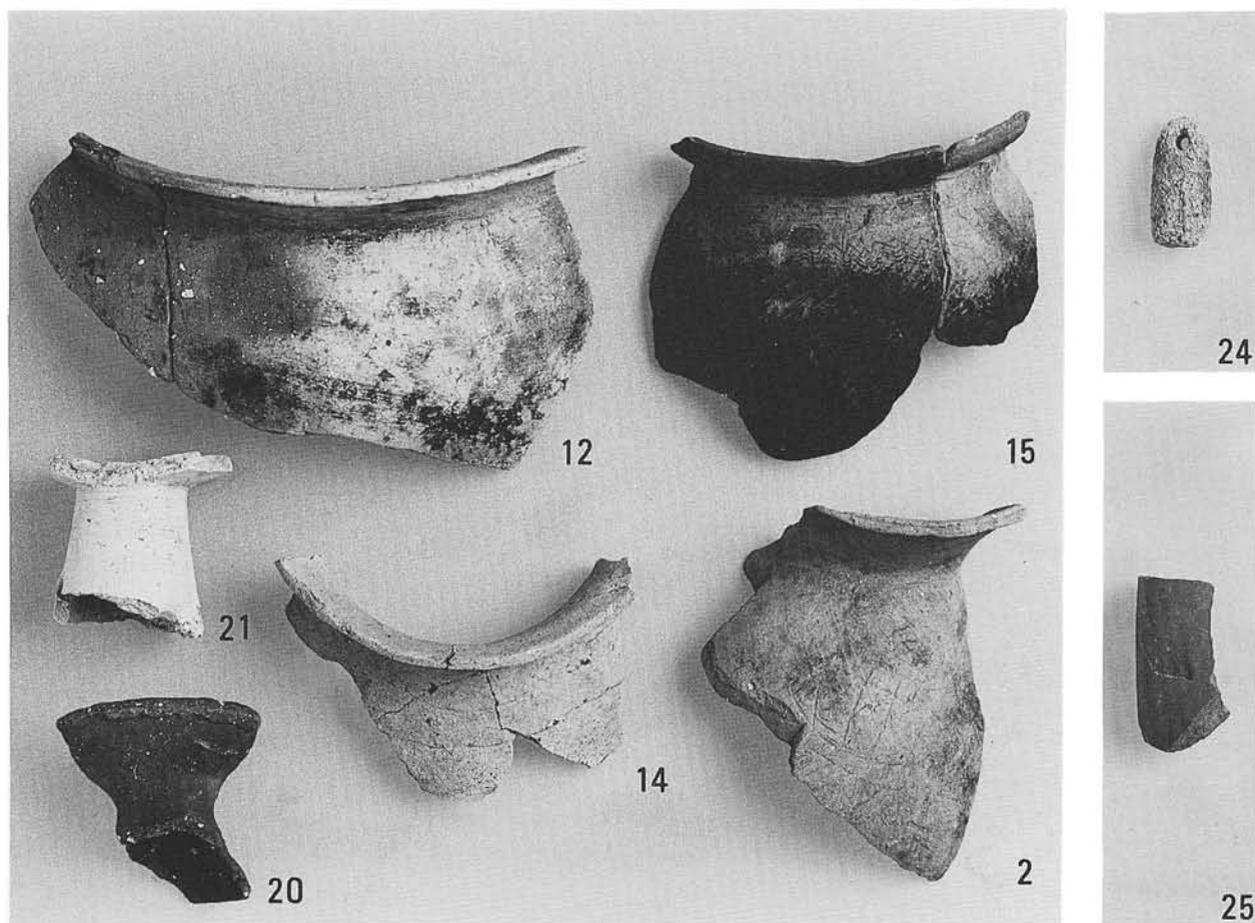


23



8

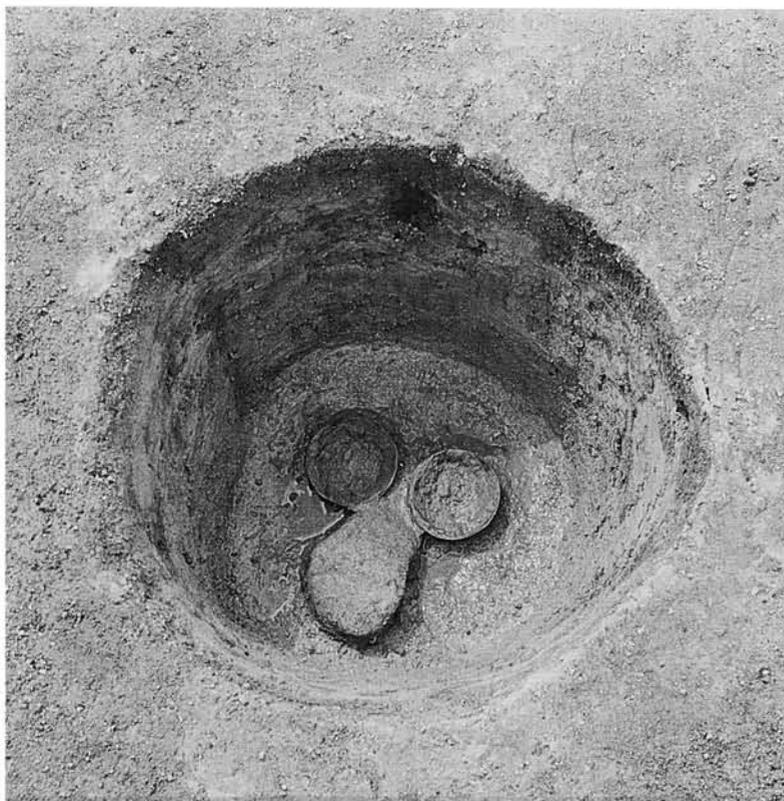
D地区 出土遺物 1 : 3



D地区出土遺物 1 : 3



E地区 全景（東から）



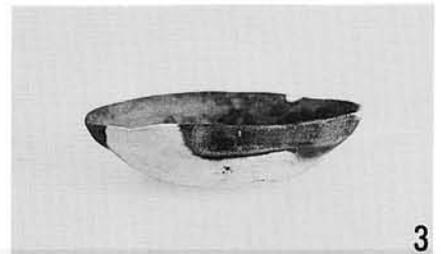
E地区 SK4 遺物出土状況（東から）



1



2



3

E地区出土遺物 1 : 3

平成 3(1991)年 3月に刊行されたものをもとに
平成 18(2006)年 12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 94-3

平成 2 年度農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

— 第 3 分冊 —

1991年 3 月

編 集 三 重 県 教 育 委 員 会
発 行 三 重 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社
